京都市内遺跡発掘調査報告

令和元年度

２０２０年3月

京　都　市　文　化　市　民　局

巻頭図版１　史跡西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡　遺構

１　４区礎石３及び地覆座（東から）

巻頭図版２　史跡西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡　遺構

１　４区礎石３（西から）

２　４区土器溜り11（南西から）

巻頭図版３　西寺跡（37次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡　遺構

1　第７調査区全景（西から）

巻頭図版４　伏見城跡・桃山古墳群，伏見城跡・指月城跡　遺構・遺物

1　伏見城跡・桃山古墳群　３区石垣２（西から）

2　伏見城跡・指月城跡　９区出土金箔瓦

例　言

1　本書は，京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した，令和元年度の京都市内発掘調査報告書である。本書では平成30年度・令和元年度に実施した発掘調査成果を報告する。

2　調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が主体となり，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の支援を受けた。

3　調査地・調査期間・調査面積・調査担当者は，下記のとおりである。

Ⅰ　平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡　（受付番号　19K011）
京都市上京区小山町908-15
2019年7月29日～11月14日　51㎡　　黒須 亜希子

Ⅱ　平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡　（受付番号　19K221）
京都市中京区聚楽廻西町90
2019年11月11日～11月23日　6㎡　　熊谷 舞子

Ⅲ　平安京左京一坊三坊十町跡　（受付番号　18H495）
京都市上京区室町通出水上る近衛町32-2・37・37-5・6，同区下長者通烏丸西入鷹司町18・18-3
2019年4月2日～5月17日　100㎡　　熊井 亮介

Ⅳ　史跡西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡（受付番号　1N03）
京都市南区唐橋西寺町57番 地内
2019年9月30日～11月2日　152㎡　　西森 正晃

Ⅴ　西寺跡（37次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡　（受付番号　19A005）
京都市南区唐橋西寺町11，25番 地内
2019年9月30日～11月15日　179㎡　　鈴木 久史

Ⅵ　山科本願寺跡（23次）（受付番号　18A007）
京都市山科区西野山階町37-2，37-3地内
2018年12月3日～12月27日　717㎡　　奥井 智子

Ⅶ　山科本願寺南殿跡（6～8次）
《6次》京都市山科区音羽伊勢宿町32-11（受付番号　18S578）
2019年1月7日～1月18日　15㎡　　廣冨 亮太・馬瀬智光
《7次》京都市山科区音羽伊勢宿町32-106（受付番号　18S854）
2019年4月8日～4月19日　15㎡　　黒須 亜希子
《8次》京都市山科区音羽伊勢宿町35-52（受付番号　18S815）
2019年6月17日～7月5日　28㎡　　黒須 亜希子

Ⅷ　中臣遺跡（92次）（受付番号　18N016）

京都市山科区勧修寺西金ヶ崎250，251

2019年6月17日～7月11日　120㎡　　赤松 佳奈

Ⅸ　伏見城跡・桃山古墳群　（受付番号　19F016）

京都市伏見区桃山町永井久太郎55-1，55-2

2019年7月22日～8月14日　99㎡　　奥井 智子

Ⅹ　伏見城跡・指月城跡　（受付番号　19A004）

京都市伏見区桃山町泰長老　桃山東合同宿舎敷地内

2019年8月19日～10月4日　143㎡　　新田 和央

4　本書の執筆分担は，本文の末尾に記している。

5　本書に使用した写真の撮影は，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託し，遺構・遺物の一部は調査担当者が行った。

6　本書で使用した遺物の名称及び形式・型式は，一部を除き，小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号，（財）京都市埋蔵文化財研究所，1996年に準拠する。

750頃			840頃			930頃			1010頃			1080～1090頃			1180頃			1270頃			1360頃			1440頃			1500頃			1580～1590頃			1660頃			1740年代頃			1820年代頃		
Ⅰ			Ⅱ			Ⅲ			Ⅳ			Ⅴ			Ⅵ			Ⅶ			Ⅷ			Ⅸ			Ⅹ			Ⅺ			Ⅻ			XIII			XIV		
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

7　本書で使用した土色名は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

8　本書中で使用した方位および座標の数値は，世界測地系　平面直角座標系Ⅵによる（ただし，単位（m）を省略した）。また，標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。なお，調査における測量基準点の設置は，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託した。

9　本書で使用した地図は，本市都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺1/2,500）「聚楽廻」「御所」「中河原」「梅小路」「安祥寺」「今熊野」「山科」「稲荷山」「勧修寺」「丹波橋」「中書島」を調整したものである。

10　本書の作成及び編集は，京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課で行った。

本　文　目　次

Ⅰ　平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡

1．調査に至る経緯と経過 …… 1

2．位置と環境 …… 2

3．調査成果 …… 5

4．まとめ …… 20

Ⅱ　平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡

1．調査経過 …… 23

2．遺　跡 …… 24

3．遺　構 …… 26

4．遺　物 …… 28

5．まとめ …… 29

Ⅲ　平安京左京一坊三坊十町跡

1．調査経過 …… 32

2．遺　跡 …… 33

3．調査成果 …… 35

4．遺　物 …… 49

5．ま と め …… 61

Ⅳ　史跡西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡

1．調査経過 …… 63

2．調査地の環境 …… 65

3．遺　構 …… 71

4．遺　物 …… 83

5．まとめ …… 86

Ⅴ　西寺跡（37次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡

1．調査経過 …… 92

2．遺　跡 …… 93

3．遺　構 …… 96

4．遺　物 …… 105

5．まとめ …… 109

Ⅵ　山科本願寺跡（23次）

1．調査経過 …… 116

2．遺　跡 …… 117

3．遺　構 …… 123

4．遺　物 …… 131
5．まとめ …… 133
Ⅶ　山科本願寺南殿跡（6～8次）
1．調査に至る経緯と経過 …… 135
2．位置と環境 …… 137
3．調査成果 …… 140
4．まとめ …… 146
Ⅷ　中臣遺跡（92次）
1．調査経過 …… 149
2．遺　跡 …… 149
3．遺　構 …… 153
4．遺　物 …… 159
5．まとめ …… 160
Ⅸ　伏見城跡・桃山古墳群
1．調査経過 …… 162
2．遺　跡 …… 163
3．調査成果 …… 167
4．まとめ …… 174
Ⅹ　伏見城跡・指月城跡
1．調査経過 …… 176
2．遺　跡 …… 177
3．遺　構 …… 181
4．遺　物 …… 186
5．まとめ …… 189
付章　指月伏見城跡出土金箔瓦の分析調査
1．はじめに …… 194
2．調査対象試料 …… 194
3．調査方法 …… 194
4．調査結果 …… 195
報告書抄録

図　版　目　次

巻頭図版１　史跡西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡　遺構
1　４区礎石３及び地覆座（東から）
巻頭図版２　史跡西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡　遺構

1　４区礎石抜取穴３（西から）
2　４区土器溜り11（南西から）
巻頭図版３　西寺跡（37次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡　遺構
1　第７調査区全景（西から）
巻頭図版４　伏見城跡・桃山古墳群，伏見城跡・指月城跡　遺構・遺物
1　伏見城跡・桃山古墳群　３区石垣２（西から）
2　伏見城跡・指月城跡　９区出土金箔瓦
図版１　平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡　遺構
1　１－１区第３面全景（北から）
2　１－１区第５面遺構検出状況（北から）
3　２区全景（東から）
4　１－２区第４面全景（南から）
5　１－２区第５面全景（南から）
6　１－２区遺構検出状況（南東から）
7　１－３区遺構検出状況（北から）
図版２　平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡　遺構
1　２区石組溝検出状況（北から）
2　２区石組溝検出状況（北東から）
3　２区石組溝西側石見通し合成図（東から）
4　２区石組溝東側石見通し合成図（西から）
図版３　平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡　遺構
1　１区北壁（南から）
2　２区西壁焼土層（北東から）
3　３区全景（西から）
図版４　平安京左京一条三坊十町跡　遺構
1　第１面全景（北から）
2　第２面全景（北から）
3　第３面全景（北から）
4　第４面全景（南から）
図版５　平安京左京一条三坊十町跡　遺物
1　出土遺物
図版6　史跡西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡　遺構
1　４区第１面全景（南から）
2　５区第２面全景（南東から）
3　４区第２面全景（南東から）

図版７　史跡西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡　遺構
1　４区講堂基壇（南東から）
2　４区礎石抜取穴４（北西から）
図版８　史跡西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡　遺構
1　４区講堂南庇側柱筋（西から）
2　４区講堂身舎桁行入側柱筋（西から）
3　４区礎石３唐居敷座（北から）
4　４区土器溜り11（北西から）
図版９　史跡西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡　遺構
1　５区第２面全景（南東から）
2　５区礎石抜取穴７（南東から）
3　５区講堂及び東軒廊基壇（南東から）
図版10　西寺跡（37次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡　遺構
1　第７調査区壺地業イ～ハ断割り状況（北から）
2　第７調査区壺地業ハ・ヘ断割り状況（東から）
3　壺地業ヘ・リ・ヲ断割り状況（西から）
4　地業38西壁断面（南東から）
図版11　西寺跡（37次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡　遺構
1　第８調査区全景（北から）
2　第８調査区鋳造関連土坑２全景（北から）
図版12　西寺跡（37次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡　遺構
1　第９調査区全景（北から）
2　内溝１瓦出土状況（南から）
3　内溝１軒瓦出土状況（北東から）
図版13　山科本願寺跡（23次）　遺構
1　１区　全景（東から）
2　１区　断割り西壁断面（北東から）
図版14　山科本願寺跡（23次）　遺構
1　2区　全景（北西から）
2　２区　断割り東壁断面（北西から）
図版15　山科本願寺跡（23次）　遺構
1　土坑１・２半裁状況（北東から）
2　柱穴33断面（北西から）
3　柱穴40断面（南から）
4　土坑42検出状況（南から）

5　現存土塁（東から）
図版16　山科本願寺跡（23次）　遺物・遺物
1　現存土塁切り通し西面（北東から）
2　現存土塁切り通し西面遺物出土状況（東から）
3　出土遺物１（69～74）
4　出土遺物２（62）
5　図版17の報告番号対応図
図版17　山科本願寺跡（23次）　遺物
1　土坑42出土遺物（19～68）
図版18　山科本願寺南殿跡（6～8次）　遺構
1　第６次調査　第２面全景（北から）
2　第７次調査　第２面全景（北から）
3　第８次調査　第１面全景（南から）
図版19　中臣遺跡（92次）　遺構・遺物
1　調査区全景　（奥が旧安祥寺川・北東から）
2　竪穴建物１完掘状況（南西から）
3　出土遺物
図版20　伏見城跡・桃山古墳群　遺構
1　３区全景　第２面石垣・造成土検出状況（南西から）
2　３区全景　第３面石垣・造成土検出状況（南西から）
図版21　伏見城跡・桃山古墳群　遺構
1　３区　第２面石垣石検出状況（南西から）
2　３区　第２面石垣石と石組溝側石（南西から）
3　3区　第３面石垣前面検出状況（南から）
4　３区　第３面石垣石と石組溝（南西から）
5　３区　第３面石垣石裏込め（南東から）
6　３区　第３面石垣石断割り部分（西から）
図版22　伏見城跡・桃山古墳群　遺構
1　３区　北壁東側断面（南から）
2　３区　拡張区全景（南東から）
3　１区　全景（南西から）
4　１区　北東隅断割り（西から）
5　１区　北西隅断割り（南東から）
6　２区　全景（北西から）
7　２区　造成土検出状況（南西から）

8　２区　造成土断割り断面（南西から）
図版23　伏見城跡・指月城跡　遺構
1　７区全景（西から）
2　７区全景（東から）
3　８区全景（東から）
図版24　伏見城跡・指月城跡　遺構・遺物
1　９区全景（南西から）
2　９区石積（南から）
3　出土遺物

挿　図　目　次

Ⅰ　平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡
図１　調査位置図 …… 1
図２　調査区配置図 …… 2
図３　人力掘削作業状況 …… 2
図４　現地説明会開催状況 …… 2
図５　内裏位置の推定と既往の調査位置図 …… 3
図６　基本層序模式図 …… 5
図７　調査区壁断面図 …… 6
図８　１区第１面全体図 …… 8
図９　１区第２面全体図 …… 8
図10　１区第３面全体図 …… 9
図11　１区第４面全体図 …… 10
図12　１区第２面～第４面遺構平面断面図 …… 11
図13　１区第５面全体図 …… 12
図14　第５面遺構平面断面図 …… 13
図15　２区平面断面図 …… 15
図16　石組溝平面立面図 …… 16
図17　出土遺物実測図・拓影 …… 18
図18　出土遺物実測図・拓影 …… 19
図19　陽明文庫本宮城図（部分） …… 20
図20　内裏内郭回廊調査成果概括図 …… 21
Ⅱ　平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡
図１　調査地位置図 …… 23

図２　周辺調査位置図 …… 25
図３　１・２区調査前風景（南西から） …… 26
図４　３区調査前風景（北東から） …… 26
図５　４区調査前風景（北西から） …… 26
図６　作業風景 …… 26
図７　調査区配置図 …… 27
図８　１・２区平・断面図 …… 27
図９　３・４区平・断面図 …… 28
図10　２区７層出土丸・平瓦 …… 29
図11　豊楽殿復元図 …… 30
図12　比較断面模式図 …… 30

Ⅲ　平安京左京一坊三坊十町跡

図１　調査地位置図 …… 32
図２　アスファルトカット風景（南西から） …… 33
図３　機材搬入風景（北東から） …… 33
図４　重機掘削風景（南から） …… 33
図５　埋め戻し風景（南東から） …… 33
図６　調査位置および周辺調査事例 …… 35
図７　調査区東壁断面図 …… 36
図８　調査区南壁断面図 …… 37
図９　第１面平面図 …… 39
図10　第１面　遺構平・断面図 …… 40
図11　第２面平面図 …… 42
図12　第２面　遺構平・断面図 …… 43
図13　第３面平面図 …… 45
図14　第３面　遺構平・断面図 …… 46
図15　第４面平面図 …… 47
図16　第４面　遺構平・断面図 …… 48
図17　第１面　出土遺物実測図 …… 50
図18　土坑54出土遺物実測図 …… 51
図19　土坑54出土遺物実測図 …… 52
図20　土坑54出土遺物実測図 …… 53
図21　土坑68出土遺物実測図 …… 55
図22　土坑68出土遺物実測図 …… 56
図23　土坑68出土遺物実測図 …… 57

図24　土坑68出土遺物実測図 …… 58
図25　土坑68出土遺物実測図 …… 59
図26　土坑68出土遺物実測図 …… 60
図27　第３・４面　出土遺物実測図 …… 61

Ⅳ　史跡西寺跡（36 次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡

図１　調査位置図 …… 63
図２　調査前のコンド山（南から） …… 63
図３　現地説明会風景（西から） …… 64
図４　作業風景（西から） …… 64
図５　調査区配置図 …… 64
図６　周辺調査位置図及び伽藍復元図 …… 66
図７　第１面平面図 …… 72
図８　４区西壁断面図 …… 73
図９　４区東壁断面図 …… 74
図10　５区調査区断面図 …… 75
図11　第２面平面図 …… 77
図12　４・５区基壇盛土断面図 …… 78
図13　４区遺構実測図 …… 80
図14　土器溜り11実測図 …… 81
図15　出土軒丸瓦実測図及び拓影 …… 83
図16　出土軒平瓦実測図及び拓影 …… 84
図17　西寺講堂復元案 …… 87

Ⅴ　西寺跡（37次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡

図１　調査位置図 …… 92
図２　調査区配置図 …… 93
図３　第７調査区調査前全景（東から） …… 94
図４　第７査区作業風景（西から） …… 94
図５　山下主任調査官現地指導（北から） …… 94
図６　第８調査区遺構養生状況（北西から） …… 94
図７　第９調査区埋め戻し（北から） …… 94
図８　現地説明会風景（西から） …… 94
図９　第７調査区平面図 …… 97
図10　第７調査区断割り後平面図 …… 98
図11　第７調査区断面図 …… 99
図12　第８調査区平面図 …… 101

図13　第８調査区断面図 …… 102
図14　第９調査区平面図 …… 103
図15　第９調査区断面図 …… 104
図16　第７調査区壺地業出土土器実測図 …… 106
図17　出土軒瓦実測・拓影図 …… 108
図18　出土平瓦実測図・拓影 …… 109
図19　礎石建物推定柱位置 …… 110
図20　西寺壺地業と東寺五重塔平面図の重ね合わせ図 …… 112

Ⅵ　山科本願寺跡（23次）

図１　調査地と周辺調査位置図 …… 116
図２　調査前全景（南から） …… 117
図３　調査地と土塁の関係（南東から） …… 117
図４　調査風景（南西から） …… 117
図５　埋め戻し風景（北東から） …… 117
図６　埋め戻し風景（南西から） …… 117
図７　土塁調査風景（南西から） …… 117
図８　調査地と山科本願寺主要施設配置想定 …… 118
図９　主要調査位置図 …… 119
図10　調査区断面図 …… 124
図11　調査区平面図 …… 125
図12　各遺構断面図 …… 126
図13　土塁地形測量平面図 …… 128
図14　土塁東壁断面図 …… 129
図15　土塁西壁断面図 …… 130
図16　出土遺物１ …… 131
図17　出土遺物２ …… 132

Ⅶ　山科本願寺南殿跡（6～8次）

図１　調査位置図 …… 135
図２　機械掘削作業状況（第６次） …… 136
図３　人力掘削作業状況（第７次） …… 136
図４　断面実測作業状況（第６次） …… 136
図５　大学生現地見学・体験学習状況（第８次） …… 136
図６　第６次・第７次調査区配置図 …… 137
図７　第８次調査区配置図 …… 137
図８　御在世山水御亭図（上が西） …… 138

図９　既往の調査位置図 …… 139
図10　第６次調査区西壁断面図 …… 140
図11　第７次調査区壁断面図 …… 141
図12　第６次第２面全体図 …… 142
図13　第７次第１面・第２面全体図 …… 143
図14　第８次調査区壁断面図 …… 144
図15　第８次調査全体図 …… 145
図16　山科本願寺南殿新復元案 …… 147

Ⅷ　中臣遺跡（92次）

図１　調査位置図 …… 149
図２　調査前風景（北東から） …… 150
図３　作業風景（北から） …… 150
図４　調査区配置図 …… 150
図５　中臣遺跡南半で検出された３～４世紀の竪穴建物 …… 151
図６　周辺調査位置図 …… 151
図７　調査区断面図 …… 154
図８　遺構平面図 …… 155
図９　竪穴建物１床面　平面図 …… 157
図10　甕５・６出土状況（北東から） …… 157
図11　貯蔵穴　遺物出土状況（北東から） …… 157
図12　竪穴建物１　平・断面図 …… 158
図13　出土遺物 …… 159
図14　周辺調査位置図 …… 161

Ⅵ　伏見城跡・桃山古墳群

図１　調査風景１（北西から） …… 162
図２　調査風景２（北東から） …… 162
図３　調査区配置図 …… 162
図４　調査地および近隣関連調査位置図 …… 163
図５　伏見御城郭並屋敷取之絵図 …… 164
図６　１区　平面図・断面図 …… 167
図７　２区平面図 …… 168
図８　２区断面図 …… 169
図９　３区平面図 …… 170
図10　３区北壁断面図 …… 171
図11　３区　南・東・西壁断面図，各断面図・立面図 …… 172

図12　出土遺物 …… 174

Ⅹ　伏見城跡・指月城跡

図1　調査地と周辺調査位置図 …… 176

図2　７区配置図 …… 177

図3　８区配置図 …… 177

図4　９区配置図 …… 177

図5　７区調査前全景（西から） …… 178

図6　８区調査前全景（北東から） …… 178

図7　９区調査前全景（南西から） …… 178

図8　８区作業風景（南から） …… 178

図9　現地説明会風景（東から） …… 178

図10　９区石積養生状況（南から） …… 178

図11　「伏見古御城絵図」調査地周辺 …… 178

図12　７区平面図・北壁断面図・遺構断面図 …… 182

図13　８区平面図・断面図 …… 184

図14　９区平面図・断面図，石積立面図 …… 185

図15　出土土器・陶磁器実測図 …… 187

図16　出土銭貨実測図及び拓影 …… 187

図17　出土瓦実測図及び拓影 …… 188

図18　出土金箔瓦 …… 188

図19　出土瓦実測図及び拓影 …… 189

図20　９区周辺調査区配置図と各地点土層柱状図 …… 190

図21　指月城復元案 …… 191

付章　指月伏見城出土金箔瓦の分析調査 …… 196

表　目　次

Ⅰ　平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡

表1　既往の調査一覧 …… 4

表2　遺構概要表 …… 7

表3　遺物概要表 …… 17

Ⅱ　平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡

表1　周辺主要調査一覧表 …… 25

表2　遺構概要表 …… 26

表3　遺物概要表 …… 29

Ⅲ　平安京左京一坊三坊十町跡

表１　遺構概要表 …… 38
表２　遺物概要表 …… 49
表３　土坑54出土遺物の構成 …… 50
表４　土坑68出土遺物の構成 …… 54

Ⅳ　史跡西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡

表１　調査成果一覧表 …… 67
表２　遺構概要表 …… 71
表３　遺物概要表 …… 82
表４　出土瓦観察表 …… 85

Ⅴ　西寺跡（37 次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡

表１　遺構概要表 …… 96
表２　遺物概要表 …… 105
表３　平安時代創建の主要塔柱間寸法一覧 …… 110

Ⅵ　山科本願寺跡（23 次）

表１　近隣調査事例一覧 …… 120
表２　遺構概要表 …… 122
表３　遺物概要表 …… 130

Ⅶ　山科本願寺南殿跡（6 ～ 8 次）

表１　既往の調査一覧 …… 139
表２　第６次・第７次調査遺構概要表 …… 142
表３　第８次調査遺構概要表 …… 144
表４　遺物概要表 …… 146

Ⅷ　中臣遺跡（92 次）

表１　中臣遺跡南半で３～４世紀の竪穴建物を検出した調査一覧 …… 152
表２　遺構概要表 …… 153
表３　遺物概要表 …… 159

Ⅵ　伏見城跡・桃山古墳群

表１　近隣関連調査一覧 …… 166
表２　遺構概要表 …… 167
表３　遺物概要表 …… 173

Ⅹ　伏見城跡・指月城跡

表１　近隣調査事例一覧（図１に対応） …… 180
表２　遺構概要表 …… 181
表３　遺物概要表 …… 187

Ⅰ　平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡

１．調査に至る経緯と経過

（１）調査に至る経緯（図１）

本件は，個人住宅建設に伴う発掘調査である。調査地は，京都市上京区小山町908-15で，京都市立二条城北小学校より北西へ150ｍ程度隔てた地点である。

平成31年４月，この区画において住宅の建替えが計画され，施工主より埋蔵文化財発掘の届出が提出された。当課は，当該地域が周知の埋蔵文化財包蔵地である「平安宮跡」及び「聚楽遺跡」に含まれていること，また周辺における既往の調査成果より，当該地に内裏内郭回廊に関わる遺構の残存が見込まれることから，本発掘調査が必要であると判断した。これを受けて，令和元年７月に発掘調査を計画し，国庫補助事業として実施した。本稿はこれに係る報告である。

（２）調査の経過と調査方法（図２～４）

現地調査期間は，令和元年７月29日～８月23日，11月７～14日のうち21日間である。調査対象は，住宅建設予定範囲のうちの43.2㎡と，埋設間敷設範囲のうちの7.57㎡である。前者を１区，

図１　調査位置図（１：2,500）

後者を２区として設定し，第１区は排土置場の都合から計３回（1-1区・1-2区・1-3区）に分割して調査を実施した。

現地調査では，重機（バックホウ）を用いて表土，盛土，近現代の撹乱土の除去を終えた後，近世包含層以下の土層を人力にて掘削した。掘削作業では，層相の変化ごとに遺構面の検出に努め，遺構を検出した際には個別に掘削を行った（図３）。

遺物の出土に際しては，ヘラや小型ショベル等を用いて慎重に取り上げ作業を行った。また検出した遺構面では，全景写真の撮影や検出遺構の個別写真撮影，平面図の作成，標高値の計測，遺構実測等，一連の記録作業を行った。

今回の調査では，調査区のほぼ全面において平安時代の遺構面を確認した。特に第２区では凝灰岩の側石と河原石の底石を組んだ水路を発見した。なお，この成果については８月18日に地元住民を対象として現地説明会を開催した。

現地調査終了後は，遺構面の保存を図るため，層厚10cm程度の真砂土を入れた後に埋め戻しと地盤改良を行なった。これらの工程をすべて終了した段階で，現地調査を終了した。

続く整理作業では，出土遺物の洗浄，選別（抽出），遺構図の精査，版組，トレースを行い，報告書としての体裁を整えた。一連の作業は，本報告の刊行をもって完了した。

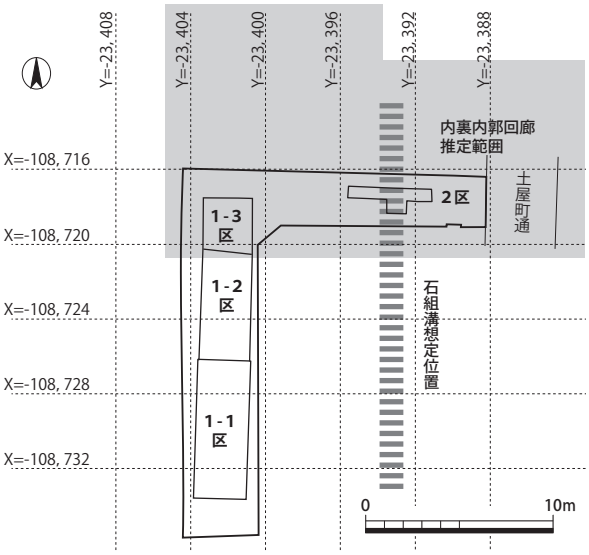


図２　調査区配置図（１：400）

図３　人力掘削作業状況

図４　現地説明会開催状況

２．位置と環境

（１）遺跡の立地と地理的環境

三方を山に囲まれた京都盆地の北方に位置する平安宮内裏跡は，北が高く，南へ向かって開く傾斜地上に立地する。このうち下立売通から丸太町通にかけては傾斜角度がやや強く，両通の間に位置する調査地も，隣家との間に高低差をもつ。

周辺は住宅と小規模な商業施設が混在しており，江戸時代より続く老舗や町屋も随所に見ら

れる。ただし，近年では世代交代による住宅の建替えや小規模共同住宅，ゲストハウスへの改築により，試掘調査や小規模な発掘調査が増加する傾向にある。

今回の調査対象である内裏跡は天皇の居住空間であり，内郭回廊はこれを囲む廊下状の施設である。現在想定されている内裏の規模は，九条家及び近衛家に伝えられた『延喜式』付図「内裏図」や「宮城図」を根拠としている。九条家本は建保六年（1218）頃，近衛家本は元応元年（1319）に模写されたものであり，その原本は平安時代後期に作成されたものと見られる。江戸時代後期の有職故実家である裏松固禅は，著書『大内裏図考証』（1788）の中で「内裏図」・「宮城図」を詳しく検証し，その殿舎や位置，構造についてより具体的に復原した。これによると内郭回廊は，南北72丈，東西57丈の範囲をめぐる築地回廊であったと想定される。その構造は，盛土の両側に凝灰岩の切石を並べて基壇とし，盛土の表層をつき固めた後，中央軸に沿って築地，左右両辺に柱列を設けて屋根をかけるものである。基壇の最大幅は10ｍ前後と考えられている。

内裏は天徳四年（960）の全焼以来，焼亡と再建を繰り返し，久寿元年（1154）から保元二年（1157）にかけて僧信西が大規模な復興を行い，源頼朝が文治五年（1190）に修繕するものの，

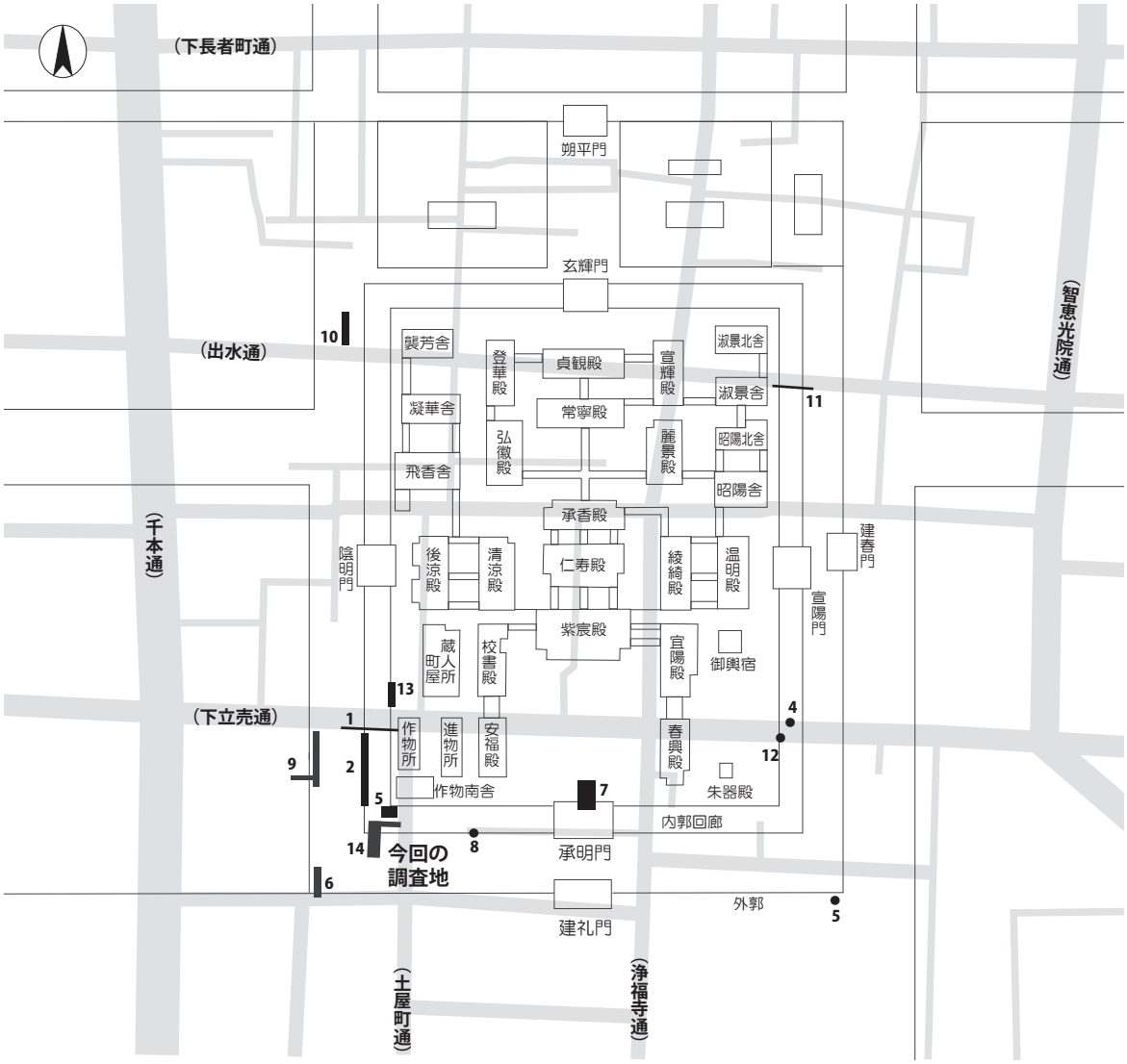


図５　内裏位置の推定と既往の調査位置図

表１　既往の調査一覧

No.	調査番号（調査次数）	推定地	調査期間	種類	住所	調査遺構・出土遺物	調査機関	文献
1		内郭 西面回廊	1963/9	立会	上京区田中町 下立売通内	平安前期／回廊基壇西縁地覆石，基壇，石敷溝（内側雨落溝） 出土遺物／土師器，須恵器，瓦	(財) 古代学協会	(財）古代学協会 1971 年
2		内郭 西面回廊	1969/02/10 ～ 1969/2/20	発掘	上京区下立売通土屋町 西入田中町 467 他	平安前期／回廊基壇西縁地覆石，基壇外溝 桃山時代／敷石列 出土遺物／土師器，瓦，青銅滓，坩堝破片	(財) 古代学協会	(財）古代学協会 1971 年
3	79HKDA 002	内郭 南面回廊 暗渠	1980/01/05 ～ 1980/01/14	発掘	上京区千本通下立売 下る小山町 908-43	平安後期／石敷溝（暗渠）	(財) 京都市埋蔵 文化財研究所	京都市文化観光 局　1980 年
4	80HKHQ 004	内郭 東面回廊	1980/11/22 ～ 1981/02/06	立会	上京区下立売通千本東 入田中町 438～ 下立売通智恵光院西入 中村町 522	平安時代／凝灰岩石列	(財) 京都市埋蔵 文化財研究所	(財）京都市埋蔵 文化財研究所 1995 年
5	81BBHQ 017	外郭築地	1981/05/25	立会	上京区千本通下立売 下る東入中務町 486-46	平安中期／土坑	(財) 京都市埋蔵 文化財研究所	京都市文化観光 局　1982 年
6	82HKDA 003	中和院	1982/08/04 ～ 1982/8/12	発掘	上京区千本通下立売 下る小山町 908-11	平安初期／土坑 平安後期／土坑 出土遺物／土師器，須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器，黒色土器，軒丸瓦，軒平瓦，土馬，転用硯	(財) 京都市埋蔵 文化財研究所	京都市文化観光 局　1983 年
7	84HKLL	承明門	1984/12/14 ～ 1985/01/21	発掘	上京区下立売通千本 東入田中町 468	平安前・後期／承明門北雨落溝，地鎮遺構（埋納土坑） 出土遺物／密教法具輪宝，櫪，金粉，銀切板，琥珀，ガラス，土師器，須恵器，陶磁器，瓦器	(財) 京都市埋蔵 文化財研究所	京都市文化観光 局　1986 年
8	85BBHQ 087	内郭 南面回廊	1986/01/24 ～ 1986/01/30	立会	上京区千本通下立売下 る東入中務町 489 地先	平安時代／凝灰岩石列	(財) 京都市埋蔵 文化財研究所	京都市文化観光 局　1986 年
9	87BBHQ 089	外郭築地 側溝	1987/10/30 ～ 1987/11/11	試掘	上京区下立売通千本 東入田中町 428-1 他	平安時代／築地状の高まり，溝，柱穴（築地塀副柱）， 出土遺物／土師器，須恵器，灰釉陶器，緑釉陶器，黒色土器，瓦，壁土	(財) 京都市埋蔵 文化財研究所	京都市文化観光 局　1988 年
10	88HKDB	内郭 西面回廊 外側 空閑地	1988/05/02 ～ 1988/06/12	発掘	上京区千本通出水東入 西神明町 338	平安前期／土坑 平安中期／土坑，瓦溜り 出土遺物／土師器椀，杯，緑釉陶器蓋，須恵器，黒色土器，灰釉陶器，銭貨，瓦類，壁土	(財) 京都市埋蔵 文化財研究所	京都市文化観光 局　1989 年
11	89HKUW 002	内郭 東面回廊 基壇 西雨落溝	1989/8/3 ～ 1989/9/30	立会	上京区中立売通～下立売通， 千本通～智恵光院通 地内	平安時代／基壇整地層，石敷溝（内側雨落溝？）	(財) 京都市埋蔵 文化財研究所	(財）京都市埋蔵 文化財研究所 1994 年
12	89HKUW 002	内郭 東面回廊 雨落溝	1989/8/3 ～ 1989/9/30	立会	上京区中立売通～下立売通， 千本通～智恵光院通 地内	平安時代／凝灰岩の石列（基壇西縁地覆石？）	(財) 京都市埋蔵 文化財研究所	(財）京都市埋蔵 文化財研究所 1994 年
13	94HKZJ 001	内郭 西面回廊 雨落溝	1994/06/01 ～ 1994/07/04	発掘	上京区下立売通千本 東入田中町 434-5	平安前期／回廊基壇東縁地覆石，石敷溝（内側雨落溝）	(財) 京都市埋蔵 文化財研究所	京都市文化観光 局　1995
14	19K011	内郭 南面回廊 暗渠	2019/07/29 ～ 2019/08/24	発掘	上京区千本通下立売 下る小山町 908-15	平安前期／南北溝，基壇盛土，石組溝（暗渠） 平安後期／溝，土坑，ピット 江戸時代／溝，土坑，ピット 出土遺物／土師器，須恵器，緑釉陶器，瓦器，陶磁器，瓦，土製品，鋳型	京都市 文化財保護課	本書にて報告

承久元年（1219）には焼失する。安貞元年（1227）の大火以後は再建されずに荒廃し，「内野」と呼ばれた。

その後，この地が活況を取り戻すのは，豊臣秀吉による聚楽第の建設が行われる桃山期である。調査地の東を通る土屋町通は，『豊公築所聚楽城ノ図』にもその名称が見える古道で，周辺には豊臣氏旗下「小人組」の居住地である「御小人町（おこひと）」が存在した。寛永十四年（1637）の『洛中絵図』によると，周辺には京都所司代であった板倉周防守の下屋敷があり，寛保年間（1741-1744）の『京大絵図』には「御小人丁」の記載がある。また，天保二年（1831）には「御小人丁」と，後に当地の町名となる「小山丁」の記名があり，近世以前の名残をとどめている。

（２）周辺の既往の調査成果（図５・表１）

内裏跡では，これまでにも発掘調査が多数行なわれている。ここでは，このうち内郭回廊跡に関わる調査について概観する。

1963年，下立売通に沿って行なわれた水道工事の掘削時に，回廊の基壇と目される凝灰岩の石列や地覆石が発見された（図５-1）。これを受けて，その南側敷地で1969年に行なわれた発掘調査では，連続する基壇の地覆石と外溝が検出され，これらが内郭の西面回廊に関連する遺構であることがはじめて認識された（図5-2）。また1980年に，調査地北側にあたる住宅地において行なわれた発掘調査では，凝灰岩の側石で組まれた石組溝が発見された（図5-3）。この溝は，西面回廊の内溝の一部として報告されたことから，これまで図上復原にとどまっていた内郭西側の推定ラインが，現地形に落とし込まれることとなった。

このほか，東側推定ライン付近では，1980年度と1989年度に下立売通と出水通で立会調査が行なわれ，凝灰岩の石列や雨落溝の一部が確認されている（図5-4,11,12）。また，南側推定ライン上でも1986年度の立会調査において凝灰岩の石敷が確認されており，この内裏内郭回廊の痕跡は比較的良好に残ることが明らかとなった（図5-8）。

３．調査成果

（１）基本層序（図６・７）

調査の現況地盤はほぼ平坦で，T.P.46.6ｍ前後を測る。第１区の基本層序は，調査区の北端と南端では大きく異なる。地山までの深度が浅い北端では，GL-0.1ｍまで盛土，-0.3ｍまで第１層（近世～近代），-0.4ｍまで第２層（近世包含層），-0.6ｍまで第３層（近世包含層）があり，これを除去した段階で回廊基壇構築土に（平安時代前期）に達する。

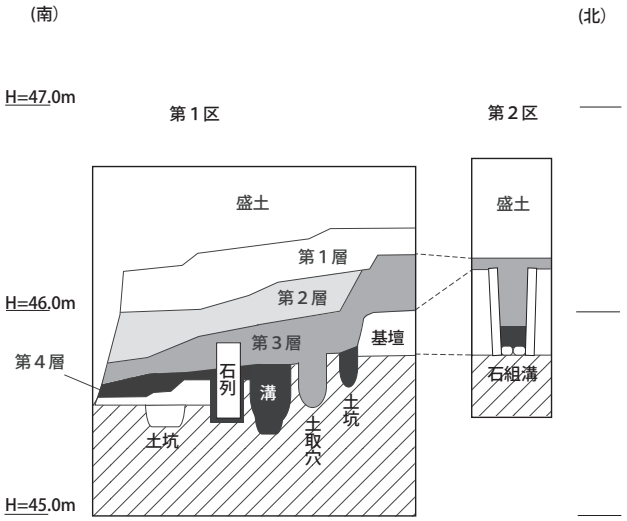
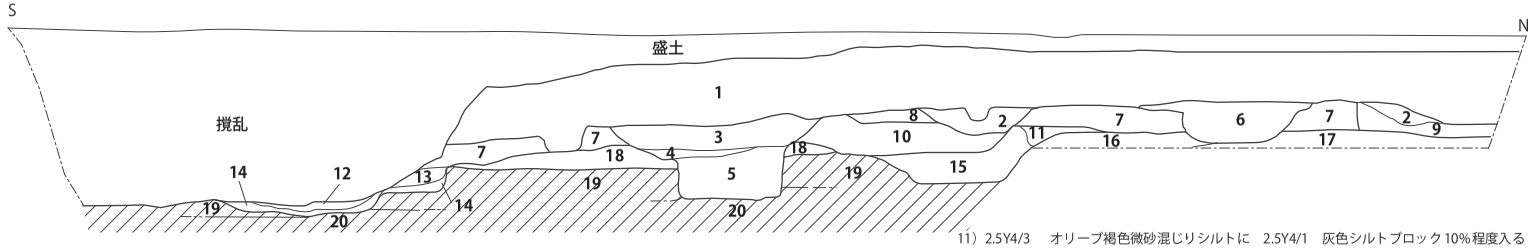


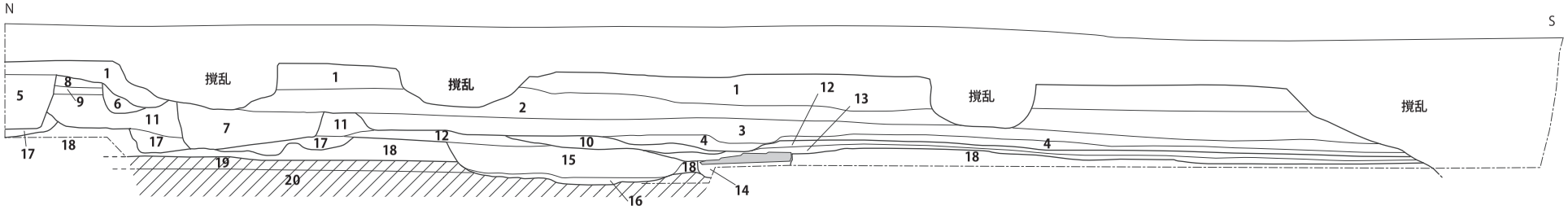
図６　基本層序模式図

H=47.0m　　1－2区・1－3区西壁断面



1）10YR4/2　暗灰黄色粗砂混じりシルト　径1㎝未満の礫少量入る　炭化物・土器片・貝殻入る　しまり悪い（第1層）
2）10YR4/2　暗灰黄色粗砂混じりシルト　径2㎝未満の礫少量入る　炭化物・染付片入る　しまり悪い（第2層）
3）2.5Y4/3　オリーブ褐色細砂～微砂　径0.5㎝未満の礫微量入る　土器片入る　下位に粗砂の流入あり（溝40）
4）2.5Y4/2　暗灰黄色礫混じりシルト　径1㎝未満の礫多量入る　陶磁器・染付片入る　しまり良い（溝40下層）
5）2.5Y4/3　オリーブ褐色礫混じりシルト　径3㎝未満の礫少量入る　ややしまり悪い（土坑47）
6）5Y4/2　暗灰黄色礫混じりシルトに　2.5Y5/4　黄褐色細砂混じりシルトブロック10%程度入る　土器片入る　ややしまり悪い
7）2.5Y4/3　オリーブ褐色微砂混じりシルトと　2.5Y3/2黒褐色細砂混じりシルトブロックの混合層　径1㎝未満の礫少量入る
土器片微量入る　ややしまり悪い（第3層）
8）5Y5/3　灰オリーブ色細砂混じりシルト　径0.5㎝未満の礫少量入る　ややしまり悪い
9）5Y4/1　灰色礫混じりシルト　径1㎝未満の礫少量入る　しまり悪い　やや軟質（土坑）
10）5Y4/3　オリーブ褐色粗砂混じりシルト　径1㎝未満の礫少量入る　土器片微量入る　ややしまり悪い
11）2.5Y4/3　オリーブ褐色微砂混じりシルトに　2.5Y4/1　灰色シルトブロック10%程度入る　ややしまり悪い
12）2.5Y4/2　暗灰黄色粗砂混じりシルト　径0.5㎝未満の礫少量入る　瓦・土器片・炭化物多量入る　ややしまり悪い
13）2.5Y5/6　黄褐色粘土質シルトブロックと　5Y4/3　オリーブ褐色シルトブロックの混合層
径1㎝未満の礫少量入る　ややしまり良い（落込52）
14）2.5Y4/2　暗灰黄色微砂混じりシルトに　2.5Y5/3　黄褐色粘土質シルトブロック10%程度入る
炭化物・土器片・瓦片入る　非常にしまり良い（溝50最下層）
15）5Y4/1-3/1　灰色～オリーブ黒色粗砂混じりシルトに　2.5Y5/6　黄褐色粘土質シルトブロック10%程度入る
径0.5㎝未満の礫少量入る　炭化物入る　ややしまり悪い
16）2.5Y5/6　黄褐色粘土質シルトに　2.5Y4/2　暗灰黄色微砂混じりシルトブロック30%程度入る　しまり良い
17）2.5Y5/3　黄褐色粗砂混じりシルト　径0.5㎝未満の礫少量入る　須恵器片・焼土・炭化物多量入る　しまり良い（基壇）
18）235Y5/4　黄褐色細砂混じりシルトに　2.5Y4/2　暗灰黄色シルトブロック10%程度入る（平安時代後期整地層）
19）2.5Y5/6　黄褐色粘土質シルト　径0.5㎝未満の礫少量入る　しまり良い（地山）
20）2.5Y4/3　オリーブ褐色礫混じりシルト　径5㎝未満の礫多量入る　しまり良い（地山）

H=47.0m　　1－1区・1－2区東壁断面



1）10YR4/2　暗灰黄色粗砂混じりシルト　径1㎝未満の礫少量入る　炭化物・土器片・貝殻入る　しまり悪い（第1層）
2）10YR4/2　暗灰黄色粗砂混じりシルト　径2㎝未満の礫少量入る　炭化物・染付片入る　しまり悪い（第2層）
3）2.5Y4/3　オリーブ褐色細砂～微砂　径0.5㎝未満の礫微量入る　土器片入る　下位に粗砂の流入あり（溝40）
4）2.5Y4/2　暗灰黄色礫混じりシルト　径1㎝未満の礫多量入る　陶磁器・染付片入る　しまり良い（溝40下層）
5）2.5Y4/3　オリーブ褐色細砂混じりシルト　径1㎝未満の礫少量入る　土器片・瓦片少量入る　やや軟質　しまり悪い
6）2.5Y4/3　オリーブ褐色微砂混じりシルト　径0.5㎝未満の礫微量入る　土器片・瓦片少量入る　やや軟質　しまり悪い
7）2.5Y3/1　黒褐色細砂混じりシルトに　2.5Y3/2　黒褐色シルトブロック10%程度入る　しまり悪い
8）2.5Y4/2　暗灰黄色粗砂混じりシルト　径1㎝未満の礫少量入る　土器細片入る　しまり悪い
9）2.5Y4/2　暗灰黄色粗砂混じりシルトに　2.5Y4/4　褐色細砂混じりシルトブロック30%程度入る
10）2.5Y4/3　オリーブ褐色粘土質シルト　径1㎝未満の礫少量入る　土器片・瓦片・炭化物多量入る　ややしまり悪い（溝26）
11）2.5Y3/2　黒褐色細砂混じりシルトに　2.5Y3/2黒褐色粘土質シルトブロック10%程度入る　土器片少量入る　ややしまり悪い
12）2.5Y3/2　黒褐色細砂混じり粘土質シルト　径1㎝未満の礫少量入る　土器片・炭化物多量入る　非常にしまり良い（整地層）
13）2.5Y3/2　黒褐色礫混じりシルト　径1㎝未満の礫多量入る　土器細片入る　ややしまり悪い
14）2.5Y4/2　暗灰黄色細砂混じりシルト　凝灰岩片多量入る　しまり悪い
15）2.5Y4/2　暗灰黄色粗砂混じりシルト　径5㎝未満の礫少量入る　瓦片・土器片・炭化物多量入る　ややしまり悪い（溝50）
16）2.5Y3/2　黒褐色粗砂混じり粘土質シルトに　2.5Y4/3　オリーブ褐色粘土質シルトブロック10%程度入る　径1㎝未満の礫少量入る
土器・瓦・炭化物の細片入る　非常によくしまる（溝50）
17）2.5Y4/2　暗黄褐色シルトブロックと　2.5Y5/4　黄褐色細砂混じりシルトブロックの混合層　径1㎝未満の礫少量入る　ややしまり悪い（無遺物）
18）2.5Y5/4　黄褐色細砂混じりシルトに　2.5Y4/2　暗灰黄色シルトブロック10%程度入る（平安時代整地層）径0.5㎝未満の礫少量入る　締まり悪い
19）2.5Y5/6　黄褐色粘土質シルト　径0.5㎝未満の礫少量入る　しまり非常に良い（地山）
20）2.5Y4/3　オリーブ褐色礫混じりシルト　径5㎝未満の礫多量入る　しまり良い（地山）

0　2m

図7　調査区壁断面図（1：50）

一方，最も深い南端では，GL-0.35ｍまで盛土，-0.6ｍまで第１層（近世～近代堆積層），-0.8ｍまで第２層（近世包含層），-0.95ｍまで第３層（近世包含層），-1.0ｍまで第４層（平安時代後期～鎌倉時代初頭包含層），-1.2ｍまで第５層（平安時代前期基盤層）があり，以下，オリーブ褐色礫混じりシルトを主体とする地山に達する。

遺構面は，第１層上面（機械掘削層除去面）を第１面，第１層除去面を第２面，第２層除去面を第３面，第３層除去面を第４面，第４層除去面を第５面とした。なお調査区の南端は撹乱状により大きく落ち込むため，深掘は行なわなかった。

第２区は，遺構面までの深度がさらに浅く，GL-0.5ｍまで盛土を除去した段階で，回廊構築土および石組溝の側石が露出した。第１区第５面に相当する。

（２）遺　構

第１区第１面（図８）

第１面は，近世後期～現代の盛土を除去して検出した遺構面である。検出面は北から南へ向かって緩やかに傾斜し，調査区南端では段をもって大きく下がる。第１面では土坑３基が切り合った状態で出土した。時期は近世後期である。

土坑１　調査区南半部において検出した土坑である。平面形状は径1.3ｍを測る円形を呈する。断面形状は碗形で，最大深度は0.4ｍを測る。近世後期の遺構である。埋土からは土師器皿，焼締陶器甕，染付碗，平瓦のほか，緑釉瓦の破片が出土した。

土坑２　平面不定形を呈する土坑である。土坑１に南端を切られており，北端は湾曲して調査区外へ続く。最大深度は0.1ｍを測る。埋土からは染付碗の破片が出土した。

土坑３　土坑２の下層で検出した遺構である。平面形状は歪な楕円形を呈し，土坑１・土坑２に切られるものの，長径0.5ｍ程度に復原できる。最大深度は0.12ｍを測る。遺物の出土は確認でき

表２　遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代前期	回廊基壇盛土	内郭回廊構築土。焼土を含む。
	土坑	31，32，33，34
平安時代後期	石組溝	側板には凝灰岩製切石，底石には河原石を敷く。
	土坑	41（凝灰岩据付），44，46，53
	落込	60（埋土は固く締まる整地層）
	溝	50（調査区を東西方向に通る），59，71，72（基壇上を南北にのびる）
近世	土坑	１（井戸跡？），２，３，10，21，47（土取穴）
	ピット	11，12，22，23
	溝	13，25（調査区を南北に貫く），40（調査区を蛇行して横断），48，70
不明	溝	59（基壇南辺を削る）
	土坑	58（基壇南辺を削る）

なかった。

凝灰岩粒集中地点　調査区北半部では，凝灰岩に由来する白色粒がまとまって出土した。平面検出の後，半裁したが明確な掘り方を見出すことができなかった。このため，近世期に凝灰岩を並べた痕跡であると判断した。この周辺より，豊楽院の創建緑釉軒平瓦と同形の緑釉瓦が１点出土した（図17-28）。

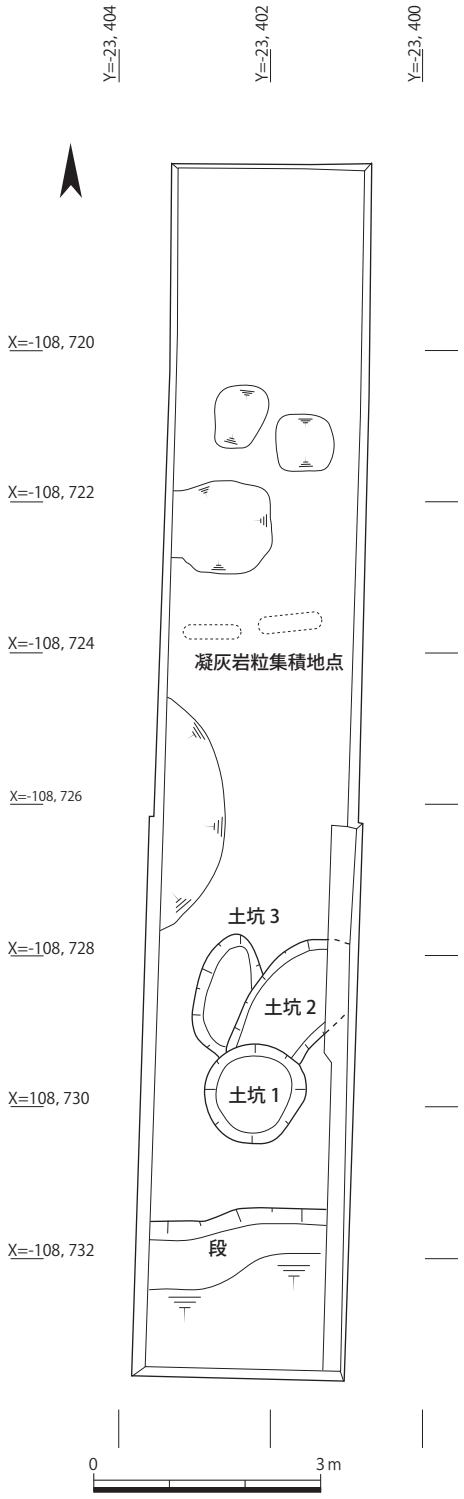


図８　１区第１面全体図（１：100）

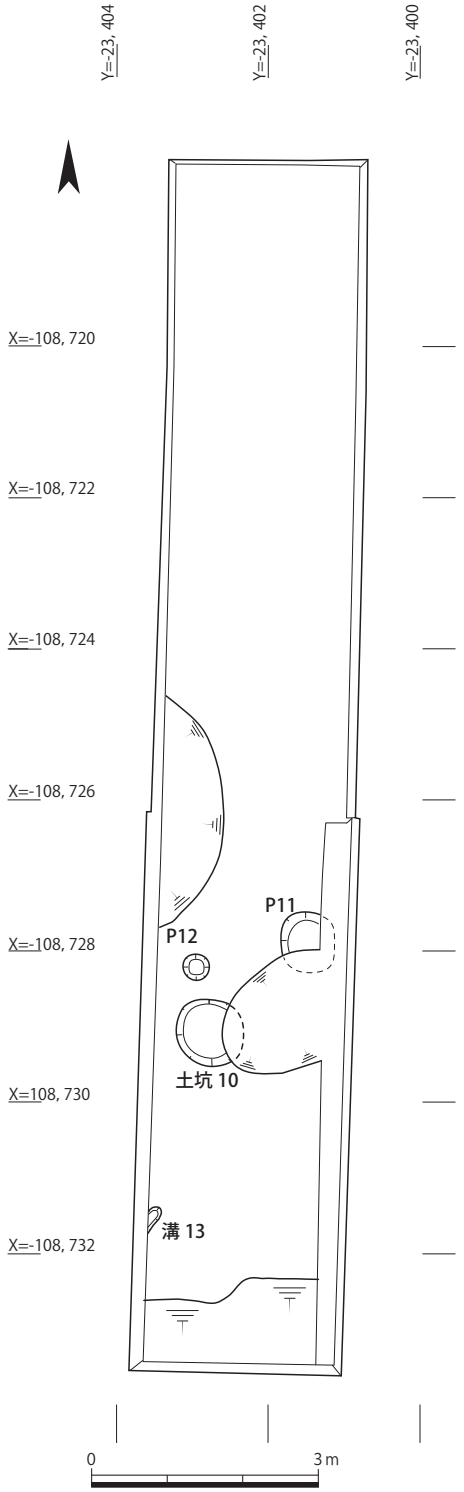


図９　１区第２面全体図（１：100）

第１区第２面（図９・12）

近世後期包含層である第１層を除去して検出した遺構面である。調査区南半部において土坑，ピットを検出した。遺構面精査時には，唐津焼碗，土師器皿等の破片が出土している。遺構面の時期は江戸時代前期～中期である。

土坑10　平面円形を呈する土坑である。一部撹乱を受けるが，径0.9ｍ程度に復原できる。断面形状は浅い皿形で，最大深度は0.08ｍを測る。埋土は暗灰黄色礫混じりシルトを主体とし，底面付近には貝殻が入る。埋土からは焼締陶器の壷，灰釉陶器皿の破片が出土した。江戸時代の廃棄土坑と考えられる。

土坑11　土坑10の北東で確認した遺構である。南半部と東辺を損なうが，平面形状は径0.75ｍ程度の円形ないし楕円形と推定される。最大深度は0.06ｍと浅いが，断面形状は逆台形で掘り方は明確である。埋土には焼土塊を多く含む。施釉陶器炮烙，土師器皿，灰釉陶器皿（図15-13）が出土した。江戸時代の遺構である。

ピット12　土坑10の北側で検出した遺構である。平面形状は，径0.35ｍを測る円形を呈する。断面形状は浅い皿形で，最大深度は0.05ｍである。埋土から，土師器皿と瓦の小片が出土した。

溝13　調査区西辺で検出した遺構である。最大幅0.15ｍ，検出長は0.3ｍを測る。明確な掘り方をもつが，これより北へは連続しない。埋土から土師器皿が出土した。

第１区第３面（図10・12）

近世包含層である第２層を除去して検出した遺構面である。この面の基盤層は，上層に比べてややしまりがあり，ブロック土を多く含む。一時的に整地が為された痕跡と推測される。

第３面では調査区中央を南北にのびる溝のほか，土坑，ピットを検出した。これらの遺構埋土には平安時代後期の遺物が一定量含まれるが，基盤層の年代が近世前期を遡らないことから，当該面の存続時期も近世前期～中期頃と判断される。

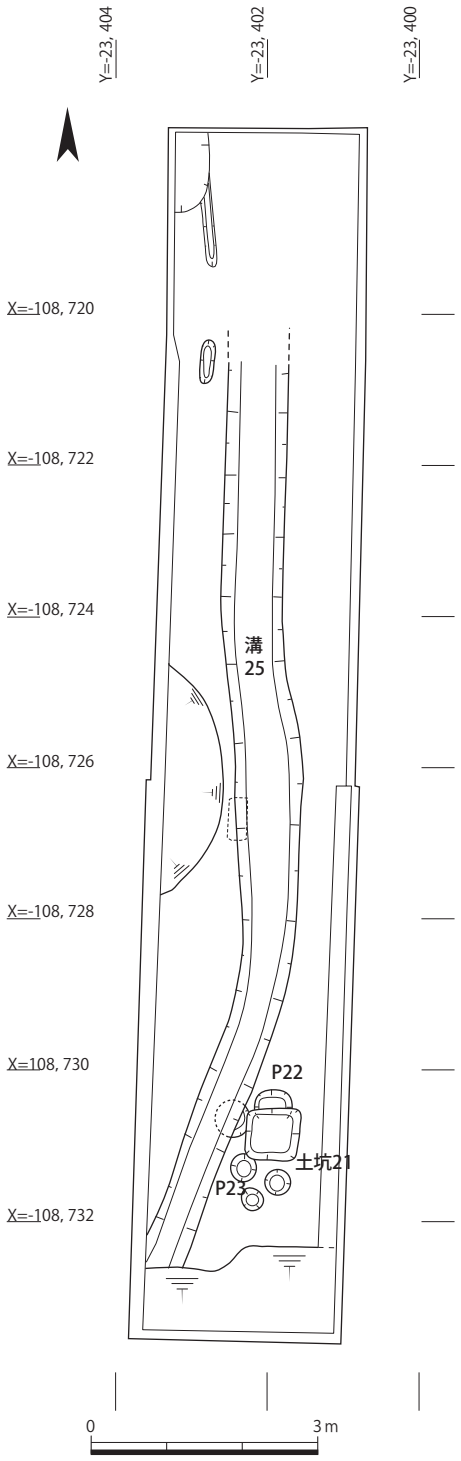


図10　１区第３面全体図（１：100）

土坑21　調査区南辺において検出した土坑である。やや歪ではあるが，平面形状は一辺0.7ｍを測る隅丸方形を呈する。断面形状は不定形で，最大深度は0.09ｍを測る。埋土は砂質で，細かい砂礫を含む。土師器皿と平瓦の破片が出土した。

ピット22　土坑21の北側で検出した遺構である。南半を土坑21に切られるが，径0.5ｍ程度の円形に復原できる。断面形状は浅い椀形で，最大深度は0.12ｍを測る。土師器皿の破片が出土した。

ピット23　土坑21の南西に接して検出した遺構である。平面形状は円形で，径0.35ｍを測る。断面形状は深い椀形を呈し，最大深度は0.22ｍである。埋土は上下層に大別でき，上層は細砂～微砂，下層には礫混じりシルトが堆積する。柱穴と推測されるが連続する建物は復原できていない。埋土から土師器皿（平安時代後期）の小片が出土した。

溝25　調査区のほぼ中央を南北に通る溝である。北から南へ流れており，やや西へ蛇行しながら調査区外へ続く。調査区北端では削平されておりその源は確認できない。断面形状は皿形で，底面には凹凸がある。埋土は黒褐色細砂混じりシルトを主体とし，凝灰岩の細かい破片を多く含む。これは，下層遺構である凝灰岩の石列を削り込んだためと考えられる。

このほか，埋土には炭や焼土塊，細かく砕けた鋳型の破片等が多く含まれていた。

溝70　調査区の北辺において検出した遺構である。検出長2.0ｍ，最大幅0.5ｍ，最大深度0.05ｍを測る。調査区の北西から湾曲して調査区内に入り，東西方向へのびた後に消滅する。遺構の性格は不明である。

第１区第４面（図11・12）

桃山期～近世初頭の包含層である第３層を除去して検出した面である。遺構面は北から南へ下がる傾斜が顕著となるとともに，西から東へ下がる微地形も認められる。基盤層である第４層は薄層ながら非常に締まった整地層である。この面では溝，土坑を検出した。各遺構の埋没時期には差があるものの，遺構面の下限は概ね江戸時代初頭と考えられる。

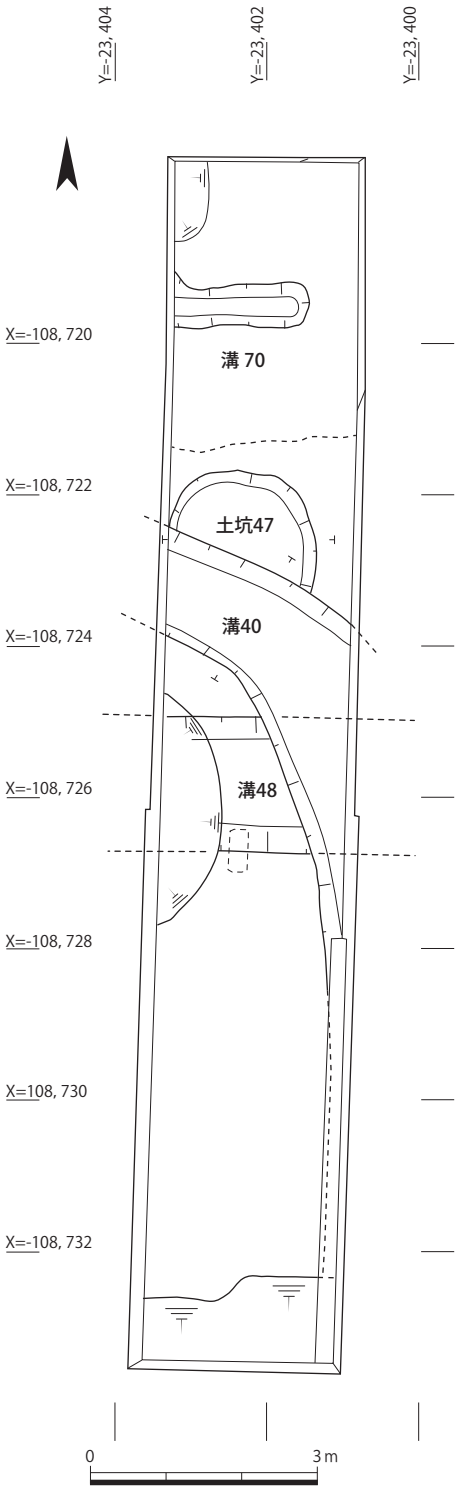


図11　１区第４面全体図（１：100）

溝40　調査区中央を北西から南へ，湾曲して続く溝である。調査区南半部の東壁面では，溝の埋土が層を成して南へ連続することを確認できる。これを含めると，遺構の検出長は10ｍ程度となる。溝幅は1.2～1.7ｍである。断面形状は皿形で，底面は総じて平坦，最大深度は0.12ｍである。埋土はオリーブ褐色細砂混じりシルトを主体とし，微砂が流入することにより細かいラミナが形成される。遺構の性格は明らかではないが，地形に逆らわずに流れていること，流水痕跡があること

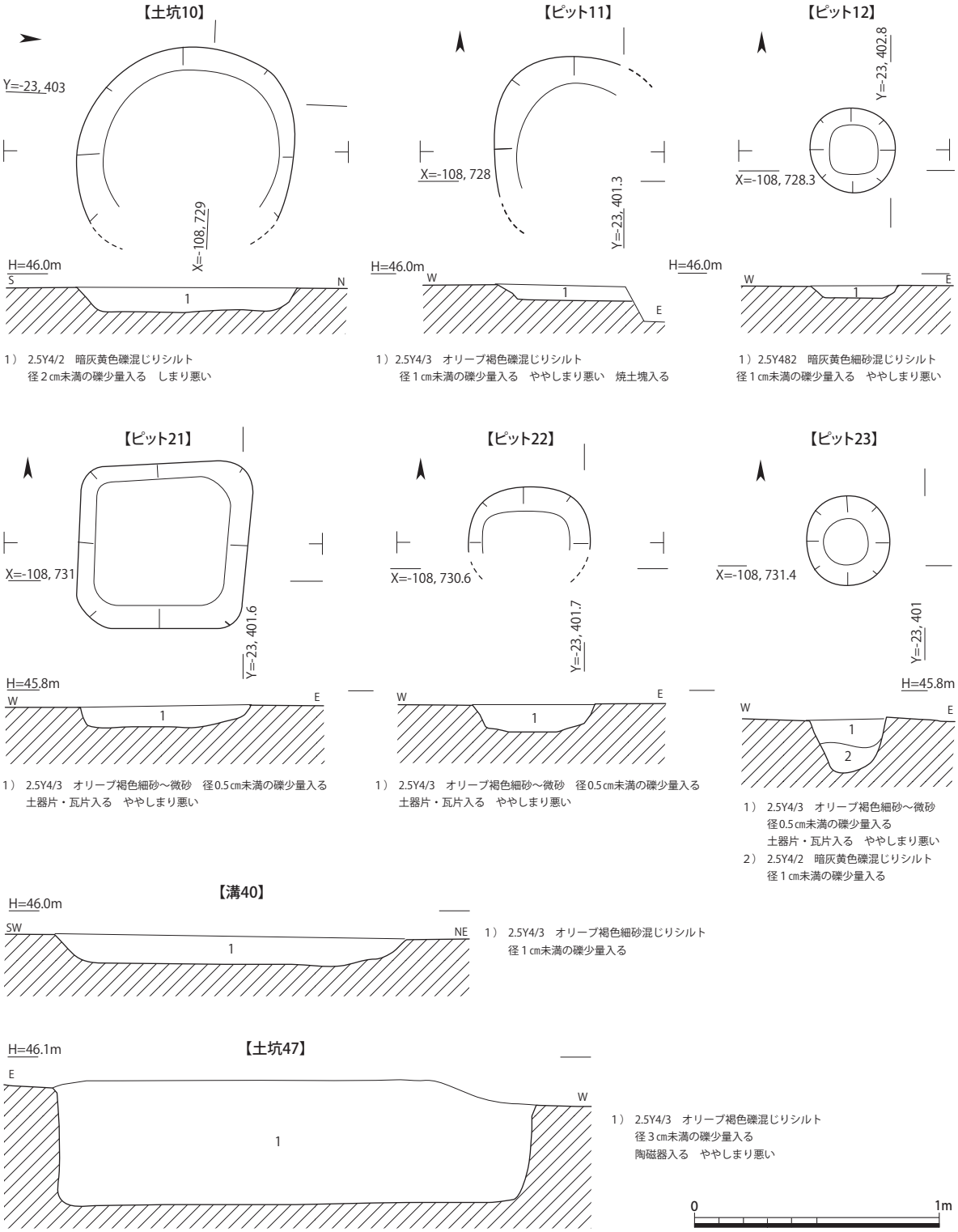


図12　１区第２面～第４面遺構平面断面図（１：25）

から，排水を目的とした施設であったと推測される。埋土からは土師器，須恵器のほか，施釉陶器，鋳型破片，壁土等が出土した。遺構の時期を明確に示す遺物は出土していないが，切りあい関係にある土坑47の年代から，近世初頭の遺構であると判断される。

土坑47　調査区北半部で検出した大型の土坑である。南半部を溝40に切られている。平面形状は長径2.7ｍを測る楕円形，最大深度は0.5ｍである。断面形状は方形に近く，壁面はほぼ垂直に落ちる。埋土はしまりの悪い礫混じりシルトで単調である。これらの特徴から，土取り穴である可能性が考えられる。埋土からは土師器皿（16世紀～），瓦質土器鉢，染付碗（17世紀）が出土した。江戸時代初頭の遺構である。

溝48　調査区のほぼ中央を東西方向にのびる溝である。溝40や撹乱によって失われた範囲が大きく，検出長は1.3ｍ，最大幅は1.8ｍである。断面形状は皿形，最大深度は0.15ｍを測る。東壁断面を見ると溝幅を減じることなく東へ延びており，そのまま調査区外へ連続する。遺構の性格は明らかではないが，遺構面の傾斜方向は既述のとおり北から南へ下がることから，この溝48の方向性は人為的であると言えよう。下層遺構である溝50の方向性を踏襲するものか。埋土からは古代の土器に混じり，鋳型の細片や壁土が出土した。

第１区第５面（図13・14）

整地層である第４層を除去して検出した平安時代の遺構面である。調査区南半部では，南東方向へ下がる落込み（落込60）の上面で凝灰岩の石列や東西溝を，下面で土坑群を検出した。また，調査区北辺では，回廊の基壇構成土とみられる高まりを検出した。

なお，今回の調査では平安時代の遺構保存を目的とするため，遺構の断割りは最小限に留めた。

回廊基壇土　調査区北辺より3.7ｍの地点において，北から南へ下がる傾斜を確認した。ただし，すぐ南には既述した土取穴（土坑47）のほか，複数の土坑が存在しており，それを確認できたの

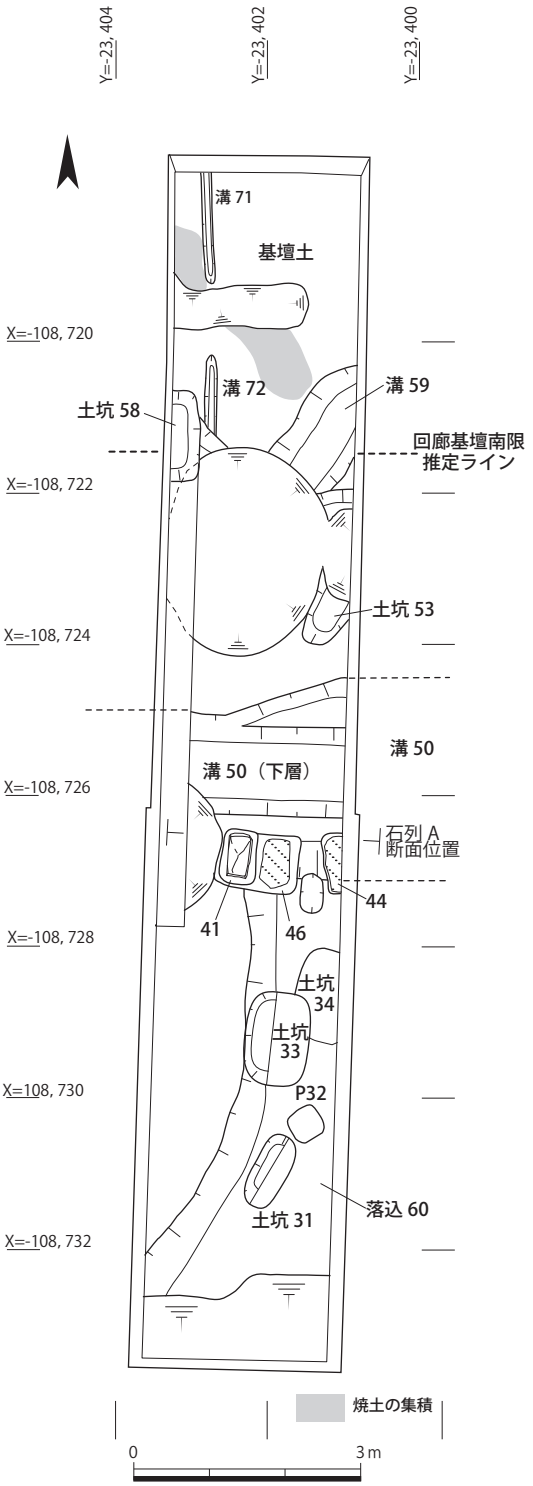


図13　１区第５面全体図（１：100）

は僅かな範囲に限られる。ただし，この傾斜が推定される内郭回廊の南限に近いこと，また傾斜より北には非常にしまりの良い整地層が広がること，さらにその表層には炭化物と焼土が多分に含まれており，その標高が第２区において検出した基壇土に近似することから，この高まりを回廊基壇の一部であると判断した。この基壇土を一部断割ったところ，奈良時代の須恵器が数点出土した（図17-1･2･4）。

土坑31　落込60の除去面において検出した遺構である。平面形状は長径1.0ｍ，短径0.5ｍの楕円形を呈する。断面形状は逆台形で，最大深度は0.22ｍを測る。埋土はオリーブ褐色細砂～微砂を主体とし，下位に暗灰黄色礫混じりシルトが存在する。遺物の出土は確認できておらず，時期は不明である。

土坑33　同じく落込み60の除去面において検出した遺構である。平面形状は，長径0.62ｍ，短径0.45ｍを測る隅丸方形を呈する。断面形状は浅い皿形で，最大深度は0.08ｍを測る。埋土は黄褐色粗砂混じりシルトを主体とする。遺物の出土は確認できていない。遺構の性格及び時期は不明である。

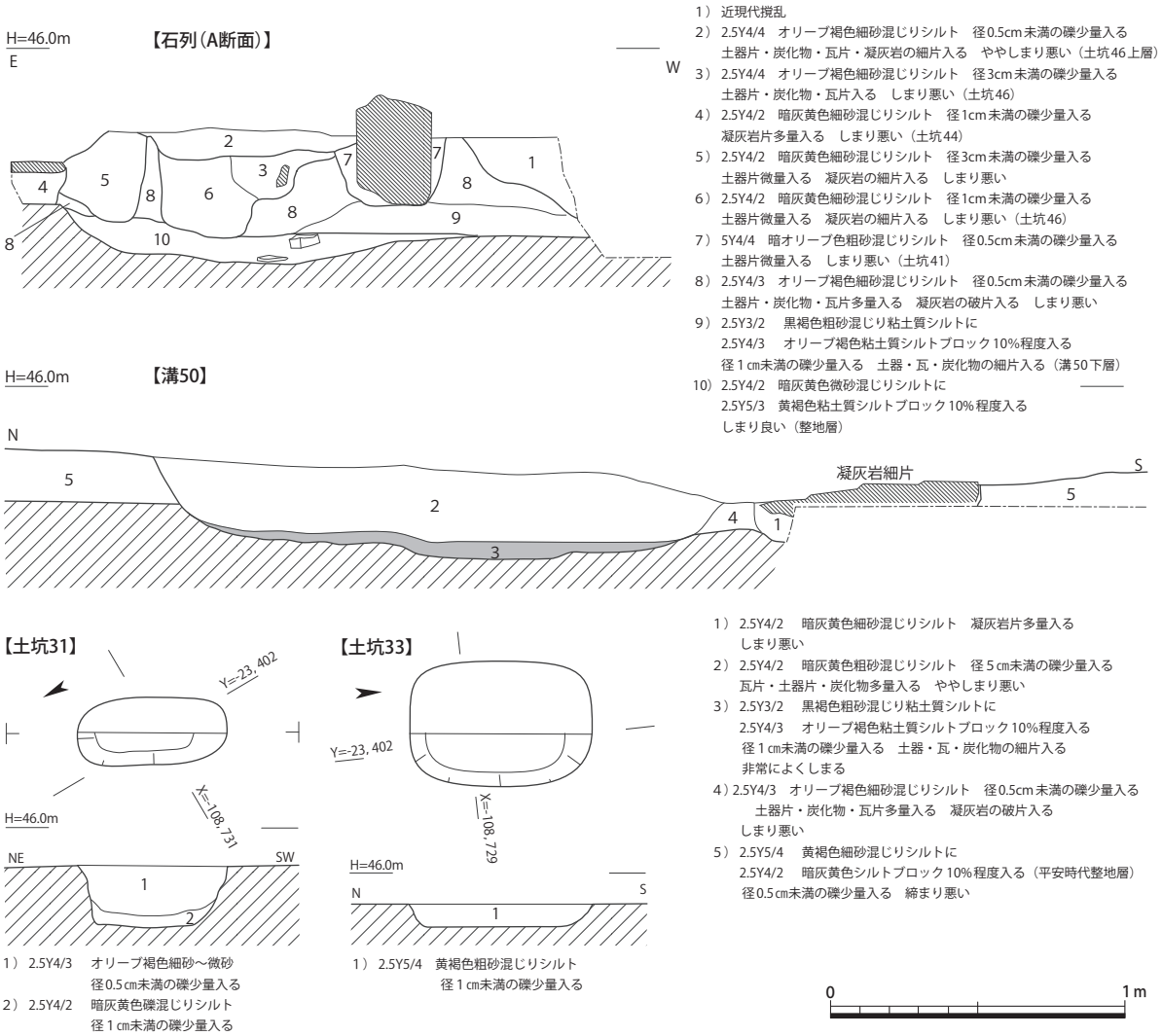


図14　第５面遺構平面断面図（１：25）

石列（土坑41・44・46） 調査区のほぼ中央において確認した凝灰岩の石列とその掘り方群である。土坑41からは，直方体に成形された石が据えられた状態で出土した。土坑44・46には石は据えられていないが，埋土には砕けた凝灰岩片が集積することから，石が抜き取られたか，破砕されたものとみられる。

土坑41は，長辺0.7ｍ，短辺0.42～0.5ｍを測る隅丸方形を呈する。断割りの結果，最大深度0.25ｍを測る掘り方のほぼ中央に，石が据えられていることを確認した。石の残存法量は，長辺0.4m，短辺0.35ｍ，厚さ0.35ｍであるが，上面は破損されているため本来はさらに高さがあったと考えられる。埋土からは，土師器皿と瓦の破片が僅かに出土した。平安時代後期の遺構である。

土坑41の東に並ぶ土坑46は，長辺1.0ｍ，短辺0.7ｍの掘り方をもつ。土坑41と切り合うが，出土遺物に大差はない。上層遺構である溝25により削平を受けたとみられる。掘り方の断面形状は段状で，西側が一段深い。凝灰岩片はこの深い掘り方付近からまとまって出土した。径５～７㎝程度の塊として残るものが多い。平安時代後期の遺構である。

土坑44は調査区東壁に接して検出した遺構で，土坑46と同じく凝灰岩片が集中する。上層遺構の溝40により削平されたと考えられる。土坑の掘り方は長辺0.8ｍ，短辺0.2ｍ以上である。

これら土坑群の性格は明らかではないが，この地点に整形された凝灰岩を組んだ構造物が存在したことは明らかである。内郭回廊南東角に設けられていた施設の基礎の一部の可能性がある。

溝50 石列の北側において検出した溝状遺構である。石列土坑群には切られる関係にある。検出長2.0ｍ，最大幅2.7ｍを測る遺構で，東西方向に主軸をもつ。ただし，底面のレベルは平坦で，傾斜は特に確認できない。断面形状は，中央が一段低く掘り込まれているため逆凸形を呈する。埋土はややしまりの悪い上層と，非常に硬くしまる下層に大別できる。下層からは土師器皿，緑釉陶器椀，須恵器甕等，10～11世紀の遺物がまとまって出土した。

土坑53 調査区北半部東辺で検出した土坑である。地山上面において成立する。平面形状，断面形状ともに不定形で，底面には凹凸が見られる。埋土は明黄褐色シルトブロックと地山ブロックの混合層である。

土坑58 調査区北半部西辺で検出した遺構である。地山上面で成立する。平面形状は隅丸方形で，長辺1.15ｍ，短辺0.4ｍ以上の規模を測る。埋土は灰色～オリーブ黒色粗砂混じりシルトを主体とし，地山ブロックを一定量含む。遺物の出土は確認できていない。遺構の性格は不明である。

溝59 調査区北半部西辺で検出した遺構である。検出長は1.3ｍ，最大幅は0.9ｍを測る。底面には凹凸があり安定しない。北東－南西方向にのびて基壇構築土を一部侵食する。遺物の出土は確認できなかった。

溝71・72 調査区北辺で検出した溝である。ともに最大幅0.15ｍを測る小規模遺構であるが掘り方は明確である。両者は主軸と規模が近似するため，同一遺構と考えられる。埋土に流水痕跡は認められない。何らかの区画を表す可能性がある。遺物の出土は確認できなかった。

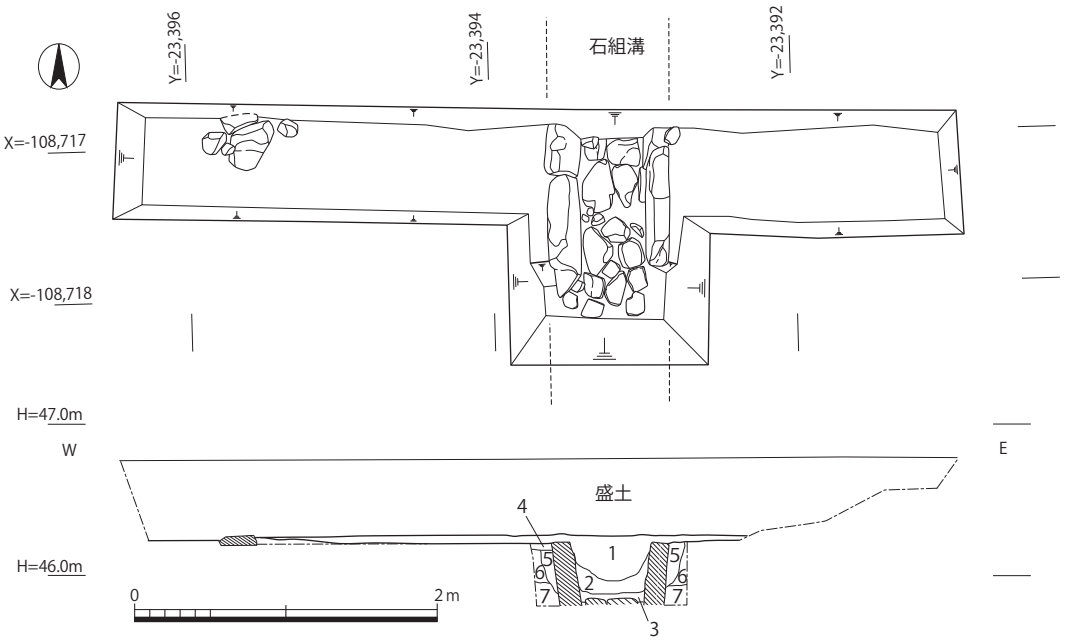
第２区（図15）

第２区では近世～近代の盛土を除去した段階で，焼土や炭化物，細かい土器片を多く含む平安時代後期の整地層を確認した。これは内郭回廊の基壇土と考えられる（図15-4層）。調査区の東半部ではこの基壇上面から掘りこまれた石組溝を検出した。これは1980年度に実施された北側隣接地の調査（表１調査３）で検出された石組溝の延長と推測される。なお現地では，溝の残存状況を確認するため調査区を南へ拡張した。その結果，最終的に長さ1.2ｍ，幅0.8ｍの規模で遺構を検出した。

石組溝（図16） 凝灰岩の切石を用いた側石と，円礫を用いた底石から成る遺構である。確認できた側石は４点，底石は20点である。南半部は下水管（近現代）の敷設により側石が抜き取られており，底石のみが残存する。なお底石には，側石の下に位置するものもある。

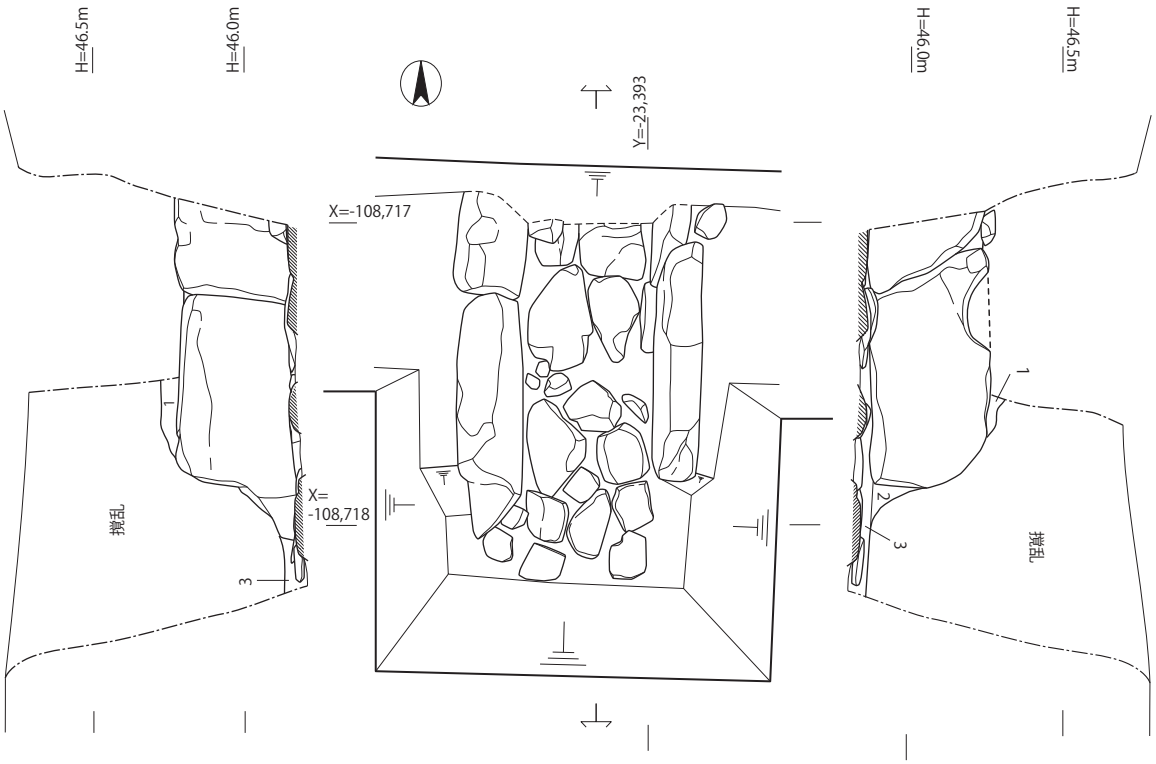
東側石は，長さ0.75ｍ，幅0.4ｍ，最大厚0.15ｍを測る。西側石は一部削られているものの，長さ0.8ｍ，幅0.45ｍ，最大厚0.15ｍに復原できる。調査３で確認された側石は長さ0.9ｍ，幅0.45ｍ，最大厚0.1ｍと報告されていることから，５㎝程度の誤差を許容範囲として，凝灰岩を切り出し，石材にしたと考えることができる。誤差によって生じる高低差は，底石と側石の間に平石を咬ませることで解消されており，隣り合う側石の天端に大きな段差は見られない。

側石は天端が開くように，やや傾斜をつけて立てられている。断面観察では，側石の外側にその掘り方を確認した（図15-5層）。基壇土の表面には固くしまった薄層があり（同４層），側石を固定するため，搗き固めるような造作が為されたと考えられる。



1）2.5Y3/2　黒褐色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る　陶磁器片・炭化物少量入る　しまり悪い（近世）
2）2.5Y4/2　灰黄褐色細砂混じりシルト　径0.5cm未満の微量入る　土師器片多量入る　ややしまり悪い（平安時代後期）
3）2.5Y4/2　灰黄褐色微砂混じりシルト　径0.5cm未満の礫微量入る　土師器片多量入る　ややしまり悪い（平安時代後期）
4）2.5Y4/3　オリーブ褐色細砂混じり粘土質シルト径１cm未満の礫多量入る　土器片・炭化物多量入る　ややしまり良い
5）2.5Y4/3　オリーブ褐色細砂混じりシルトに　2.5Y4/1　黄灰色シルトブロック10%程度入る　土器片・炭化物微量入る　しまりやや悪い
6）2.5Y4/4　オリーブ褐色粗砂混じりシルト　径1cm未満の礫少量入る　土器片・炭化物入る　ややしまり悪い
7）2.5Y4/1　黄灰色粗砂混じりシルト　土器片・炭化物微量入る　しまりやや悪い

図15　２区平面断面図（１：50）



1）2.5Y3/2　黒褐色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る　陶磁器片・炭化物少量入る　しまり悪い（近世）
2）2.5Y4/1　黄灰色粗砂混じりシルト　土器片・炭化物微量入る　しまりやや悪い
3）2.5Y4/2　灰黄褐色微砂混じりシルト　径１cm未満の礫少量入る　土器片多量入る　ややしまり悪い

図16　石組溝平面立面図（１：25）

底石は径0.1～0.3ｍ程度の円礫が用いられている。灰色の花崗岩から赤色味を帯びた砂岩まで，石種・石色はバラエティに富む。平坦面を上に向け，底面が平滑に仕上がるように敷かれている。北から南へ僅かに傾斜しており，北端と南端とでは上面に3.0cmの高低差がある。このことから，流水を目的とした施設であることがわかる。

今回の調査では遺構保存のため底石の連続性を確かめた段階で掘削を終了したが，調査３では溝の断面が確認されており，その構築方法について，「黄色粘土面を巾90cm，深さ10cmまで掘りくぼめ，側石を立てた後に暗褐色土で埋めている」と推測する。この成果を援用すると，石組溝はまず基盤層を10cm程度溝状に掘り，側石を立てた後，溝に土を入れて側石の根元を固定し，その後回廊の基壇土を盛ったこととなる。しかし今回の調査では，両側石の外側に基壇上面からの掘り込みを確認した。このため，側石を立ててから基壇土を盛ったのではなく，基壇土が既に盛られたか，もしくはその途中の段階で，上面から溝幅を掘り込んで側石を入れたと理解したほうがよいだろう。また，底石は側石を立てた後に充填されたのではなく，それ以前に並べられ，側石の天端調整を行っていたことも加えておきたい。

なお，この石組溝が暗渠であったのか，もしくは開渠であったのかは今回の調査結果からは判断できない。溝の埋没状況からは，近世前期の段階ですでに開溝していたことは明らかであるが，それ以前に遡る蓋石（もしくは蓋板）等の痕跡を確認することはできなかった。

（3）遺　物（図17・18）

今回の調査では，コンテナ計７箱の遺物が出土した。このうち，本文では実測が可能な61点について報告する。図17には第１区出土遺物を，図18には第２区出土遺物を掲載した。

１～４・９は須恵器である。１～３は回廊基壇土より焼土とともに出土した。１は坏蓋の一部で，丸みを帯びた天井部から屈曲して端先に至る。８世紀前半の製品である。２は杯身である。平坦な底部とやや外反しながら立ち上がる口縁をもつ。口縁端部はナデによりわずかに屈曲させる。８世紀の製品である。３は鉢の一部である。内湾して立ち上がる器壁をもつ。内外面ともにナデて仕上げる。８世紀前半の製品である。４は杯身の一部である。緩く外反する口縁と厚い底部をもつ。９世紀後半の製品である。第２層より出土した。９は有段鉢の口縁部である。口縁短部を上方につまみ上げて尖らせる。９世紀後半の製品である。溝25より出土した。

５～８・10～13は施釉陶器である。５・６・８・10は，緑釉陶器椀の底部である。５の素地は須恵質，内外ともに濃緑色に施釉する。９世紀の製品である。溝48より出土した。６の素地は土師質で，淡緑色に施釉する。高台は露胎し，高台内には筆で釉を塗り足す。10世紀の製品である。溝50の最下層より出土した。８の底部外面は露胎し，ケズリを施す。内外ともに淡緑色に施釉する。第２層より出土した。10は底部内面に圏線をめぐらせる。素地は須恵質，内外面は濃緑色に施釉する。９世紀後半の製品である。溝48上層より出土した。７は灰釉陶器椀の底部である。内面の施釉は体部のみであり，底部には届いていない。底部外面中央には粘土塊が残る。９世紀後半～10世紀の製品である。11は施釉陶器椀の底部である。輪状にめぐらせた低い高台を備える。内外面ともに淡黄色の釉を塗布する。土坑47より出土した。12は緑釉陶器皿の口縁部である。胎土は土師質，内外面ともに暗緑灰色に施釉する。９世紀の製品である。溝25より出土した。13は灰釉陶器皿の口縁部である。一部に粘土塊が付着する。10世紀後半の製品で，溝48より出土した。

14～20は土師器皿である。14・17・18は「て」字状口縁をもつ皿で，屈曲した口縁の先端を上方へつまみあげる。10～11世紀の製品である。すべて溝50より出土した。15・19・20は底部に圏線を作る。19は灯明皿で，口縁部に黒色化した油焦げが残る。16世紀以後の製品である。

表３　遺物概要表

時代	内容	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数	コンテナ合計
奈良時代	須恵器	6			
平安時代	土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦・壁土	33	5		
桃山時代～江戸時代	土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・染付・土製品・鋳型・鞴・銅製鍋・瓦	22			
合計		61点（1箱）	1箱	5箱	7箱

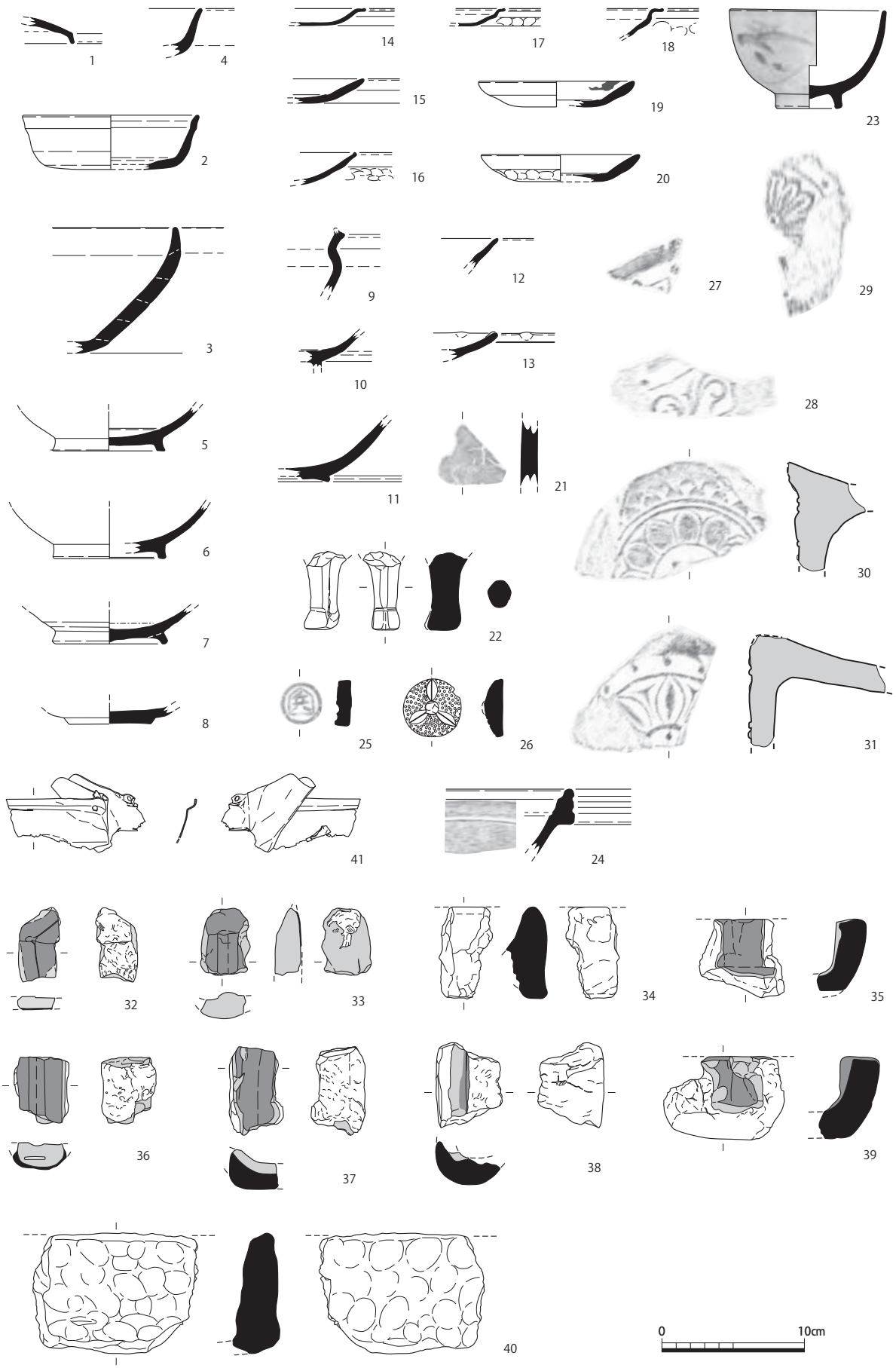


図17　出土遺物実測図・拓影（1：4）

土坑47より出土した。16は口縁部を一段なでた後，端部を玉縁状に作る。３層より出土した。

21・22は瓦質土器の一部である。21は鉢の器壁か底面の破片と解される。焼成後に「ホ（または木）」字が線刻されている。第３層より出土した。22は脚である。外面は濃灰色を呈する。正面中央には縦方向に線刻が施されている。偶蹄類の表現か。第２層より出土した。

23は染付椀である。外面に笹の文様を描く。高台先端には離れ砂が付着する17世紀以後の製品である。土坑47より出土した。

24は，備前焼擂鉢の口縁部である。内面には７本１セットの擂目を密に刻む。17世紀以後の製品である。第２層より出土した。

25・26は泥面子である。25は，側縁の中に「兵」の文字とこれを囲む五角形を陽刻する。第１層より出土した。26は山形に盛り上げた中央に突起と三つ葉の装飾を配する。これ以外の範囲に地紋として小円を刺突する。第２層より出土した。

27・28は軒平瓦の一部である。27は外区のみ残存しており文様は不明である。焼成不良で淡黄色を呈する。28は唐草文で，瓦当面に緑釉が塗布されている。豊楽殿創建瓦と同文である。29～31は軒丸瓦である。29は単弁蓮華文で外区に珠文を配する。溝48より出土した。30は下半部を失うが，素弁十四葉蓮華文に復原できる。内外面ともに磨耗が著しい。土坑47より出土した。31は単弁蓮華文で外区に珠文，内区に連弁と子葉を施す。瓦当裏面には布目を残す。溝50の北肩部より出土した。

32～36は面をもつ土製品で，金属製品の鋳型の一部と考えられる。外面は褐色～黄橙色を呈し，籾殻形の圧痕が複数認められる。内面は灰色もしくは黒色で，彫り窪められた段がある。完存品はなく，何を鋳造したものであるのか判別できない。多くが撹乱からの出土であるが，33と36は溝25，溝48から出土した。第３面に属することから近世初頭の製品と推測される。37も手捏ねの製品であるが，鋳型のような面を持たない。外面は鈍い橙色で，湾曲した内面が灰色味を帯びる。筒形に復原できることから鞴の羽口等，窯体の一部の可能性がある。38～40は，椀形の土製品で，外面は赤褐色，内面は黒色を呈する。ともに外面には指頭圧痕が多数あり，手づくねによって製作されたものとみられる。39の内面には高温により白色化した範囲がある。鋳造関係品か。撹乱内か

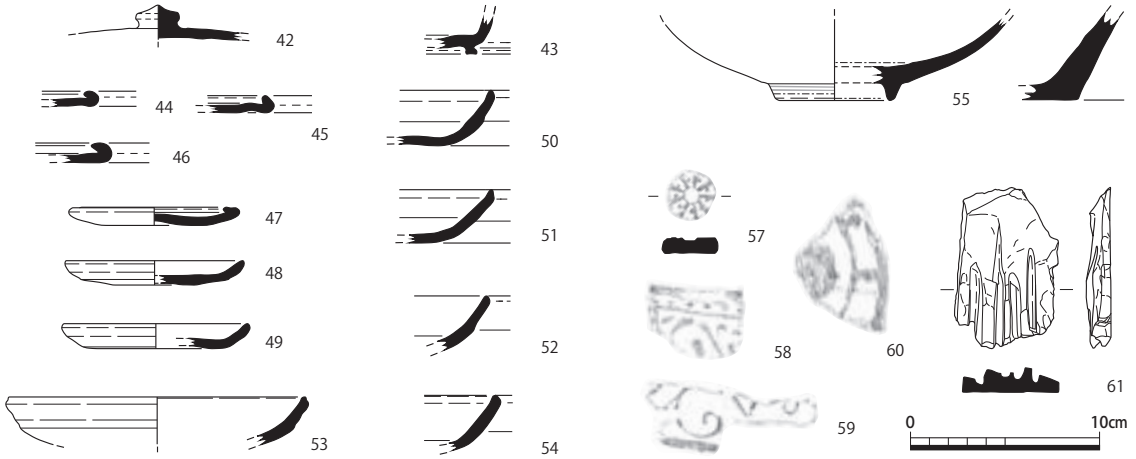


図18　出土遺物実測図・拓影（１：４）

らの出土である。

41は，銅製鍋の一部である。押し潰された状態であるが，口縁及び注口部であることがわかる。口縁部は受口状に段を作る。注口根元には小孔を２点施す。第３層より出土した。

42・43は須恵器である。42は杯蓋で，宝珠形の摘みがある。石組溝の側石底面より出土した。基壇土に含まれていたものと解される。８世紀後半～９世紀前半の製品である。43は杯身の底部である。石組溝内部下層より出土した。

44～54は，土師器皿である。すべて石組溝内部より出土した。いずれも中層または下層からの出土であり，層間で明確な時期差を認めることはできない。44～47はコースター形の皿で，平坦な底部と内側に折り曲げた口縁をもつ。11～13世紀の製品である。48・49は小型の皿で口縁には２段ナデを施す。51～54は中型品で，２段ナデの後さらに口縁端部を細かくナデるものが多い。53は端部をなでて面を作る。いずれも11～12世紀の製品である。

55～61は，石組溝内部の上層より出土した。既述のとおり，近世初頭以後，溝は開口していたとみられ，当時の製品の出土が複数認められる。55は染付の大型鉢である。内外面ともに釉は貫入し，底部内面には蛇の目釉剥が認められる。56は東播系須恵器鉢の底部である。57は泥面子で，上面に放射状の文様を作る。58・59は唐草文軒平瓦，60は単弁蓮華文軒丸瓦である。61は粘板岩製の砥石で，板状品の上面に細い擦痕が４条残る。

４．まとめ（図19・20）

以上，平安宮内裏内郭回廊跡の調査成果を報告した。今回の調査では，平安時代から近世まで，計５面の遺構面とこれに伴う遺構群を検出した。このうち回廊の基壇土と石組溝は，周辺の調査成果から存在が予測されてはいたものの，削平を受けずに良好な状態で検出できたことは特筆すべき成果と言える。加えて，回廊より南において平安時代後期に構築された凝灰岩の石列や東西溝の発見は，新たな情報として提示できるものである。以下，これらの遺構の性格を考察し，まとめにかえたい。

内郭回廊の南西部では，既往の調査による西側回廊の延石列（図20調査２）や雨落溝（同調査13）の発見により，比較的，解明が進んでいると言える。今回確認された石組溝もすでに調査５によって発見された遺構の延長部である。ただし，この石組溝の性格については，必ずしも見解の一致が得られていない。

調査３で確認された石組溝は，回廊内側のコーナー部に近い地点であったことから，調査13から続く内側雨

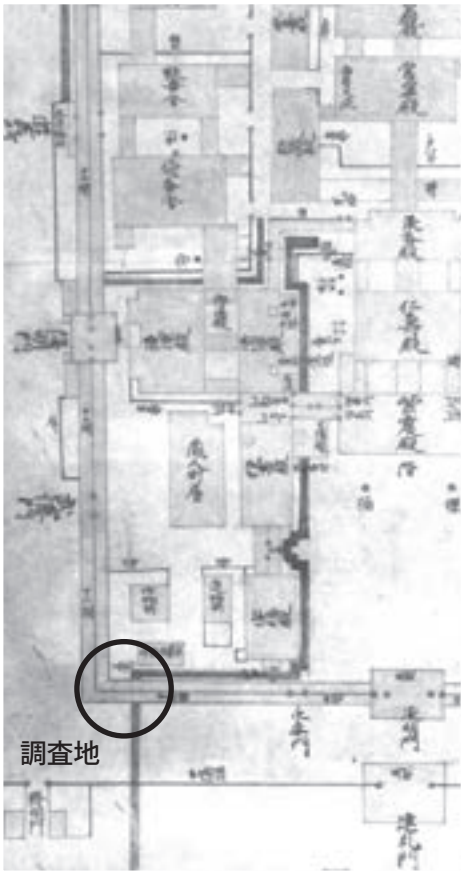


図19　陽明文庫本宮城図（部分）

落溝が東へ屈曲する部分であると調査時には理解された。しかし，今回の調査成果により，この石組溝は回廊内を横断して南へ続くことが明らかとなった。すなわち，雨落溝を通ってきた雨水を内裏外に排出する機能を備えていたと考えられる。

一方，「内裏図」には雨落溝とは異なる溝が描かれている（図19）。『和歌知顕集』（『伊勢物語』古注釈）に「御溝水（おかわみず）」と記されるのもので，陽明門の北から西側回廊の下を潜って内裏内へ入り，東行して女御や天皇が日常を過ごす弘徽殿，承香殿，仁壽殿付近で南に折れ，南側回廊へ至る。御溝水の遺構はこれまで確認されておらず，どのような構造であったのかは不明であるが，少なくと

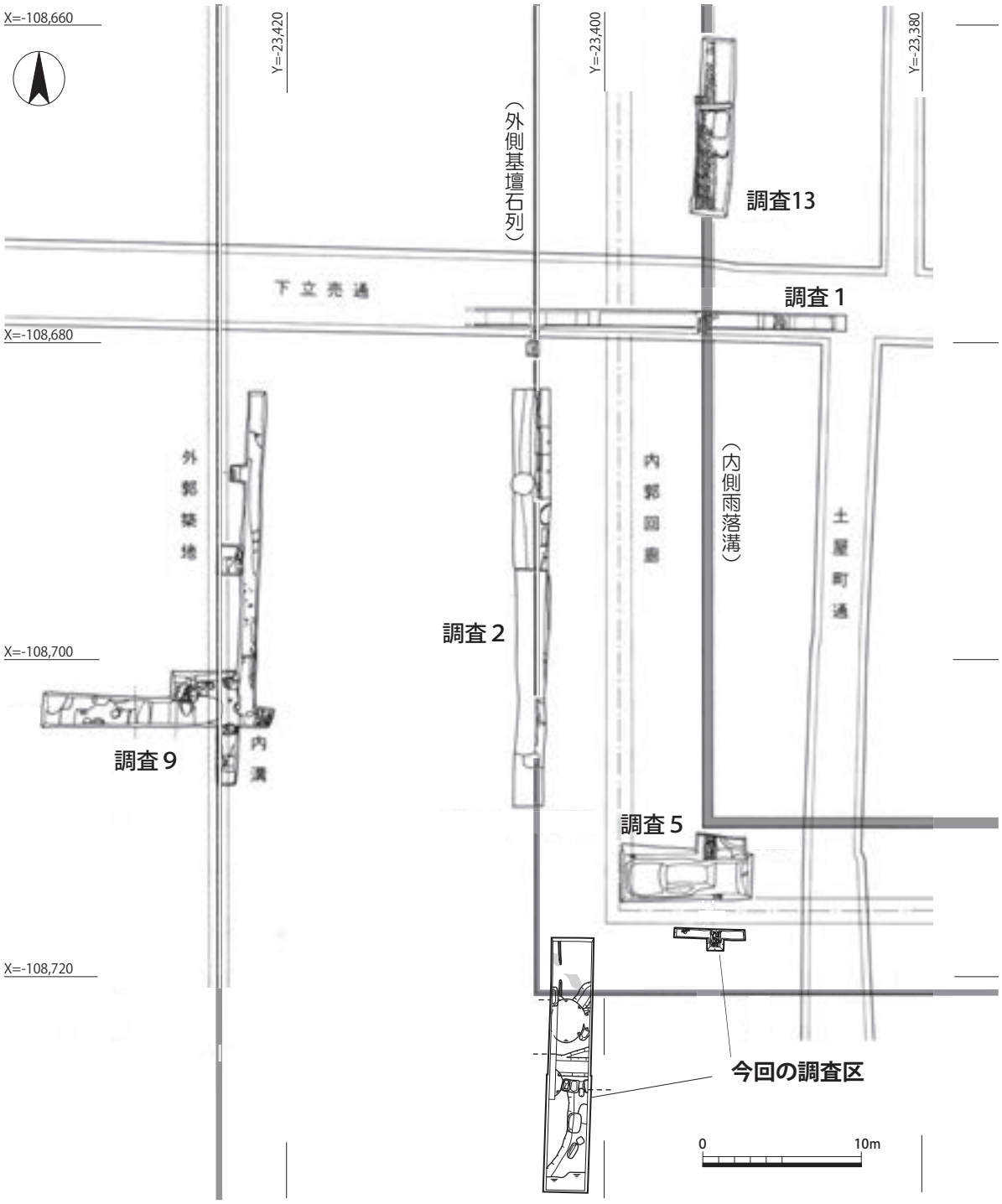


図20　内裏内郭回廊調査成果概括図（１：400）

も内裏における主要な施設であることから単なる素掘り溝とは考えにくい。今回確認した石組溝は側石の法量も大きく，平安宮内でも類を見ない施設である。また，調査13検出の雨落溝とは検出位置が僅かにずれており連続する遺構であることにも懸念が生じる。内裏が複数回補修されていること，また両溝が回廊際で合流する可能性も含め，その性格については今後の課題としたい。

このほか，平安時代後期に構築された石列については，凝灰岩の切石を用いていること，回廊と並行する位置関係から，内裏に関連する建物の基礎である可能性が高い。「内裏図」の写本には，回廊の南西角に「僧房」と付記されたものもあり，その関係が注視される。なお，本調査で確認した平安時代の遺構面については，現地にて保存が図られた。

（黒須亜希子）

引用文献（表１　調査一覧）

１．２．大石良材「平安宮内裏址の調査」『平安博物館研究紀要』第３輯　平安文化の研究２　（財）古代学協会　1971年。

３．上村和直　「平安宮内裏内郭回廊跡」『平安京発掘調査概要　文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』1979年度　京都市文化観光局　1980年。
上村和直　「１平安宮内裏跡」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　2012年。

４．永田信一・辻　純一　ほか「付章　未報告調査の概要　37　内裏跡」『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊　（財）京都市埋蔵文化財研究所　1995年。

５．大矢義明　『京都市内遺跡試掘、立会調査概報』昭和56年度　京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所　1982年。

６．大矢義明・吉川義彦　「第１部　第１章　内裏外郭跡」『平安京跡発掘調査概報』昭和57年度　京都市文化観光局　1983年。

７．梅川光隆　「Ⅳ平安宮内裏」『平安京跡発掘調査概報』昭和60年度　京都市文化観光局　1986年。

８．近藤章子・吉本健吾ほか　「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度　京都市文化観光局　1986年。

９．本弥八郎「Ⅲ平安宮内裏跡（ＨＱ89）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度　京都市文化観光局　（財）京都市埋蔵文化財研究所　1988年。

10. 網　伸也ほか　「平安宮内裏」『平安京跡発掘調査概報』昭和63年度　京都市文化観光局 1989年。

11．12．川村雅章・吉本健吾・本弥八郎　「平安宮内裏・縫殿寮・長殿・率分蔵跡」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1994年。

13.山本雅和　「Ⅰ平安宮内裏内郭回廊」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成６年度　京都市文化観光局1995。

参考文献

林屋辰三郎ほか編　『京都市の地名』日本歴史地名体系27　平凡社　1979年。

高橋昌明　「第一部　第Ⅲ章　よごれの中の京都」『平安京・京都研究蔵書３　洛中洛外　京は”花の都”か』図書出版文理閣　2015年。

Ⅱ　平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡

1．調査経過（図１・７，表１）

調査地は中京区聚楽廻西町90に所在し，豊楽院の正殿である豊楽殿の南端に隣接する。調査地の敷地南端に１mほどの段差が存在し，調査地を含めた北側が一段高くなっていることから，この段差は豊楽殿の基壇に関連するものと推定されてきた。同敷地内では，昭和48年（1973）に母屋の建替えに伴って部分的に調査が実施され，焼土層や凝灰岩を含む土層などが検出された（表１-調査３）。今回は建物計画が契機となり，土地所有者と協議を重ね，文化庁国庫補助事業による発掘調査を実施することとなった。

調査区は，北から１～４区の計４か所に設けた。既存建物を残したまま調査を実施することになったため，限られた掘削範囲となったが，豊楽殿の基壇周囲の状況を確認するために調査区を設けた。全て人力で掘削を行い，１区で整地層，２区で焼土層を確認し，全調査区で地山を確認した。調査は，令和元年11月11日より開始し，11月23日に全ての作業を終了した。調査面積は計６㎡である。

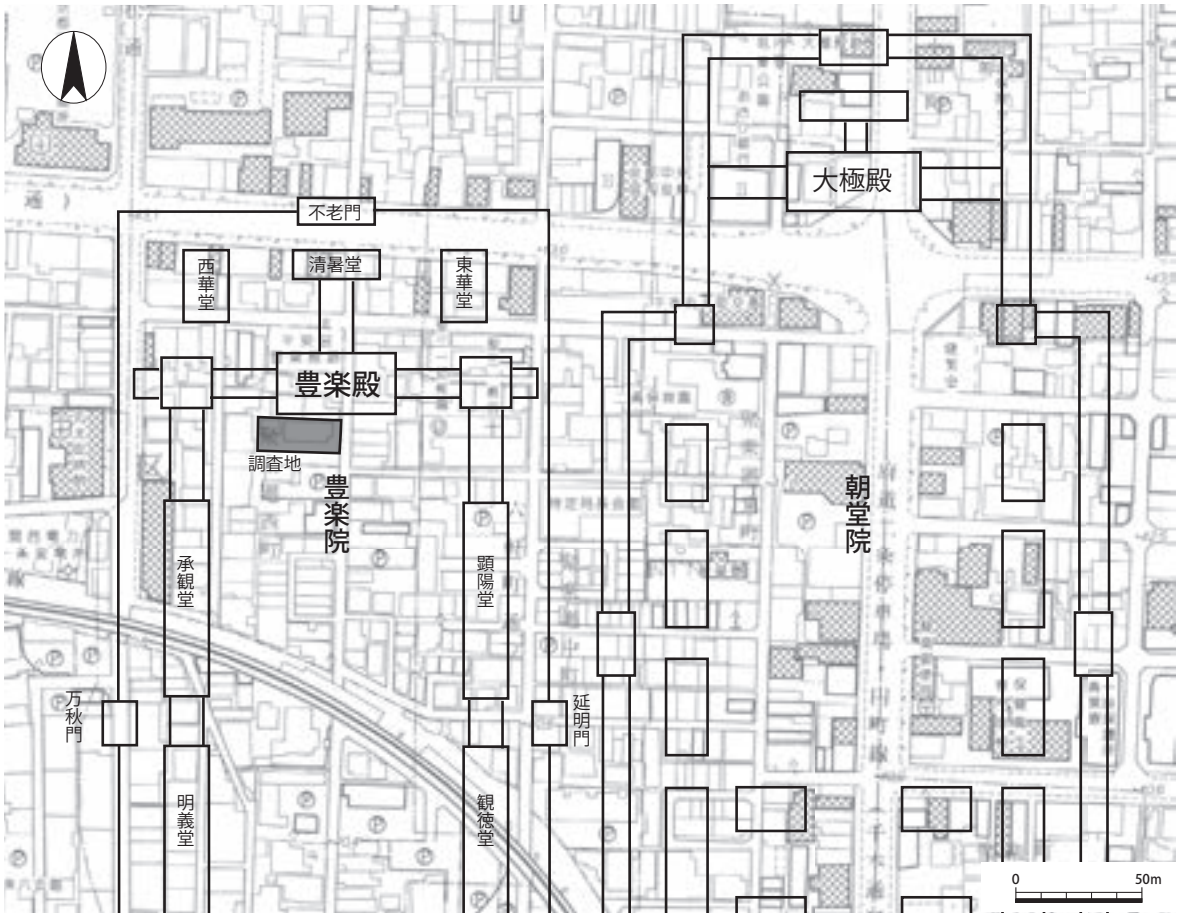


図１　調査地位置図（１：3,000）

2．遺　跡

（1）位置と環境

平安宮は，船岡山から派生する丘陵上に立地する。宮域の設定にあたり，舌状に張り出す丘陵部を意識的に占地していると想定できる。

豊楽殿を正殿とする豊楽院は，朝堂院の西に隣接し，南北134丈，東西57丈の規模を持つ。平安時代前期の儀式書である『内裏式』や『儀式』によると，天皇が出御する正月の元日，七日白馬（あおうま），十六日踏歌（とうか），十七日射礼（じゃらい）の各節会（せちえ）のほか，大嘗祭や新嘗祭の場とされ，『西宮記（さいぐうき）』には「天子宴会之処（てんしえんかいのところ）」と記されるなど，国家的な饗宴の場として捉えられていることがわかる[1]。

豊楽院の造営は遷都よりもやや遅れ，延暦十八年（799）に渤海使を迎えた正月七日の白馬節会の際，「豊楽殿未成功（ぶらくでんいまだこうならず）」のため龍尾壇に借殿を設けたとあり，この時点で未完成であったことがわかる[2]。大同三年（808）には平城天皇の大嘗会が豊楽院で執り行われていることから[3]，その頃までに完成していたことがわかる。次の嵯峨天皇の代に最も使用頻度が高まるものの，９世紀後半以降，大嘗会を除く各節会は内裏など別の場所で催されるようになる。10世紀後半になると地震や大風による豊楽院の倒壊などの記事が散見される[4]。その後，康平六年（1063）に焼亡[5]した後は，再建されなかったようである。

（2）周辺の調査（表１・図２）

調査地周辺の主要な調査成果をまとめたのが，表１・図２である。調査11で豊楽殿の建物規模がほぼ確定するなど大きな成果を得ており，それを元にした総括が既になされているため，ここでは今回の調査に関連する成果を取り上げることとする。今回，豊楽殿の基壇周囲に想定される場所を調査したため，基壇周囲の様相が判明した事例として調査３・８・10をあげる。

調査３は，住宅建築工事の途中で実施された部分的な調査だが，敷地北東側に焼土層が広がることが明らかとなり，地山上面で凝灰岩ブロック堆積層が確認された。

調査８では，豊楽殿基壇と北廊が検出された。基壇周囲では雨落溝は検出されず，薄い砂層が確認され，白砂を敷いて化粧を施していたとみられる。また，基壇周囲の創建時整地層には凝灰岩の削り屑や小片が多量に含まれていたことから，基壇化粧に使用した凝灰岩を付近で調整しながら仕上げたことが示された。一方，基壇外にあたる北西部においては，瓦塼類を多量に含む整地土層が厚さ約70cm認められ，その整地は豊楽殿廃絶後まもなく行われたと考えられている。

調査10では，清暑堂基壇と北廊が検出された。北廊は３時期の変遷があることが判明したが，そのⅢ期に北廊周囲に白化粧が施されていた可能性が示された。

以上のように，基壇周囲の状況として，豊楽殿基壇と北廊の周囲には白化粧が施されていたこと，基壇化粧の凝灰岩を現地で調整していたことが明らかになっている。また，廃絶後まもなく整地を行っていたとみられる[6]。

表１　周辺主要調査一覧表

調査番号	調査年度	調　査　概　要
調査１	昭和３（1928）	多量の瓦とともに基壇外装に用いられた凝灰岩を３箇所で検出。後に，豊楽院北門である不老門南東隅及び清暑堂北縁であることが明らかにされた。
調査２	昭和 44（1969）	凝灰岩片を多量に含む溝状遺構を検出。北側に，基壇を有する建物が存在したことが想定された。また，溝状遺構は暗渠の可能性も指摘されている。緑釉軒平瓦・軒丸瓦を含む平安時代の瓦が多量に出土した。
調査３	昭和 48（1973）	厚い焼土層と多量の瓦片等が出土。また，地山直上で，凝灰岩の破片や屑を多量に含む整地層が面的に広がることが確認され，北側に豊楽殿の存在が推定された。
調査４	昭和 51（1976）	版築で構築された盛土と，礎石据え付け穴１基を検出。後に豊楽殿の基壇盛土と礎石下根固めの壺掘地業であることが判明した。
調査５	昭和 52（1977）	調査区全面で11箇所の瓦溜を検出。約530点の軒瓦など平安時代前期から後期の多量の瓦が出土した。10世紀を中心とした中期の瓦が主体とされる。
調査６	昭和 54（1979）	凝灰岩片を含む平安時代の整地層を検出。
調査７	昭和 55（1980）	調査区北東隅において，版築で築かれた盛土を約50cm分確認。
調査８	昭和 63（1988）	豊楽殿基壇北西縁と北面西階段・中央階段及び基壇上面にて礎石根固めの壺掘地業を４基確認。根固めは建物の庇にあたることが明らかになった。また，豊楽殿と北側の清暑堂を繋ぐ北廊が検出され，北廊が北面中央階段を壊して構築されていることから，豊楽殿完成後に付け加えられたことが明らかになった。さらに，豊楽院の中軸線が明らかになった。
調査９	昭和 63（1988）	清暑堂の基壇盛土及び礎石根固め痕を検出。
調査 10	平成 18（2007）	清暑堂基壇南縁と南面西階段及び豊楽殿北廊の基壇盛土を確認。階段の幅から身舎桁行７間の柱間14尺であること，清暑堂南面中央には階段は無く，北廊と清暑堂が同時期に造営されていること，北廊は創建以降，２度にわたる拡幅が行われていることが明らかになった。
調査 11	平成 27（2015）	豊楽殿の基壇盛土とともに，礎石根固めを５基検出。さらに，根固め下層の壺掘地業を４基検出。基壇の構築過程が明らかとなった。また，豊楽殿の建物規模がほぼ確定し，平城宮第二次大極殿SB9150とほぼ同じ規模を持つことが明らかになった。この調査成果により，これまでの調査を含めた総括がなされた。
調査 12	平成 29（2017）	清暑堂の基壇化粧である延石抜き取り痕を確認。清暑堂の西縁が確定され，基壇の東西幅が復元された。

※調査番号と文献一覧番号は対応する

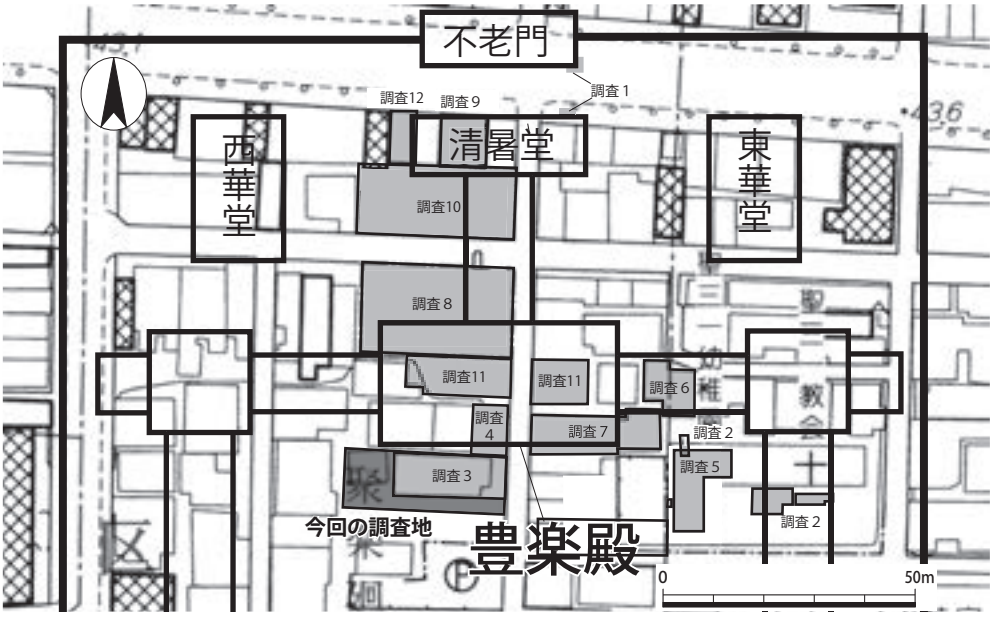


図２　周辺調査位置図（１：1,500）

3．遺　構

（1）層序（図８・９）

現地表面は，調査区西側北端で標高42.44m，西側南端で42.58mである。

北端の１区では，GL-0.24mで暗褐色泥砂（５層），-0.3mで暗褐色シルト（６層），-0.38mで黄褐色シルト（７層）となる。６層は固く締まることから整地土の可能性があり，７層の黄褐色シルト層は調査区全てで確認できる地山である。６層上面の標高は42.08m，地山上面では41.98mとなる。２区では，GL-0.26mで暗褐色シルト（７層），-0.46mで黄褐色シルト（８層）となる。７層は焼土・瓦・凝灰岩片が混じり，火災後に整地を行った痕跡と考えられる。７層上面の標高は42.06mである。３区では，GL-0.18mで黒褐色泥砂（４層），-0.3mで暗オリーブ褐色泥砂（６層），-0.56mで黄褐色シルト（10層），-0.82mで暗褐色砂礫（11層）となる。６層から昭和７年（1932）の１銭玉が出土したことから，６層以上は近現代層である。４区は，GL-0.80mの地山直上まで近現代の撹乱が及んでいた。地山の標高は41.98mである。

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
平安時代	整地土１・２	
江戸時代以降	土取穴	

図３　１・２区調査前風景（南西から）

図４　３区調査前風景（北東から）

図５　４区調査前風景（北西から）

図６　作業風景

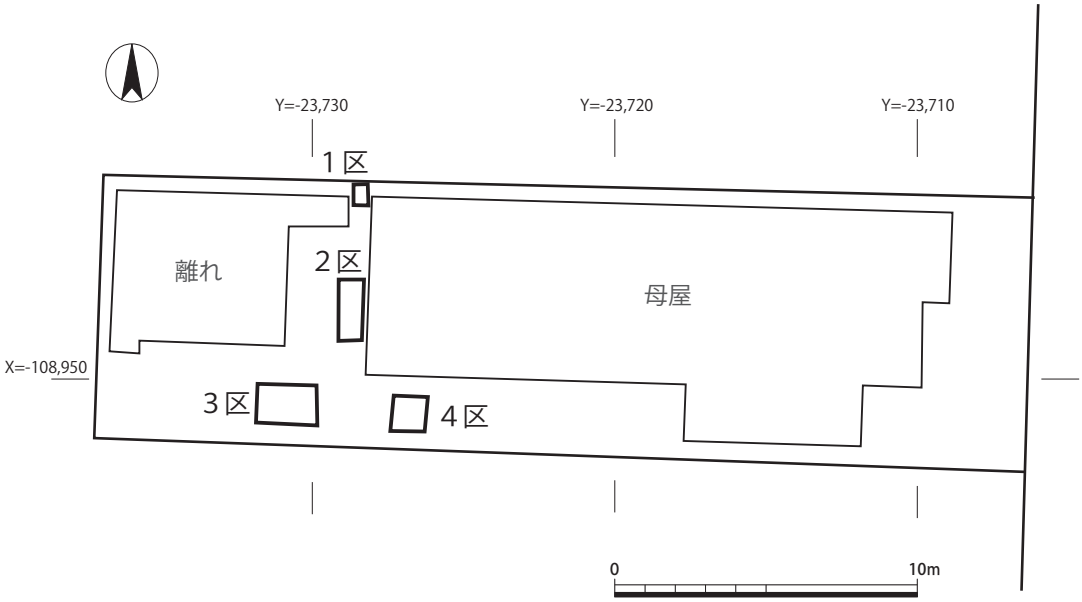
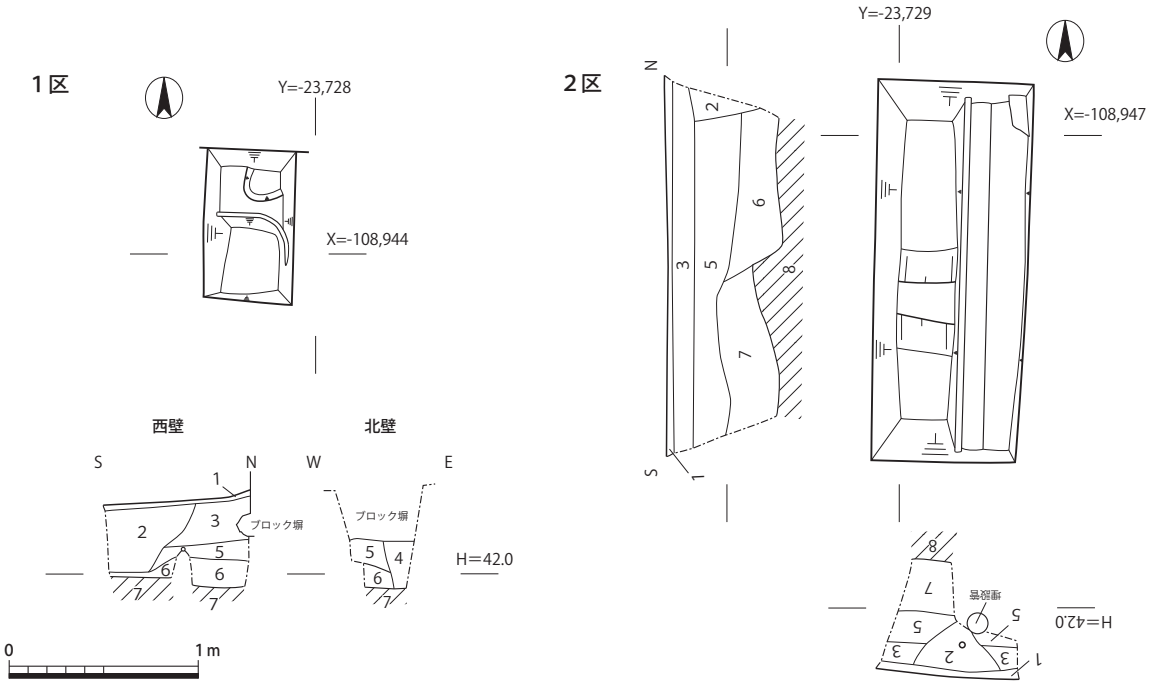


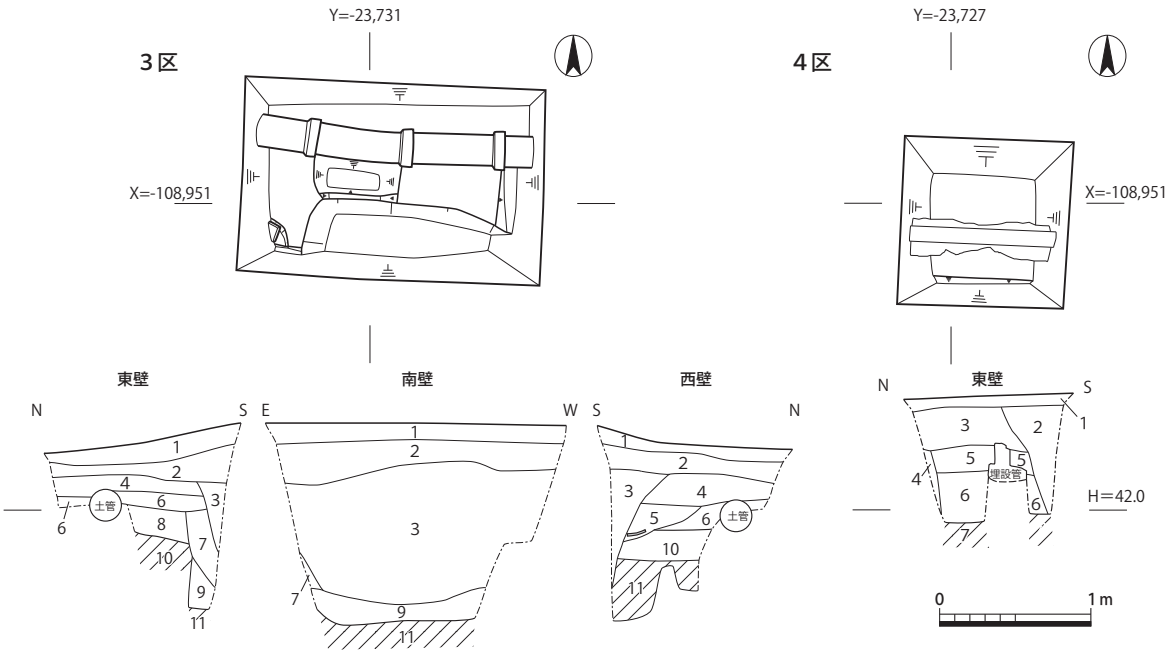
図７　調査区配置図（１：250）



1　表土
2　10YR3/1 黒褐色泥砂（コンクリート含む）【埋設管掘方】
3　10YR4/2 灰黄褐色泥砂
4　10YR2/3 黒褐色泥砂（やや粘質・締まりなし）
5　10YR3/4 暗褐色泥砂（凝灰岩片含む・締まりなし）
6　10YR3/3 暗褐色シルト（7 層ブロック状に混じる・固く締まる）【整地土１】
7　10YR5/6 黄褐色シルト【地山】

1　表土
2　10YR4/2 灰黄褐色泥砂【埋設管掘方】
3　10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂
4　2.5Y3/2 黒褐色泥砂（炭混じる）
5　10YR4/4 褐色泥砂
6　10YR3/4 暗褐色泥砂（8 層ブロック状に混じる）【江戸時代以降土坑】
7　10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂（焼土・瓦・炭混じる）【整地土２】
8　10YR5/6 黄褐色シルト【地山】

図８　１・２区平・断面図（１：40）



1　表土
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂（2.5Y6/6 明黄褐色泥砂混じる）
3　2.5Y4/1 黄灰色泥砂（コンクリート含む）【擁壁掘方】
4　2.5Y3/2 黒褐色泥砂
5　10YR3/2 黒褐色泥砂（炭、瓦混じる）
6　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂（10 層ブロック状に混じる）
7　2.5Y3/2 黒褐色泥砂（陶磁器混じる）【土取穴１】
8　10YR3/3 暗褐色泥砂（瓦混じる）
9　10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂（やや粘質）【土取穴２】
10　10YR5/6 黄褐色シルト【地山】
11　10YR3/4 暗褐色砂礫【地山】

1　表土
2　10YR3/4 暗褐色泥砂【擁壁掘方】
3　10YR5/6 黄褐色泥砂（コンクリート含む）
4　10YR3/2 黒褐色泥砂【埋設管掘方】
5　10YR3/3 暗褐色泥砂
6　10YR3/4 暗褐色泥砂（７層ブロック状に混じる）
7　10YR5/6 黄褐色シルト【地山】

図９　３・４区平・断面図（１：50）

（２）遺構（表２）

１区で，遺物を含まない固く締まった層（整地土１）を確認した。２区では，焼土・瓦・凝灰岩片が混じる整地土２を厚さ約30cmほど確認した。瓦は細片のものがほとんどで，軒瓦は確認できていない。火災後の整地に伴うものと考えられる。３区では，土取穴１・２を確認した。擁壁の掘方で南側を撹乱され，幅は不明だが土取穴１は深さ0.5mである。土取穴２は土取穴１に切られ，残存幅1.15m，深さ0.35mである。出土遺物からいずれも江戸時代以降と考えられる。

４．遺　物（表３・図10）

出土した遺物は整理箱にして１箱である。内訳は，平安時代の瓦類や，江戸時代以降の陶磁器，瓦類などである。

１～８は２区７層から出土した平安時代の瓦類である。１～３が丸瓦，４～８が平瓦である。平・丸瓦ともに厚さ2cm程度のものが多い。丸瓦は，凸面の縄叩きをナデ消しているものがほとんどで，２には糸切り痕が残る。平瓦凸面は縄叩きをおこなうものが主流だが，格子叩きの平瓦も１点出土した（４）。５は，凹凸両面に離れ砂が確認できる。なお，図示していないが凸面に緑釉が残る丸瓦が１点出土している[7)]。

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代	瓦		８点（丸・平瓦）		
江戸時代以降	陶磁器、瓦、伏見人形、古銭				
合　計		３箱	８点（１箱）	１箱	１箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より２箱多くなっている。

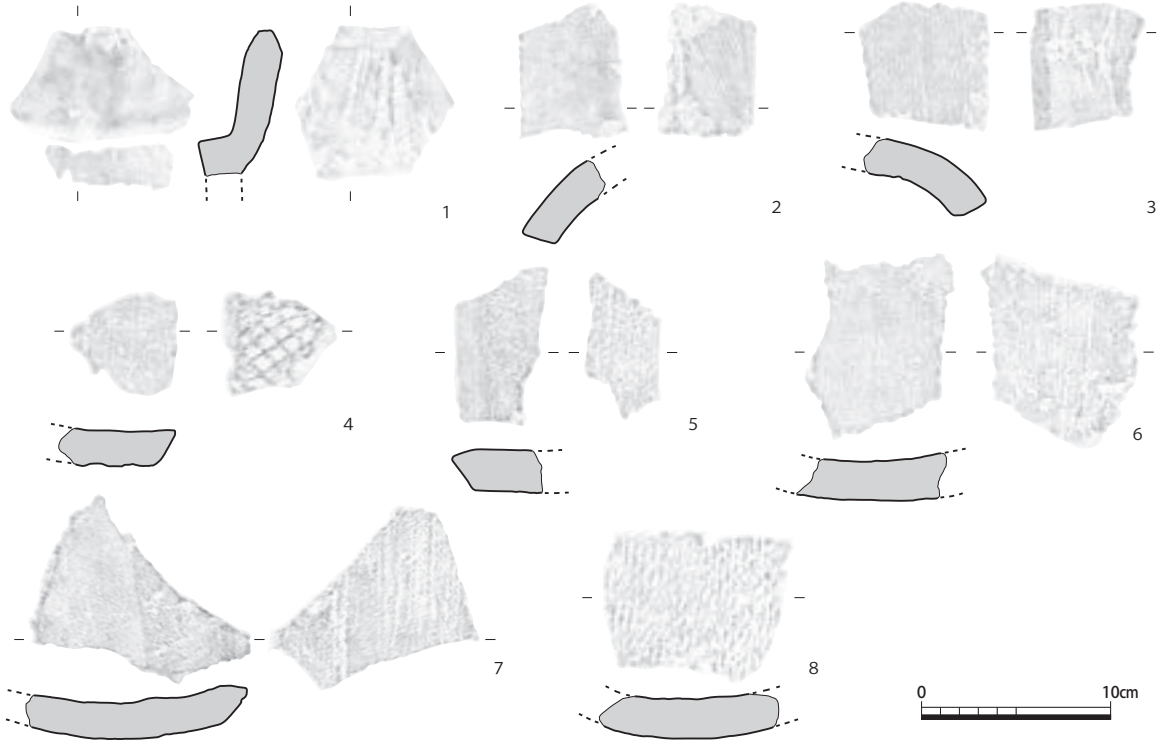


図10　２区７層出土丸・平瓦（１：４）

５．まとめ（図11・12）

今回の調査では，豊楽殿基壇周囲に施された可能性のある整地土１と，廃絶後の様相を示す整地土２を確認した。一方，既往の調査で確認された化粧土の砂層を確認することはできなかった。

整地土１に関しては，非常に限られた範囲での確認に留まるため今後検証が必要である。調査８の成果に基づいて豊楽殿基壇外装の延石推定位置を落としたところ，推定位置から１区で検出した整地層までは約50cmしか離れていないことになる（図11）。豊楽殿は北から南に傾斜する場所に立地しており，調査８で確認された延石及び創建時整地層上面は標高約42.3ｍで[8]，整地土１上面の標高は42.08mである。なお，整地土１には凝灰岩を現地で調整した際に見られる砕片はほとんど確認できない。また，類例として，朝堂院東第一堂の昌福堂では，延石外側で地山を掘り込んで形成した整地層と考えられる黒褐色粘質土が確認されている[9]。遺物をほとんど含まないことから時期は不明だが，礫をほとんど含まず，土も締まっていると報告されている。今回は，地山を掘り込んで形成しているかは不明だが，遺物や礫を含まず，締まった土であるという点からも整地土と考えたい。

整地土２については，調査３で同様の焼土層が確認されており，確実に豊楽院の火災によるものとされる（図11・12）。今回，時期を確定できる遺物が出土していないため時期は不明だが，豊楽殿の火災後の整地土と考えられる。

以上のように，推論を重ねる形となったが，調査区北端で整地土１を検出したことは，豊楽院正殿である豊楽殿の基壇の位置を確定する上で重要であるとともに，火災痕跡を示す整地土２は，豊楽殿の修繕あるいは廃絶過程を示す根拠となることから極めて重要な意味を持つ。また，当該地は豊楽殿の南面西階段・中央階段の推定位置でもあることから，史跡平安宮跡の重要な構成要素である豊楽殿跡を考える上で欠くことのできない場所であることが判明した。　　（熊谷　舞子）

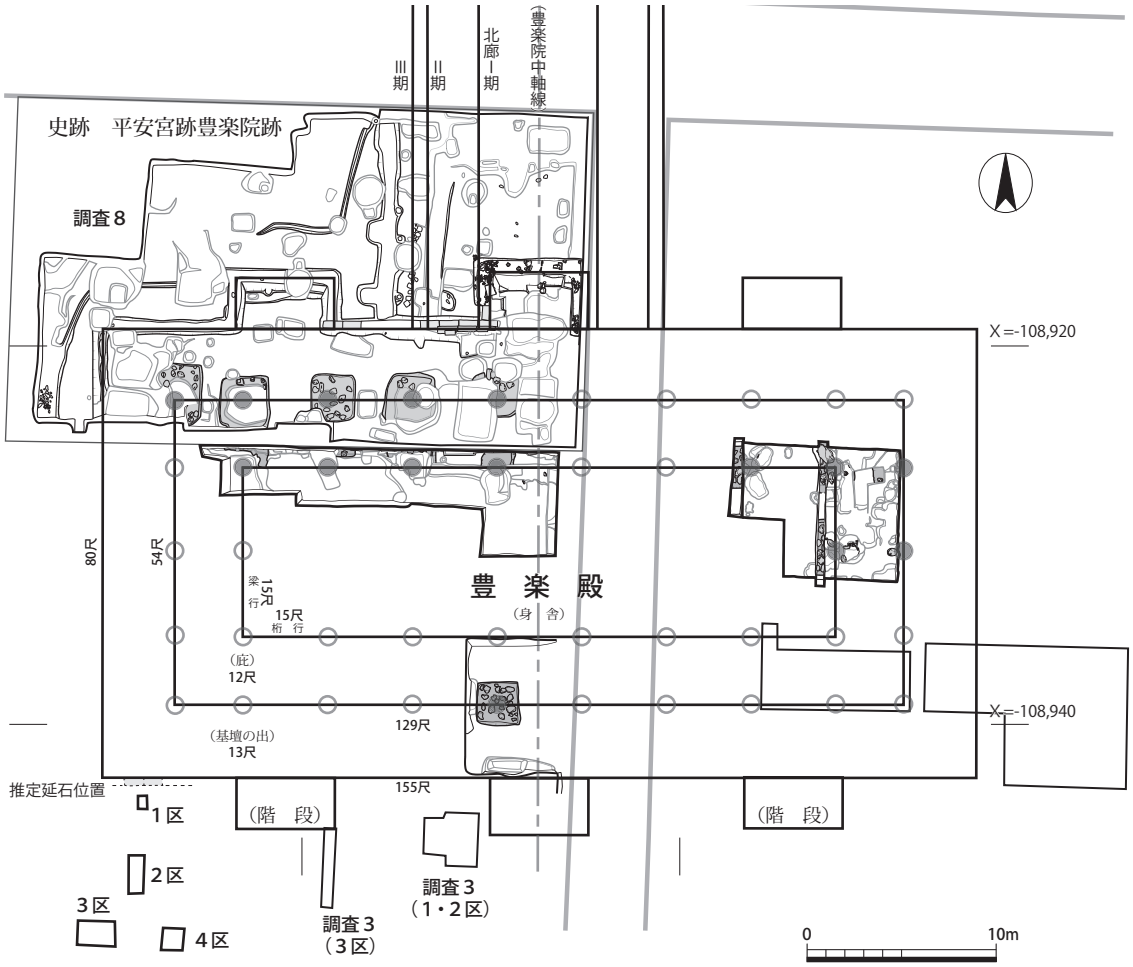


図11　豊楽殿復元図（１：400）

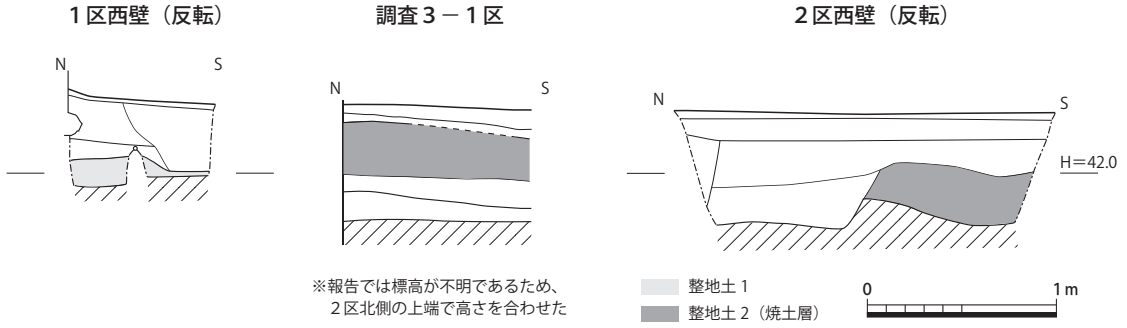


図12　比較断面模式図（１：40）

註

1）『西宮記』巻八諸院。

2）『日本後紀』巻八延暦十八年正月壬子条。

3）『日本後紀』巻十七大同三年十一月壬辰条。

4）『日本紀略』貞元元年六月癸丑条など。

5）『扶桑略記』巻二十九　康平六年三月二十二日条。

6）平安宮のその後については以下の論文でまとめられている（上村和直「平安宮の衰微」『研究紀要』第10号，(財)京都市埋蔵文化財研究所，2007年)。鎌倉時代後半以降平安宮域内の施設が衰退又は廃絶しても，外郭施設は執拗に整備されていることが明らかになっている。すなわち「宮域跡」は国家的な儀式・祭祀を執行するための空間として，空閑地という形態で維持・管理しておかなくてはならない特別な空間であったとされる。

7）他に３区の土取穴から緑釉瓦が３点出土しており，うち１点は厚さ4cm前後の大型のものである。

8）鈴木久男「豊楽院跡」『平安宮Ⅰ』(財)京都市埋蔵文化財研究所　1995年。

9）西森正晃「平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成19年度』京都市文化市民局　2008年。なお，平城宮第二次大極殿SB9150では，造営・解体に伴う足場穴が確認されており，基壇外であっても造営に関する情報を得られる可能性がある（金子裕之編『平城宮発掘調査報告ⅩⅣ　第二次大極殿院の調査』奈良国立文化財研究所　1993年)。

文献一覧（表１の調査番号と下記の番号は対応する）

1　佐藤虎雄「平安宮豊楽院の遺物」『古代学』第６巻第４号　（財）古代学協会　1958年。
家崎孝治「平安宮の復元について」第11回京都市考古資料館文化財講座資料　1987年。

2　近藤喬一ほか「平安宮豊楽院推定地（聚楽廻中町）の調査」『平安博物館研究紀要』第３輯　1971年。

3　寺島孝一「平安宮推定豊楽院跡の調査」『古代文化』第26巻第４号　1974年。

4　梶川敏夫「平安宮豊楽殿跡緊急発掘調査概要」『平安宮跡』京都市埋蔵文化財年次報告1976-Ⅰ　京都市文化観光局文化財保護課　1977年。

5　植山茂「平安宮豊楽院跡出土の軒瓦」『古代文化』第29巻第11号　1977年。

6　「付章Ⅰ-10豊楽院跡」『平安宮Ⅰ』(財)京都市埋蔵文化財研究所　1995年。

7　吉崎伸「平安宮豊楽院跡」『平安京跡発掘調査報告　昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター　1981年。

8　鈴木久男「平安宮豊楽院（１）」『平安京跡発掘調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局　1989年。

9　鈴木久男・網伸也「平安宮豊楽院（２）」『平安京跡発掘調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局　1989年。

10　西森正晃「平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成19年度』京都市文化市民局　2008年。

11　西森正晃「平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成27年度』京都市文化市民局　2015年。

12　近藤章子『平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017-2　（公財）京都市埋蔵文化財研究所　2017年。

Ⅲ　平安京左京一条三坊十町跡

1．調査経過（図１～５）

調査地は京都市上京区室町通出水上る近衛町32-2・37・37-5・6及び同区下長者通烏丸西入鷹司町18・18-3で，当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「平安京左京一条三坊十町跡」にあたる。当地において個人住宅の建設が計画され，平成30年10月4日付けで文化財保護法93条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。

これに対して京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下，保護課）は，当町域には平安時代末期の摂政である藤原忠通の邸宅，そしてその娘である崇徳天皇中宮の御所，鎌倉時代から天正年間までは近衛家の本邸などが所在した平安京の中でも一級の宅地であり，また南側には旧二条城が隣接しており，付近の歴史変遷を考えるうえで重要な地点であることから記録保存のための発掘調査を指導した。

計画範囲の南側に南北20ｍ×東西５ｍの調査区を１ヶ所設けた。調査期間は平成31年４月２日から令和元年５月17日で，実働日数は30日間である。近世後半から平安時代にかけて４面の遺構面で調査を実施した。なお，調査を進めるにつれ掘削深度が想定よりも深くなったことから，安全対策のため３面目以下は犬走を設けて調査区の中央部のみ掘り下げて調査した。

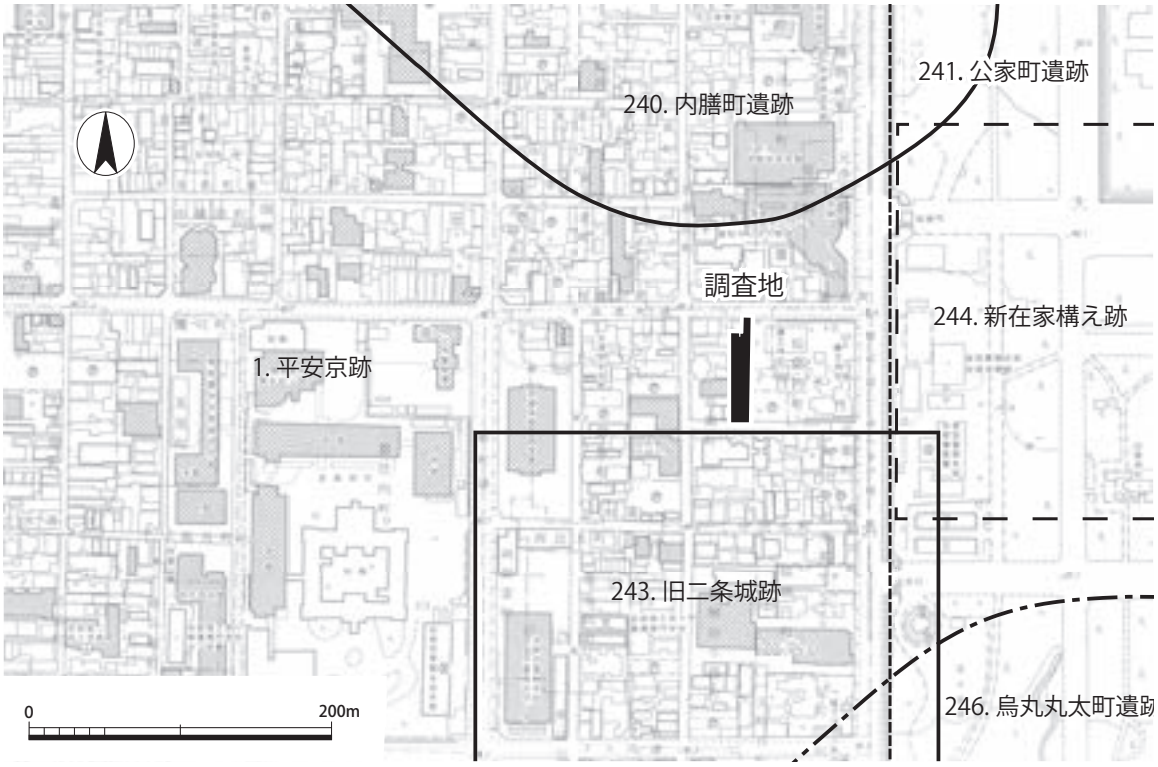


図１　調査地位置図（１：5,000）

図２　アスファルトカット風景（南西から）

図３　機材搬入風景（北東から）

図４　重機掘削風景（南から）

図５　埋め戻し風景（南東から）

２．遺　跡

（１）立地と歴史的環境

当該地は平安京左京一条三坊十町跡にあたる。本調査地を取り囲むような形で，北には弥生時代の遺物包含層が確認されている内膳町遺跡，東には法華宗徒によって築かれた新在家構え跡の他にに公家町遺跡，南には足利義昭の邸宅として織田信長が造営した旧二条城跡が所在する。

当町域は北を鷹司小路，東を烏丸小路，西を室町小路，南を近衛大路によって区画され，本調査地は町域中央のやや北西寄りの場所に位置する。なお，本調査地の南側には東西方向の道が町域を横断している。現在の地図では名前が付いていないが明治２年の『京町御絵図』には「近衛突抜」と記されている。また，寛永14年（1637）の『洛中絵図』にはこの道路名こそないが，近衛突抜町という町名が確認でき，この道路の成立は江戸時代前期以前に遡る可能性がある。

当町域は，平安時代中期までは小規邸宅として利用されていたようである。正確な年代は不明だが平安時代末期には摂政である藤原忠通の邸宅である近衛第が所在した。『本朝世紀』には，康治２年（1143）に忠通が近衛第に鴨川の水を引き込んだために，禁中に河水が流入したことが記されている。仁平元年（1151）には近衛天皇が近衛第に移り里内裏として利用したものの，近衛天皇は久寿２年（1155）に亡くなったことから約４年間で里内裏としての役割を終える事となる。その後，承安２年（1172）には焼失している。

焼失の後，しばらく経った正治２年（1200）に近衛基通がこの地に鷹司室町殿を造営し移っている。これ以降，近衛家代々の本邸として用いられる。しかし，鷹司室町殿は応仁元年（1467）の

応仁の乱により焼失した。その後の状況は判然としないが，『明智軍記』には本能寺の変に際して織田信忠が立て籠もった旧二条城に鷹司室町殿の屋上から火矢を射かけたとの記事が見られるものの，この文献については信憑性に欠ける部分があり検討の余地がある。その後，天正年間には豊臣秀吉の命により近衛家の邸宅は現在の京都御苑内に移り，鷹司室町殿は消滅する。

鷹司室町殿廃絶以降の土地利用については不明な点が多いが，寛永14年（1637）の『洛中絵図』には特段表記が見られない。延宝5年（1677）の『内裏之図』には，当町域のうち近衛突抜以北の区画について「町家」との表記がなされている。その後，慶応4年（1868）の『京町御絵図細見大成』や明治2年（1869）の京町御絵図には，近衛突抜以北に区画について「中院」と表記されており，詳細な時期は不明ながら江戸時代後半に公家の邸宅となったことが伺える。明治19年（1886）には，近衛突抜以北の区画に護王神社が移転する。大正19年（1915）の『大典記念京都市街地図』には，東半に護王神社，西半に森本東閣という人名が表記されている。

（2）周辺の調査（図6）

調査地は，平安京左京一条三坊十町の中央やや北西寄りの場所にあたる。四行八門の区割りでは，北三門西二行および北四門西二行にあたり，調査区の中央に北三・四門の境，調査区の西辺は西一・二行の境にあたる。調査地近辺では比較的多くの発掘・試掘調査事例が確認できるが，本町域に限るとこれまでに本件以外に3件の発掘調査が実施されている。

まず，東隣地の護王神社境内の中では1970年に発掘調査が実施されている（調査①）[1)]。ただしこの調査では江戸時代前期以前の遺構は確認されていないようだが，詳細不詳である。

次に，本調査地から南西方向，近衛突抜と室町通が交わるT字路の南東側の敷地では，1970年に発掘調査が実施されており，平安時代中期の溝のほか室町～江戸時代を中心とした時期の遺構・遺物が確認されている（調査②）[2)]。

また，調査②の南側隣地では2012年に発掘調査が実施されている（調査③）[3)]。この調査では，室町時代後半～江戸時代，室町時代，鎌倉時代～室町時代，平安時代，弥生時代の5面の遺構面で調査を実施している。平安時代前期～後期にかけての四行八門にのる区画溝や条坊側溝のほか，方形の掘方を持つ東西・南北1間の掘立柱建物が確認されている。弥生時代の遺構としては北東から南西方向に流れる弥生時代後期の遺物を含む旧流路が確認されており，内膳町遺跡の範囲を考える上で興味深い。

以上，本町域内についてはそれほど多くはないものの発掘調査が実施されている。しかし，確認されている遺構は室町～江戸時代のものがその大半を占めており，平安～鎌倉時代に属する遺構は比して少なく，当該期の様相は不明確である。また，いずれの調査でも現時点までに近衛第や鷹司室町殿との関係を直接示す遺構・遺物は確認できておらず，当町域の歴史的変遷を考えるうえでの課題は多い。

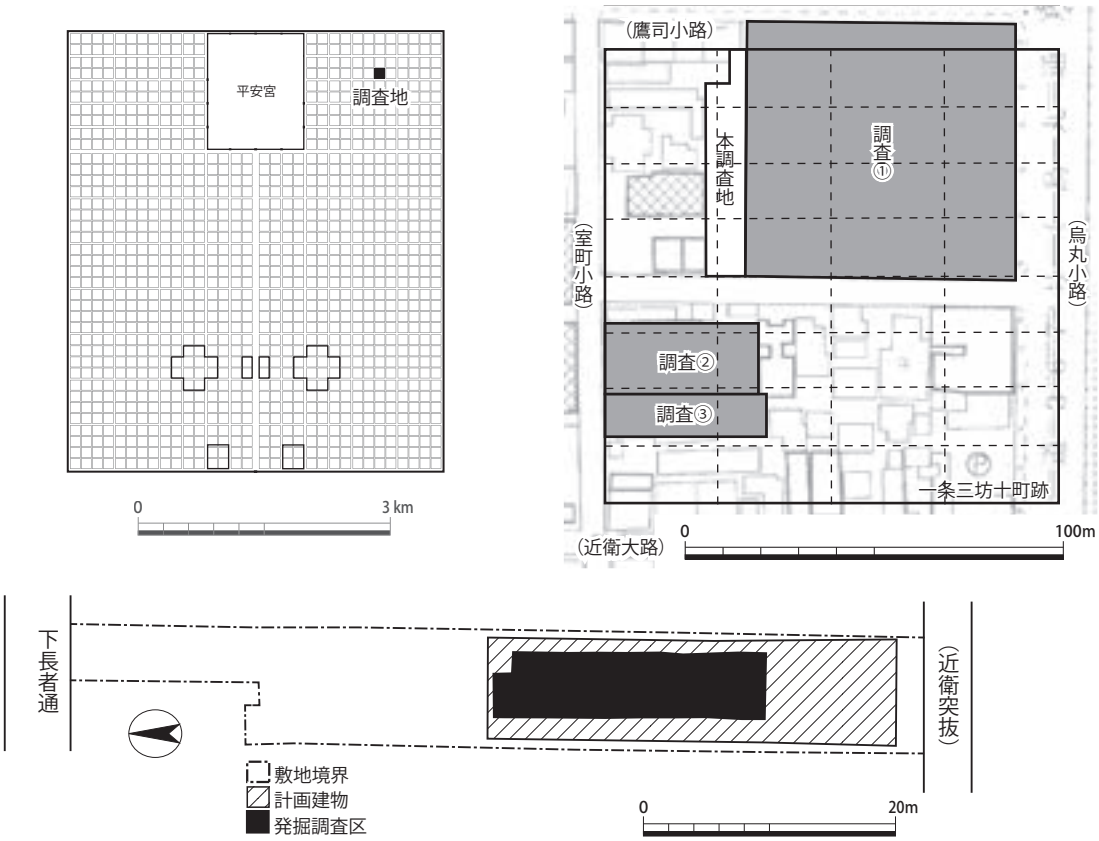


図６　調査位置および周辺調査事例（左上 1：9,000，右上 1：2,000，下 1：600）

３．調査成果

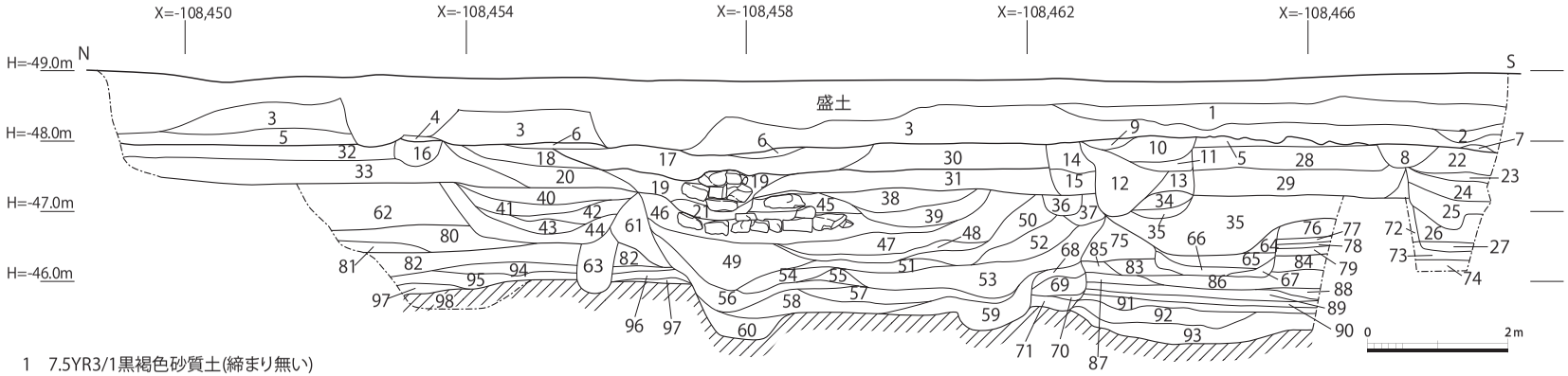
（１）基本層序（図７・８）

本調査地は南側の道路からは一段高くなっており，その比高差は0.3～0.5m程ある。北側に接する下長者町通とはほぼ同じ高さである。現地表面の標高は49.0ｍ前後で，敷地内に顕著な傾斜や段差等は無くほぼ平坦である。

調査区内には，部分的に近世の火災処理土坑や攪乱等があるものの，平安時代から江戸時代後期にかけての遺構が遺存していた。調査は第１～２面までは設定した調査区の形に沿って実施したが，第3～4面は想定よりも掘削深度が深くなったことから，安全を考慮し0.5m～１ｍほど犬走りを設けて中央部のみ掘り下げて調査を行った。以下，調査区東壁を参考にして層序を述べる。

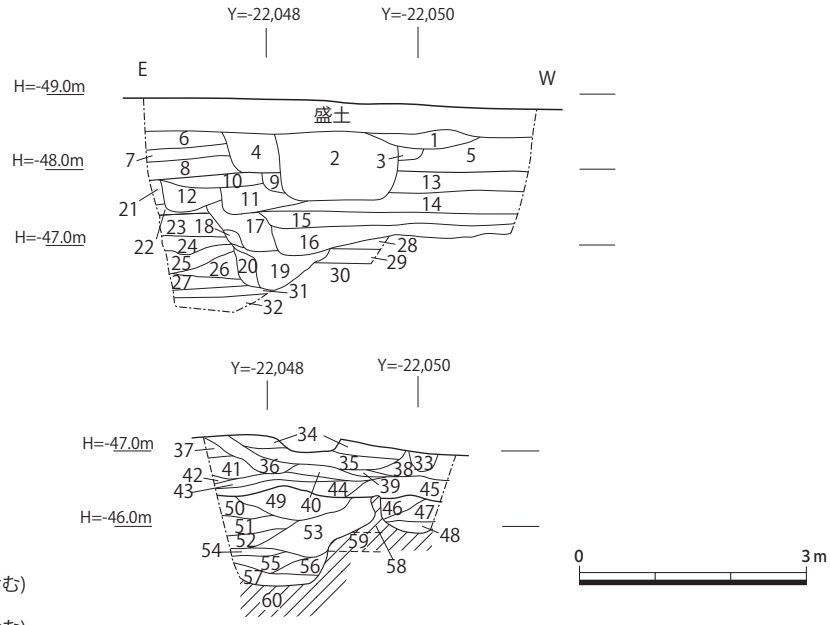
調査地の南半にはアスファルト舗装，北半に砕石がまかれている。アスファルト・砕石と現代盛土が地表面下0.6ｍまであり，その下に0.3mほどの厚さで近代以降の土層（1～5層）が堆積する。それら直下，地表面下0.9ｍで江戸時代後期の整地層である褐灰色砂礫やにぶい褐色砂礫（31～33層）となる。この整地層上面を第1面として調査を行った。この第1面を構成する土層の除去後，地表面下1.5ｍで褐灰色砂質土（62層）を確認した。その上面を第2面として調査を実施し，江戸時代前期を中心とする時期の遺構を確認した。

そののち地表下2.55ｍで部分的に地山の黄褐色シルト（98層）を確認した。この上面では土取



1 7.5YR3/1黒褐色砂質土(締まり無い)
2 7.5YR1.7/1黒色砂泥
3 10YR6/2灰黄褐色砂質土(拳大の礫・漆喰含む)
4 5YR5/8明赤褐色粗砂(焼土・焼瓦含む)
5 10YR6/6明黄褐色粘土
6 10YR7/6明黄褐色粘土
7 10YR6/6明黄褐色泥砂
8 7.5YR3/3暗褐色泥砂
9 10YR4/1褐灰色砂質土
10 5YR5/8明赤褐色粗砂(焼土・焼瓦含む)
11 5YR4/1褐灰色シルト
12 7.5YR5/3にぶい褐色砂質土(φ～3cmの礫・砂含む)
13 7.5YR4/3褐色砂質土(焼土・炭含む)
14 10YR6/3にぶい黄橙色砂質土
15 10YR6/8明黄褐色シルト
16 7.5YR3/2黒褐色砂質土(固く締まる) 【溝29】
17 7.5YR6/1褐灰色砂質土(拳大の礫含む,固く締まる)
18 10YR6/1褐灰色シルト
19 10YR5/2灰黄褐色泥砂(固く締まる)
20 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土(礫・砂含む. 固く締まる)
21 10YR5/4にぶい黄褐色シルト
【石組溝28】
22 10YR4/4褐色泥砂
23 10YR5/3にぶい黄褐色シルト(粗砂混じり)
24 10YR4/1褐灰色砂礫(φ～拳大の礫含む)
【土坑40】
25 10YR4/6褐色泥砂
26 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂(炭・粗砂含む)
27 2.5Y5/4黄褐色粗砂(拳大の礫多量に含む)
28 10YR3/3暗褐色泥砂
29 10YR2/3黒褐色泥砂(炭多く含む)
30 10YR6/2灰黄褐色砂質土(小礫含む)
31 10YR6/4にぶい黄橙色砂質土(粗砂混じり)
32 7.5YR6/3にぶい褐色砂礫(固く締まる)
33 7.5YR6/1褐灰色砂礫(固く締まる)
34 5YR3/1黒褐色砂質土(焼土・炭含む)
35 10YR6/1褐灰色砂礫
36 10YR4/2灰黄褐色シルト(炭含む)
37 7.5YR4/2灰褐色泥砂(拳大の礫含む)
38 2.5Y7/6明黄褐色粘土
39 2.5Y6/1黄灰色砂礫
【土坑66】
40 10YR7/6明黄褐色粘土
41 7.5YR3/1黒褐色泥砂(炭を多量に含む)
42 7.5YR4/3褐色泥砂
43 7.5YR4/1褐灰色泥砂(炭含む)
44 7.5YR4/2灰褐色シルト(炭含む)
【土坑54】
45 2.5Y7/3浅黄色砂質土
46 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂(φ～3cmの礫含む)
47 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫(～拳大の礫含む)
48 2.5Y5/3黄褐色シルト
49 2.5Y3/2黒褐色泥砂(炭含む)
50 2.5Y6/3にぶい黄色泥砂
51 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂(焼土・炭含む)
52 2.5Y5/1黄灰色砂礫
53 2.5Y3/2黒褐色泥砂(炭・焼土含む)
54 2.5Y3/1黒褐色泥砂(粗砂・炭含む)
55 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂
56 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(灰・炭・焼土含む)
57 2.5Y3/2黒褐色泥砂(灰・炭・焼土含む)
58 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂(灰・炭・焼土含む)
59 2.5Y2/1黒色泥砂(灰・炭・焼土含む)
60 2.5Y3/2黒褐色砂泥(灰・炭・焼土含む)
【土坑68】
61 10YR4/2灰黄褐色砂質土
62 10YR5/1褐灰色砂質土(礫混じり)
63 7.5YR6/1褐灰色シルト
64 2.5Y3/2黒褐色砂泥(粗砂混じり)
65 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土(粗砂・炭含む)
66 2.5Y3/1黒褐色微砂(炭含む)
67 2.5Y3/2黒褐色粗砂(拳大の礫含む)
【土坑95】
68 10YR4/1褐灰色シルト(炭含む)
69 5Y4/1灰色微砂(炭・小礫含む)
70 2.5Y3/1黒褐色砂質土
71 5Y5/3灰オリーブ色粗砂(炭・多量に含む)
72 2.5Y3/1黒褐色シルト(地山ブロック・粗砂・炭・小礫含む)
73 2.5Y3/1黒褐色シルト(粗砂含む)
74 10YR6/6明黄褐色粗砂
75 10YR4/2灰黄褐色シルト(炭・小礫含む)
76 10YR1.7/1黒色泥砂(粗砂混じり)
77 10YR2/2黒褐色泥砂(粗砂混じり)
78 10YR3/3暗褐色細砂(粗砂混じり)
79 2.5Y3/1黒褐色細砂(粗砂混じり)
80 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土(礫多量に含む,固く締まる)
81 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂(礫多量に含む,固く締まる)
82 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土(礫多量に含む,固く締まる)
83 10YR4/3にぶい黄褐色微砂(礫含む)
84 2.5Y3/2黒褐色粗砂(の礫多く含む)
85 10YR6/2灰黄褐色砂礫
86 10YR4/2灰黄褐色砂礫
87 10YR5/2灰黄褐色砂礫
88 2.5Y2/1黒色微砂(礫多量に含む)
89 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂
90 10YR3/2黒褐色微砂
91 2.5Y3/1黒褐色粗砂
92 10YR4/2灰黄褐色シルト(地山ブロック含む)
93 10YR4/4褐色シルト(φ～5cmの礫・地山ブロック含む)
94 10YR4/1褐灰色砂礫
95 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫(黒褐色シルトブロック含む)
96 10YR5/6黄褐色シルト
97 10YR3/2黒褐色泥砂
98 10YR5/6黄褐色シルト【地山】
【落込117】

図７　調査区東壁断面図（１：100）



1　10YR4/2灰黄褐色砂質土
2　10YR3/1黒褐色砂質土(漆喰含む)
3　10YR5/3にぶい黄褐色砂質土
4　10YR2/1黒色泥砂(焼土少量含む)
5　10YR2/2黒褐色泥砂
6　10YR2/3黒褐色砂質土
7　10YR1.7/1黒色泥砂
8　10YR3/2黒褐色泥砂(焼土多量に含む)
9　10YR3/1黒褐色泥砂(小礫,漆喰含む)【土坑】
10　10YR2/2黒褐色シルト(10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック含む)
11　10YR3/1黒褐色砂質土(拳大の礫. 漆喰少量含む)
12　10YR4/1褐灰色砂礫(φ～3cmの礫含む)【土坑】
13　10YR4/1褐灰色砂質土(拳大の礫含む)
14　10YR4/2灰黄褐色シルト(拳大の礫,漆喰含む)
15　10YR5/2灰黄褐色砂質土(拳大の礫多量に含む)
16　10YR4/1褐灰色粗砂(拳大の礫多量に含む)　【溝1】
17　10YR2/2黒褐色泥砂(漆喰.炭少量含む)
18　10YR4/3にぶい黄褐色シルト
19　2.5Y5/6黄褐色粘質土
20　2.5Y3/1黒褐色微砂（礫含む）　【土坑36】
21　10YR2/2黒褐色砂質土(粗砂.小礫少量含む)
22　10YR2/3黒褐色砂質土
23　10YR3/3暗褐色砂質土(拳大の礫多量に含む)
24　7.5YR2/1黒色シルト(粗砂混じり)
25　2.5Y5/4黄褐色粗砂(拳大の礫多量に含む)
26　10YR4/1褐灰色シルト(地山ブロック含む
27　2.5Y5/4黄褐色粗砂(拳大の礫多量に含む)　【土坑40】
28　10YR4/2灰黄褐色シルト(地山ブロック少量)
29　10YR2/2黒褐色シルト(地山ブロック. 小礫含む)
30　10YR1.7/1黒色泥砂
31　5Y4/1灰色微砂（炭・小礫含む）
32　5Y5/3灰オリーブ色粗砂(炭多く含む)
33　7.5YR2/1黒色シルト(粗砂混じり)【土坑】
34　10YR6/1褐灰色粗砂(人頭大礫含む)
35　10YR4/1褐灰色泥砂(粗砂混じり)
36　10YR7/1灰白色砂礫　【土坑128】
37　10YR6/1褐灰色砂礫
38　10YR1.7/1黒色シルト(粗砂混じり)
39　10YR2/1黒色砂質土(炭混じり)
40　10YR1.7/1黒色泥砂(粗砂混じり)
41　10YR1.7/1黒色泥砂(粗砂混じり)
42　10YR2/2黒褐色泥砂(粗砂混じり)
43　10YR3/3暗褐色細砂(粗砂混じり)
44　2.5Y3/1黒褐色細砂(粗砂混じり)
45　2.5Y2/1黒色泥砂(粗砂.小礫,炭含む)
46　2.5Y3/2黒褐色泥砂
47　2.5Y3/1黒褐色泥砂(炭,粗砂含む)
48　2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト　【土坑109】
49　2.5Y3/1黒褐色シルト(φ～3cmの礫多く含む)
50　2.5Y3/2黒褐色粗砂(φ～3cmの礫多く含む)
51　2.5Y2/1黒色微砂(φ～3cmの礫多く含む)
52　10YR4/2灰黄褐色粗砂(φ～3cmの礫含む)
53　2.5Y3/2黒褐色シルト(地山ブロック.φ～拳大の礫含む)
54　10YR3/2黒褐色微砂
55　2.5Y3/1黒褐色粗砂
56　10YR4/2灰黄褐色シルト(地山ブロック含む)
57　10YR1.7/1黒色シルト(小礫含む)　【落込117】
58　2.5Y6/6黄褐色シルト
59　10YR1.7/1黒色シルト
60　2.5Y5/6黄褐色シルト（拳大の礫含む）　【地山】

図８　調査区南壁断面図（１：100）

穴と思われる土坑が多数確認でき，複数時期の遺構が切り合っていた。そのため，各遺構の切り合い関係を加味して，土取穴と思われる土坑とそれを切って成立する遺構を第３面，それ以前のものを第４面として調査を実施した。

なお，本調査地では周辺で確認されている弥生時代の旧流路は確認できず，安定した地盤を確認した。この地山の黄褐色シルト（南壁58層）の下には黒色シルト（南壁59層）が存在する。この上面で弥生時代以前の遺構が成立する可能性を考慮し，各遺構面での調査終了後，調査区西壁に沿って部分的に断割りを行い下層の確認を行った。その結果，黒色シルト上面では遺構・遺物は全く確認することはできなかった。

表１　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
江戸時代後期	礎石建物A・溝29・石組溝28・埋甕33	
江戸時代前～中期	石組遺構37・溝45・土坑54・石組遺構67・土坑68・土坑95	
室町時代	柱穴列B・C・土坑92・落込117	
室町時代以前	柱列D・土坑107・121	

（２）遺構の概要（表１）

本調査では４面の遺構面で調査を実施し，平安時代～江戸時代後期にかけての遺構・遺物を確認した。第１・２面までは，各面の調査終了後に重機を用いて掘り下げを行い，第３・４面は人力で掘削を進めた。検出した遺構は大小あわせて全部で82基あり，遺構の種類としては土坑・ピット・石組遺構・溝・礎石・柱穴等がある。

（３）第１面の遺構（図９・10）

第１面の遺構群は，地表面下0.9ｍ，標高48.0ｍ付近で確認した整地層と考えられる褐灰色砂礫やにぶい褐色砂礫（31～33層）の上面で検出した。これらの遺構群は，江戸時代後期に属するものと考えられる。

建物Ａ（礎石１～19・柱穴15）　調査区の中央で検出した19基からなる礎石群と柱穴15を同一の建物を構成するものとして報告する。調査区外へと続くため，正確な全容については不明だが，少なくとも東西３間以上，南北２間以上の規模を有する。

礎石には花崗岩を用いており，大きいものでは長軸1m以上の石材が確認できる。いずれも掘方は確認できず，整地土と共に据えられたものと考えられる。これらの礎石のうち，礎石２・３・７・８・10・11については第１面の掘下げ作業中に検出したもので，石材上面の高さが他のものに比べて低い。礎石上面の高さに着目すると，47.8～47.9mに揃うものと47.3～47.6mの間に収まるものが確認できる。大半の礎石は前者に含まれるが，掘下げ中に検出した礎石２・３・７・８・10・11が後者に含まれ，その高低差は最大で0.6ｍ程となる。

また，石材の中心で各礎石間の距離を計測すると，①ほぼ１ｍ前後に揃うもの②１ｍ未満のもの③１ｍを大きく超えるものの３つに分けられる。①としては，礎石４と５，５と６，６と７，６と９，12と13，14と16，16と17，17と18が該当する。②としては礎石７と８が該当し，間隔は0.8ｍとなる。③としては礎石１と３，３と７，７と14が該当し，その間隔は順に3.3ｍ，2m，2.7ｍとなる。これについても，掘下げ作業中に検出した礎石を中心に間隔の差異が認められる。

以上の点を踏まえ，礎石２・３・７・８・10・11はそれ以外の礎石群とは時期を異にする可能性も考慮したものの，それぞれの礎石群で建物を復元できないことや，高低差こそあるものの第１面

で確認した礎石と掘下げ中に確認したものが南北・東西に列をなすこと，そして調査区断面では第１面と第２面の間に遺構面と思われる層界を確認できなかったことから，これらを同一の建物を構成する礎石群と判断した。礎石上面の比高差は，建物が建つ範囲の地盤の段差・傾斜等に起因するものと考えたい。礎石の据え付けと同時に施されたと思われる整地層から土師器が出土しており，18世紀後半の遺構と考えられる。なお，柱穴15は当初は礎石と考えていたものの断割りを行った結果，掘方を有することが判明した。これは，建物の補強や改修に伴い設けられた可能性が想定される。

礎石20　調査区の北端部，埋甕33の西側に近接して存在する。礎石建物に伴う区画溝と思われる溝29を挟んだ北側にあること，そして建物Ａとした礎石群の主軸延長線上に礎石20がのらないことから，建物Ａとは別の建物に伴う礎石と考えられる。周辺に対応する礎石は確認出来ず，具体的な様相は不明であるが，埋甕33の上屋に伴う可能性がある。

布掘地業25　南北方向の素掘溝で，長さ2.6ｍ，幅0.6ｍ，深さ0.35ｍの規模を有する。埋土は黒褐色粗砂で，人頭大までの大きさの礫を多量に含む非常に固くしまった土層である。溝の南北が途切れること，溝の上面に礎石13が据えられていたことから，地業と判断した。

石組溝28　調査区の中央，東壁付近にて第１面の調査終了後の掘下げ作業中に検出した。東西方向の石組溝と考えられ

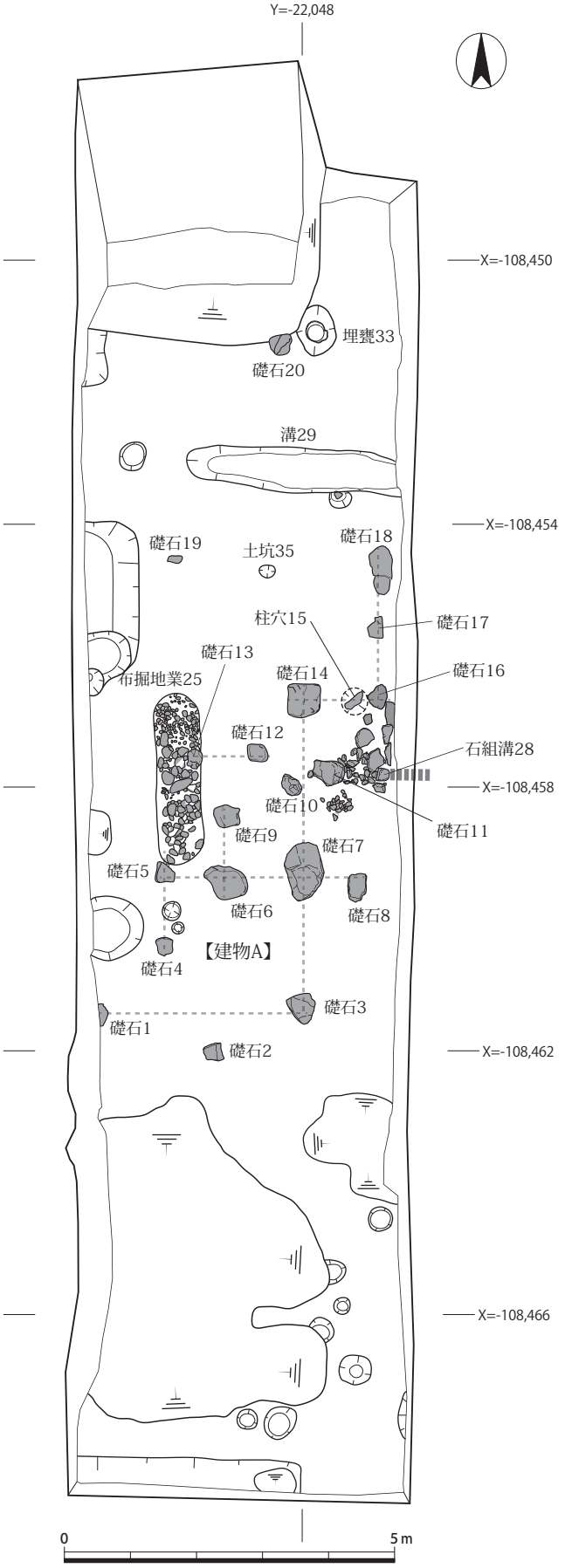
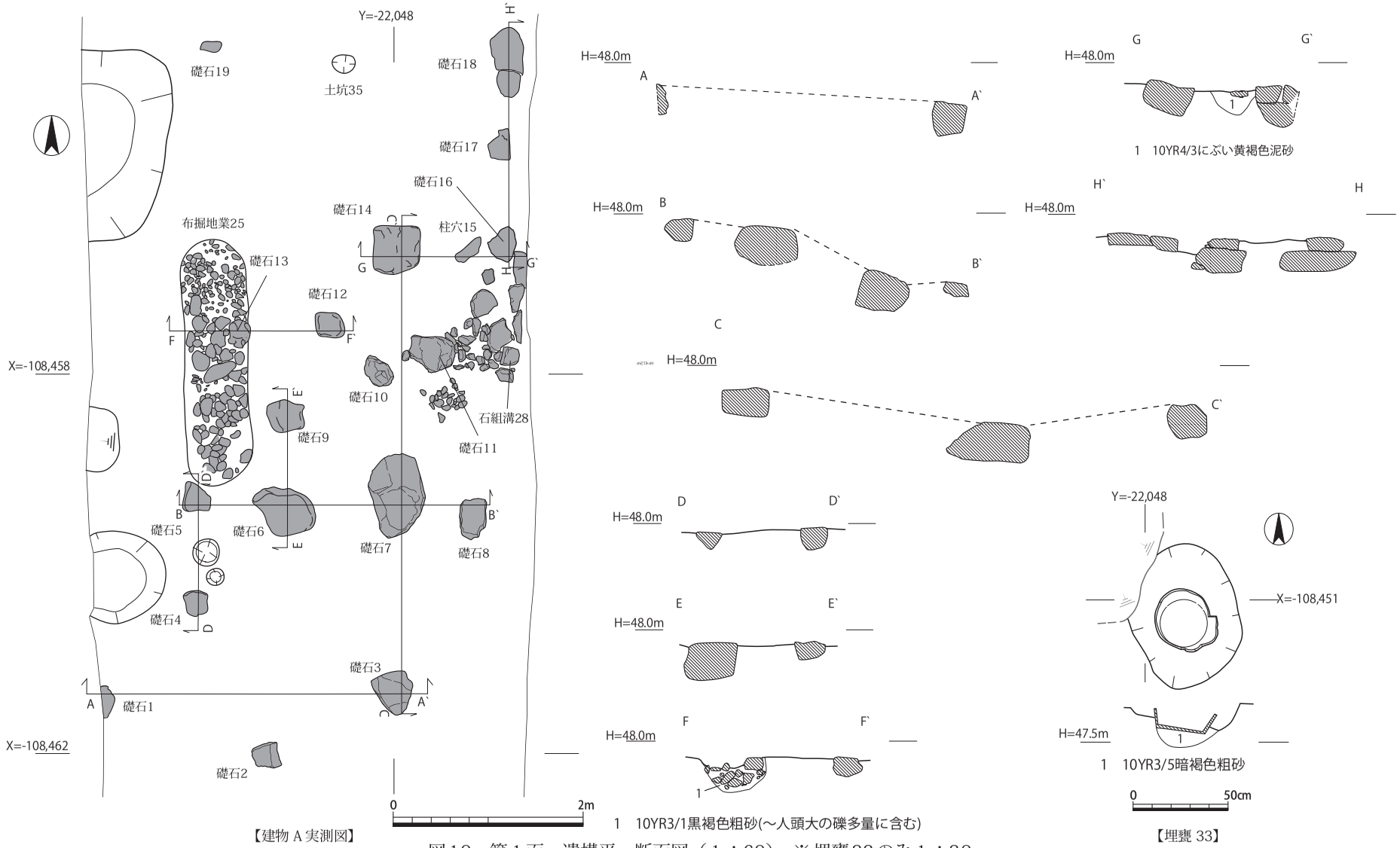


図９　第１面平面図（１：100）



【建物 A 実測図】

【埋甕 33】

図10　第1面　遺構平・断面図（1：60）　※埋甕33のみ1：30

るが，調査区内では西端部を確認したのみで全容は不明である。ただし，この石組溝がさらに東へ続くのを目視にて確認した。調査区東壁断面を参考にすると，第１面上面から0.9m程掘り込んでこの石組溝を構築している。西側には近接して礎石11が存在するが，石組溝の蓋石と礎石11の上面の標高がほぼ同じことから，それ以西には続かない。石組溝は，ある程度成形された長方形の花崗岩を使用し，底石と蓋石で両側壁を挟み込むようにして構築しており断面は「ロ」字形を呈する。また，「ロ」字に組まれた溝の内部にも同様の石材が配されている。位置関係や深度，そして同じく花崗岩を使用していることから，この石組溝は建物Ａに伴う暗渠排水溝と考えられる。

溝29　調査区の北半部，建物Ａの北側に接するように位置する。東西方向の素掘溝で，西端は調査区内で途切れ，東側は調査区外へと伸びる。長さは3.2ｍで幅は0.7ｍ，深さは0.3mの規模を有する。埋土は黒褐色砂質土の単一層であり，染付や土師器，擂鉢などが出土した。出土遺物より，18世紀後半の遺構と考えられる。時期・位置から礎石建物に伴う遺構と考えられる。

埋甕33　調査区の北東隅で単独で検出した。東西0.6ｍで南北0.76ｍ，深さ0.2ｍほどの楕円形の土坑内に，底径0.26mほどの甕が正位置で据えられている。甕は底部付近のみ遺存しており，上半部はその直上や周辺から破片の状態で出土した。甕の内面には無機質カルシウムと思われる物質が付着しており，便甕として使用されたものと推測される。

（４）第２面の遺構（図11・12）

第１面を構成する土層の除去後，地表面下1.5ｍ，標高47.2ｍで確認した褐灰色砂質土（62層）の上面を第２面として調査を行った。調査の結果，大型土坑や石組遺構，溝，礎石など，江戸時代前期以降の遺構群を確認した。この面で確認した土坑は，比較的大きなものが多く，ピットなどの小型の遺構は少ない傾向にある。

石組遺構37　調査区の南側中央で確認した。南北1.5ｍで東西1.7ｍ，深さは0.8ｍ程の規模を有し，平面は不整円形を呈する。検出時は土坑として認識していたが，底面付近で円形に配された石材が１段ないしは２段積まれた状態を確認した。井戸などの可能性も考慮に入れて調査を進めたが，木枠などはなく，底面では下層遺構の輪郭を確認した。周辺の調査事例を参考にすると本遺構の底面のレベルでは湧水は望めないことから井戸ではないと判断した。推測の域を出ないが，この遺構の規模や深度，そして井戸によく似た石積みを有することから，貯水を目的とした遺構と考えておきたい。

土坑40　調査区の南東隅で検出した土坑である。東および南側は調査区外へ続き，西側は土坑61に切られており，全体の規模は不明だが東西1.2ｍ以上で南北１ｍ以上，深さは1.2ｍの規模を有する。本遺構からは，染付や土師器，陶磁器類が出土した。京都Ⅻ期の遺構と考えられる。

溝45　調査区の南半で検出した，東西方向の溝である。東西端は調査区外へ延びるため全容は不明だが，東西4.2ｍ以上で幅0.55m，深さは0.35ｍの規模を有する。埋土は上下２層に分けられる。出土遺物からⅫ期の遺構と考えられる。現在の地図を見ると，東西の隣接地でも溝の延長部付近に

東西方向の隣地境界が確認できることから，土地境界等を示す区画溝と考えられる。

土坑54　調査区北半の東壁付近で検出した土坑である。平面は不整方形である。東側は調査区外へとのびるため全体の規模については不明だが，東西が3.3ｍ以上で南北が3.0m，深さは最深部で0.8ｍほどの比較的規模の大きな土坑である。西側壁面の上半部のみ傾斜が緩くなっている。埋土は5層に分けられ，炭や灰を多く含む。土師器や輸入磁器とみられる染付，志野・織部焼などの遺物がまとまって出土した。江戸時代前期（京都Ⅺ期古～中段階）の遺構と考えられる。

石組遺構67　調査区中央の東壁付近で検出した南北方向の石積みである。1段ないし2段の石材が積まれており，あまりきれいな石積みではないものの西に面を向ける。東側は調査区外へとのび，南側は土坑66により切られており，遺構の北西隅のみを確認した。この遺構は土坑66・68と重複関係にあり遺構の外形が明瞭ではなかったことから，最終的に断割りを行い断面の精査を行った。その結果，南北長4.4ｍで東西幅1.15ｍ，深さが0.75ｍの溝状の掘込みを有し，その底面に0.3ｍ程の厚さで褐色砂質土を敷いたうえで石材が配置されていることを確認した。石材の内側には，裏込め状の栗石を多量に含む黒褐色泥砂が確認できる。この石組遺構67の上には，礎石64とし

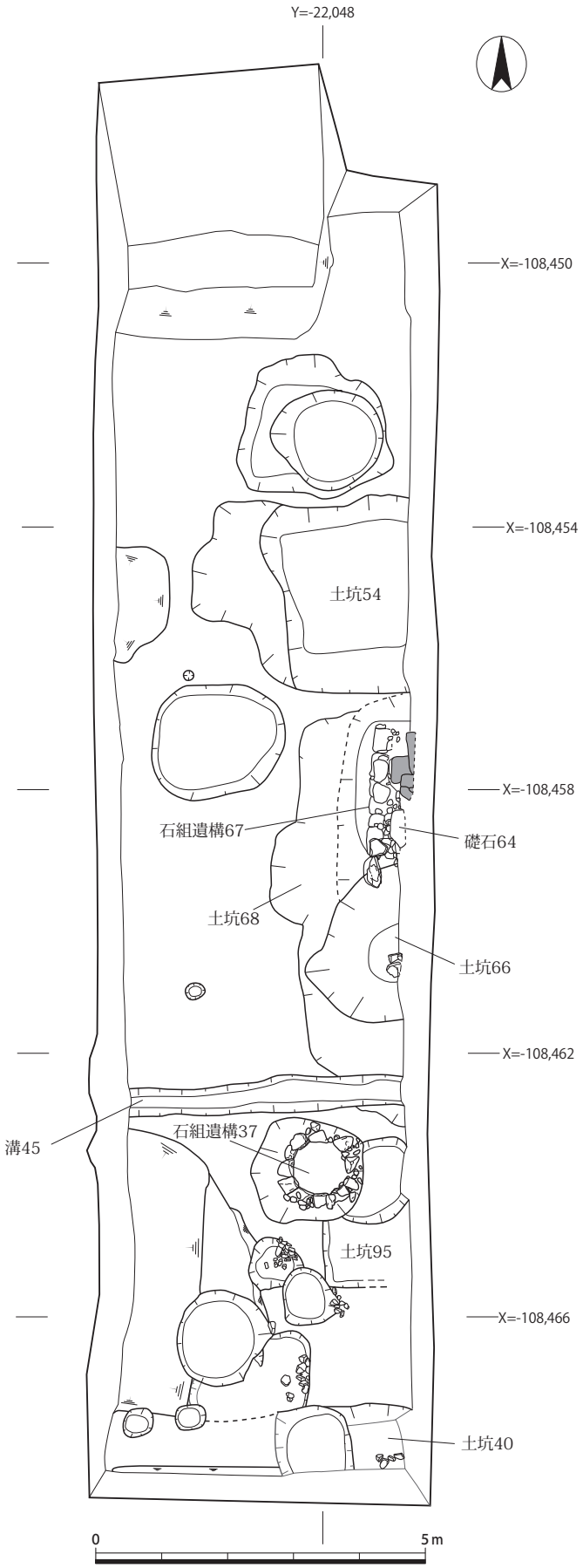
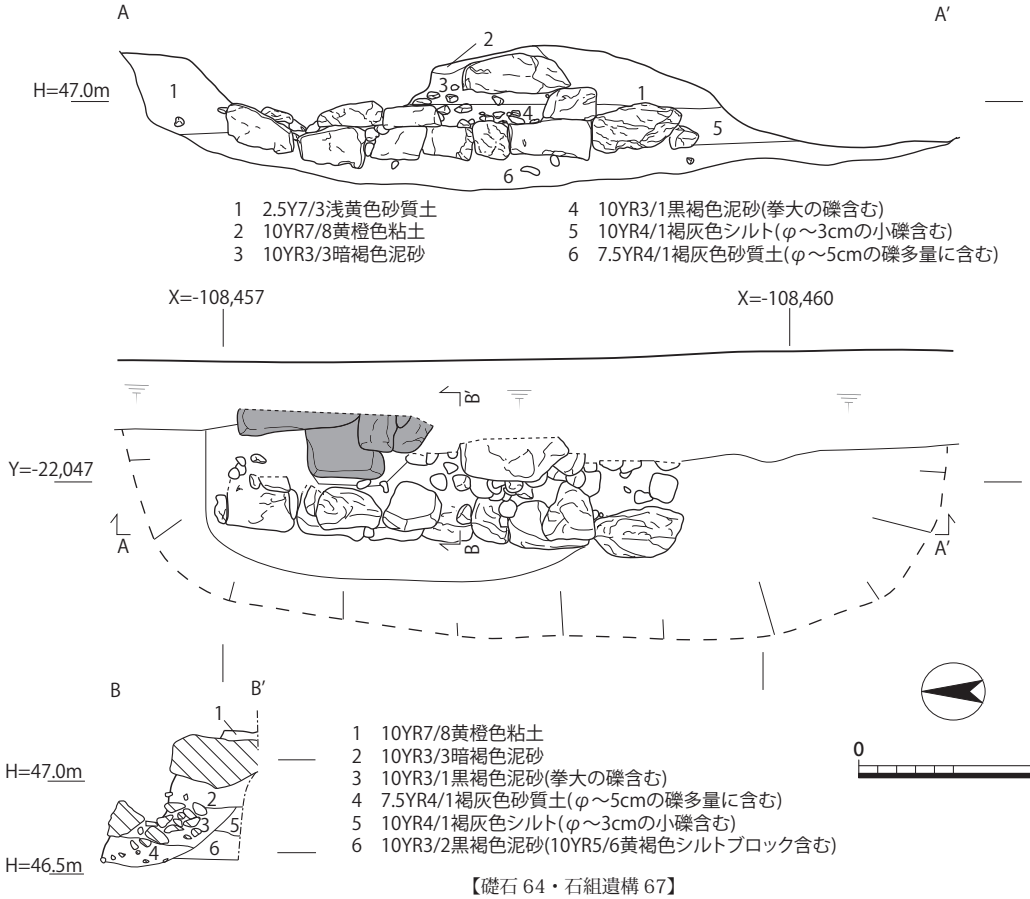
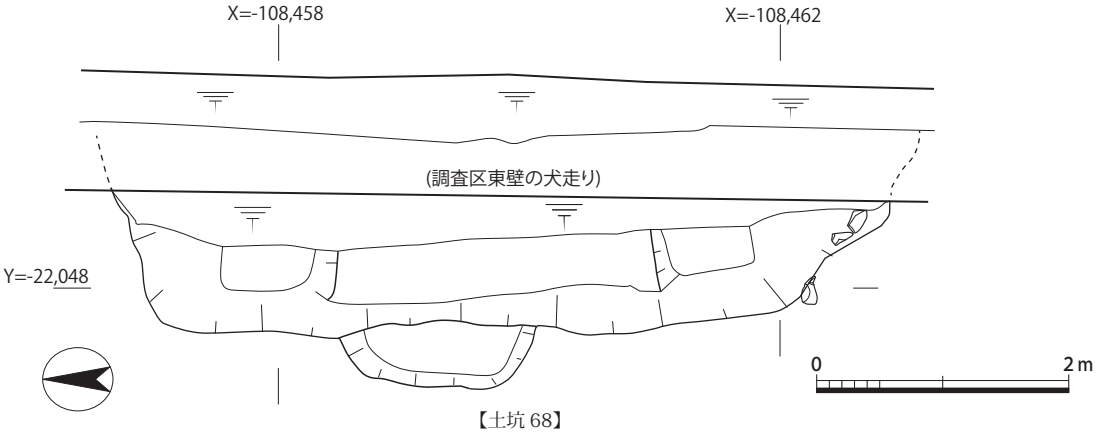


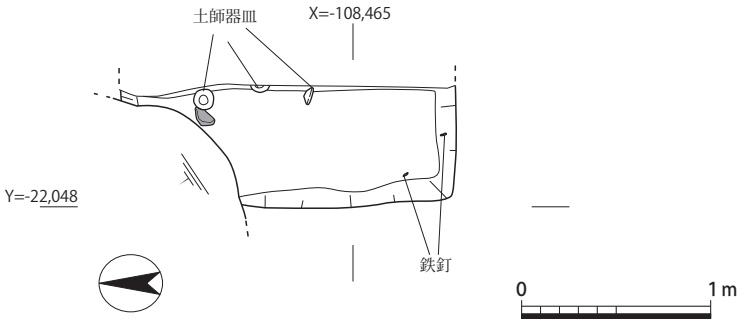
図11　第2面平面図（1：100）



【礎石 64・石組遺構 67】



【土坑 68】



【土坑 95 遺物出土状況】

図12　第２面　遺構平・断面図（１：40，１：60）

た南北長0.6ｍで東西長0.2m以上，厚さ0.2m以上の大型の石材があり，平坦な面を上に向けた状態で据えられている。礎石64と石組遺構67を本来的に同一の遺構を構成するものと考えた場合，石組遺構67は何らかの施設に伴う石積基壇の下部もしくは地業の可能性がある。時期が判別できる遺物等は確認できなかった。

土坑68　調査区中央の東壁付近で検出した。土坑66・石組遺構67・溝45と重複しており，これらに切られる関係にある。東側は調査区の外側へのびるため全体の様相は不明だが，南北長は6.5ｍ，東西長は1.95ｍ以上，深さ2.1mの規模を有する方形の大型土坑である。底面は，北端と南端部が1段低くなる。また，土坑の西辺中央には突出部が認められる。検出時は別の遺構が重複しているものと考えていたが，セクションを設けて断面を精査した結果，同一の遺構であることが判明した。この突出部の底，およそ標高45.85ｍには南北長1.1ｍ，東西長0.3ｍほどの平坦面が認められ，それ以東は急傾斜をもって0.7ｍほど下がり土坑の底に至る。この突出部付近のみ，ひな壇状になっている。土坑の埋土は13層に分けられ，炭や灰を多く含む。また，土師器や輸入磁器とみられる染付・青磁，美濃・志野・織部・唐津焼など施釉陶器，石製品や金属製品など多数の遺物がまとまって出土した。江戸時代前期（京都Ⅺ期古～中段階）の遺構と考えられる。

土坑95　調査区南東隅付近で検出した土坑である。この遺構は，第3面で検出した遺構だが,出土遺物の時期や断面の検討から第2面に帰属する遺構と判断した。平面形態は南北に長い長方形を呈し，南北長1.8mで東西長0.65m以上の規模を有する。土坑の北東部には完形に近い状態の土師器が2枚出土した。また，土坑底面の南西隅付近では少数ではあるが釘が出土した。木棺の痕跡等は確認できなかったが，遺構の形状や遺物の出土状況から，土坑95は土坑墓と考えられる。時期は出土した遺物から江戸時代前期（京都Ⅺ期古～中段階）と考えられる。

（5）第3面の遺構（図13・14）

地表面下2.55ｍ，標高46.5ｍで地山の黄褐色シルトを確認した。この上面では土取穴と思われる土坑が多数確認でき，複数時期の遺構が切り合った状態にあった。そのため，各遺構の切り合い関係を加味して，土取穴と思われる土坑とそれを切って成立する遺構を第3面として報告する。遺構としては室町時代後期の柱穴列や溝，土坑等を確認した。

柱穴列B　調査区の南側で確認した，東西方向に並ぶ柱穴77・81・82の3基で構成される。いずれも，平面形態は直径0.3～0.5ｍほどの円形もしくは不整円形で，深さは0.15～0.2ｍ程である。各柱穴間の距離は，1.2m前後に揃う。北および南側では対応する柱穴は確認できないことから，柵列などと想定される。柱穴82より出土した土師器皿からⅩ期新段階の遺構と考えたい。

柱穴列C　調査区の北側で確認した，東西方向に並ぶ柱穴93・103・110の3基で構成される。平面形態は直径0.5ｍほどの円形もしくは楕円形で，深さは0.2ｍ前後である。各柱穴間の距離は，柱穴93と103の間が1.2m，柱穴103～110の間が1.3ｍとなる。この柱穴列Cも柱穴列Bと同じく，北および南側では対応する柱穴は確認できないことから，柵列などと考えられる。出土遺物の

量はそれほど多くは無く，また混入したと思われる古い時期の遺物が多く認められる。柱穴110の出土遺物から京都Ⅹ期新段階の遺構と考えたい。

溝104　調査区北側の西壁付近で確認した東西方向の溝である。西側は調査区外へと続く。規模は，長さ1.3m以上で幅0.5m，深さは0.5mで断面は「U」字型を呈する。溝底部には，1石だけだが人頭大の礫が平坦面を上に向けた状態で据えられていた。遺構の一部しか確認できておらず断定はできないものの，溝104は布掘りの柱穴の可能性がある。なお，出土遺物は確認できなかった。

落込109　調査区北西部で確認した落込である。南肩口しか確認できておらず，全体の様相は不明である。埋土は5cm以下の円礫を主体とする砂礫層で，深さは0.5m程である。この砂礫層にはラミナ状の堆積は認められず，人為的に埋められた土層と考えられる。遺物もほとんど含まず，また全体の様相が不明であり性格については断定できない。ただし，地山の精良な黄褐色シルトがその下層の礫混じりの黒色シルトに変化する層界付近で落込の底が収まっていることから，土取穴の一部と考えておきたい。この落込からは，出土遺物は確認できなかったものの，この落込109を切り込んで土坑92や落込117が成立していることから，京都Ⅹ期以前の遺構と考えられる。

落込117　調査区東半を南北にはし

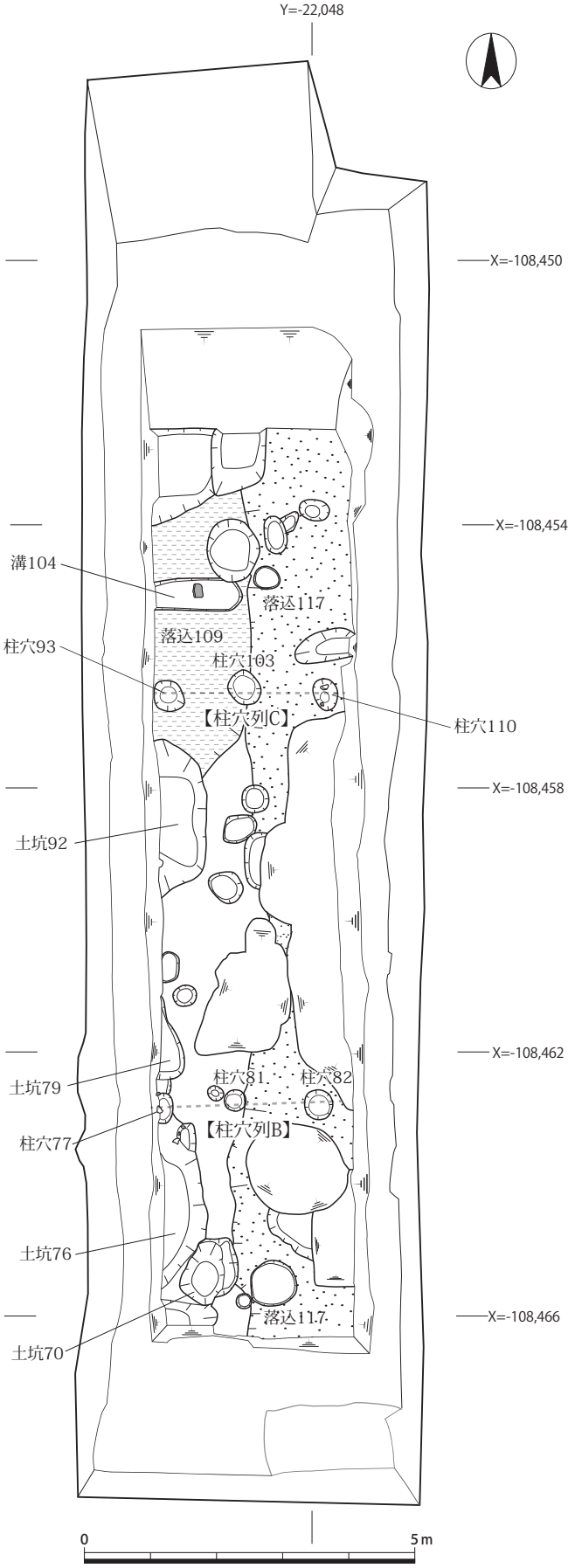
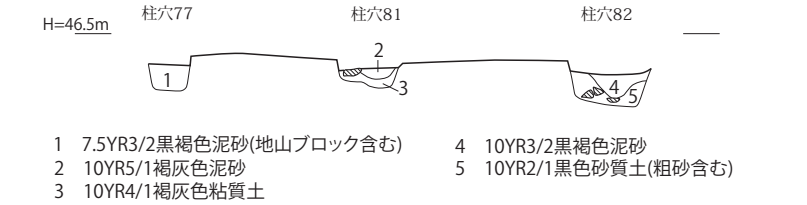
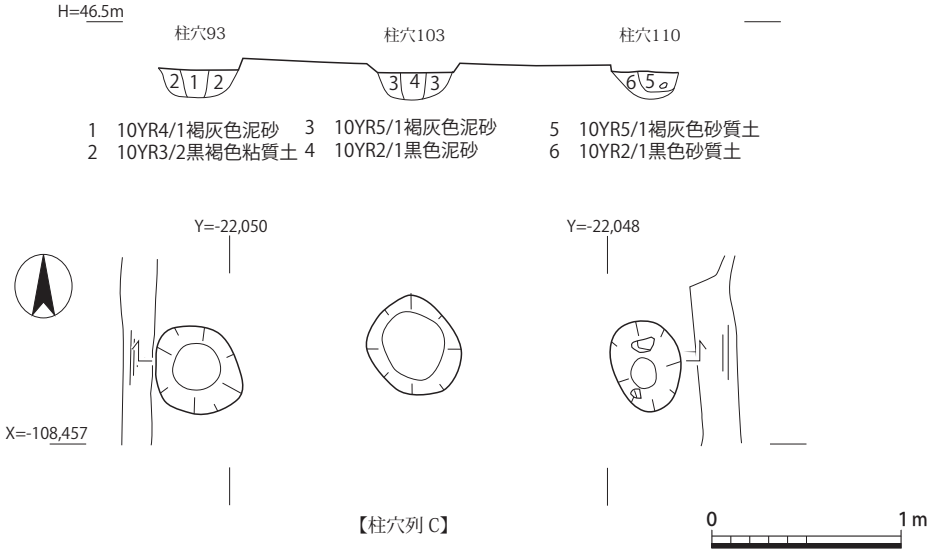


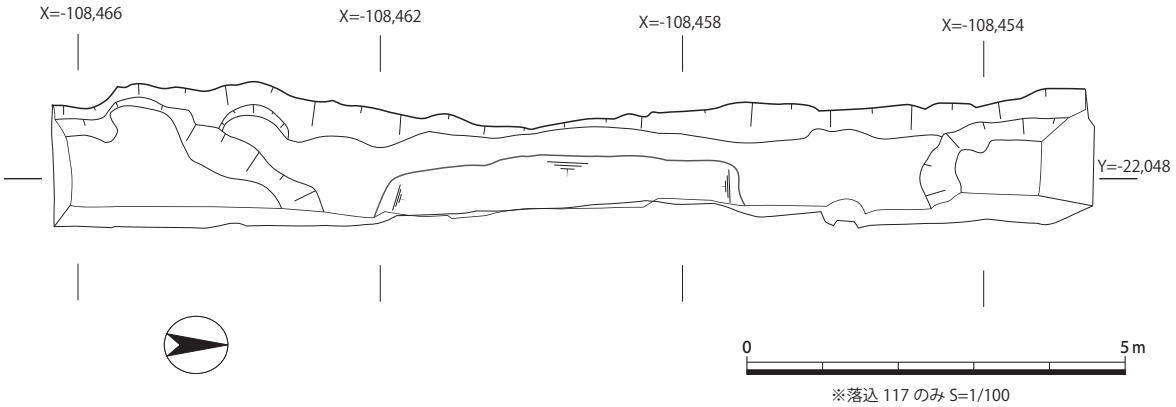
図13　第3面平面図（1：100）



【柱穴列 B】



【柱穴列 C】



【落込 117】

図14　第３面　遺構平・断面図（１：40，１：100）

る東下がりの落込である。西肩口を除く三方は，それぞれ調査区外へと伸びるため全容は不明である。長さは13.8m以上で幅は1.9m以上の規模を有する。深さは場所によって異なるが，北に向かって浅くなる傾向があり，南端部では1.3m，北端部では0.5mとなる。調査時点では南北方向の溝や堀と考えていたものの，底面に不定形な土坑を連結したような凹凸が多数確認できたことから，土取穴である可能性が高い。遺物は一定量出土しているが，平安時代後期～室町時代後期にかけてのものが混在しており，土取りの際に周辺の遺構を削平したと想定される。出土遺物から京都X期中～新段階の遺構と考えておきたい。なお，埋土の様相が類似する，土坑70・76・79についても土取りを目的とした土坑である可能性がある。

（6）第４面の遺構（図15・16）

地表面下2.55ｍ，標高46.5ｍで確認した地山の上面で成立する遺構のうち，土取穴を除去した段階で確認した遺構である。調査区の大部分が土取穴によって削平を受けており，黄褐色シルトを標高46.5ｍ付近で確認できたのは調査区の1/3程の範囲しかない。少数ながら，室町時代後期以前の柱穴や平安時代の土坑を確認した。

柱穴列Ｄ　調査区中央で確認した。柱穴124・125の２基で構成される，南北方向の柱穴列である。柱穴の平面形はともに円形で，直径は0.5ｍ，深さは0.4～0.5ｍの規模を有し，柱穴間の距離は3mとなる。柱穴125の底面には人頭大の礫が据えら

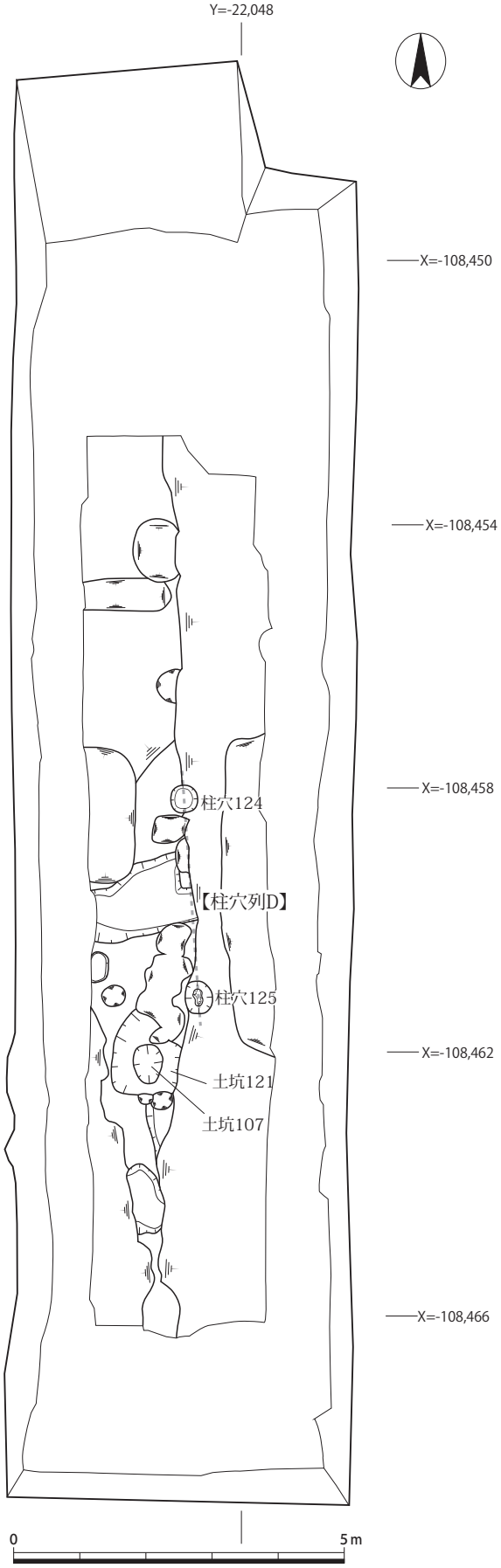


図15　第４面平面図（１：100）

れていた。遺物は確認できなかった。落込117に切られていることから，室町時代後期以前の遺構である。

土坑107・121　調査区中央で確認した。土坑121の規模は東西1ｍで南北1.3ｍ，深さは0.2ｍ程である。平面形態は北側はやや不整形だが，南側および西側は直線的にのび，おおよそ隅丸方形状となる。土坑107は土坑121の中央部に重複する楕円形の土坑で，東西0.45ｍで南北0.6ｍ，深さ0.23ｍである。二つの土坑は，同一の柱穴の掘方と柱当たりとも考えたが，掘方の規模が非常に大きくなること，対応する柱穴が他に確認できなかったことから，それぞれ別遺構と考えられる。土坑107からは須恵器や土馬の破片が出土しており，祭祀遺構と考えられる。

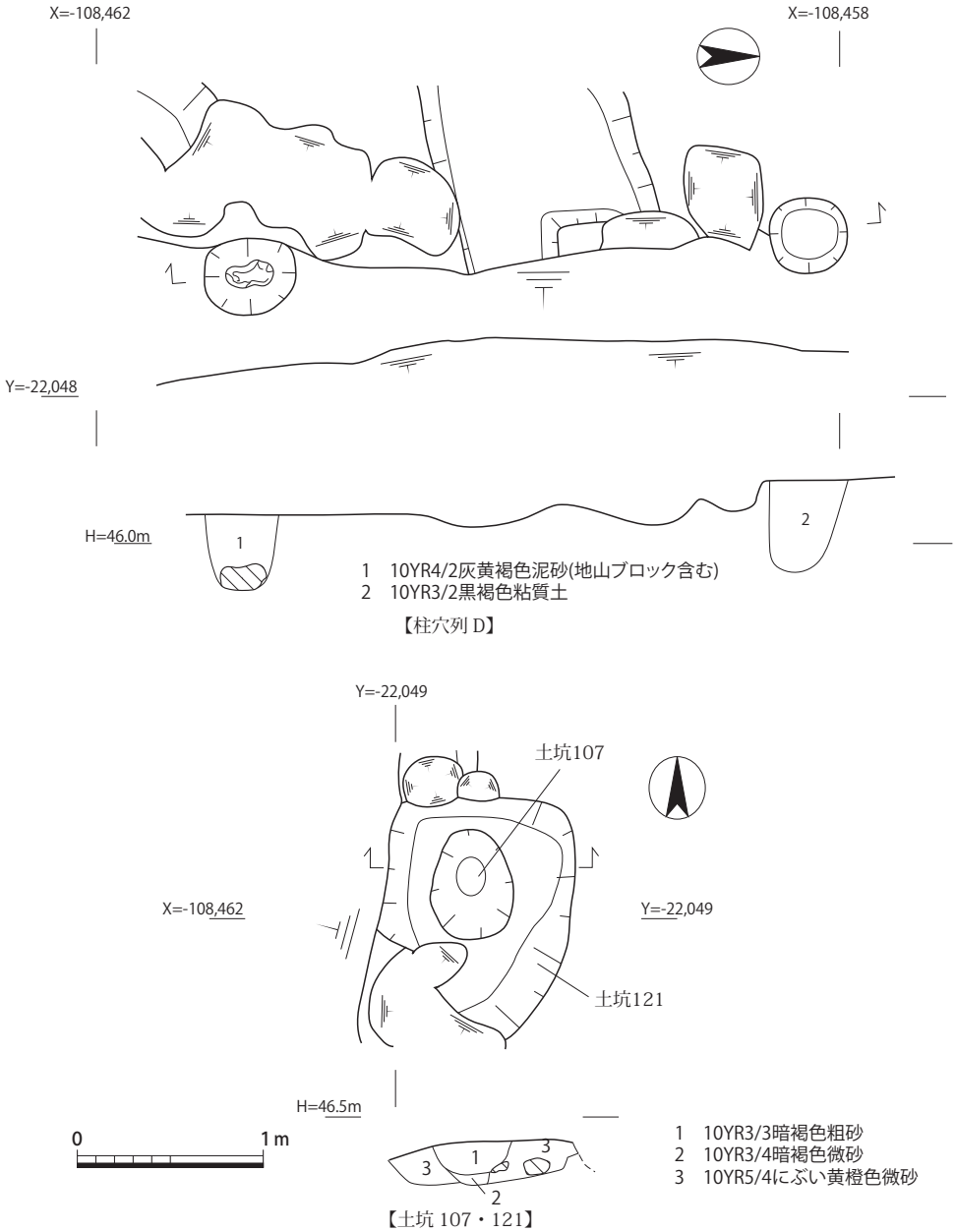


図16　第４面　遺構平・断面図（１：40）

4．遺　物（図17～27，表2～4）

現地調査終了時点において，コンテナ箱にして36箱の遺物が出土した。時期は平安時代後期～江戸時代後期までのものが確認できる。また，種類としては土師器・須恵器・瓦・瓦器・国産施釉陶器・焼締陶器・輸入陶磁器・土製品・石製品・金属製品など多岐にわたる。出土遺物は小片のものが多く，全体を復元できるものは一部に限られる。その中でも，第2面目で確認した土坑54・68から出土した遺物は，遺存状況が比較的良好であり量もまとまって出土している。

溝29　1・2は土師器皿N，3～5は同皿Sである，6・7は染付である。口径は1・2が5.1～5.25cm，3～5が10.2～10.3cm，6・7は9.5～10.0cmとなる。18世紀後半に位置付けられる。

埋甕33　8は埋甕33に据えられていた甕である。瓦質焼成の甕で，口径は43.4cm，高さは35.5cmとなる。内面に無機質カルシウムと思われる付着物が確認できる。

土坑54　この遺構からは大小合わせて破片にして1,400点の遺物が出土した。遺物の構成は表3の通りである。これらの遺物の時期は，XI期古～中段階に位置付けられる。9～52は土師器である。9～25が土師器皿N，26～37が同皿S，38～42が同皿Sbである。口径は，同皿Nでは9～15が5.3～5.6cm，16～23が6.0～6.8cm，24・25が7.0～7.2cmである。同皿Sでは，26～33は10.2～10.8cm，34～36は11.0～12.0cmとなる。口径を復元できないが，37は器壁は大型の皿と思われる。同皿Sbの口径は38～42が9.8～10.0cmとなる。14は口縁の一部を押しつぶし，注ぎ口を作る。43・44はつぼつぼである。45～47は焼塩壺の蓋，48～50は焼塩壺の身である。いずれもスタンプ等は確認できない。51は土師器の羽釜で，口径は19.3cm。52は焙烙鍋で口径30.2cm，器高は9.5cmである。53は不明土製品である。直径2.7cmの円形を呈し，中心部に穴が穿たれる。

54～57は瓦器である。小片が多く全体を復元できる資料はないが，火鉢（54～55）や鉢（57）が確認できる。

58～62は焼締陶器である。58は丹波焼，59～62は備前焼である。58・59は擂鉢，60～62は小型の壺である。60の内面には鉄分が沈着しており，鉄漿壺と推定される。62は壺の頸部と考えられ，頸部にヘラ記号が認められる。

表2　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
江戸時代	土師器・国産施釉陶器（美濃・織部・志野・唐津・伊賀など）輸入陶磁器（白磁・青磁・染付など）・石製品・金属製品		294点		
室町時代以前	土師器・土製品・須恵器・緑釉陶器・瓦器など		21点		
合　計		40箱	315点	18箱	12箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランク遺物の抽出，詰め直しのため，出土時より4箱多くなっている。

63～83は美濃産の施釉陶器である。63～69は皿である。63・64は縁折皿，67は長石釉の菊皿である。口径は64が11.6cm，67が12.6cm。70は志野の鉢で，口径は18.0cm。71・72は鉄釉天目椀で，口径は71が11.0cm，72が10.8cm。73は総織部の椀で口径は10.2cm。74は美濃唐津の椀である。口径は13.5cmで，内面底部に直径1.9cmほどの円形の凹みが確認できる。75は長石釉の掛かる無文の椀で，口径は11.0cmで器高は7.2cm。76は長石釉の小杯で口径は6.8cmで器高は3.0cm。77・78は鉄釉の掛かる壺である。78の底径は8.2cm，77の口径は3.2cm。79は長石釉の壺である。底部には糸切り痕と「ハ」字形のヘラ記号が確認できる。80～83は志野製品で，80は鉢，81・82は向付，83は茶椀である。82は底部に3箇所の脚が付き，内面には胎土目が3箇所確認できる。一辺は15.6cmで高さ5.5cm。83は口径12.1cmで高さ9.15cm，底径6.0cmで，底部には「○」に「－」が突き刺さったような形態のヘラ記号が高台の内側と外側に計2箇所確認できる。

表3　土坑54出土遺物の構成

器種	器形	破片数	比率	破片数	比率
土師器	椀・皿	806	57.57%	879	62.79%
	鍋・釜	50	3.57%		
	炉・火鉢	0	0.00%		
	その他・不明	23	1.64%		
瓦器	炉・火鉢	43	3.07%	87	6.21%
	鉢	43	3.07%		
	その他・不明	1	0.07%		
美濃・瀬戸	椀・皿	52	3.71%	78	5.57%
	鉢・向付	11	0.79%		
	瓶・壺	4	0.29%		
	盤・大皿	1	0.07%		
	その他・不明	10	0.71%		
唐津・高取	椀・皿	85	6.07%	103	7.36%
	鉢・向付	0	0.00%		
	瓶・壺	7	0.50%		
	盤・大皿	0	0.00%		
	その他・不明	11	0.79%		
その他国産施釉陶器	椀・皿	1	0.07%	1	0.07%
	鉢・向付	0	0.00%		
	瓶・壺	0	0.00%		
	盤・大皿	0	0.00%		
	その他・不明	0	0.00%		
焼締陶器	甕	8	0.57%	88	6.29%
	壺	24	1.71%		
	擂鉢	51	3.64%		
	盤・大皿	1	0.07%		
	その他・不明	4	0.29%		
輸入陶磁器	椀・皿	60	4.29%	78	5.57%
	鉢	5	0.36%		
	瓶・壺	1	0.07%		
	その他・不明	12	0.86%		
金属器		71	5.07%	71	5.07%
石製品		9	0.64%	9	0.64%
その他		6	0.43%	6	0.43%
合計		1400	100.00%	1400	100.00%

84は軟質施釉陶器で，全形は不明ながら脚が付いていることから鉢などの底部とみられる。

85～102は唐津製品である。85～93は皿で，口径は85が10.0cm，86～91が11.8cm～12.6cm，92が11.3cm，93が10.9cm。94～96は絵唐津の皿で，鉄絵で文様を描く。

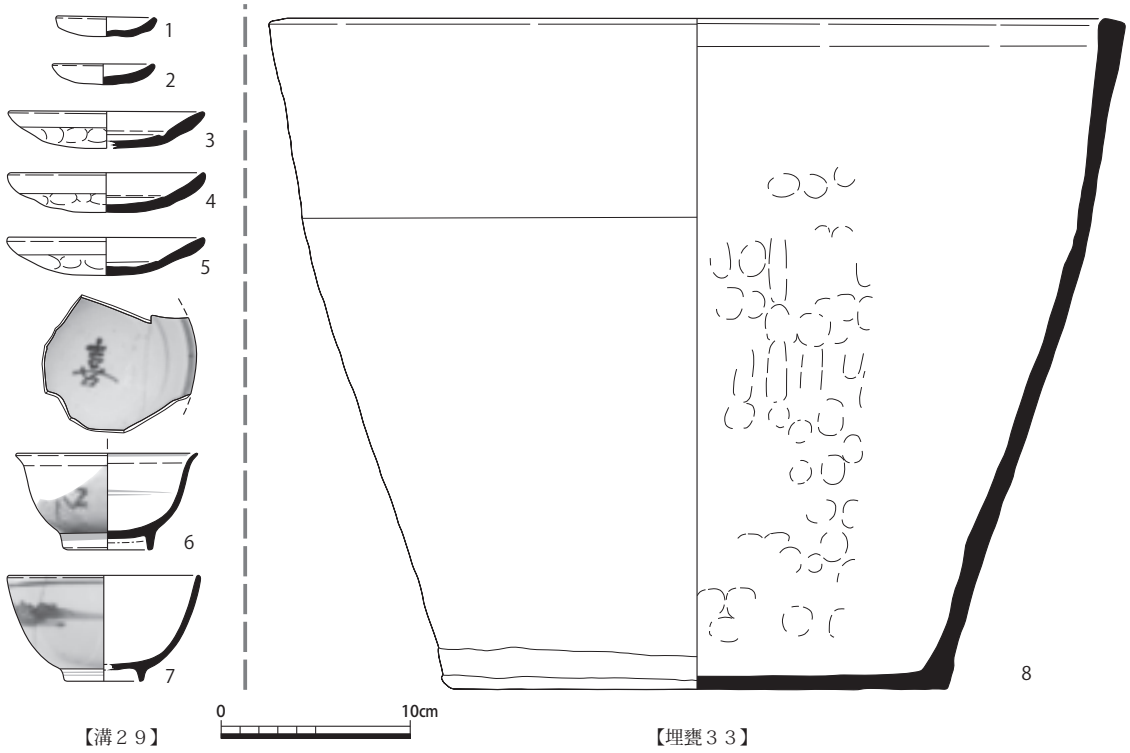


図17　第１面　出土遺物実測図（１：４）

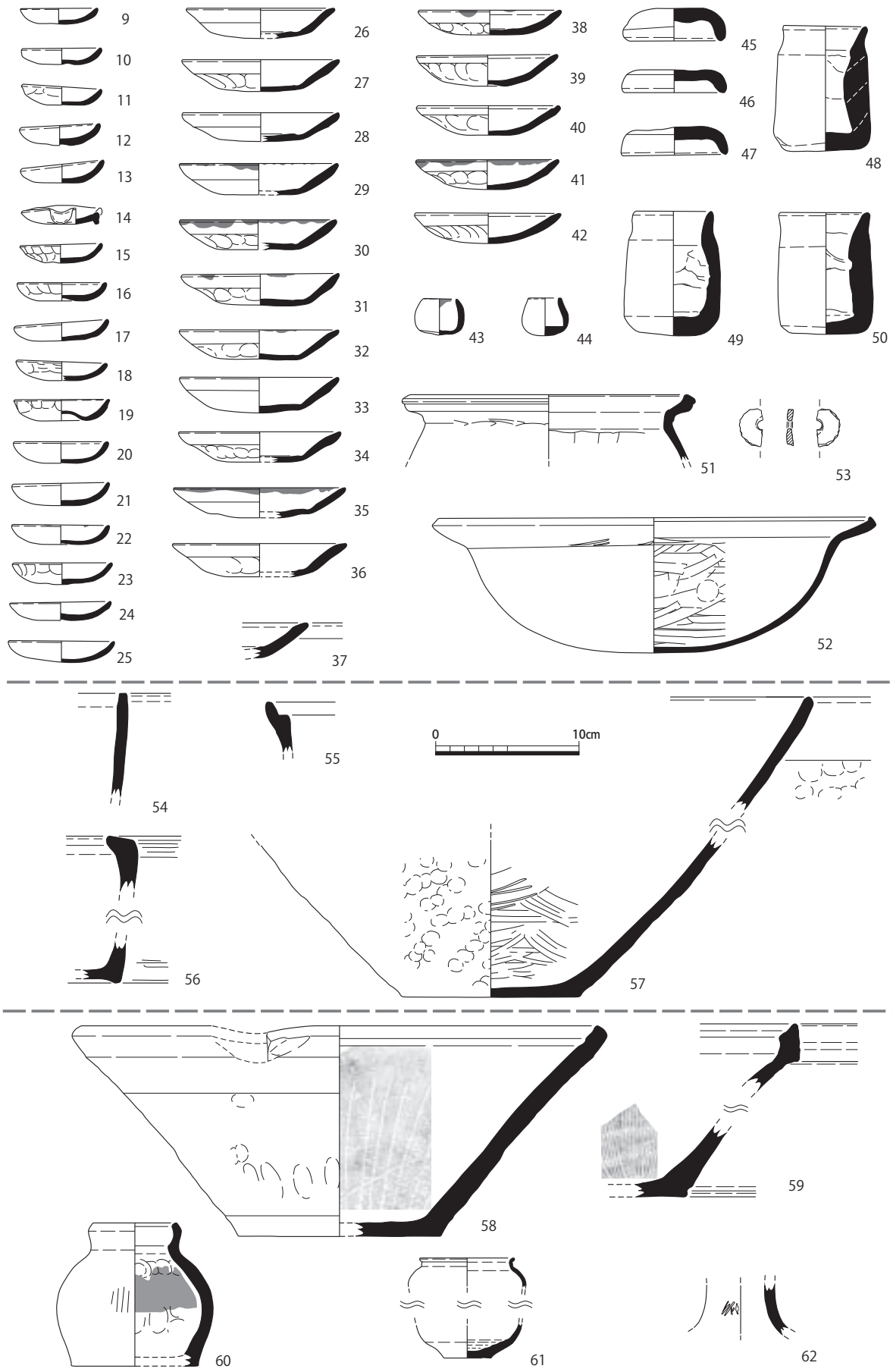


図18　土坑54出土遺物実測図（1：4）

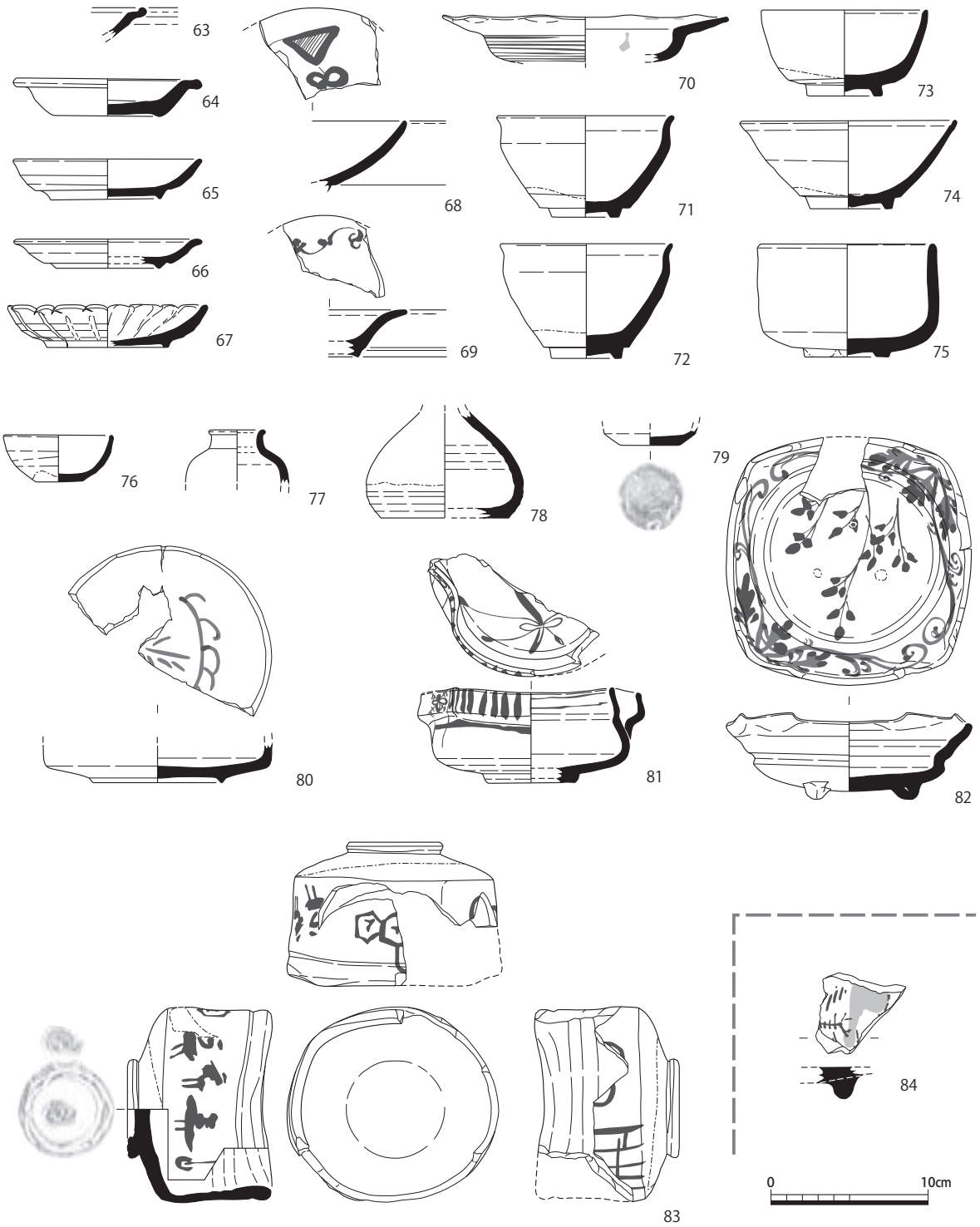


図19　土坑54出土遺物実測図（1：4）

97は長石釉の皿である。無文だが口縁端部をつまみ上げ輪花状の形態をなす。口径は14.8cm，器高は4.6cm。98～101は椀で，口径は98が10.6cm，99が11.8cm，100が10.8cm，101が11.2cm。102は小杯で底面には糸切り痕が確認できる。口径は7.0cmで器高は3.7cm。

103～107は輸入磁器である。103は染付の大皿である。口径は31.8cmで底径は13.0cm，器高は7.6cmである。内面には，同心円状の２本１組の線を３組描き，その線の間に草葉文を描く。外

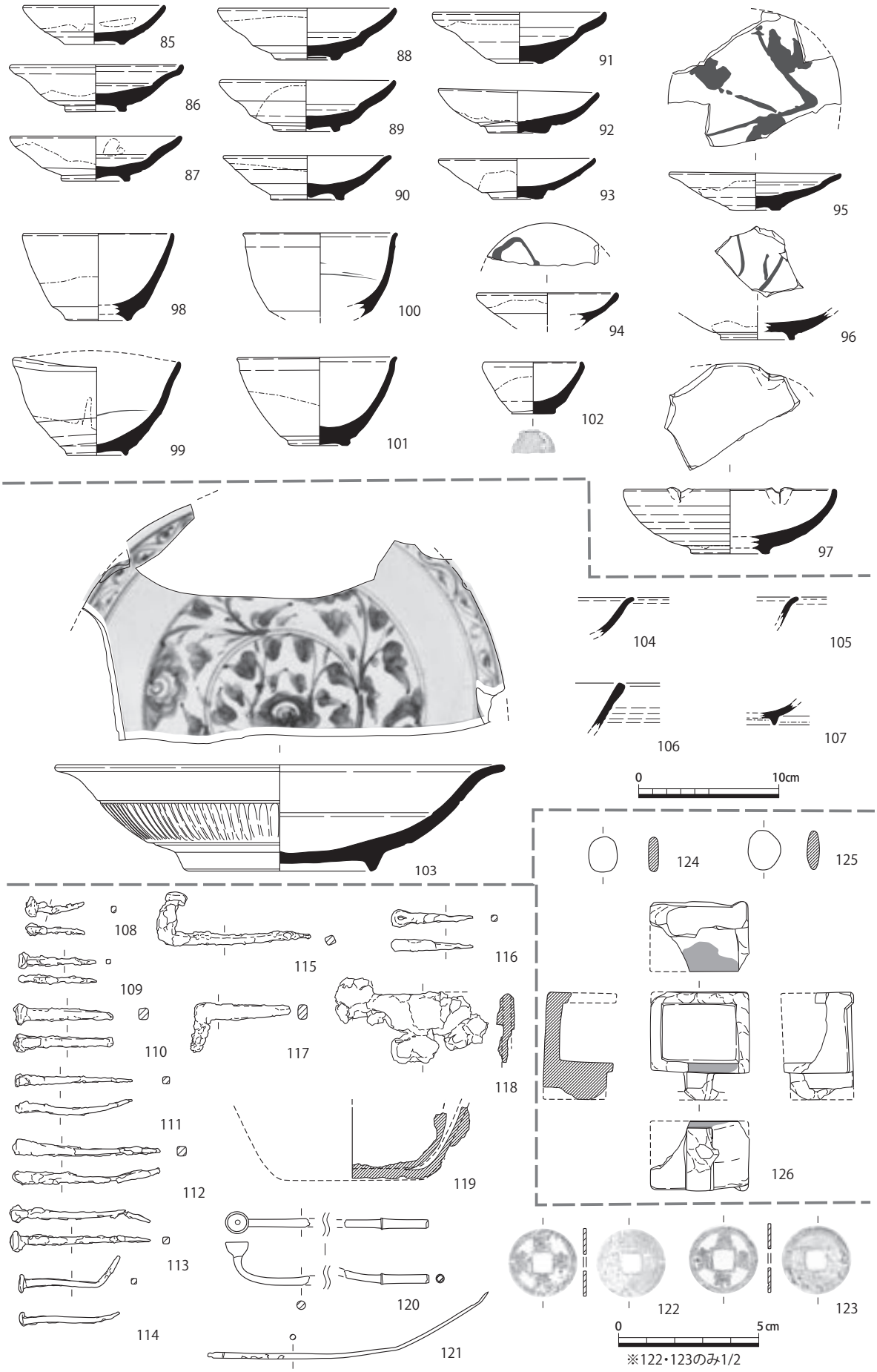


図20　土坑54出土遺物実測図（1：4，1：2）

面には染付は見られないが，体部下半に２本の沈線を引き，その間に鎬を施す。104と107は白磁椀の口縁部と底部である。105・106はともに青磁椀の口縁部である。

108～123は金属製品である。108～114 は鉄釘で，断面は方形を呈する。長さから小型（108・109），中型（110・111），大型（112・113）の三種類に分けられる。114のみ先端部が屈曲する。115は釘と形態が類似するが，大型であり頭部のやや下が垂直に屈曲する。116は先端は釘と同じ形状をとるが，頭部は円環状となる。117は鎹と思われる。118・119は錆膨れが著しいが鉄鍋である。119の底径は10cmほどである。120は銅製の煙管である。121は銅製の簪で頭部の先端付近がくびれる。122・123は宋銭で，122が皇宋通宝，123が熙寧元宝である。

表４　土坑68出土遺物の構成

器種	器形	破片数	比率	破片数	比率
土師器	椀・皿	1262	54.99%	1369	59.65%
	鍋・釜	38	1.66%		
	炉・火鉢	0	0.00%		
	その他・不明	69	3.01%		
瓦器	炉・火鉢	25	1.09%	62	2.70%
	鉢	13	0.57%		
	その他・不明	24	1.05%		
美濃・瀬戸	椀・皿	134	5.84%	205	8.93%
	鉢・向付	40	1.74%		
	瓶・壺	3	0.13%		
	盤・大皿	1	0.04%		
	その他・不明	27	1.18%		
唐津・高取	椀・皿	77	3.36%	150	6.54%
	鉢・向付	3	0.13%		
	瓶・壺	34	1.48%		
	盤・大皿	0	0.00%		
	その他・不明	36	1.57%		
その他国産施釉陶器	椀・皿	0	0.00%	1	0.04%
	鉢・向付	0	0.00%		
	瓶・壺	0	0.00%		
	盤・大皿	0	0.00%		
	その他・不明	1	0.04%		
焼締陶器	甕	8	0.35%	127	5.53%
	壺	31	1.35%		
	擂鉢	68	2.96%		
	盤・大皿	3	0.13%		
	その他・不明	17	0.74%		
輸入陶磁器	椀・皿	219	9.54%	237	10.33%
	鉢	5	0.22%		
	瓶・壺	1	0.04%		
	その他・不明	12	0.52%		
金属器		72	3.14%	72	3.14%
石製品		23	1.00%	23	1.00%
その他		49	2.14%	49	2.14%
合計		2295	100.00%	2295	100.00%

124～126は石製品である。124・125は碁石と考えられ，黒色を呈する。直径は2.5～2.8cm。126は石製の燈明具と考えられる。平面は長方形で，短辺5.8cm，長辺7.0cmである。長辺の片面には把手と思われる突出部が取り付く。また底面には，把手の付かない長辺側に脚と思われる突起が２箇所確認できる。内面には煤が付着する。石材は緑色凝灰岩で，笏谷石製と思われる。

土坑68　大小合わせて破片にして2,295点の遺物が出土した。遺物の構成は表４の通りである。これらの遺物の時期は，XI期古～中段階に位置付けられる。127～164は土師器である。127～133が土師器皿N，134～147が同皿S，148～150が同皿Sbである。口径は，同皿Nでは127～130が5.3cm～5.8cm，131～133が6.0～6.95cm。同皿Sでは，134～136が10.0～10.4cm，137～146が11.0～11.4cm，147が12.8cmとなる。同皿Sbでは，148・149が9.8～9.9cm，150が10.8cm。151・152はつぼつぼである。

153・154は焼塩壺の蓋，155・156は焼塩壺の身である。いずれもスタンプ等は確認できない。157・158は土師器羽釜，159・160は焙烙鍋である。161・162は取鍋で口径は5.4～6.0cm。168は坩堝で，口径は9.8cm。164はフイゴの羽口である。165は不明土製品である。内外面共に丁寧にみがかれており，外面には直線や波状の条線が確認できる。また，１箇所の穿孔が認められる。

166～175は瓦器である。166～168は鉢，169・170は蓋，171～173は火鉢，174は火消壺，175は燈火具である。口径は，169が17.8cm，171は23.9cm，174は9.6cm，175は9.3cm。

176～188は焼締陶器である。176～184は備前製品である。176は盤，177～183は壺である。183は底部に糸切り痕がある。181は壺の頸部に「〒」形，182は体部下半に「二」字形，183は底部に「土」字形のヘラ記号が確認できる。口径は178が12.0cm，底径は179が4.4cm，182が8.4cm，183が5.4cm，184は5.2cm。

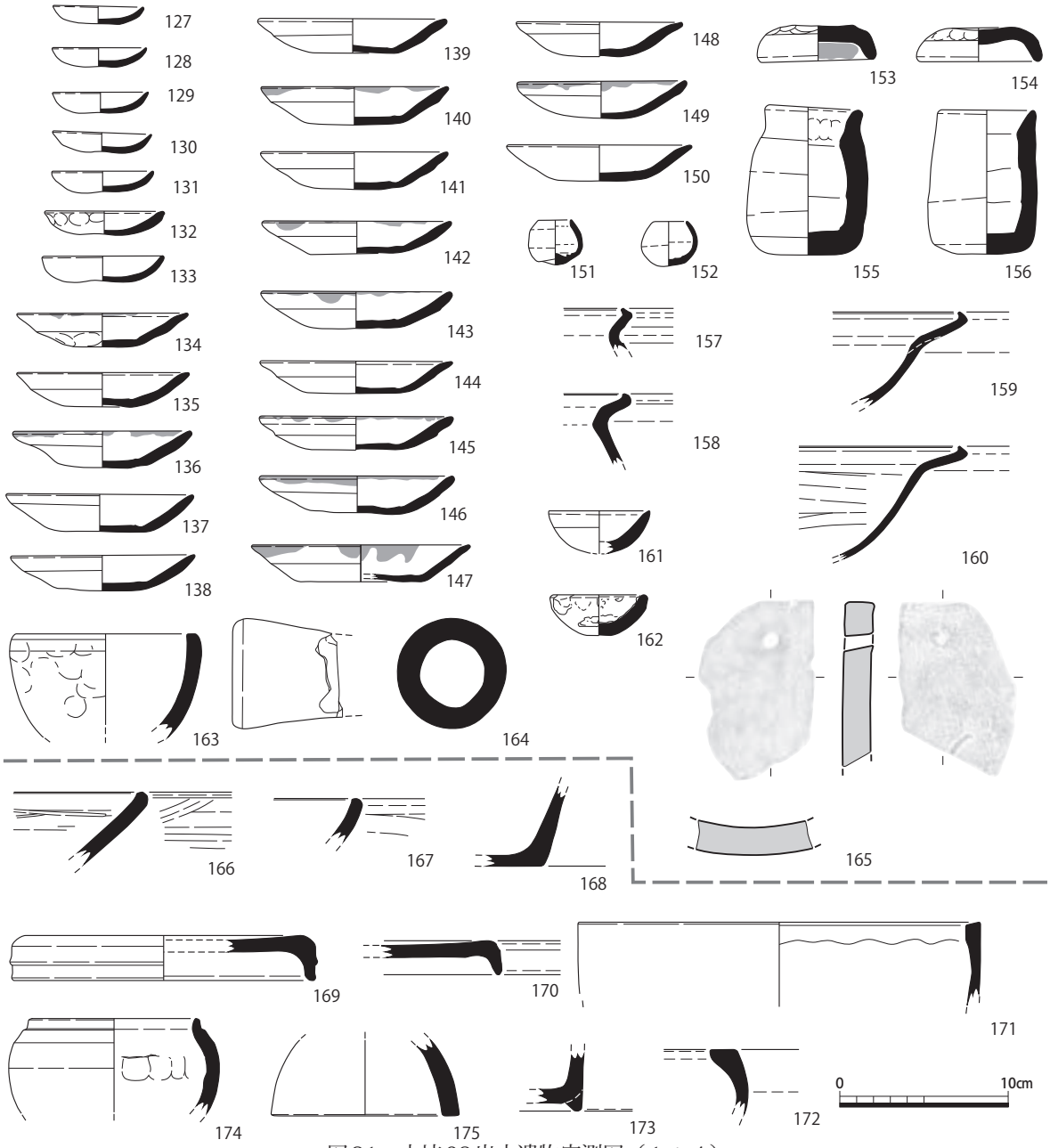


図21　土坑68出土遺物実測図（1：4）

185は信楽製品の水指，186は擂鉢である。185は側面には2箇所把手が付く。口縁部にはヘラ記号が確認できる。口径は21.7cm，底径は16.6cm，器高は20.2cmである。底部には自然釉が剥離した痕跡がある。186は31.6cm，底径は179が4.4cm，

188は丹波製品の擂鉢で，口径は32.8cmである。破片のため断定できないが，187も丹波製品と思われる。

189～217は美濃産の施釉陶器である。189は菊皿，191・192は灰釉縁折ソギ皿，193～203は長石皿，204～206は志野皿である。190は内面に印花が確認できる。口径は縁折皿が10.6cm～11.6cm，長石皿は10.0～12.1cm。206は14.2cm。207～214は椀である。207・208が総織部椀，209が鉄釉天目椀，210～213が長石椀，214が志野丸椀である。口径は207が11.0cm，209が10.4cm，210が7.6cm，211～213が10.8～11.0cm。215は小杯で口径は6.8cmであり，

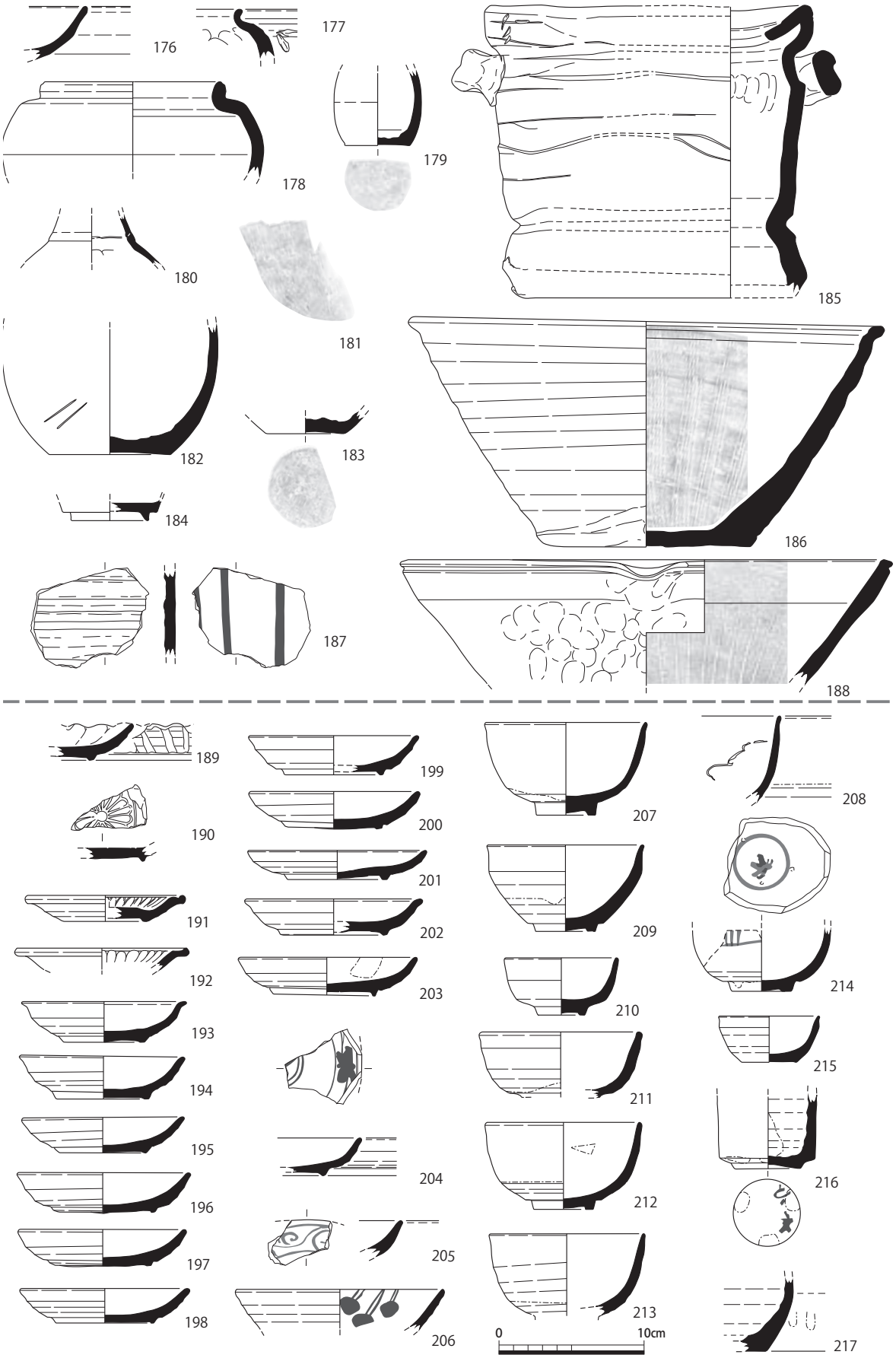


図22　土坑68出土遺物実測図（1：4）

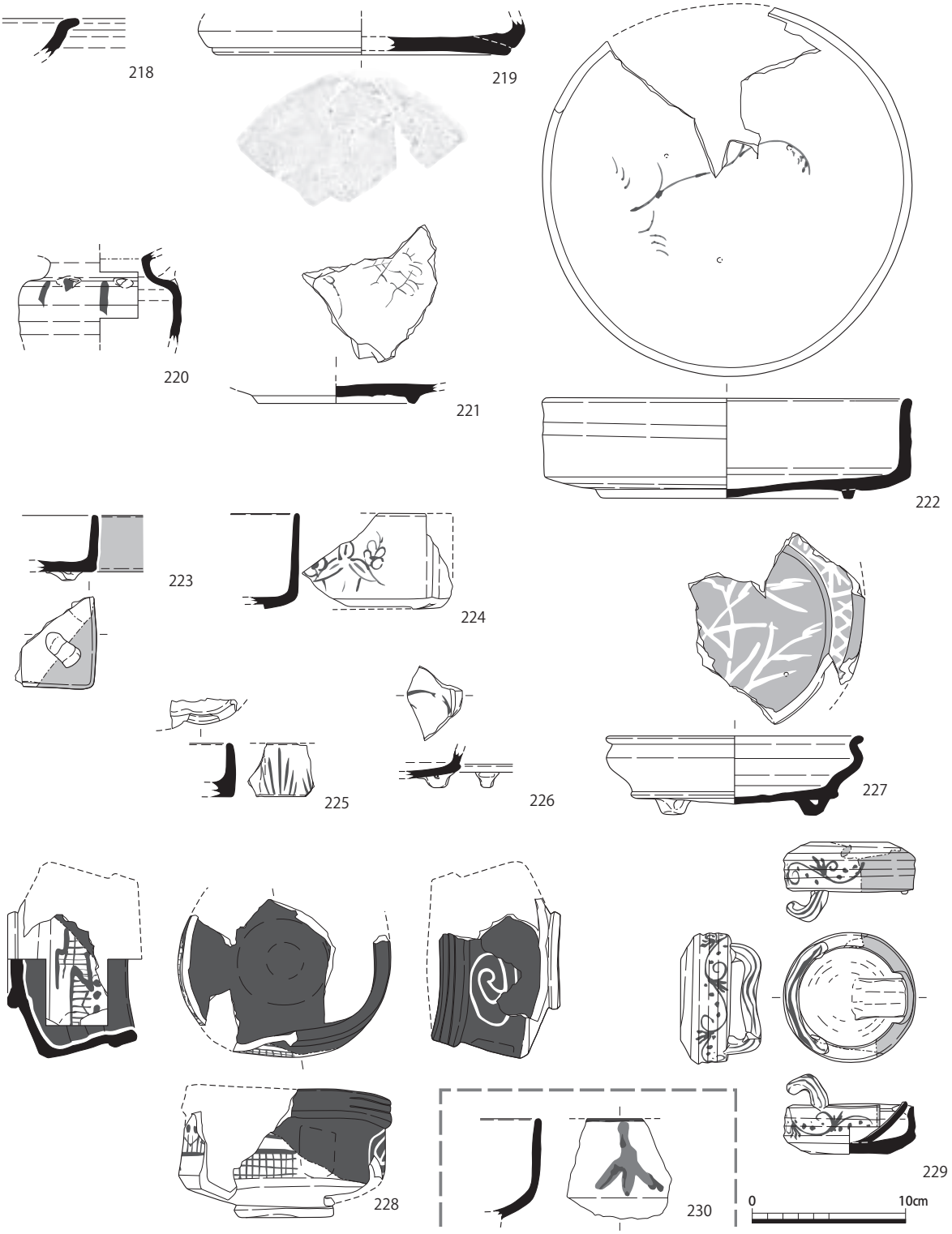


図23　土坑68出土遺物実測図（1：4）

底部に糸切り痕が確認できる。216は長石釉の香炉である。底径は4.5cmで，判読はできないものの墨書の痕跡が確認できる。217は鉄釉壺である。218は黄瀬戸の鉢，219は黄瀬戸の水注である。219の底径は19.0cmで底部には糸切り痕が認められる。220は水指と思われ，肩部に把手が剥離した痕跡が2箇所確認できる。221・222は志野鉢である。222の口径は23.6cmで底径は16.2cm，器高は6.5cmである。223～227は向付である。223は織部，224～226は志野，227

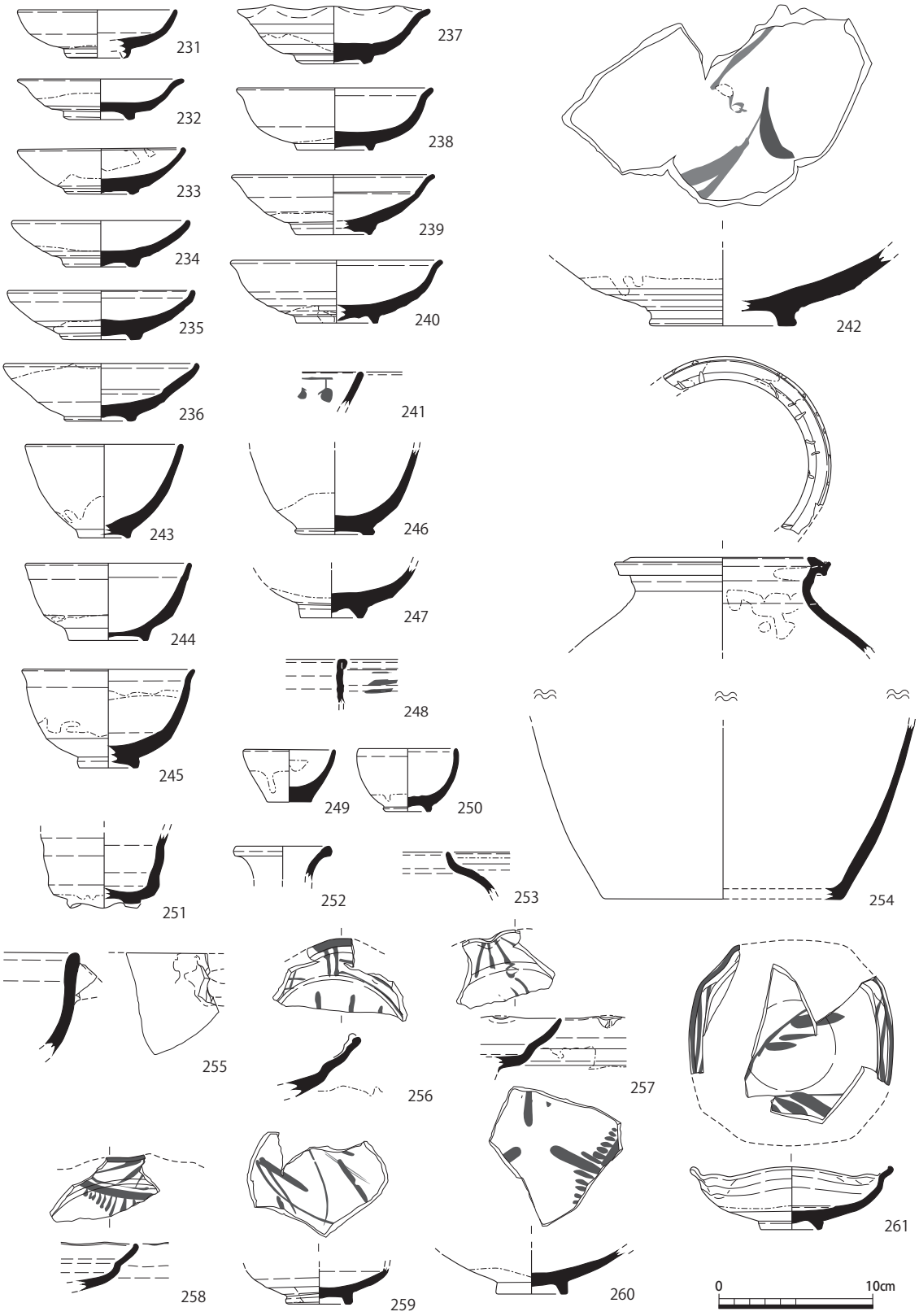


図24　土坑68出土遺物実測図（1：4）

は鼠志野である。228は黒織部の茶椀である。器の半分に鉄釉をかけ，その部分のみ掻き落としで螺旋状の文様を描く。それ以外の範囲では鉄絵で文様を描く。底径は5.8cm，器高は8.4cm。229は青織部の灯明具の身である。体部の1/3ほど緑釉をかける。内面には火種をのせる舌部が付く。

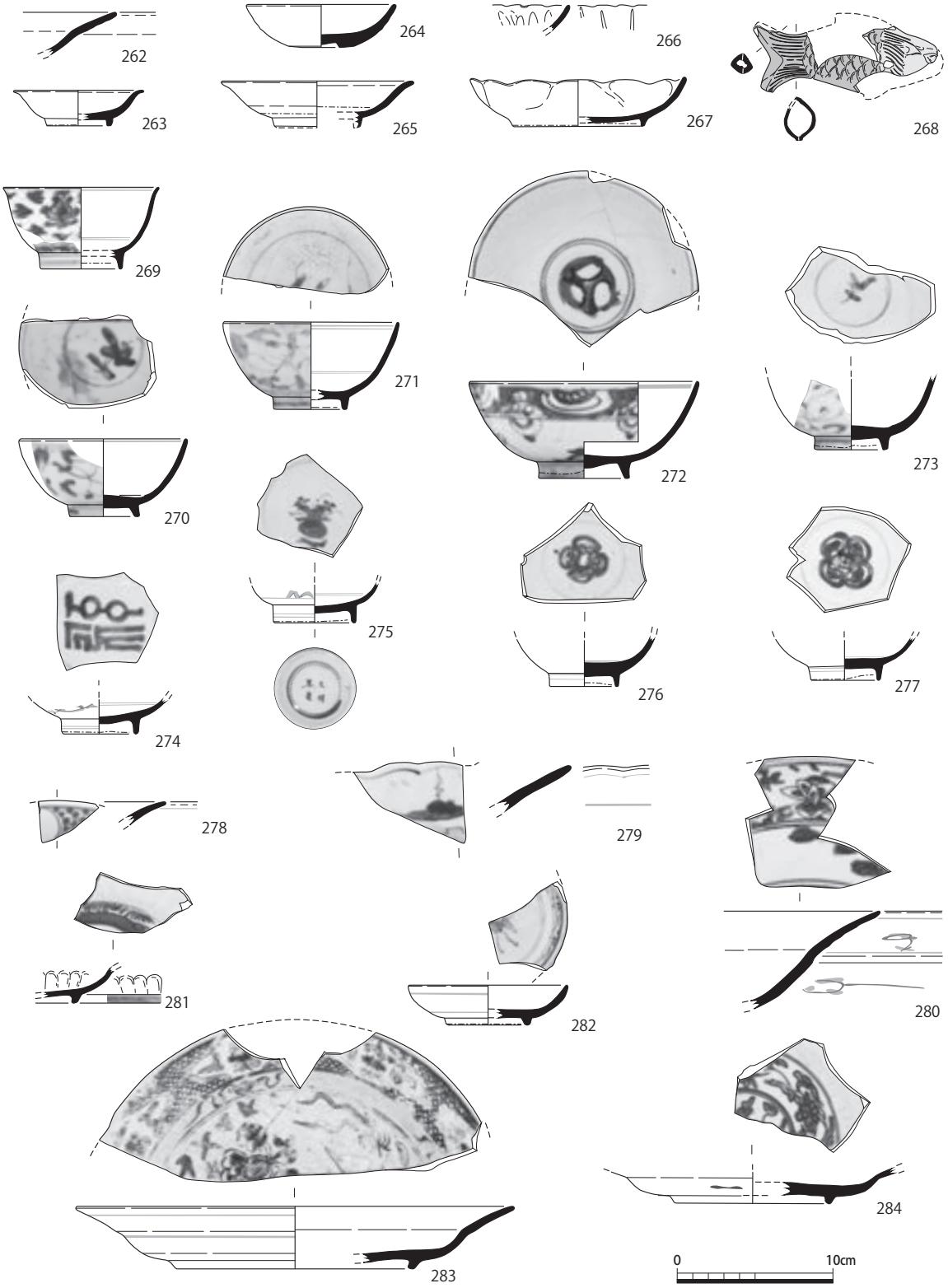


図25　土坑68出土遺物実測図（1：4）

また，口縁部には把手が取付く。

230は軟質施釉陶器の椀である。外面には緑釉で鳥足文状の文様を描く。

231～261は唐津製品である。231～240は長石釉の皿である。口径は231・232がやや小ぶりで10.2～10.4cm，233～240は11.4～14.2cmとなる。237のみ口縁が波うつ。241・242は絵

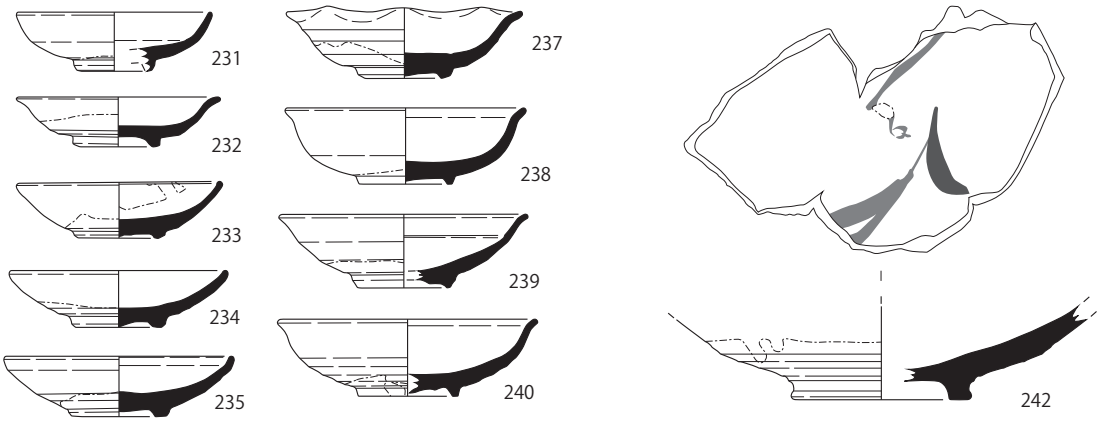


図26　土坑68出土遺物実測図（1：4）

唐津の皿である。242は底径が9.3cmあり大型である。243～247は椀である。口径は10.2～11.0cm。248は茶碗の口縁部とみられ鉄絵が部分的に確認できる。249・250は小杯である。250は高台が付き，249の底部には糸切り痕が認められる。口径は5.8～6.3cm。251は香炉で，高台部が波うつ。252～254は壺である。254は灰釉が薄くかかった壺で，口縁部が特徴的な形状を呈する。口縁部と底部に貝目が認められる。口径は11.2cm，底径は15.4cm。255は片口鉢である。256～261は向付で鉄絵が施される。261は平面が隅切方形を呈し，底径は3.9cmで器高は4.1cm。

262～284は輸入陶磁器である。262～267は白磁の皿である。266・267は輪花皿である。口径は263が8.2cm，264は9.4cm，265は12.2cm，267は9.7cmである。268は陶製の水滴である。中身は中空で，破片が左右半身できれいに剥離していることから，型作りと考えられる。不明確な個所もあるが，体部は魚，頭部は獣のような表現である。表面には尾側は緑釉，頭側は黄釉をかける。尾の先端に水を注ぐための穴が認められる。

269～284は染付である。269～277は椀である。口径は，269が9.8cm，270が10.6cm，271が14.6cmである。278～284は皿である。278は胎土から漳州窯産と考えられる。283のみ藍色以外にも赤や緑などの顔料が認められ，中国南方の赤絵とみられる。口径は28.0cm，底径は15.3cm，器高は4.0cm。

285～292は金属製品である。285～288は鉄釘である。ほとんどのものが折損している。断面方形を呈し，最も長い288は全長11.7cmとなる。289は錆膨れが著しいが，断面形から鉄鍋の口縁と考えられる。290・291は子柄，292は針状銅製品である。

293・294は石製品である。293は碁石で，黒色を呈する。294は軽石である。明確な整形はなされていないものの部分的に平坦面があり，そこに刻み目状の痕跡が数条確認できる。この痕跡は断面が三角形を呈しており，断定はできないものの砥石などとして用いられた可能性がある[4)]。

柱穴82　土師器の皿や羽釜などの小片が出土した。295～297は土師器皿S，298は同羽釜の口縁である。口径は297が10.0cmとなる。京都X期新段階と考えたい。

落込117　土師器や須恵器，緑釉陶器，瓦器等が出土した。古い時期の遺物も比較的多く混入する。298～307は土師皿S，308は瓦器羽釜，309・310は須恵器の壺と杯，311は白磁椀，312

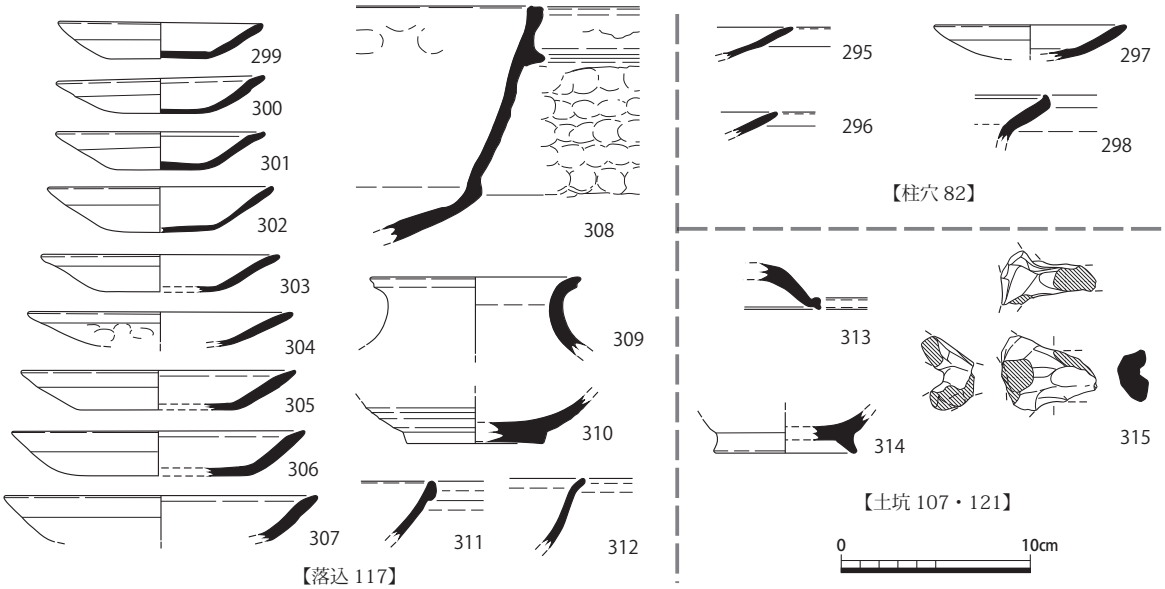


図27　第３・４面　出土遺物実測図（１：４）

は青磁椀である。309～312は古い時期の混入品である。皿Sの口径は，299～301が10.6～10.8cm，302が11.8cm，303が12.4cm，304が13.8cm，305が14.4cm，306が15.4cm，307が16.4cmである。京都Ｘ期中～新段階と考えたい。

土坑107・121　須恵器や土馬などが少量出土した。313・314は須恵器である。315は土馬である。胴部の前半部のみが出土しており，足や頭は欠損している。

５．まとめ

以上，本調査では江戸時代後期から平安時代前期までの遺構・遺物を確認した。以下，各時期の様相を概観して結びとしたい。

まず，第１面では礎石建物Ａが特筆される。部分的な確認に留まりその全容については不明と言わざるを得ないものの，東西３間以上，南北２間以上の規模を有する。礎石には大型の花崗岩を用いており，また暗渠排水と思われる石組溝28もそなえる。この礎石建物Ａは，整地層から出土した遺物から江戸時代後期（18世紀後半）に位置付けられる。当該期の本調査地近辺の占有状況を示す資料は管見の限り確認できないが，前後する時期の絵図を参考にすると延宝５年（1677）の『内裏之図』には「町家」，慶応４年（1868）の『京町御絵図細見大成』や明治２年（1869）の京町御絵図には近衛突抜以北の区画について「中院」と表記される。この絵図からは，正確な時期は不明ながら江戸時代前期末以降の段階で，本調査地付近が中院家の宅地となったことが判明する。また，その範囲については本町域の北側1/2町とするものや北東1/4町とする資料があり，判然としない[5)]。したがって，現状では礎石建物Ａが中院家の邸宅に伴うものか否かは不明である。ただし，礎石の規模等から一般的な町家とは考えにくく，公家や有力な商家などの邸宅に伴うものと考えたい。

次に，第２面では比較的大型の遺構群を確認した。ピットや柱穴はほとんど確認出来ないことか

ら，当該期は空閑地等であった状況が想定される。この中で，江戸時代前期の遺物がまとまって出土した土坑54・68は注目される。この土坑からは，白磁・青磁・染付などの輸入陶磁器類や織部・志野・伊賀・唐津などの国産施釉陶器がまとまって出土した。これらの遺物は，当時において高級品と考えられる。この遺構も，部分的な確認に留まりその全容については不明であるが，埋土には炭や灰などが多く含まれており，おそらくは廃棄土坑と考えられる。これを廃棄土坑とした場合，本調査地付近は有力者の宅地内の裏手にあたるものと想定される。

第３面では，室町時代後期の大規模な土取穴を確認した。文献史料によると，正治２年（1200）～天正年間までは当該地に近衛家の本邸である鷹司室町殿が所在したとされるが，その様相や変遷については良く分かっていない。しかし，この土取穴の存在から，室町時代後期の段階においても空閑地であったものと考えられ，鷹司室町殿の中心域からは外れていたものと推察される。

第４面では，平安時代前期～室町時代後期以前にかけての遺構を少数だが確認することができた。しかし，土取穴と思われる遺構により強く削平を受けており，室町時代以前の様相について考えられるほどの資料はない。上面の遺構埋土などに混入して平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺物は一定量確認できるものの，遺構としては当該期のものは確認されておらず，本調査では近衛第もしくは鷹司室町殿に関する新たな知見は得られなかった。

以上，本調査で当該地における土地利用の時期的変遷を明らかにすることができたことは，大きな成果といえる。しかしながら，近衛第や鷹司室町殿の様相など残された課題は少なくない。本調査地付近は，平安時代中期以降より貴族の宅地として利用され，それ以降も江戸時代を通して活発な土地利用が認められる地域である。特に，付近には御所や室町殿，旧二条城など重要な遺跡も多くあり，京都の歴史のみならず日本の歴史を考える上でも欠かすことの出来ない地域である。今後の，継続的な調査・研究に期待したい。

（熊井　亮介）

註

1） 正報告書未刊。概要は『苑信風』創刊号（1976）に掲載。

2） 昭和51年に平安京調査会が発掘調査を実施。正報告書未刊。

3） 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京一条三坊十町跡・旧二条城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-13　2013年。

4） 下記では，時期は異なるものの，同じく刻み目を有する軽石について触れられている。
引原茂治ほか「軽石考２－丹後の遺跡から見た日本海流域における軽石の流通－」『京都府埋蔵文化財情報』136号　2019年。

5） 慶応４年（1868）の『京町御絵図細見大成』では本町域の北側1/2町，「中院家拝領屋敷図」では北東1/4町が中院家の宅地と表現される。

Ⅳ　史跡 西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡

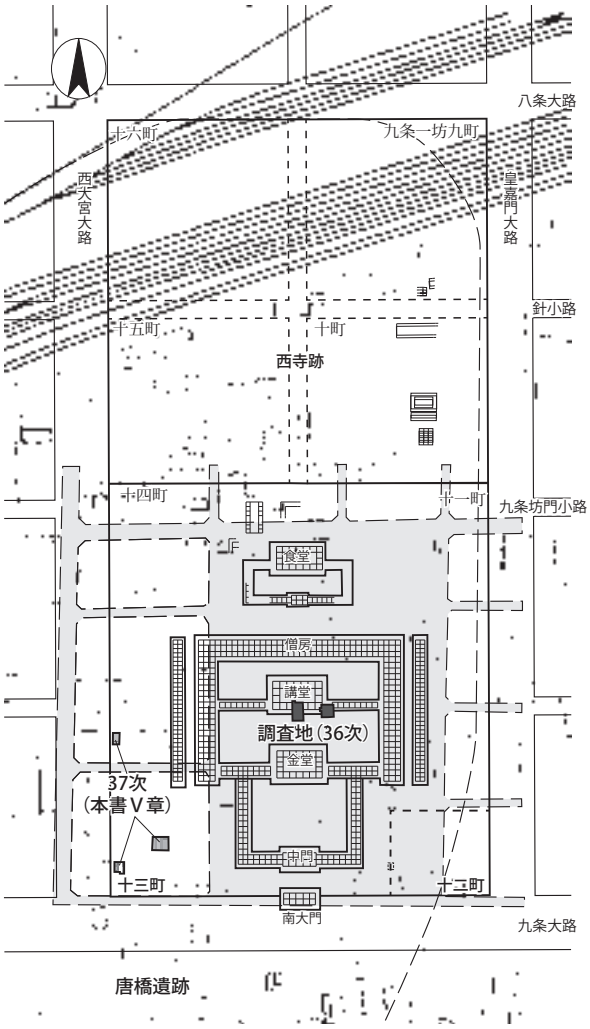


図１　調査位置図（１：5,000）

図２　調査前のコンド山（南から）

１．調査経過

（１）調査に至る経緯

本件は，史跡西寺跡における範囲確認調査である。本市では，管理団体に指定されている史跡西寺跡について，将来の保存活用計画策定に向けて，国土座標系に基づく正確な伽藍復元に有効な基礎的データを得ること，民有地を多く含む西寺跡の普及啓発を目的として，３箇年での範囲確認調査を計画した。今回は２箇年目で，西寺跡36次調査となる。

調査の対象は，昨年に引き続き唐橋西寺公園中央に所在する土壇（コンド山）で，これまでの調査成果に基づく伽藍復元では，講堂跡に比定されている（図１）。

昨年度の調査（35次）では，講堂正面中央階段の延石抜取溝と基壇盛土南縁を確認し，それまで東寺講堂の位置よりも約４m南に想定されていた西寺講堂の位置が東寺講堂と左右対称であることを明らかにする成果を得た[1)]。したがって今回の調査では，講堂の基壇及び建物規模の確認を目的とした。

（２）調査の経緯

調査区については，上記の調査目的を踏まえ以下の通り計画した。

35次２区北端にて基壇盛土南縁を確認していることから，想定される講堂正面中央の柱間を含むように４区を設定し，講堂中軸線の

図３　現地説明会風景（東から）

図４　作業風景（東から）

確認を行う。加えて35次３区西壁にて凝灰岩を多量に含む土層を認め，基壇に伴う可能性が高いことから，３区北半と重複して５区を設定した（図５）。

文化財保護法第125条に基づく史跡名勝天然記念物の現状変更については，令和元年８月20日付けで申請書を提出し，９月20日付け元受文庁第４号の743号で文化庁長官の許可を得た。

調査は９月30日から開始し，近代の公園整備に伴う盛土を除去したところ，近世のコンド山盛土を確認したため記録作業を行った。その後一部拡張を行い，平安時代の遺構面まで盛土を掘り進めたところ，火災で焼失した痕跡を示す基壇盛土上面が残っており，原位置を保った礎石１基及び

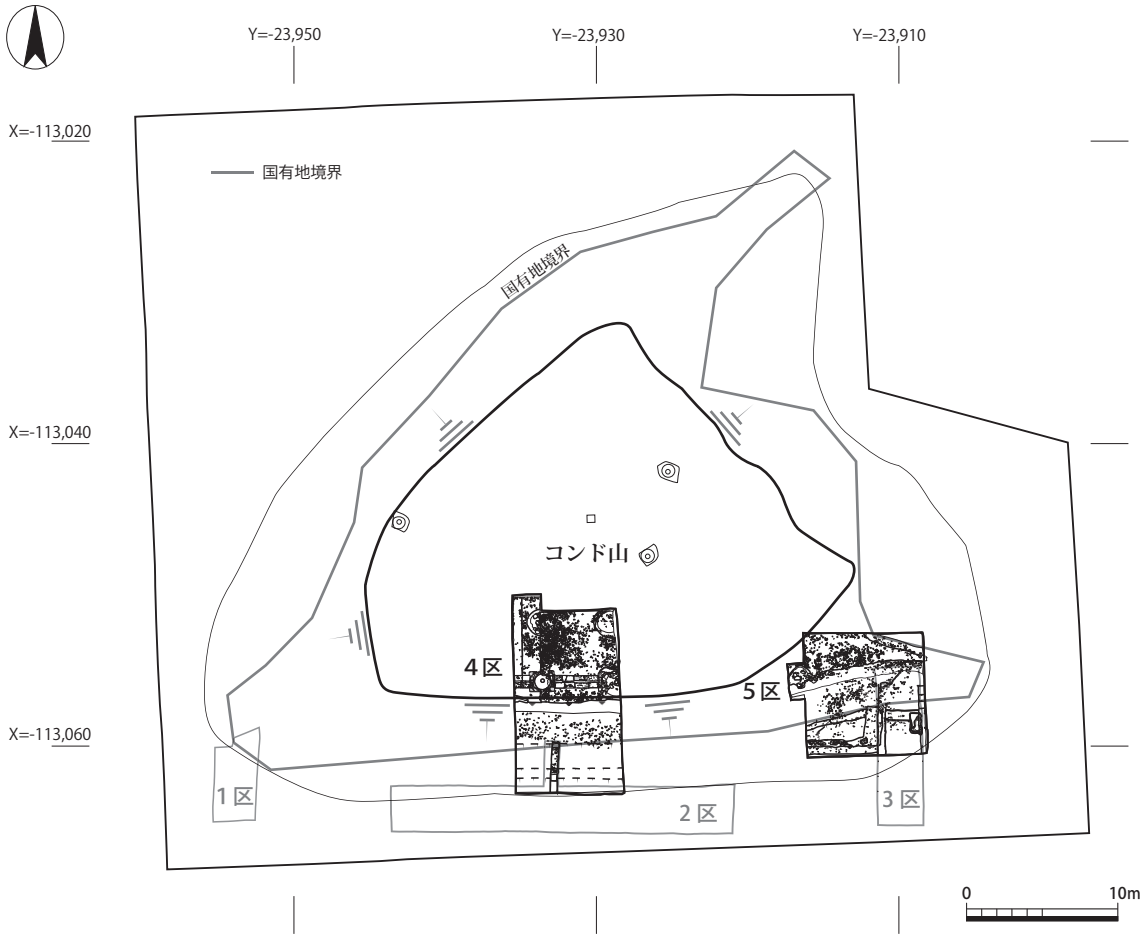


図５　調査区配置図（１：500）

抜取穴４基，凝灰岩製の石列，基壇外装の凝灰岩抜取溝等を確認するに至った。講堂の建物規模が推定できる重要な成果が得られたため，37次調査（第Ⅴ章）と合わせ10月24日に報道発表，26日に現地説明会を開催し約1,000名の参加を見た。10月30日には，調査地に隣接する市立唐橋小学校３年生90名が現場の見学に訪れ，説明を行った。また，調査期間中は調査区を囲うフェンスに西寺跡の概要や復元図，古写真，調査経過を掲示し，周知に努めた。

調査終了後，重要遺構は土嚢で養生し，遺構面は真砂土を敷き詰めて埋め戻しを行い，11月２日に全ての調査が終了した。最終的な調査面積は152㎡である。

２．歴史的環境

（１）歴史的経緯

西寺は，平安京の造営とともに，東寺と朱雀大路を挟み左右対称となるように造営された官寺で，南は九条大路に面し，北は八条大路，東は皇嘉門大路，西は西大宮大路に限られる右京九条一坊九町から十六町の東西二町，南北四町を占める広大な寺域を有していた。主要な堂塔は，南半の四町域に所在し，九条大路に面して南大門を設け，中軸線上に南から中門，金堂，講堂，僧坊，食堂が並び，南西隅には塔が配されていたと推定されている（図６）。

造営については，延暦16年（797）に藤原緒嗣が造西寺長官[2]，笠江人が造西寺次官に任ぜられており[3]，遷都直後から造営に着手していたことがわかる。弘仁３年（812）に障子46枚が西寺へ施入され[4]，翌年，坐夏が行われていることから，金堂が完成していることがわかる[5]。講堂については，天長９年（832）に供養され，御願仏が新造されている[6]。五重塔の造営は遅く，元慶６年（882）造塔料として諸国より稲6000束，穀250斛が充てられており[7]，この頃には造営が進められていたことがわかる。

西寺は，東寺が弘仁14年（823）に空海に下賜された後も[8]，御霊会や文殊会，国忌などが執り行われ，全国の僧尼の規律を司る僧綱が出仕する僧綱所が置かれるなど，官寺として引き続き国家による管理が行われていた。正暦元年（990）に焼亡記事が認められ[9]，その後一定の再建が進められたものの[10]，律令国家の衰退と共に衰亡したようで[3]，天福元年（1233）に塔が焼亡した際には，「本ヨリ荒廃ノ寺」と記されている[11]。塔焼亡後の西寺についての史料はなく，廃絶したと考えられる。

その後，西寺跡は田畑となり，松尾大社還幸祭にて神輿が担ぎ上げられるコンド山のみが唯一残された。大正時代に入り，京都府史蹟勝地委員会の委嘱を受けた梅原末治によって報告され[12]，大正10年（1921）にはコンド山を中心に京都府下第一号となる史蹟指定を受けた。翌11年には管理団体として京都市が指定されている。昭和30年代以降は，西寺跡の発掘調査が進み，南大門，中門，金堂，僧坊，食堂が確認され，東寺とほぼ左右対称の伽藍配置であったことが明らかとなり，平安京の規模を知る上でも極めて重要であるため，昭和41年には追加指定が行われた（図６）。

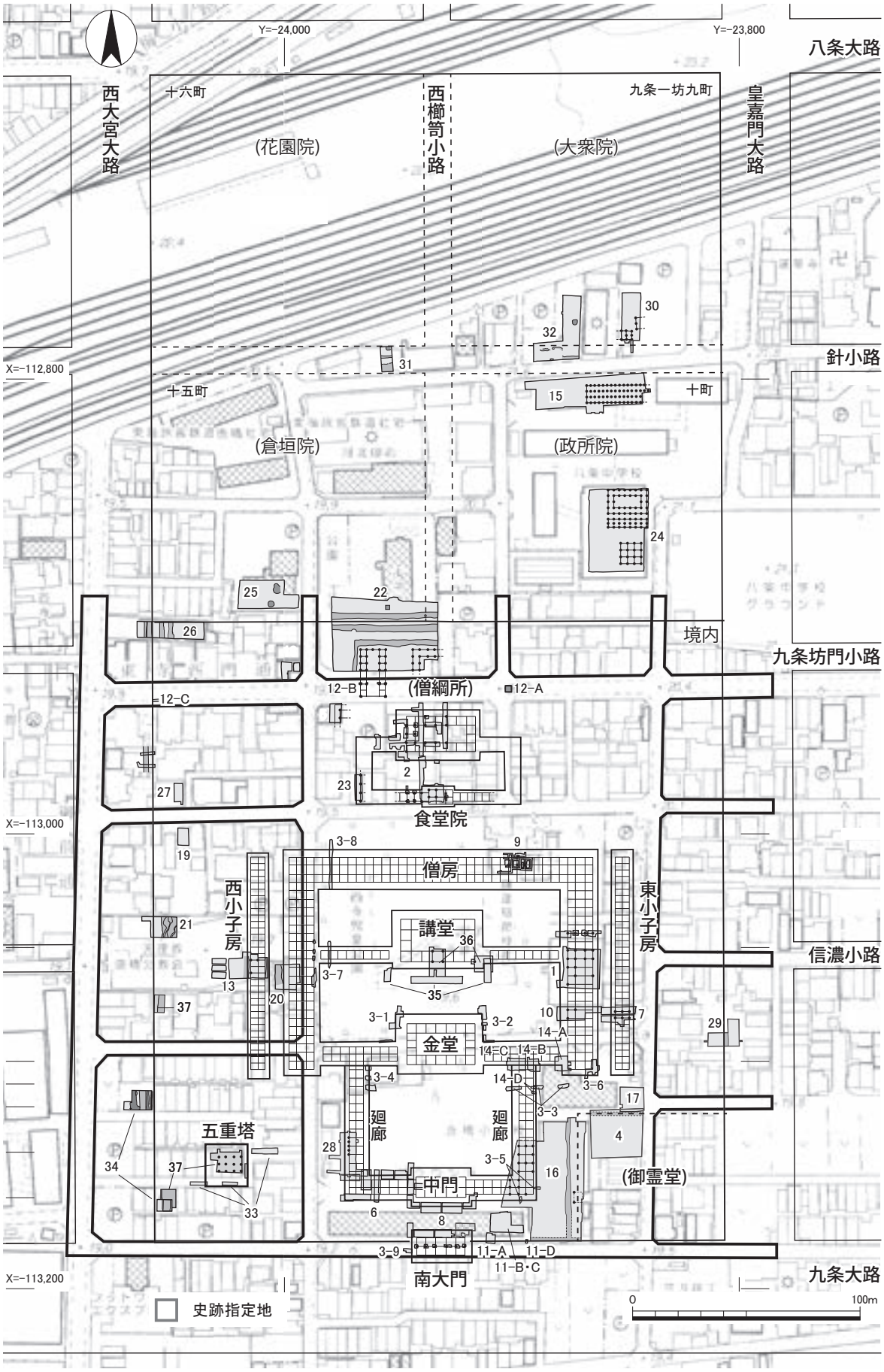


図６　周辺調査位置図及び伽藍復元図（１：2,500）

表１　西寺跡発掘調査一覧表

調査次数	推定地	調査地	調査期間	調査機関（担当者）	主要遺構	文献
1	東僧坊	西寺町（唐橋西寺公園プール）	1959/6/18～26	京都府・奈文研（杉山信三）	基壇土と 15 箇所で礎石・礎石抜取痕跡を確認。	1・2・3
2	食堂院	南区西寺町	1962/2/19～3/12	京都府・奈文研（杉山）	食堂・廻廊・南門を確認。食堂：基壇・基壇土上面の 15 箇所で礎石もしくは抜取穴を確認。廻廊：15 箇所で礎石もしくは礎石抜取穴を確認。南門：５箇所で礎石抜取穴を確認。	1・2・3・5
3-1	金堂・東西軒廊	西寺町（下水工事等）	1962/2/9～12 月	京都府・奈文研（杉山）	金堂と東軒廊の入隅の延石を確認。工事中に西軒廊基壇北縁を確認。	1・2・4
3-2	金堂	唐橋西寺公園	同上	同上	金堂西北隅の地覆石と延石を確認（７枚分）。北東隅で雨落溝を確認。	1
3-3	東廻廊	唐橋小学校（北校舎と南校舎）	同上	同上	基壇東縁凝灰岩（南北方向）。西縁据付痕跡。	同上
3-4	西廻廊	唐橋小学校北西隅	同上	同上	西廻廊基壇東縁地覆石を確認。	同上
3-5	東廻廊・南廻廊	唐橋小学校講堂	同上	同上	東廻廊：基壇東側凝灰岩を確認。 南廻廊：凝灰岩を確認。	同上
3-6	東僧房	唐橋小学校（給食調理室）	同上	同上	東僧房の基壇土・東縁雨落溝。南縁雨落溝底。礎石抜取穴を確認。	同上
3-7	西僧房	唐橋西寺公園西側	同上	同上	東より第一列の礎石抜取穴（５～６箇所）を確認。	同上
3-8	北僧房	唐橋西寺公園	同上	同上	礫を固めた場所を４箇所で確認。（２列目の礎石の据付け位置と推測）	同上
3-9	南大門	唐橋小学校南側道路	同上	同上	南大門の中央柱通りの礎石据付穴を確認。	同上
4	国忌堂（御霊堂）	唐橋西寺町 65（唐橋小学校プール）	1970/7/14～8/8	市教委・平博（伊藤玄三）	築地基底部（幅約３ｍで東西方向に展開する小砂礫敷き）と築地北側に緩い凹凸のある大溝を確認。	1
5	大炊殿	唐橋西寺町 40	1972/11/2～12/5	市文化財・鳥羽研（杉山・浪貝毅・峰巍）	礎石・根石を確認（１箇所）。	1・6
6	中門・西廻廊・南廻廊	唐橋西寺町 65（唐橋小学校グラウンド）	1973/7/25～8/20	市教委・鳥羽研（杉山）	南廻廊北側雨落溝，基壇南北縁凝灰岩。西廻廊と南廻廊の入隅部分。西廻廊を横断する暗渠。中門基壇南北縁凝灰岩片を確認。	1
7	東小子房	唐橋西寺町 64（ガレージ）	1973/9/20～10/10	市文化財（浪貝・玉村登志夫）	東小子房の柱掘形を５箇所で確認。このうち４箇所は根石が残る。東側で南北溝を確認。	1・7
8	中門・南廻廊・南大門	唐橋西寺町 65（唐橋小学校グラウンド南端）	1974/5/3～6/15	市教育・鳥羽研（杉山）	中門：基壇南東隅延石と階段部分を確認。中門・南廻廊：中門南東隅と南廻廊の入隅部の延石を確認。南廻廊：基壇地業を確認。	1
9	北僧房	唐橋西寺町 57-1（鎌達稲荷神社社務所）	1974/6/25～7月	市文化財（梶川敏夫）	北僧房の東西に並ぶ礎石抜取穴を確認。	1・8
10	東僧房	唐橋西寺町 65（公園チビッコプール）	1977/5/16～6/4	埋文研（長宗繁一・吉川義彦）	東僧房の礎石据付穴３基，西側雨落溝（幅 0.5 m，深さ 0.2 m），基壇東辺を確認。	9a・10a
11-A・D	南面築地	唐橋西寺町 65（唐橋小学校南校舎）	1977/8/1～23	埋文研（本弥八郎）	南面築地（九条大路北側築地）・内溝（幅 1.6 m , 深さ約 0.3 m）を確認。	10b
11-B・C					柱穴群を確認。	
12- A	食堂北東部	唐橋西寺町 86	1977/9/1～10/31	埋文研（鈴木廣司・長宗）	食堂北東部で井戸（方形木組，一辺 3.5 m）を確認。	9b・10c
12- B	大炊殿				礎石据付穴を６箇所で確認。東西約 2.7 m, 南北約 5.4 m。	
12- C	西面築地				東西方向の凝灰岩の石列（北側 2.9 m , 南側 3.3 m，南北間隔約 0.4 m）を確認。	
13	西小子房	唐橋西寺町 27（天理教唐橋分教会）	1977/11/7～30	埋文研（鈴木廣）	西小子房基壇土（幅 8.5 m , 残存高 0.3 m），礎石据付け穴５基（方形で一辺 1.3 m , 深さ 0.2 m），西側雨落溝（幅 0.8～1 m，深さ約 0.2 m）を確認。	10d
14- A	東僧坊	唐橋西寺町 65（唐橋小学校グラウンド）	1978/8/24～31	埋文研（百瀬正恒）	東僧房の礎石据付穴２基（径 1.2 m，深さ約 0.1 m，根石を持つ），西側雨落溝（幅 1.8 m，深さ 0.3 m）を確認。	11・12b
14- C	金堂東軒廊				金堂東軒廊南縁延石（凝灰岩, 幅 0.35 m, 厚さ 0.1 m）と掘方（幅 1.4 m，深さ 0.2 m），礎石を確認。	
14- D	東廻廊				東廻廊東縁延石を確認。	

調査次数	推定地	調査地	調査期間	調査機関（担当者）	西寺関連主要遺構	文献
15	付属地	唐橋門脇町35（八条中学校）	1978/11/21～79/3/6	埋文研（平方幸雄）	梁間３間，桁行15間以上の総柱掘立建物（東西棟）を確認。身舎の柱穴は一辺１mの方形，庇（北側）は長形0.4～0.5 mの円形に近い隅丸方形。建物北側で東西溝を確認。	12a
16	東廻廊・南廻廊・国忌堂	唐橋西寺町65（唐橋小学校体育館・給食室）	1979/1/27～3/31	埋文研（堀内明博）	東・南廻廊の基壇土，礎石据付穴（一辺約１mの隅丸方形，深さ約0.3 m），基壇外装（延石：幅0.3 m，長さ0.5～1 m。地覆石：幅0.3 m，厚さ0.16～0.2 m，長さ0.6～1 m）を確認。築地：南北方向の築地基底部を確認。築地の西側で南北溝。門跡：凝灰岩方形礎石・小礎石の据付穴２基を確認。	12C
17	伽藍地南東部	唐橋西寺町65（唐橋小学校）	1979/6/1～21	埋文研（磯部勝・辻純一）	炭・土師器を多量に含む土坑，瓦溜りを確認。	13
18	伽藍地北西部	唐橋門脇町２（個人住宅）	1980/5/16～5/25	埋文研（鈴木廣）	創建期の整地層と平安時代後期の整地層。井戸（南北約2.75 m，東西2.5 m以上の方形掘形）を確認。	14a・15b
19	伽藍地北西部	唐橋西寺町33-3（個人住宅）	1980/6/23～7/5	埋文研（堀内）	西小子房北西部。西寺関連の整地層を確認。	14b・15b
20	西僧坊	唐橋西寺町30（天理教会ガレージ）	1980/8/1～13	埋文研（長宗）	西僧房基壇土，柱穴２基，ピットを確認。	14C・15C
21	西面築地	唐橋西寺町30（天理教会）	1981/2/3～20	埋文研（平尾政幸）	西寺西面築地（西大宮大路東築地）基壇，築地内溝を確認。	14d・15d
22	中仕切築地塀・大炊殿	唐橋門脇町29他（共同住宅）	1986/6/2～10/6	埋文研（磯部・鈴木久男・堀内）	礎石建物：梁間２間，桁行７間の東西庇付礎石建物（南北棟）。梁間２間，桁行７間の四面庇付礎石建物（東西棟）。溝：礎石建物を取り囲む溝（幅1.5～2.3 m，深さ0.2 m）。築地南北側溝（幅2.3～2.6 m，深さ0.15～0.3 m）築地：幅約2.6 mの東西方向の築地跡。	17a
23	食堂院	唐橋西寺町55-2（個人住宅）	1986/11/5～19	埋文研（堀内）	食堂院西廻廊基壇，西側柱列礎石抜取穴４基（径1.4 m前後，深さ0.4 m）。基壇西側に南北溝（幅2.2 m以上，深さ約0.3 m）。廻廊基壇土の下層でピットと土坑を確認。	16・17b
24	付属地	唐橋門脇町35（八条中学体育館）	1988/9/8～12/28	埋文研（菅田薫）	東西５間，南北２間の四面庇掘立柱建物（一辺約0.8 mの方形の掘方）・東西７間，南北２間掘立柱建物（径0.3 mの掘方）。礎石建物：３間３間の総柱礎石建物（掘方0.9～1.2 mの円形。）井戸・土坑を確認。	18a
25	付属地	唐橋門脇町６・７	1989/1/17～3/15	埋文研（菅田）	平安時代の土坑や井戸を確認。	18b
26	中仕切り築地塀西面築地	唐橋門脇町4-1	1990/11/8～12/20	関西文化（吉川・鎌田博子）	中仕切り築地塀に伴う溝と整地層，西面築地に伴う溝を確認。	未報告
27	西面築地	唐橋西寺町35-12	2007/2/16～3/2	埋文研（能芝妙子）	湿地状の落込み，柱穴３，土坑３基を確認。	19
28	西廻廊	唐橋西寺町69（唐橋小学校児童館）	2007/7/23～8/20	埋文研（柏田有香）	西廻廊基壇整地土，柱穴４基（一辺0.65～0.7 m，深さ約0.22 mの隅丸方形），溝を確認。	20
29	東面築地	唐橋花園町9-8・9・11	2013/11/8～12/10	埋文研（東洋一）	東面築地基底部（幅約2.1 m，），内溝（幅1.5 m，深さ0.35 m），落込みを確認。	21
30	付属地	唐橋門脇町23	2016/5/9～6/17	埋文研（李銀眞）	梁間２間，桁行２間以上の掘立柱建物。梁間1.8 m，桁行2.2～2.4 mで、柱穴掘方は一辺0.3～0.4 mの隅丸方形である。梁間２間，桁行１間以上の掘立柱建物。梁間約2.4 m，柱穴掘方は一辺0.5～0.9 m以上の隅丸方形。柱穴列（柱穴掘方一辺0.15～0.3 mの隅丸方形）。	22
31	付属地	唐橋門脇町17	2016/10/13～21	埋文研（近藤奈央）	井戸（掘方は一辺約２m，一辺0.85 mの縦板横桟組），溝（幅0.8～1.1 m，深さ0.2～0.4 m）。造寺に関わる土取坑を確認。	23
32	付属地	唐橋門脇町21・22	2017/5/22～6/29	埋文研（鈴木康高・木下保明）	井戸（掘方一辺2.2 m，深さ約1.6 m，井籠組），区画溝（幅1.15～1.5 m，深さ0.3 m，東西方向）を確認。	24
33	五重塔	唐橋西寺町10	2017/10/31～12/08	市文化財（鈴木久史）	瓦溜り，落込みを確認。	25
34	西面築地	唐橋西寺町10	2018/10/1～11/8	市文化財（鈴木）	西大宮大路と西寺西面築地内溝，鋳造関連遺構を確認。	26

調査次数	推定地	調査地	調査期間	調査機関（担当者）	西寺関連主要遺構	文献
35	講堂	唐橋西寺町（唐橋西寺公園）	2018/10/2～11/2	市文化財（西森正晃）	講堂階段抜取溝，整地層などを確認。	27
36	講堂	唐橋西寺町（唐橋西寺公園）	2019/9/30～11/2	市文化財（西森）	講堂の礎石１基及び抜取穴４基，基壇盛土，南・東縁及び講堂東軒廊基壇盛土を確認。	本報告
37	五重塔	唐橋西寺町 10	2019/9/30～11/15	市文化財（鈴木）	壷堀地業 12 基，西寺西限内溝等を確認。	本書第Ⅴ章

文献（表１　西寺跡関係発掘調査一覧表の文献番号に対応）

1　杉山信三『史跡　西寺跡』鳥羽離宮跡調査研究所 1979年
2　杉山信三「西寺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1964年
3　杉山信三「西寺跡発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報1962』奈良国立文化財研究所 1962年
4　杉山信三「西寺跡第３次発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報1963』奈良国立文化財研究 1963年
5　杉山信三「29西寺食堂跡」『東海道幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』日本国有鉄道 1965年
6　杉山信三・井上満郎・木村捷三郎・浪貝毅「史跡西寺跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告 1972』鳥羽離宮跡調査研究所 1974年
7　浪貝毅・玉村登志夫「西寺跡発掘調査概要」『史跡　西寺跡・鳥羽離宮跡　京都市埋蔵文化財年次報告 1973－Ⅱ』京都市文化観光局文化財保護課 1975年
8　梶川敏夫「史跡 西寺跡－北僧房跡発掘調査概要－」『鳥羽離宮跡・史跡西寺跡 京都市埋蔵文化財年次報告　1974－Ⅳ』京都市文化観光局文化財保護課 1975年
9 a　長宗繋一・鈴木久男「西寺東僧房跡」『平安京跡発掘調査概報』（『京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978-Ⅱ』）（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
b　長宗繋一・鈴木久男「西寺井戸跡」同上
10 a「平安京右京九条一坊、西寺跡１」『昭和52年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2011年
b「平安京右京九条一坊、西寺跡２」同上
c「平安京右京九条一坊、西寺跡３」同上
d「平安京右京九条一坊、西寺跡４」同上
11　百瀬正恒「平安京西寺跡」『平安京跡発掘調査概要』（『京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』）京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所 1979年
12 a「平安京右京九条一坊十町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2011年
b「平安京右京九条一坊・西寺跡１」同上
c「平安京右京九条一坊、西寺跡２」同上
13　「平安京右京九条一坊十二町・西寺跡」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2012年
14 a　鈴木廣司「西寺跡発掘調査　第17次発掘調査」『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
b　堀内明博「西寺跡発掘調査　第18次発掘調査」同上
c　長宗繋一「西寺跡発掘調査　第19次発掘調査」同上
d　平尾政幸「西寺跡発掘調査　第20次発掘調査」同上
15 a「平安京右京九条一坊、西寺跡１」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2011年
b「平安京右京九条一坊、西寺跡２」同上
c「平安京右京九条一坊、西寺跡３」同上
d「平安京右京九条一坊、西寺跡４」同上
16　堀内明博「西寺跡第13次調査」『平安京跡発掘調査概報　昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
17 a　磯部勝・鈴木久男・堀内明博「平安京右京九条一坊１」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1989年
b　堀内明博「平安京右京九条一坊２」同上
18 a　菅田薫「平安京右京九条一坊１」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
b　菅田薫「平安京右京九条一坊２」同上
19　能芝妙子「平安京西寺跡・唐橋遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
20　柏田有香『平安京跡・史跡西寺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-4』）（財）京都市

埋蔵文化財研究所 2007年
21　東洋一「平安京右京九条一坊十二町・西寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014年
22　李銀眞『平安京右京九条一坊九町跡・唐橋遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-4』）（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2016年
23　近藤奈央『平安京右京九条一坊十五町・十六町跡（西寺跡）・唐橋遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016‐6』）（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2017年
24　鈴木 康高・木下保明『平安京右京九条一坊九町跡（西寺跡）・唐橋遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017‐6』）（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2017年
25　鈴木 久史『平安京右京九条一坊九町跡・西寺跡・唐橋遺跡』（『京都市内遺跡発掘調査報告平成29年度』）京都市文化市民局 2018年
26　鈴木 久史『平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡』（『京都市内遺跡発掘調査報告平成30年度』）京都市文化市民局 2019年
27　西森正晃『平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（35次）・唐橋遺跡』（『京都市内遺跡発掘調査報 告平成30年度』）京都市文化市民局 2019年

（２）周辺の調査

これまでの西寺跡における発掘調査については図６に提示し，一覧表を示した（表１）。

ここでは，コンド山として残されていた講堂跡に関わる文献，調査について述べる。講堂跡についての所見は，正徳元年（1711）に刊行された『山城名勝志』に「金堂ノ跡僅ニ田間ニ残ル，今松尾祭ノ日神供ヲ備ル所也。又講堂，塔ノ本等田畑ノ名トナル。」とあり13)，コンド山が金堂跡として認識され，附近に関連する字名が残されていたことがわかる。大正８年（1919）には先述したように梅原末治によって踏査され，「略矩形ヲナシテ東西ハ長ク，此ノ部歩測ニテ約九十尺，南北約五十尺，高サ五尺アリ。上部平坦ニシテ周圍ニ四五ノ松樹ヲ見ル。（中略）土人コレヲ金堂朝日の森ト称シテココニ西寺ノ金堂アリシト云フ。礎石ヲ見ザルモ古瓦片散在シテソノ然ルヲ思ハシム。」とあり，コンド山を金堂の址とし，その形状及び規模について述べられている14)。その後，大正10年の史蹟指定を経て，昭和10年には区画整理に伴って指定地（当時）を現在の唐橋西寺公園として公園化し，現在見られる姿となっている。

発掘調査は昭和34年から開始され，調査を主導した杉山信三によって西寺の伽藍配置の解明が進み，昭和37年（３次調査），唐橋西寺公園南端と唐橋小学校北端にて凝灰岩の切石列が確認されるに至り，東寺の伽藍配置との比較から金堂の基壇に伴うものと判断され，ここにコンド山は講堂跡であることが確定した[15]。

以後長らく，建築計画やインフラ整備など開発に伴う調査が優先されたため，公園化されていた講堂跡では発掘調査は実施されず，今回の範囲確認調査以外では，３次調査７区にて講堂と西僧房を繋ぐ講堂西軒廊推定地の調査が行われた程度である[16]。この調査で，調査区南半にて認められた僅かな地山の高まりを軒廊基壇の痕跡と捉えたため，伽藍復元図作成に当たって講堂の位置は，東寺講堂よりも約４m南に配されることとなった。この復元図を基に，昨年度35次調査を実施したところ，想定していた位置で基壇痕跡は認められず，２区拡張区北端で漸く基壇南縁を捉えることができた。その結果，講堂基壇南縁の位置は，東寺講堂のそれと正しく左右対称の位置にあることが明らかとなった。また，講堂正面階段の延石抜取溝に10世紀後半の土師器皿片とともに焼土が多く含まれ，正暦元年（990）の焼亡時に講堂も焼失した可能性を提示する成果が得られた[17]。

上記の通り，講堂について発掘調査成果からは漸く基壇位置の手懸りを得たばかりである。一方

で官寺として西寺と並行して造営された東寺の歴史や建物，宝物などを記した『東宝記』に東寺講堂指図が示されており，西寺もこれに准ずるとある[18]。これによると，桁行柱間は九間で柱間一丈三尺，妻行四間で柱間一丈三尺と記されており，桁行七間，梁行二間に四面庇が取り付く七間四面堂東西棟礎石建物であることがわかる。東寺講堂の基壇については，昭和の講堂修理の際に発掘調査が実施され，花崗岩製の現基壇化粧石のすぐ内側に凝灰岩製の基壇外装が残っており，創建期の基壇と評価されている[19]。

3．遺　構

調査区の層序は，コンド山の上下で大きく異なる。コンド山上部の標高は22.0ｍ前後で，表土以下，GL-0.2ｍでコンド山盛土最上面となり，以下，複数の盛土が認められ，-1.0ｍにて中世盛土上面，-1.25ｍにて焼瓦，焼土を多量に含む正暦元年（990）の火災時の堆積層となる。４区西端では一部断割を行い，-1.5ｍにて創建期の講堂床面を確認している。４区コンド山下部では，公園整備時の盛土直下のGL-0.4ｍで近世耕作土，-0.5ｍ（19.35ｍ）にて焼土を多量に含む火災後の整地層となる。

遺構面は，公園化される以前のコンド山盛土上面を第１面，講堂焼失後の盛土を除去した平安時代を第２面とした。表土剥ぎ後，第１面の調査，記録作業を行った後，再び重機にて第２面上面まで掘削を行い，以下手作業にて調査を進めた。調査区は基壇南縁を確認した35次２区北側に４区，東縁の手懸りを得られた３区北半を含む北西側に５区を設定した（図５）。

調査の結果，講堂身舎の柱位置を示す礎石抜取穴２基，庇部分の原位置を保った礎石１基，抜取穴２基，基壇南東縁の凝灰岩抜取溝を検出するなど，講堂の基壇及び建物規模を具体的に復元することを可能とする重要な遺構を確認した。

第１面

コンド山（図７，図版１-１・１-２）　４・５区北半の表土直下で確認した。講堂焼失後，10層以上の盛土単位が認められる。盛土内には多数の瓦が含まれており，西寺廃絶後，周辺の耕作地化に伴い支障となる瓦を講堂基壇に盛り上げたことがわかる。最上層上面にて成立する撹乱に近代の遺物が含まれていることから，昭和10年の公園開園以前のコンド山と判断できる。山上部の標高は４区で21.7～21.8ｍ，５区は21.6ｍである。

裾部は急傾斜を呈し，下場が概ね図５に示す国有地の範囲とほぼ一致しており，国有地が公園化される以前のコンド山の規模を示している。公園化に伴い裾部に盛土が行われ，現在見られる緩斜

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
平安時代	礎石３，礎石抜取穴４～７，溝８～10， 土器溜り11，基壇盛土	講堂身舎桁行礎石抜取穴， 南庇礎石及び抜取穴，基壇盛土 基壇南縁・東縁凝灰岩抜取溝， 正面中央階段延石抜取溝 講堂東軒廊基壇南縁・盛土

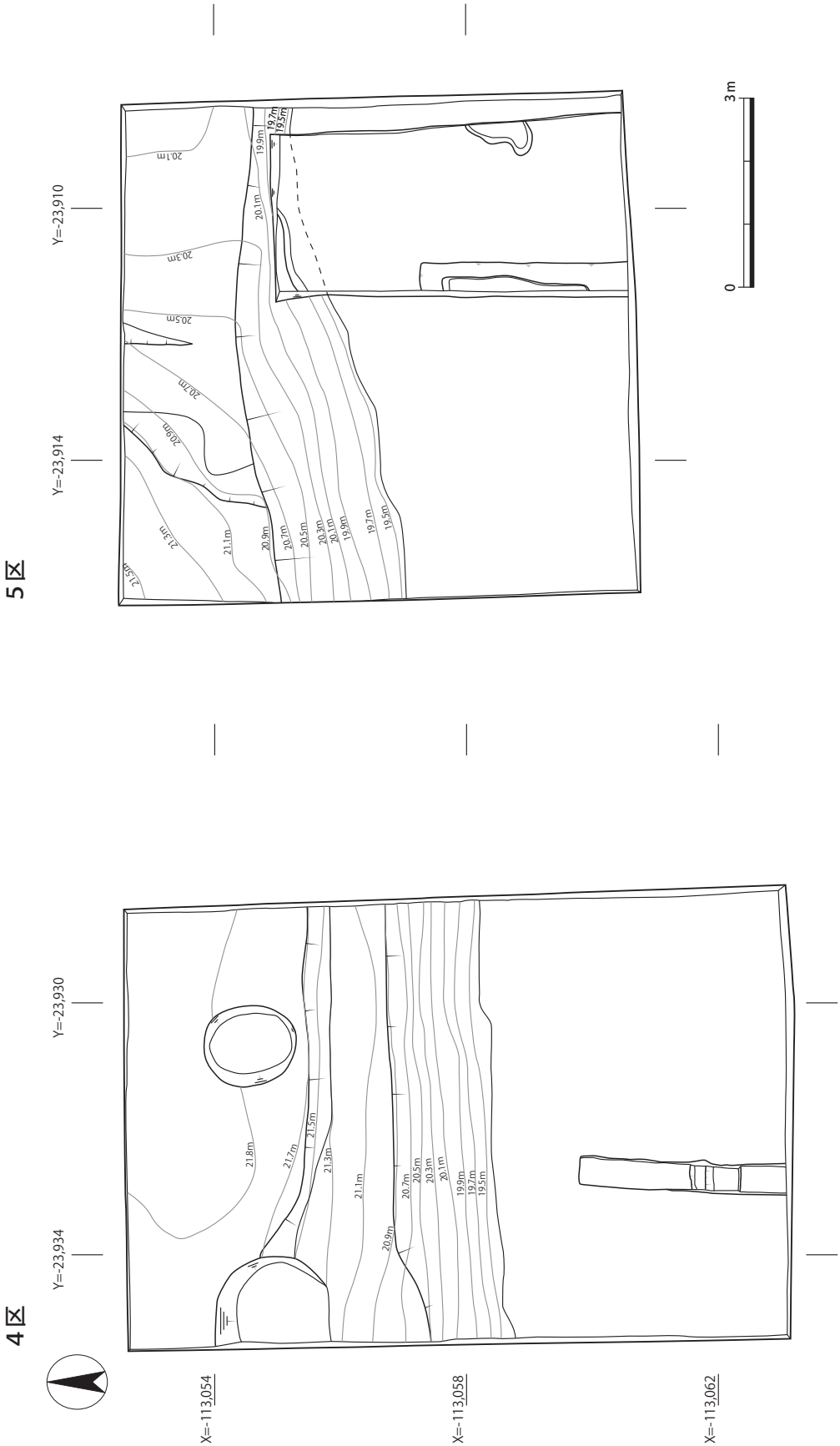
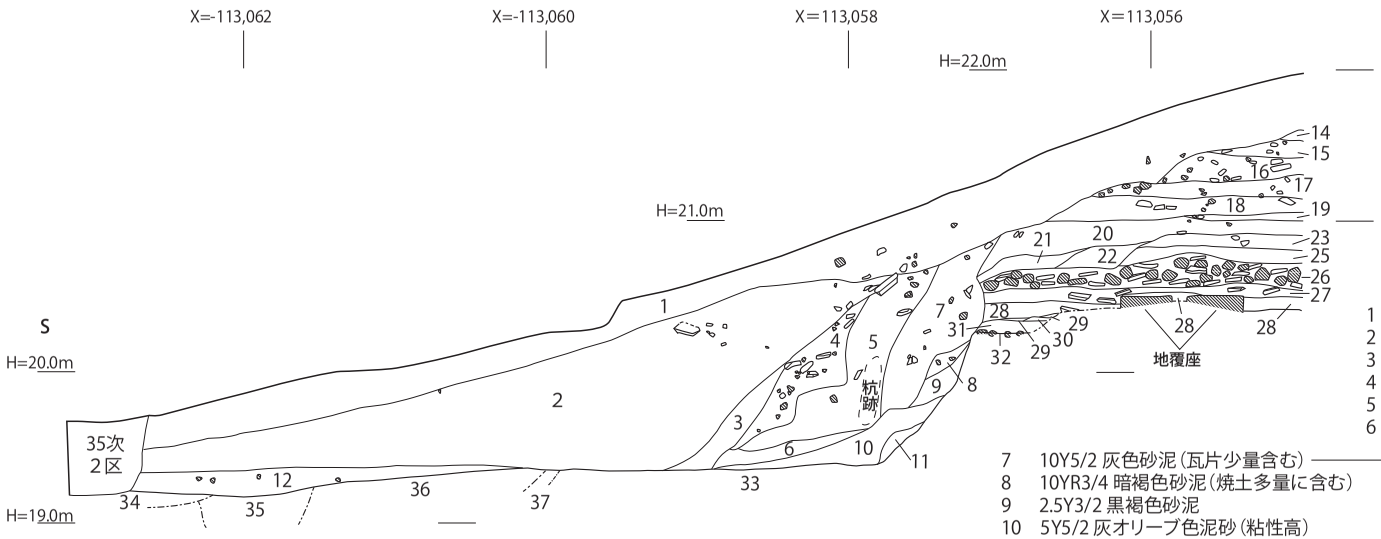
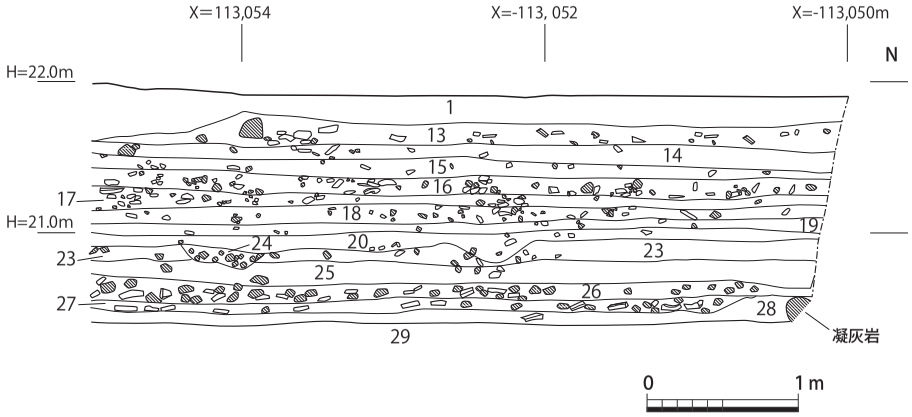


図7　第1面平面図（1：100）





1　表土
2　10YR3/1 オリーブ黒色砂泥【近代コンド山盛土】
3　10YR5/1 灰色砂泥
4　10YR4/1 褐灰色砂泥
5　2.5Y6/1 黄灰色砂泥
6　2.5Y4/1 黄灰色砂泥
【近代コンド山裾部】

7　10Y5/2 灰色砂泥（瓦片少量含む）
8　10YR3/4 暗褐色砂泥（焼土多量に含む）
9　2.5Y3/2 黒褐色砂泥
10　5Y5/2 灰オリーブ色泥砂（粘性高）
11　5Y5/1 灰オリーブ泥砂
【近世コンド山裾部】

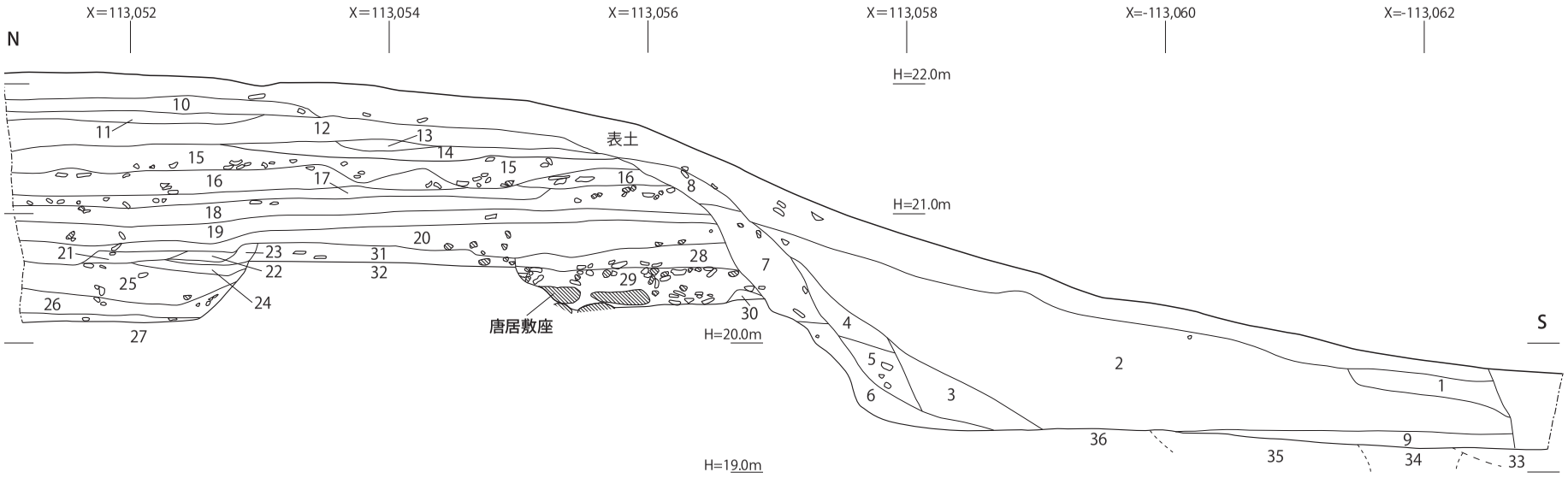
12　10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂（瓦片少量含む）【近世耕作土】

13　2.5Y6/4 にぶい黄色砂泥（瓦片多量含む）
14　2.5Y6/1 黄灰色泥砂（瓦片少量含む）
15　2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂（瓦片少量含む）
16　2.5Y6/2 灰黄色泥砂（瓦片少量含む）
17　2.5Y5/1 黄灰色泥砂（瓦片多量に含む・小礫中量含む・締り無し）
18　2.5Y5/1 黄灰色泥砂（瓦片中量に含む中量含む）
19　5Y6/1 灰色砂泥（瓦片少量含む・小礫少量含む）
20　7.5Y6/1 灰色砂泥（瓦片少量含む・小礫少量含む）
【近世コンド山盛土】

21　5Y6/2 灰オリーブ色砂泥（締り無し）
22　5Y6/3 オリーブ黄色砂泥
23　5Y6/3 オリーブ黄色砂泥（瓦片少量含む）
24　5Y6/3 オリーブ黄色泥砂（小礫小量含む・締り無し）
25　5Y6/4 オリーブ黄色砂泥（瓦片少量含む・非常に固く締まる）
【中世コンド山盛土】

26　5Y6/2 灰オリーブ色砂泥（瓦細片，小礫極めて多量に含む）【整地層】
27　5YR5/4 にぶい赤褐色砂泥（焼瓦片，焼土多量に含む）【火災堆積層上層】
28　5YR6/8 橙色砂泥（焼土・炭化物極めて多量に含む，焼瓦少量含む，締り無し）【火災堆積層下層】
29　7.5YR6/8 橙色砂泥（固く締まる）【床面被熱面】
30　10YR7/8 黄橙色土（非常に固く締まる）【床面】
31　2.5Y5/3 黄褐色砂泥（固く締まる）
32　2.5Y5/3 黄褐色砂泥（小礫多量に含む）
33　10YR5/6 黄褐色泥砂（砂礫混じり・固く締まる）【基壇盛土又は地山か】
34　5YR4/3 にぶい赤褐色泥砂（焼土多量に含む・固く締まる）【火災後整地層】
35　10YR3/1 黒褐色砂泥（凝灰岩片多量に含む・焼土含む）【溝10】【階段延石抜取溝】
36　10YR5/6 黄褐色砂泥（凝灰岩片多量に含む・焼土含む）【階段石抜取痕】
37　10YR4/2灰黄褐色泥砂【階段裏込め土】

図８　４区西壁断面図（１：50）



1 7.5YR3/1 黒褐色砂泥
2 10YR3/1 黒褐色砂泥
【近代コンド山盛土】

3 10YR5/1 灰色砂泥
4 10YR4/1 褐灰色砂泥
5 2.5Y4/1 黄灰色砂泥
6 5Y5/2 灰オリーブ色砂泥
7 10Y6/1 灰色砂泥(瓦片少量含む)
8 2.5Y6/2 灰黄色砂泥(瓦片少量含む)
【近代コンド山裾部】

9 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥(瓦片中量含む小礫少量含む)【近世耕作土】

10 2.5Y7/3 浅黄色砂泥(瓦片少量含む)
11 2.5Y7/2 灰黄色砂泥(小礫多量に含む)
12 2.5Y6/4 にぶい黄色砂泥(瓦片少量含む, 固く締まる)
13 2.5Y5/1 黄灰色砂泥(瓦片, 小礫多量に含む)
14 2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂(瓦片少量含む)
15 2.5Y5/1 黄灰色砂泥(瓦片多量に含む, 小礫中量含む, 締りなし)
16 2.5Y6/2 灰黄色泥砂(瓦片中量含む, 固く締まる)
17 10YR6/6 明黄褐色砂泥(瓦片中量含む, 礫多量に含む)
18 5Y6/1 灰色砂泥(小礫多量に含む)
19 7.5Y6/1 灰色砂泥(瓦片, 小礫少量含む)
【近世コンド山盛土】

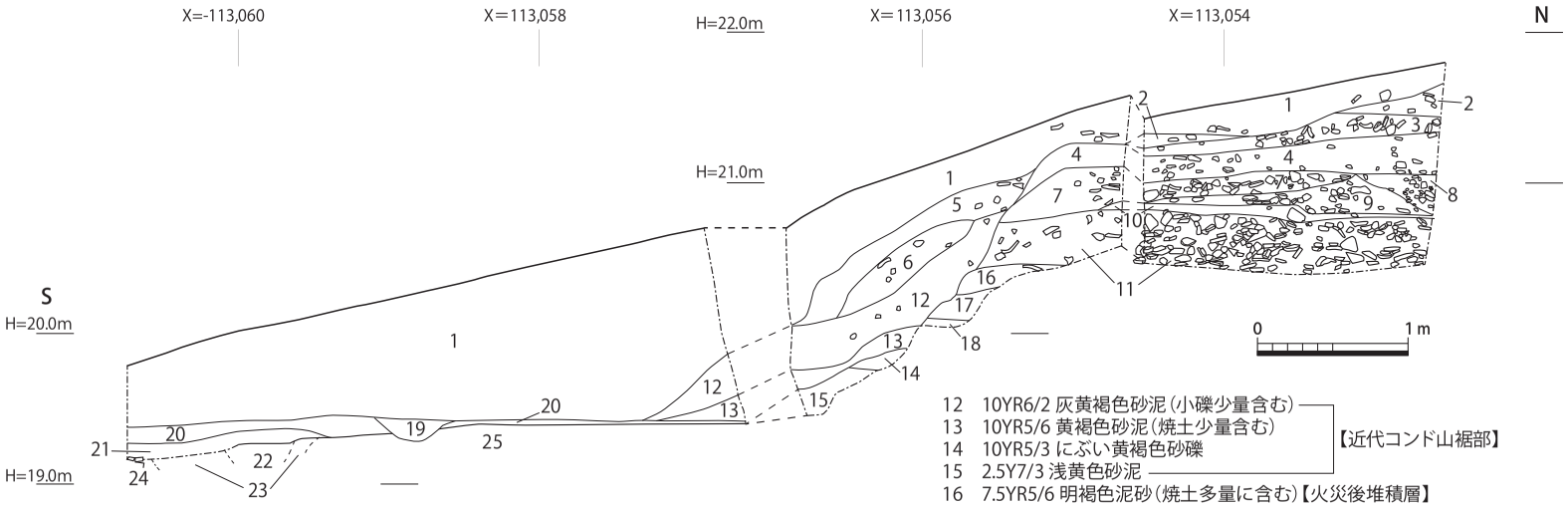
20 5Y6/3 オリーブ黄色砂泥(瓦片少量含む)【中世整地層】

21 5Y5/3 灰オリーブ色砂泥(固く締まる)
22 5Y5/2 灰オリーブ色砂泥(固く締まる)
23 5Y6/2 灰オリーブ色砂泥(小礫少量含む)
24 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
25 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥(瓦片, 小礫少量含む)
26 10YR4/2 灰黄褐色砂泥(焼瓦片, 焼土中量含む)
27 2.5Y5/3 黄褐色砂泥(焼土, 炭化物中量含む)
【礎石抜取穴６】

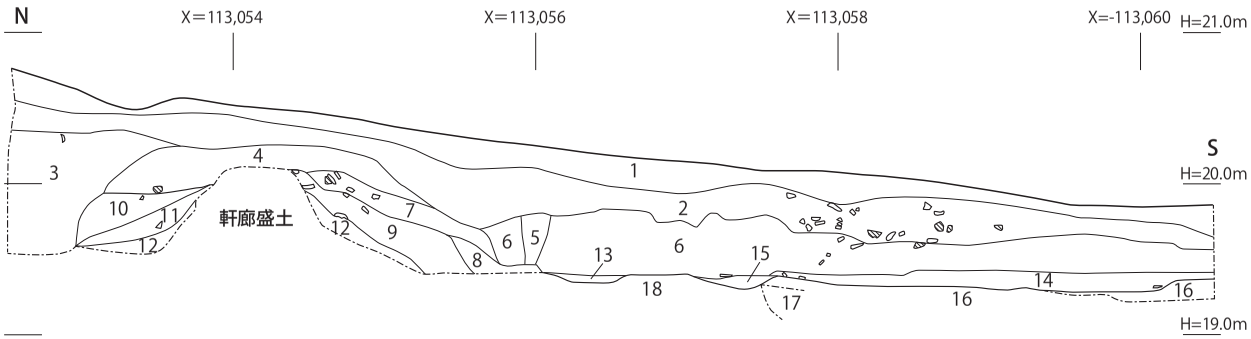
28 2.5Y5/3 黄褐色砂泥(小礫少量含む, 固く締まる)
29 2.5Y5/3 黄褐色砂泥(焼瓦片, 小礫多量に含む)
30 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥(焼土, 炭化物多量に含む)
【礎石抜取穴４】

31 2.5Y6/4 オリーブ黄色砂泥(瓦片多量に含む, 非常に固く締まる)【中世整地層】
32 5Y6/2 灰オリーブ色砂泥(瓦細片, 小礫極めて多量に含む)【整地層】
33 5YR4/3 にぶい赤褐色泥砂(焼土多量に含む, 固く締まる)【火災後整地層】
34 10YR3/1 黒褐色砂泥(凝灰岩片多量に含む, 焼土含む)【溝10】【階段延石抜取溝】
35 10YR5/6 黄褐色砂泥(凝灰岩片多量に含む, 焼土含む)【階段石抜取痕】
36 10YR5/6 黄褐色泥砂(多量の礫が混じる)【基壇盛土又は地山】

図９　４区東壁断面図（１：50）



1　表土・近現代盛土
2　2.5Y6/1 黄灰色砂泥（瓦片少量含む）
3　10YR7/6 明黄褐色砂泥（瓦片多量に含む）
4　10YR7/6 明黄褐色砂泥（瓦片多量に含む）
【近世コンド山盛土】
5　2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
6　2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥（小礫少量含む）
【近代コンド山盛土】
7　10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥（瓦片多量に含む）
8　10YR7/3 にぶい黄橙色砂礫
9　10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥（焼土・瓦片少量含む）
10　10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥（瓦片極めて多量に含む）
11　10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥（焼土多量に含む）
【近世コンド山盛土】
12　10YR6/2 灰黄褐色砂泥（小礫少量含む）
13　10YR5/6 黄褐色砂泥（焼土少量含む）
14　10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫
15　2.5Y7/3 浅黄色砂泥
【近代コンド山裾部】
16　7.5YR5/6 明褐色泥砂（焼土多量に含む）【火災後堆積層】
17　10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥（焼土・瓦片少量含む）【礎石抜取穴７】
18　10YR5/3 にぶい黄褐色砂レキ【基壇盛土】
19　10YR5/2 灰黄褐色泥砂（瓦片少量含む）【近世耕作溝】
20　10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂（瓦片，小礫含む）【近世耕作溝】
21　10YR5/2 灰黄褐色泥砂（瓦片，小礫，凝灰岩片含む）【火災後整地層】
22　10YR5/2 灰黄褐色泥砂（凝灰岩片多量に含む）【溝８】【基壇延石抜取溝】
23　10YR6/3 にぶい黄橙色泥砂（凝灰岩片少量含む）【凝灰岩据え付け痕】
24　10YR6/2 灰黄褐色泥砂（瓦片多量に含む）【瓦溜りか】
25　2.5Y7/6 明黄褐色シルト【地山か】



1　表土
2　10Y3/1 オリーブ黒色砂泥
（瓦片，小礫中量含む）【近現代コンド山盛土】
3　7.5Y4/1 灰色泥土【近現代コンド山盛土】
4　7.5Y6/1 灰色砂泥（瓦片少量含む）【近現代コンド山盛土】
5　杭跡
6　7.5Y3/1 オリーブ黒色砂泥（小礫，瓦片少量含む）【近代耕作土】
7　5Y3/1 オリーブ黒色砂泥（瓦片少量含む）
8　7.5Y6/1 灰色砂泥
9　5Y6/2 灰オリーブ色砂泥（瓦片中量含む）
10　5Y6/2 灰オリーブ色泥砂
11　5Y6/1 灰色泥砂
12　5Y7/2 灰白色砂泥（小礫少量含む）
【近世コンド山裾部】
13　10YR5/2 灰黄色褐色泥砂【近世耕作溝】
14　10YR7/6 黄橙色泥砂【近世耕作土】
15　10YR5/2 灰黄色褐色泥砂【近世耕作溝】
16　10YR5/2 灰黄褐色泥砂（瓦片小礫少量含む）【整地層】
17　2.5Y3/2 黒褐色粗砂礫混じり【溝９】【軒廊南縁基壇抜取溝】
18　2.5Y7/6 明黄褐色シルト【地山又は基壇盛土】

図10　5区調査区断面図（1：50）

面のコンド山が成立したことが判明した。

第２面

講堂（図８～14，巻頭図版１・２，図版１～４）

基壇（図８・９・11・12）　４・５区北半にて版築で構築された基壇盛土を確認した。裾部は後世の耕作によって側柱列附近まで削平を受けるものの，基壇上面は廃絶後の盛土によって保全されており，４区では創建当初の盛土がほぼ完全な状態で残されていた。

下層の断割調査は実施していないが，35次調査及び断面観察から基壇構築方法については，掘込地業は行わず，地山のにぶい黄褐色砂泥や砂礫に直接版築を施していると想定している。版築は全体で20層前後を数え，大きく上下２つの単位に分かれる（図12）。下位の約40～50㎝分は，礫をほとんど含まない均質な黄褐色シルトを主体とし，単位も２～10㎝と薄い。上位は礫や砂粒を多く含む土で構築され，単位も10～20㎝と厚く，厚みも一定ではない。これは，礎石抜取穴７の断面観察により，根固め石最下部が下位版築の最上面に接していることが確認できることから，礎石を通して建物重量の負荷が直接かかる盛土下層は丁寧に版築を施す必要があったためと考えられる。

なお，４区では下層最上層を構築後，幅1.2ｍ，深さ0.2ｍの凝灰岩屑を多量に含んだ落ち込みが３基認められるが，その間隔は不規則であり，落ち込みの性格は不明である。

盛土及び床面については，造り替えや修理等の痕跡は認められず，創建期のものと判断できる。

基壇床面（図８，巻頭図版２-１）　４区西壁北半にて実施した断割調査にて，基壇盛土最上層は，叩き締められた均質な黄橙色土が厚さ２～３㎝でほぼ全面に広がることを確認し，床面は土間叩きであることを確認した。床面上面の標高は20.45ｍで35次２区で確認した創建期整地層上面の標高は19.1ｍであることから，基壇高は1.35ｍに復元できる。

床面は赤変しており，直上に焼土，焼壁土及び炭化材が堆積し，その上には焼瓦が厚く堆積することから講堂が焼失したことを示している。

基壇外装（図10・11，図版４-１）　後世の耕作に伴い大きく削平を受け，残存状況は芳しくないが，５区にて基壇南縁及び東縁を示す凝灰岩抜取溝（溝８）を検出したことから，壇上積基壇であったことがわかる。溝８は５区西側から続く東西溝で，調査区中央で北に直角に折れ，2.3ｍ先で再び直角に折れ曲がり，東へと延びる。調査区西から続く東西溝（溝８）が講堂基壇南縁，南北溝が東縁，再び東へと延びる東西溝（溝９）は，講堂東軒廊南縁を示す。検出に留めたため，深さは不明であるが，幅は0.4～1.0ｍ以上を測る。埋土には凝灰岩片を多量に含む。

なお，基壇端を示す延石内面の位置となる溝５内側肩口の座標は，講堂基壇南縁がX=-113,059.8ｍ，東縁がY=-23,912.07ｍ，東軒廊南縁がX=-113,057.5ｍ附近である。

階段　４区南半にて正面階段の凝灰岩抜取溝（溝10）及び階段石抜取痕を確認した。東西方向の溝10は，35次調査２区の溝８と同一の溝で，幅0.6～0.8ｍ，長さ７ｍ以上を測り，さらに調査区外に延びる。多量の凝灰岩片とともに焼土を含んでいること，焼土を含む整地層に南肩が覆わ

図11　第２面平面図（1：100）

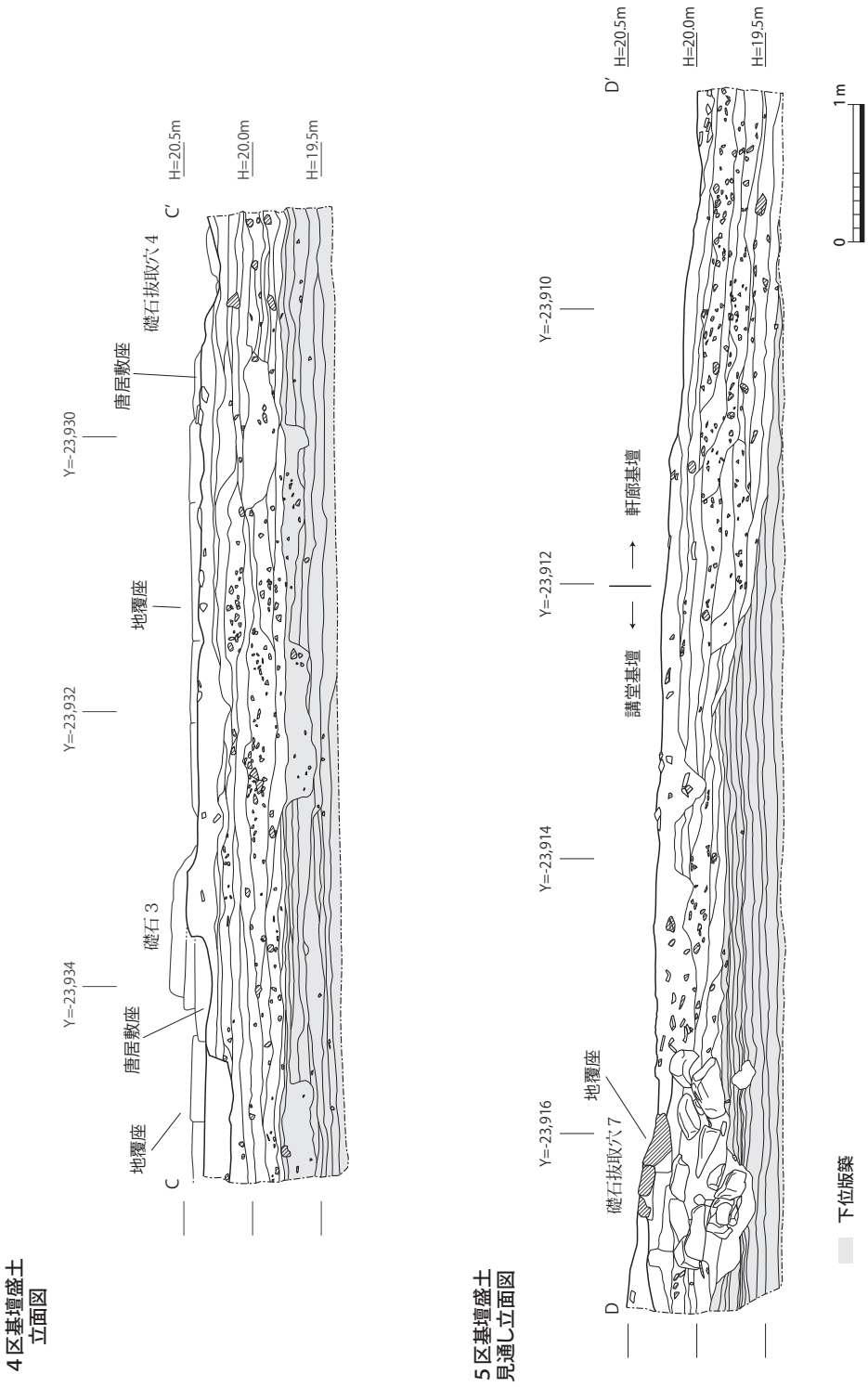


図12　4・5区基壇盛土断面図（1：50）

れることから，正暦元年（990）の火災後に凝灰岩が抜き取られたことが改めて裏付けられた。

溝10内側の肩口は，X=-113,061.8m附近であり，階段の出は1.8m（6尺）である。階段の幅は7m以上あり，中央間とその東西の柱間3間以上となる。

建物（図11・13，巻頭図版１・２-１）　４区にて身舎桁行入側柱筋の柱位置を示す礎石抜取穴５・６，南庇側柱筋の礎石３，抜取穴４，５区にて南東隅の抜取穴７を確認した。桁行の柱間は4.2ｍ（15尺），庇の出3.9ｍ（13尺）を測る。

礎石抜取穴５（図９・13，図版３-2）　４区北西隅に位置する身舎桁行入側柱筋の礎石を抜き取った穴で，直径1.8ｍの円形を呈し，深さ0.3ｍを測る。埋土には焼瓦，焼土，炭化物を多量に含み，凝灰岩片も一定量認められた。被熱痕が残る面を持った花崗岩片が混じることから，礎石は花崗岩であったことがわかる。底部中央には固く締まった黄褐色シルトが広がり，縁辺部には径25～40㎝の人頭大の河原石がシルトに埋め込まれるように固定され，礎石の根固めとしている。

遺物は瓦のほか，土師器皿，凝灰岩片，焼壁土などが出土している。

礎石抜取穴６（図９，図版３-2）　４区北東隅に位置し，抜取穴５とともに身舎桁行入側柱筋で正面中央間を構成する。直径1.8ｍ以上の円形を呈し，さらに調査区外に広がる。掘方の成立面は中世のコンド山盛土上面で，深さ0.6ｍを測る。埋土には焼瓦，焼土，炭化物を含む。抜取穴５と異なり根固め石は認められなかった。

遺物は瓦のほか，土師器皿，凝灰岩片，釘などが出土している。

礎石３（図13，巻頭図版１・２，図版３-1）　４区中央西端にある花崗岩製の礎石である。南庇桁行側柱筋にあたる。規模は一辺1.2ｍで多角形を呈す。自然石の上面を平坦にし，直径1.0ｍの円形に柱座を造り出し，中央やや北寄りに直径約25㎝の出枘が僅かに残る。礎石上面は南西がやや高く北東に傾斜し，標高は南西隅で20.61ｍ，北東隅で20.58ｍとなり，約３㎝の高低差がある。礎石の裾部には僅かに炭化痕跡が認められ，柱座表面も熱を受けてかせていることから，被熱痕と捉えられる。したがって，創建期の礎石が正暦元年の火災によって被災したものと判断した。

礎石抜取穴４（図13，図版２-2）　４区中央東端に位置する。礎石３とともに南庇桁行側柱筋の中央間を構成する。直径２ｍ以上の不整形を呈し，さらに調査区外に広がる。南東側に掘方が広がり，礎石を抜き取った方向を示している。抜取穴６と同様に中世コンド山盛土上面を成立面としており，深さ0.45ｍを測る。被熱して割れた花崗岩の残欠があり，礎石は花崗岩であったことがわかる。底部中央には固く締まった黄褐色シルトが広がり，周囲には径40～50㎝の河原石を巻くようにはめ込み，根固めとしている。

遺物は，焼瓦や土師器皿，須恵器坏，灰釉陶器碗，焼壁土，銅製品のほか，13～14世紀の瓦器碗が出土している。

礎石抜取穴７（図11・12，図版４）　５区中央西端に位置する。南東隅の庇にあたる。直径1.5ｍ以上の円形で，南肩は後世の耕作によって削平を受け残っていない。底部中央は黄褐色シルトとなり，縁辺部に径50㎝前後の河原石をはめ込み根固めとしている。

遺物は，凝灰岩片のほか，焼瓦や軒平瓦が出土している。

唐居敷座（図13，巻頭図版２-1，図版3-3）　４区南庇側柱筋の礎石３の周囲と礎石抜取穴４の底部周縁には，東西に凝灰岩製の切石が残っていた。この２基は講堂正面中央の柱間を構成することと，基壇南面には幅３間以上の階段が取り付き出入口として門扉が存在することから，門扉の回転

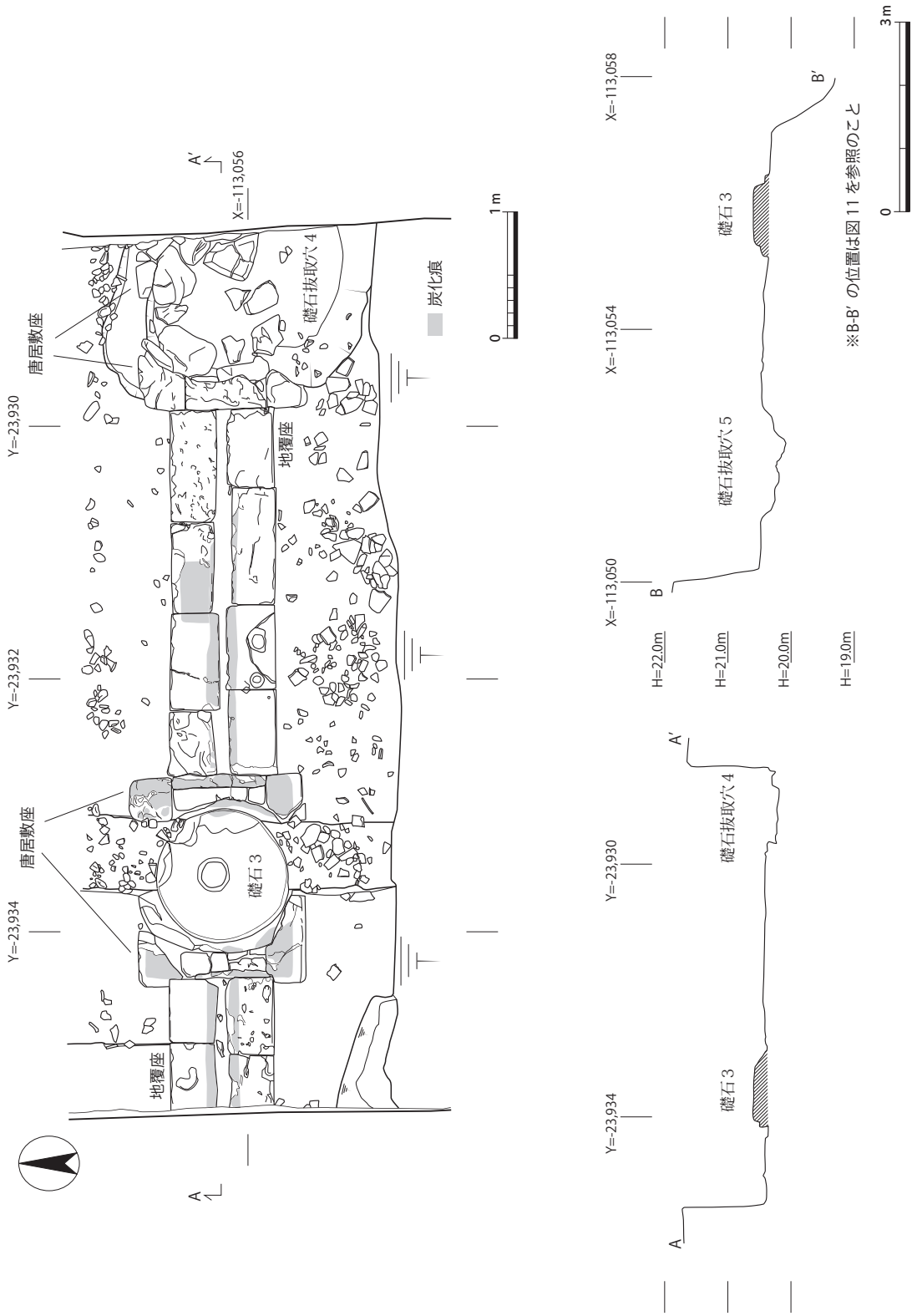


図13　４区遺構実測図（１：50，１：100）

軸を受ける唐居敷の座と判断した[20]。唐居敷座は礎石３及び礎石抜取穴４の残存状況から，礎石の周囲は全周しないことがわかる。

礎石３西側の座は，凝灰岩３石から成り，南北135㎝，東西70㎝以上を測る。中央には南北67

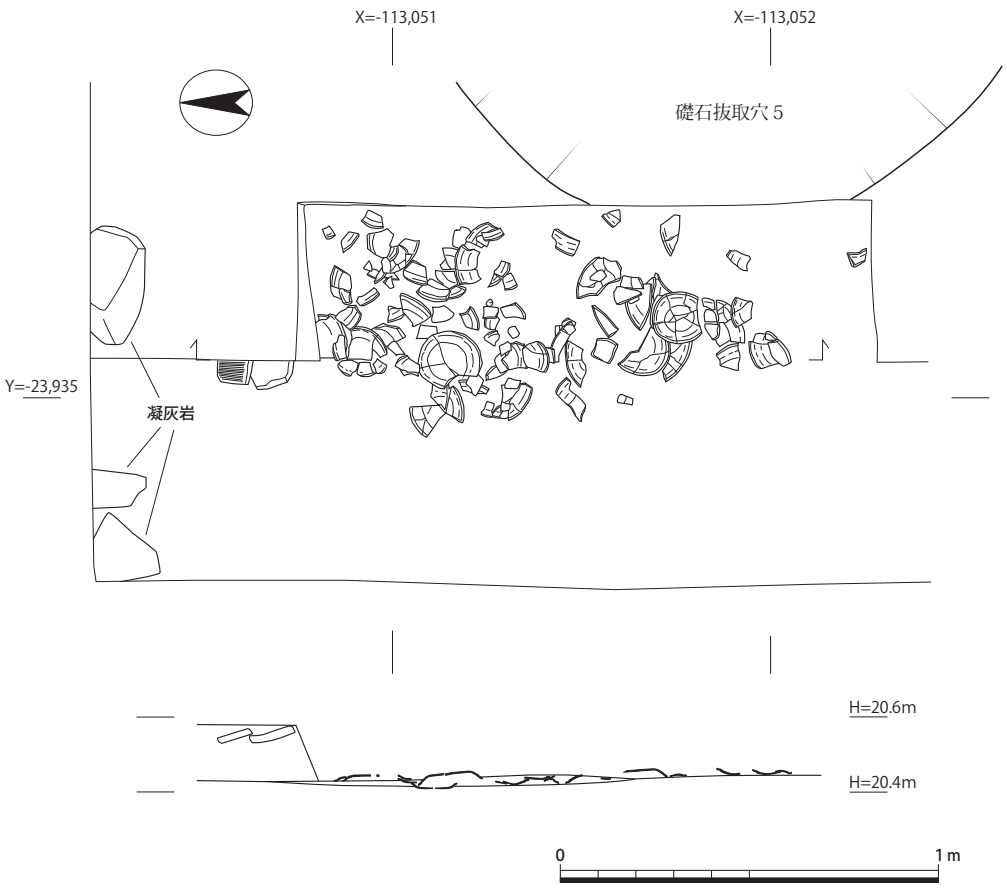


図14　土器溜り11実測図（１：20）

㎝，東西15～20㎝，深さ３㎝の抉りを設ける。東側の座も３石で構成され，南北138㎝，東西40㎝以上を測る。中央には南北75㎝，東西８～25㎝，深さ３㎝の抉りを設ける。抉りは門扉の軸を受ける唐居敷のズレ防止のために設けられた可能性が高い[21)]。

いずれも礎石と接する部分は形状に合わせて加工され，ほぼ隙間の無いように組み合わされる。後述する地覆座との組み合わせでは，東側の座では接するだけであるが，西側の座で唐居敷座側に６㎝の抉りを設けている。

礎石抜取穴４西側の座は，被熱及び抜取りによって破損している部分があるが，３石から成り，南北130㎝，東西20～45㎝，厚さ10㎝を測る。礎石３の座と同様に，中央の石材に南北65㎝でやや抉りを設けた痕跡が認められるが，表面の摩耗が著しく不明瞭である。東側の座は１石のみが残り，南北30㎝，東西45㎝，厚さ10㎝を測る。いずれも礎石と接する部分は形状に合わせ加工されている。

礎石３の唐居敷座上面には，火災を受けて焼失した唐居敷の炭化痕が明瞭に残されており，南北120～130㎝，東西45㎝前後の長方形に復元できる。

なお，唐居敷座上面の標高は20.42ｍである。

地覆座（図13，巻頭図版１，図版3-1）　４区礎石３西側と礎石３，礎石抜取穴４の間，５区礎石抜取穴７北側に凝灰岩切石２列からなる地覆座を確認した。全容が把握できる礎石３と抜取穴

４の間では，双方の唐居敷座に接し，全長287㎝，幅82～84㎝を測る。１列は４石からなり，長さ50～92㎝，幅35～42㎝の石材を用いている。石材の形状が異なるため，２列の中央には６～15㎝の隙間があり，地覆座外側の面を揃えている。

地覆座中央には，東西方向に幅27㎝前後の炭化痕が明瞭に残されており，蹴放があったと考えられる[22]。また，柱間中央に位置する地覆座北側に45×24㎝の炭化痕が残されており，門扉の開閉に伴う木部の存在が想定できる。

なお，地覆座上面の標高は20.46ｍで，唐居敷座上面よりも４㎝高い。

土器溜り11（図14，巻頭図版2-2，図版3-4）　４区北西隅の礎石抜取穴５西側にて確認した南北1.3ｍ以上，東西0.6ｍ以上の土器溜りである。赤変した床面の直上に10世紀後半（Ⅲ期中段階）に属する土師器皿がまとまって出土しており，完形に復元できるものも多い。土師器皿は全体が黒色化しており，被熱を受けたものと判断できる。土器溜りの約１ｍ北側の調査区北壁沿いには凝灰岩の切石が点在しており，身舎中央附近に該当することを考え合わせると須弥壇を構成していた石材と考えられ，土師器皿は須弥壇に灯明皿として供えられていたものが焼失時に散乱したものと捉えられる。

講堂東軒廊（図10～12，図版４）

基壇（図12）　５区東半で確認した。後世の耕作に伴い大きく削平を受け，調査区東端では上端の幅は約40㎝しか残っていなかった。耕作に伴って裾部を削平され，急傾斜となったコンド山に上がるために通路として僅かに残されたものと考えられる。

基壇は，厚さ８～15㎝の礫を多く含む盛土で構築されている。盛土に凝灰岩粉を多量に含むことから，講堂基壇盛土構築後，外装作業を実施する段階で軒廊の盛土を行っていることがわかる。基壇構築にあたっては，既に存在した講堂基壇盛土に向かって土を充てるように盛土を行っており，版築されたものではない。

基壇の上面の標高は20.0～20.2ｍで，講堂に向かって緩やかに傾斜することから，講堂との取り付きは階段ではなく，登り廊下であったことがわかる。

基壇外装（図11）　講堂基壇南東縁の凝灰岩抜取溝である溝８と接続する東西溝（溝９）を確認

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代	土師器，須恵器，黒色土器，緑釉陶器，灰釉陶器，輸入陶磁器，瓦類，焼壁土，石製品，金属製品		軒丸瓦８点，軒平瓦10点		
鎌倉時代 室町時代	土師器，焼締陶器，瓦器，輸入陶磁器，国産施釉陶器				
江戸時代	焼締陶器，国産施釉陶器，輸入陶磁器，金属製品				
合　計		18箱	18点（２箱）	０箱	０箱

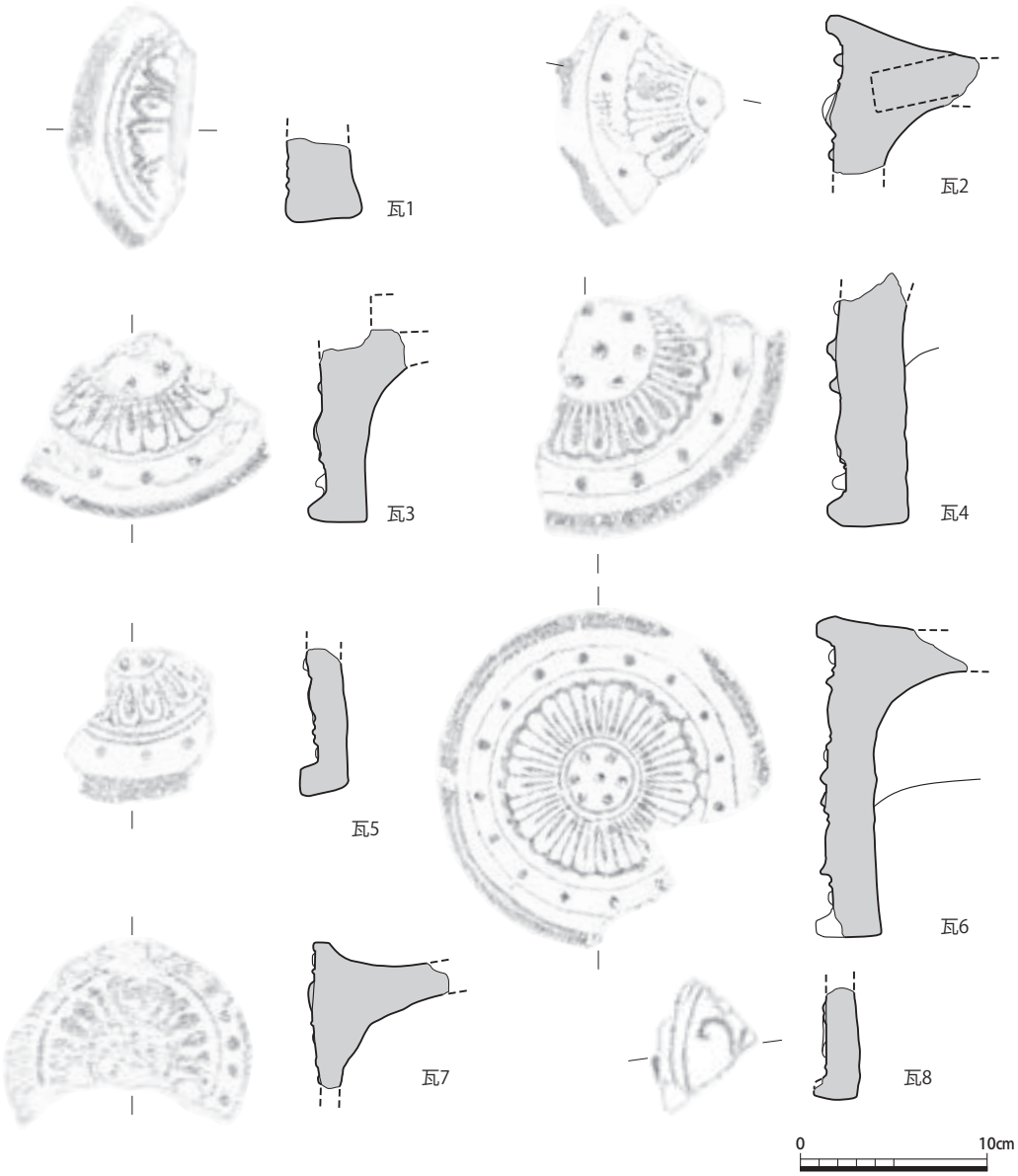


図15　出土軒丸瓦実測図及び拓影（1：4）

した。講堂梁行の南端の柱間に取り付く軒廊南縁に伴う溝で，35次3区溝5にあたり，さらに調査区外に続く。溝8と異なり埋土には凝灰岩粉は少ないため，外装の種類は断定できないが，一定の基壇高もあり講堂と同様の壇上積基壇と想定しておく。

4．遺　物

今回の調査では，コンテナ18箱の遺物が出土している。遺物の種類には，土師器，須恵器，黒色土器のほかに緑釉陶器，灰釉陶器などの施釉陶器や焼締陶器，磁器，輸入陶磁器，石製品，鉄製品，土製品，瓦が含まれている。特に，コンド山盛土から多量の瓦や講堂床面直上に焼失時に一括廃棄された土師器皿がまとまって出土している。ここでは軒瓦に絞って報告し，掲載していない遺物は来年度の総括報告書にて掲載する予定である。なお，掘削中に出土した瓦の細片は，埋め戻し

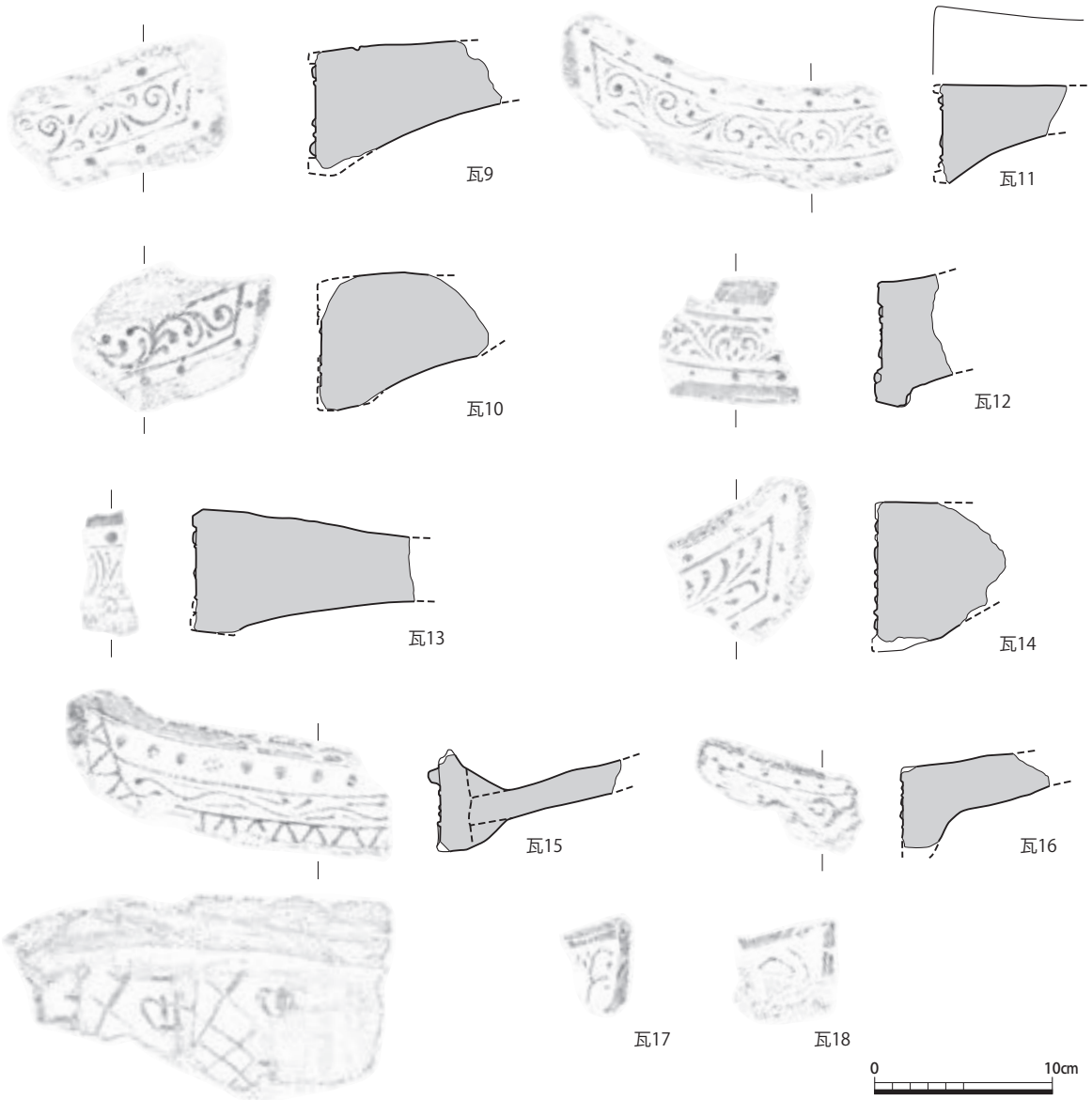


図16　出土軒平瓦実測図及び拓影（1：4）

の際，遺構面保護のための真砂土上面に散布し現地保存を行っている。

瓦

瓦では，軒丸瓦，軒平瓦，丸瓦，平瓦，塼，鬼瓦が出土している。緑釉瓦は軒平瓦（瓦10）が１点出土した以外は細片が数点出土したのみである。瓦は多数出土しているが，周辺の耕作地化に伴ってコンド山に積み上げられたものであり，講堂で使用した瓦を特定することは困難である。

なお，掲載した瓦ついては，観察表（表４）を附したので参照されたい。

軒丸瓦（図15）　軒丸瓦は８種類が認められる。平安時代前期に属するものが大半を占める。４区礎石抜取穴４から出土した瓦５以外は，全てコンド山盛土から出土している。瓦１は奈良時代に属するもので，旧都から搬入された再利用瓦である。文様は複弁蓮華文である。瓦２～６は平安時代前期に属するものである。いずれも文様は複弁蓮華文で，瓦４を除き圏線を持つ中房を持つ。瓦

表４　出土瓦観察表

番号	種類	時　　代	文様の特徴	技法の特徴	備　考	出土遺構
1	軒丸瓦	奈良時代	複弁蓮華文。花弁は短く，「Y」形の間弁を配す。外区に２重の圏線が巡る。	瓦当貼り付け。胎土は少量の砂粒を含み，焼成は軟質で，色調は黄色を呈す。	旧都からの再利用瓦	５区コンド山盛土
2		平安時代前期	複弁蓮華文。中房は僅かに盛り上がる。花弁は子葉が盛り上がり，輪郭線が間弁と接す。外区には珠文が巡り「寺」を配す。周縁との境に段があり，周縁内側が傾斜する。	瓦当貼り付け。瓦当部凸面から丸瓦部凸面にかけてナデ，瓦当裏面ナデ。胎土は少量の砂粒を含み，焼成は軟質で，色調は灰白色を呈す。		５区コンド山盛土
3			複弁蓮華文。中房は平坦で蓮子を配す。花弁・間弁とも盛り上がり外区には珠文が巡る。周縁との境に段がある。周縁内側が傾斜する。	瓦当貼り付け。瓦当側縁に下半ナデと凹みがあり，瓦当裏面接合部に向かってナデ。胎土は少量の砂粒を含み焼成は硬質で，色調は灰色と裏面が橙色を呈す。	４との同笵の可能性あり。瓦当面の磨耗及び花弁の盛り上がりの相違から，別笵と認識。	５区コンド山盛土
4			複弁八葉蓮華文。中房は大きく平坦で，蓮子は１＋６。花弁・間弁ともに盛り上がり，外区には珠文が巡る。周辺との境に段があり，周縁内側が傾斜する。	瓦当貼り付け。あらかじめ丸瓦接合位置に溝を穿ち，丸瓦接合後に裏面から補足粘土を加える。瓦当裏面は不定方向のナデ，瓦当側面はナデ。胎土は多量の砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は黒褐色を呈す。		４区コンド山盛土
5			複弁蓮華文。中房は僅かに盛り上がり，蓮子を配す。花弁は子葉が僅かに盛り上がる。圏線は２重に巡り外区には珠文が巡る。	瓦当貼り付け。胎土は砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は褐色を呈す。	吉志部瓦窯産	４区礎石抜取穴４
6			複弁八葉蓮華文。中房は凸型で，珠文は１＋６。花弁は細弁で輪郭線と間弁が接する。外区には圏線と珠文が巡り，周縁との境に段がある。周縁内側が傾斜する。	瓦当貼り付け。瓦当部から丸瓦部凸面にかけてケズリ，瓦当側面下半ナデ。瓦当裏面から丸瓦部凹面にかけてナデ。胎土は多量の砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は黒褐色を呈す。		５区コンド山盛土
7		平安時代中期	複弁八葉蓮華文。中房は平坦で蓮子を配す。花弁・間弁ともに盛り上がり，外区には圏線と珠文が巡る。	瓦当部から丸瓦部凸面にかけてナデ，瓦当裏面は補足粘土を加えナデ。丸瓦部凹面は布目を残す。胎土は多量の砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は灰色を呈す。		５区コンド山盛土
8		平安時代後期	先端が肥大した唐草文を配し外区には圏線が巡る。	瓦当側面と裏面はナデ。胎土は少量の砂粒を含み焼成は硬質で，色調は灰色を呈す。		４区コンド山盛土
9	軒平瓦	平安時代前期	唐草文。唐草が外向きに展開し，主葉の各単位が独立する。主葉と支葉は大きく巻き込む。外区には珠文が巡る。	曲線顎。凹面横ナデ。顎部横ナデ，裏面から平瓦部凸面にかけて縦ケズリ，側面ケズリ。胎土は多量の砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は赤褐色を呈す。	2次焼成を受ける。	４区コンド山盛土
10			唐草文。唐草が外側に向かって展開する。主葉は連続し緩やかに反転。支葉の先端が水滴状を呈す。外区には珠文が巡る。	曲線顎。平瓦部凹面布目。顎部・平瓦凸面がナデ。胎土は少量の砂粒を含み，焼成は硬質。釉薬が施されている。		５区コンド山盛土
11			均整唐草文。中心飾りは三葉と左右から上向きの唐草が派生する。唐草は外側に向かって展開する。主葉は各単位が独立し，先端が巻き込む。一部の支葉の先端が「Y」形を呈す。外区には珠文が巡る。	曲線顎。平瓦部凹面ナデ，側面付近のみ布目。顎部から平瓦部にかけてナデ，側面ケズリ。胎土は多量の砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は黒褐色を呈す。		５区コンド山盛土
12			均整唐草文。文様構成は３と同様。中心飾りの三葉の上部に「西」を追刻する。	曲線顎。瓦当部凹面横ナデ，顎部から裏面ヨコナデ，平瓦部凸面縦ケズリ。胎土は砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は黒褐色を呈す。		５区礎石抜取穴７
13			唐草文。唐草が外側に向かって展開する。外区は珠文が巡る。	曲線顎。瓦当部凹面から平瓦凹面にかけて横ナデ，平瓦部凹面布目。裏面横ナデ，平瓦部凸面縦ケズリ。胎土は砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は灰色を呈す。		５区コンド山盛土
14			唐草文。唐草が外側に向かって展開する。唐草は独立し直線的で先端が僅かに巻き込む。外区には珠文が巡る。	瓦当部凹面横ナデ，顎部横ナデ，側面ケズリ。胎土は多量の砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は灰色を呈す。		５区コンド山盛土
15		平安時代中期	偏向唐草文。主葉は直線的で連続し，支葉は独立するものと主葉から派生するものがある。外区の上区は珠文，下・脇区には鋸歯文が巡る。なお，珠文は内区より高い。	曲線顎。瓦当貼り付け後に上下，左右から補足粘土を加えている。凹面は布目，側面と瓦当付近のみナデ，顎部から裏面にかけて横ナデ。平瓦部凸面には「西寺」と斜格子叩き痕。胎土は砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は淡黄色を呈す。	北部九州産	５区コンド山盛土
16			唐草文。唐草の先端が巻き込む。外区には珠文が巡る。摩滅が著しい。	胎土は砂粒を含み，焼成は軟質で色調は灰白色を呈す。		５区コンド山盛土
17		平安時代後期	唐草文。唐草が外側に向かって展開する。唐草の先端が周縁に接す。	凹面布目。顎部，裏面横ナデ，平瓦部凸面糸切り痕。側面ナデ。胎土は少量の砂粒を含み，焼成は硬質で色調は灰色を呈す。		４区コンド山盛土
18			花文。	瓦当部凹面ケズリ，平瓦部凹面ナデ，側面ケズリ。胎土は少量の砂粒を含み，焼成は軟質で色調は灰白色を呈す。		５区コンド山盛土

２～４は花弁が大きく盛り上がる。瓦２は外区に「寺」の銘がある。吉志部瓦窯産の瓦５以外は，西寺で主体的に用いられた瓦である。瓦７は平安時代中期に属する複弁八葉蓮華文の文様を持つ。瓦８は平安時代後期に属するもので，先端が肥大した唐草文が配され，外区には圏線が巡る。

軒平瓦（図16）　軒平瓦は10種類が認められる。平安時代前期に属するものが多く（瓦9～14），中期（瓦15・16），後期（17・18）のものは少ない。５区礎石抜取穴７から出土した瓦12を除き，コンド山盛土から出土したものである。瓦９～14の文様は中心から外側に向かって展開する均整唐草文で，外区に珠文を配す。瓦９は二次焼成を受け赤く変色している。瓦10は緑釉瓦である。瓦11の中心飾りは上向きの三葉である。瓦12は中心飾りに「西」の銘を追刻する。瓦14は唐草が直線的で，先端で僅かに巻き込む。瓦９・11・12は西寺で主体的に用いられた瓦で，顎面の明瞭な曲線顎である。瓦15は偏行唐草文で主葉は直線的で連続し，外区の脇から下部にかけては鋸歯文が巡る。平瓦部凸面には「西寺」銘と斜格子叩きを施す。北部九州産。なお，今回の調査では，斜格子叩きの平瓦が多数出しているが，二次焼成を受けたものは認められず，使用された堂舎は特定できないものの，正暦元年（990）の焼亡後の再建に伴い，使用された瓦と捉えられる。

５．まとめ

今回の調査では，西寺廃絶後のコンド山盛土によって，講堂基壇が極めて良好に残っていることが明らかとなった。裾部は後世の削平を受けているものの，床面は正暦元年の焼亡当時のままである。礎石３は原位置を保ち，柱位置も特定できることから，講堂の規模を復元するにあたり，極めて有益な情報を得ることができた。詳細な分析は総括報告書で述べるとして，ここでは調査成果から明らかとなったことについて説明を行う。

（１）講堂について

基壇盛土　基壇については，５区や35次１区にて地山を確認していることから，掘込地業は行っていないと考えられ，地山に直接版築を施していると想定している。版築は大きく上下２つの単位に分かれ，下位の約40～50㎝分は，礫をほとんど含まない均質な黄褐色シルトを主体とし，単位も２～10㎝と薄いことに対し，上位は礫や砂粒を多く含む土で構築され，単位も10～20㎝と厚く，厚みも一定ではない。これは，礎石抜取穴７で確認した下位版築の最上面に礎石根固め石が置かれることに密接に関わっており，建物の負荷が直接かかる盛土下層は丁寧に版築を施す必要があったためと考えられる。

以上のことを鑑みると，基壇版築と礎石据え付けの工程を復元すると，下層の版築を構築後，上面にドーナツ状に根固め石を据付け，根固め石を固く締まった黄褐色シルトで搗き固めて固定し，根固め石に向かって上層の版築を行いつつ礎石を据えていたことがわかる。このこととは，礎石には据付のための掘方はなく，礎石周りの版築は円丘状を呈することから傍証される。この円丘状の工法は，豊楽殿でも確認でき，奈良時代後半から平安時代前半にかけての主殿クラスの礎石据え付け工法として主流であった可能性も考えられよう。

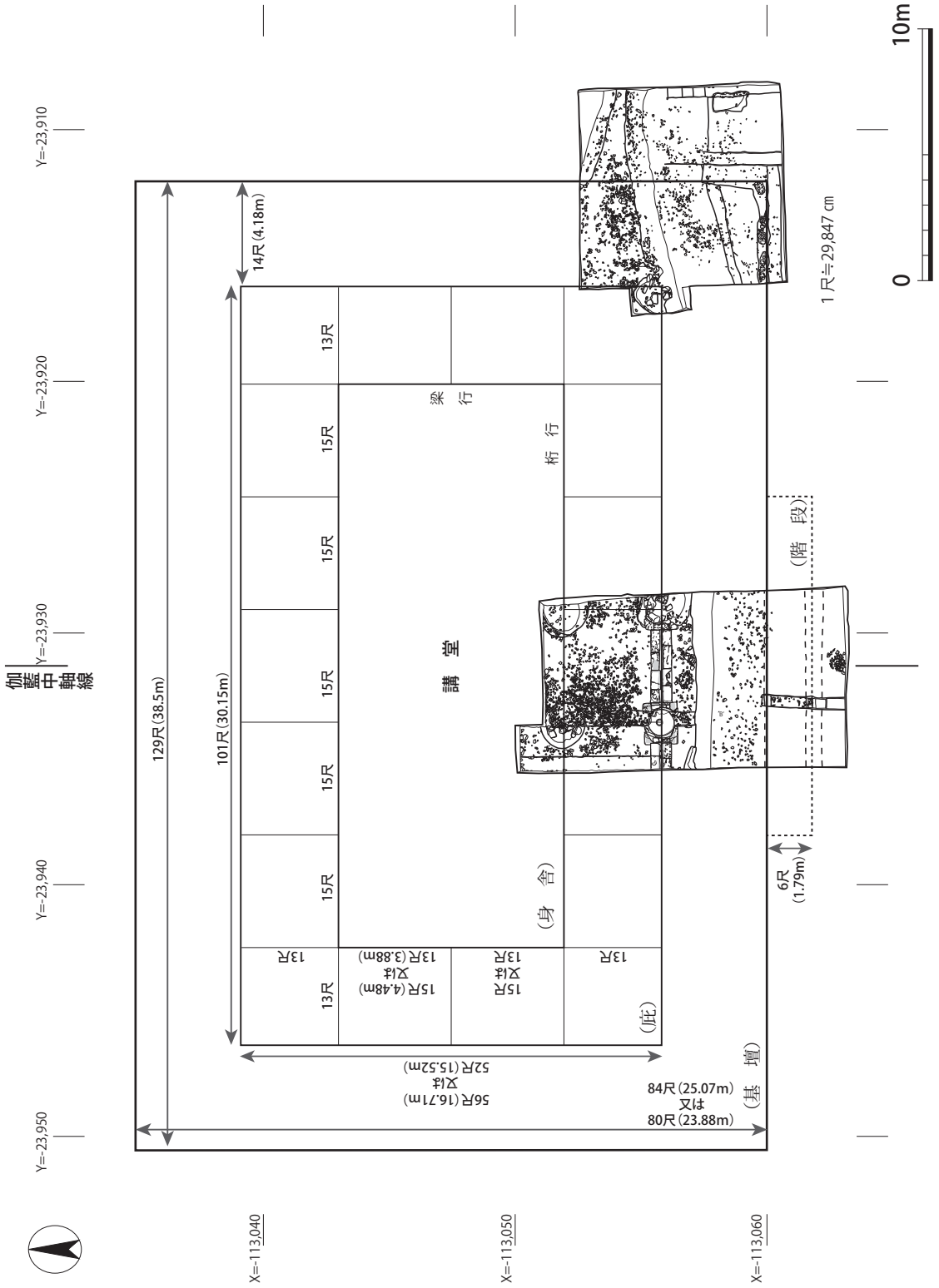


図17　西寺講堂復元案（1：250）

中軸線　４区では，礎石３及び礎石抜取穴４～６を確認したことで，身舎及び南庇桁行正面の中央柱間を構成する柱位置を特定することが可能となった。特に南庇では，側柱筋芯を特定できる地覆座が残ることから，柱位置をより正確に特定することができる。礎石３では，２列の地覆座中央の座標がX=-113,055.9ｍであり，出枘の位置からY=-23,933.65ｍとなる。礎石抜取穴では唐居敷座の残存状況からY=-23,929.1ｍとなることから，南庇側柱列芯での講堂中軸線はY=-23,931.3ｍとなる。これは，条坊復元モデルの計算上で求められる右京九条一坊十二町及び十三町の中心線がY=-23,931.21ｍであることから，その差は僅か10㎝弱となる。

基壇規模　外装については，５区にて凝灰岩抜取溝（溝８）を確認していることから，凝灰岩で構築された壇上積基壇であることがわかる。溝８は，基壇南縁，東縁を示すもので，推定される東縁の延石西肩がY=-23,912.07ｍ附近となり，中軸線からの距離は19.23ｍを測る。これを中軸線と折り返すと38.46ｍで，基壇東西規模は129尺となろう。一方で東寺講堂基壇の東西規模は，42.4ｍ（142尺）であることが知られており，東西幅は東寺よりも3.9ｍ（13尺）小さいことになる。

基壇南縁については，X=-113,059.8ｍ附近となり，配置については東寺講堂と朱雀大路を挟み左右対称となることが改めて裏付けられた。

基壇高については，４区北半西端の断割で確認した講堂床面の標高は20.45ｍ，35次２区で確認した創建期整地層上面の標高は19.1ｍであることから，1.35ｍに復元できる。

建物規模　今回の調査では，柱位置を示す遺構を計５基確認した。身舎桁行入側柱筋の礎石抜取穴５・６，南庇側柱筋の礎石３，礎石抜取穴４・７である。したがって，身舎桁行の柱間は4.5ｍ（15尺），庇の出3.9ｍ（13尺）であることがわかる。また，５区で確認した礎石抜取穴７は外側に基壇南東縁を確認していることから，建物南東隅の柱位置を示している。これらの成果から講堂建物規模は，桁行は身舎五間の柱間4.5ｍ（15尺）等間で，庇の出3.9ｍ（13尺），基壇の出4.2ｍ（14尺）とすると納まりがよく，桁行五間の身舎に四面に庇が付いた所謂五間四面の東西棟礎石建物となり，桁行全長は30.1ｍ（101尺）となる。

これまで西寺の講堂については，『東宝記』「東寺新定講堂図」にある「西寺亦准此」の記載から，東寺と同様の七間四面の平面形式で，桁行九間の13尺等間（計117尺）と考えられていた。しかし，基壇規模と同様に建物規模についても東寺とは異なり，身舎の柱間は広いものの，一回り小さいことが明らかとなった。

階段　４区では，35次調査２区の溝８の続きである正面階段の凝灰岩延石抜取溝（溝10）が調査区外にも展開することが明らかとなった。４区では，正面中央の柱間を示す礎石３と礎石抜取穴４を確認していることから，正面階段の幅は少なくとも柱間３間（13.5ｍ）以上あることがわかる。階段の出については，1.8ｍ（６尺）である。35次調査でも指摘した通り，溝10には焼土が混じり，火災整地層に一部表面が覆われていることから，焼亡後に抜き取られたことが改めて裏付けられた。

柱間装置　４区の南庇桁行側柱筋の礎石３の東西には礎石を囲うように凝灰岩切石が認められ，

礎石抜取穴４でも同様に凝灰岩切石が残されていた。柱間については，２列の凝灰岩切石が繋いでおり，それぞれの石材に残る木部の炭化痕から，凝灰岩は礎石廻りが唐居敷座で，柱間は地覆座であることが判明した。焼失時の炭化痕から，唐居敷は礎石の東西に分かれて存在し，その大きさは南北112㎝前後，東西45㎝前後の長方形に復元できる。唐居敷座は中央に抉りが設けられており，唐居敷を座に固定するためのものと考えられる。地覆座についても２列中央の東西方向に幅27㎝前後の木部の痕跡が明瞭に残されており，蹴放があったと考えられ，少なくとも正面中央３間には門扉が取り付いていたことが裏付けられた。また，柱間中央に位置する地覆座北側には，45×24㎝の木部の炭化痕が残されており，開閉に伴う木部の装置の存在が想定できると共に，扉が内開きであったことを示している[23)]。

このように，通常門で用いられる唐居敷と蹴放が，講堂のような主要な建物で使用されることはほとんど類例がなく，現存する建物としては，奈良時代末頃に建立されたとされる奈良新薬師寺の本堂でしか見ることができない。西寺は，東寺とともに平安京では唯一の官寺であり，僧綱所が設置され，多くの僧侶を抱え，国忌も行われていたことから，高位の人間の出入りがあったと想定され，取り外しが可能な蹴放を採用した可能性も考えられよう[24)]。

このように官寺の主要堂舎で唐居敷と蹴放が採用されていることを考えると，平安宮跡の正殿クラスの建物等にも用いられていたことも考えられ，建立年代も明確であることから当時の木部構造の基準資料と成り得る成果といえよう。

（２）講堂東軒廊について

３区東半にて，軒廊基壇盛土及び南縁に関わる溝（溝９）を確認した。

基壇盛土については，盛土下層に多量の凝灰岩紛が含まれていることから，講堂基壇構築後，外装施工時と並行して軒廊基壇盛土を構築していたと考えられよう。また，講堂基壇と異なり，盛土の単位は厚く，講堂基壇盛土に擂り付けるように盛土されており，版築で構築したものでないことを確認した。軒廊基壇は南北端が後世の耕作によって削平を受けており，残存状況は芳しくなく，柱間を示す遺構は認められなかったが，残存部分の基壇盛土上面の残りは良好で，基壇高は0.9～1.1ｍで，講堂に向かって傾斜しており，講堂との取り付き部分については，階段ではなく登り廊下であったと判断できる。

上記のように，平安京内における造営の順序が明らかになる類例は少なく，平安京を理解する上で欠くことの出来ない成果といえる。

（３）コンド山について

講堂基壇床面の標高は20.45ｍで，現在のコンド山頂部の標高が高いところで22.0ｍであり，講堂焼失後に最大で1.5ｍ以上もの積土が行われたことになる。盛土には破片の大きい瓦が含まれることから，35次調査で指摘した通り，周辺の耕作地化に伴って積み上げられたことがわかった。

盛土が行われた要因としては，２つの要素が想定できる。１つは，４区北西端で床面から出土し

た複数の凝灰岩片である。出土した場所は身舎の中央付近であり，本来は仏像を安置する須弥壇が存在したと考えられ，現存する東寺須弥壇が当初凝灰岩で築造されていたことを踏まえると，出土した凝灰岩片は須弥壇を構成していた可能性が高い。東寺講堂では，須弥壇の高さは床面よりも高さ2.9現尺（約１ｍ）であることに鑑みると[25]，西寺にも同様の須弥壇が存在した可能性は高い。附近の床面に散乱していた多量の土師器皿の存在も須弥壇に供えられていた器と理解できる。したがって，講堂焼失後には，須弥壇の部分が高く盛り上がって残っていたと想定でき，盛土は須弥壇の高さに左右されたと考えられる。

もう一つの要因は，コンド山が現在まで続く松尾祭での神事の舞台として重要視されていることである。盛土が行われた時期は焼失した際の堆積土直上の盛土に13～14世紀の瓦器碗や龍泉窯産の青磁碗が含まれており，西寺五重塔が焼失する頃から始まっていたことがわかる。盛土の堆積状況は厚みも均質で，常時平坦面を造り出そうとする意図を感じることができ，神事の舞台として必要な行為であったことが読み取れよう。コンド山での神事は，文献では江戸時代までしか遡ることができないが，盛土の開始が神事に関わるものであれば，鎌倉時代に五重塔が焼失し，西寺が廃絶した頃よりコンド山での神事が執り行われた可能性も指摘できよう。

これら２つの要因からコンド山が現在に残され，西寺跡を偲ぶ唯一の構造物となったといえる。

（４）今後の課題

今回の調査では，後世の盛土によって西寺講堂跡の残存状況が極めて良好であったため，基壇及び建物規模，木部についても言及することができる貴重な成果となった。特に，これまで建物規模も含めて東寺と左右対称と論じられてきた中，中枢伽藍の一つである講堂の規模が異なることが明らかになったことは，東西両寺を考えるうえで極めて重要である。規模が異なる理由の一つとして考えられるのは，東寺講堂の造営開が空海下賜後の天長元年（824）であり，空間が立体曼荼羅を具現化するため大規模な須弥壇を必要とした結果，当初計画を変更した可能性である。

３箇年計画の範囲確認調査の最終年度となる来年度は，今回の調査成果を踏まえ，西寺講堂の建物及び基壇規模を確定し，手懸りを得られた須弥壇の詳細に迫り，東寺講堂との比較検討に耐えうる調査を実施する必要がある。

一方で，今回出土した遺構については担当者の力量を越えたものも多く，意を尽くせなかった点も多い。今回の調査成果を活かし，来年の調査及び総括報告書に反映させる所存である。

（西森正晃）

なお，今回の西寺跡36次・37次調査では，下記の方々から多岐にわたる御指導，御協力を得た。末筆ではあるがここに記し，感謝の意を表します。（所属・敬称略，五十音順）

青山均・天野広一・網伸也・諫早直人・五十川伸也・一瀬和夫・井上満郎・上原真人・大脇潔
梶川敏夫・岸泰子・國下多美樹・清水一徳・鈴木嘉吉・鈴木久男・瀧浪貞子・竹内直道
塚原十三雄・冨島義幸・新見康子・西山良平・長谷川行孝・畑中英二・菱田哲郎・平尾政幸
水ノ江和同・栁晴子・山岸常人・山田邦和・吉川義彦

註

1）西森正晃「平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（35次）・唐橋遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告平成30年度』京都市文化市民局，2019年。
2）『続日本後紀』巻十三，承和十年七月廿三日条。
3）『日本紀略』延暦十六年夏四月四日条。
4）『日本後紀』巻廿二，弘仁三年二月三日条。
5）『日本後紀』巻廿二，弘仁四年正月十九日条。
6）『日本紀略』天長九年七月五日条。
7）『日本三代実録』巻四十二，元慶六年六月廿六日条。
8）『東寺長者補任』一。
9）『日本紀略』正暦元年二月二日条。
10）『日本紀略』正暦元年八月廿六日条。
11）『明月記』天福元年十二月二十五日条。
12）「西寺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第二冊，京都府，1920年。
13）『山城名勝志』巻七，正徳元年刊行。
14）12）に同じ。
15）杉山信三『史跡西寺跡』鳥羽離宮跡調査研究所，1979年。
16）15）に同じ。３次調査７区。
17）１）に同じ。
18）『東宝記』第一　仏宝上　講堂項に「東寺新定講堂図」が記され，「西寺亦准此」とある。
19）『重要文化財教王護国寺講堂修理工事報告書』京都府教育庁文化財保護課，1954年。
20～24）鈴木嘉吉先生の御教示による。
25）19）に同じ。

Ⅴ　西寺跡（37次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡

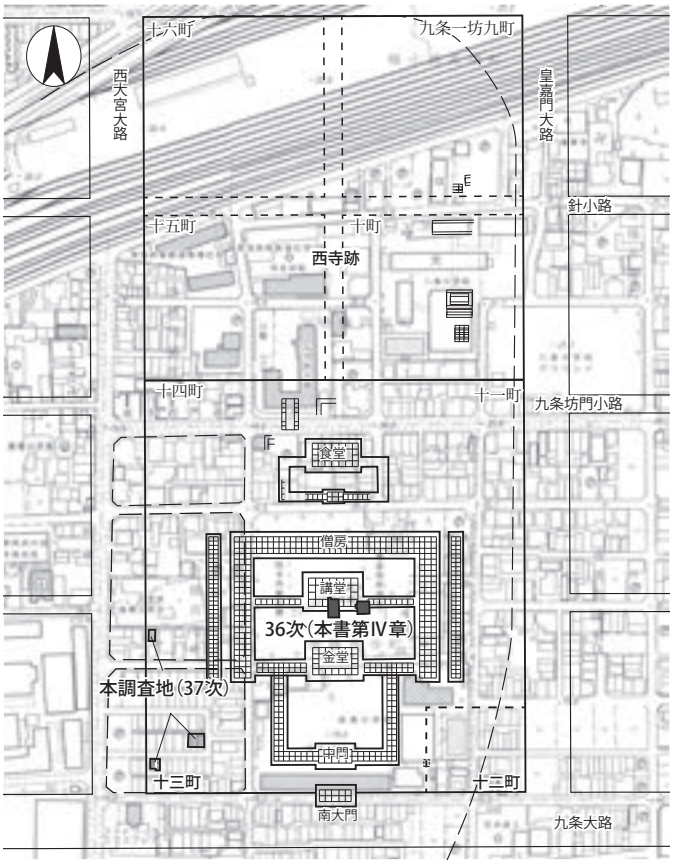


図１　調査位置図（１：5,000）

１．調査経過

（１）調査に至る経緯

本件は文化庁国庫補助事業による西寺跡の範囲確認調査で，今年度は最終年度（３年目）にあたる。これまでの２か年にわたる発掘調査によって，推定塔跡付近に瓦葺建物が存在していた可能性が高まり（33次），さらに，伽藍地南西隅地で鉄製品の生産が行われていたこと，西面築地や西大宮大路の様相などが明らかになった（34次）。そこで最終年度は，推定塔跡における瓦葺建物の全容把握と，鉄製品に関わる遺構の規模の確定，寺域西限を限る内溝の確認を目的に調査を実施した。

（２）調査の経緯

調査地は南区唐橋西寺町内で，調査区は地権者の協力を得て推定塔跡（第７調査区）と西面築地（第９調査区）にあたる空閑地の２箇所，第６調査区の北側（第８調査区）の合計３箇所に設定した（図２）。第７調査区は，瓦葺建物の全容把握を目的として当初は東西約10.4ｍ，南北約９ｍに設定したが，調査の進行に合わせて北側と西側の一部を拡張した。第８調査区は第６調査区で検出した鋳造関連遺構の規模の把握を目的として東西約6.3ｍ，南北約7.8ｍ，第９調査区は西面築地内溝及び門跡の確認を目的として東西約4.5ｍ，南北7.5ｍに設定した。調査面積は合計で約179㎡である。調査は令和元年９月30日から開始し，重機を用いた現代盛土等の除去後，人力による遺構検出を実施した。その結果，第７調査区で基壇建物遺構，第８調査区で鋳造関連遺構，第９調査区で西面築地内溝を確認した。11月７日に文化庁の指導を経て，11月15日までに埋め戻しを終えた。また，10月26日には現地説明会を開催し，多数の参加者を得た。本調査で確認した遺構は，土嚢と真砂土によって保護した上で埋め戻しを行った。

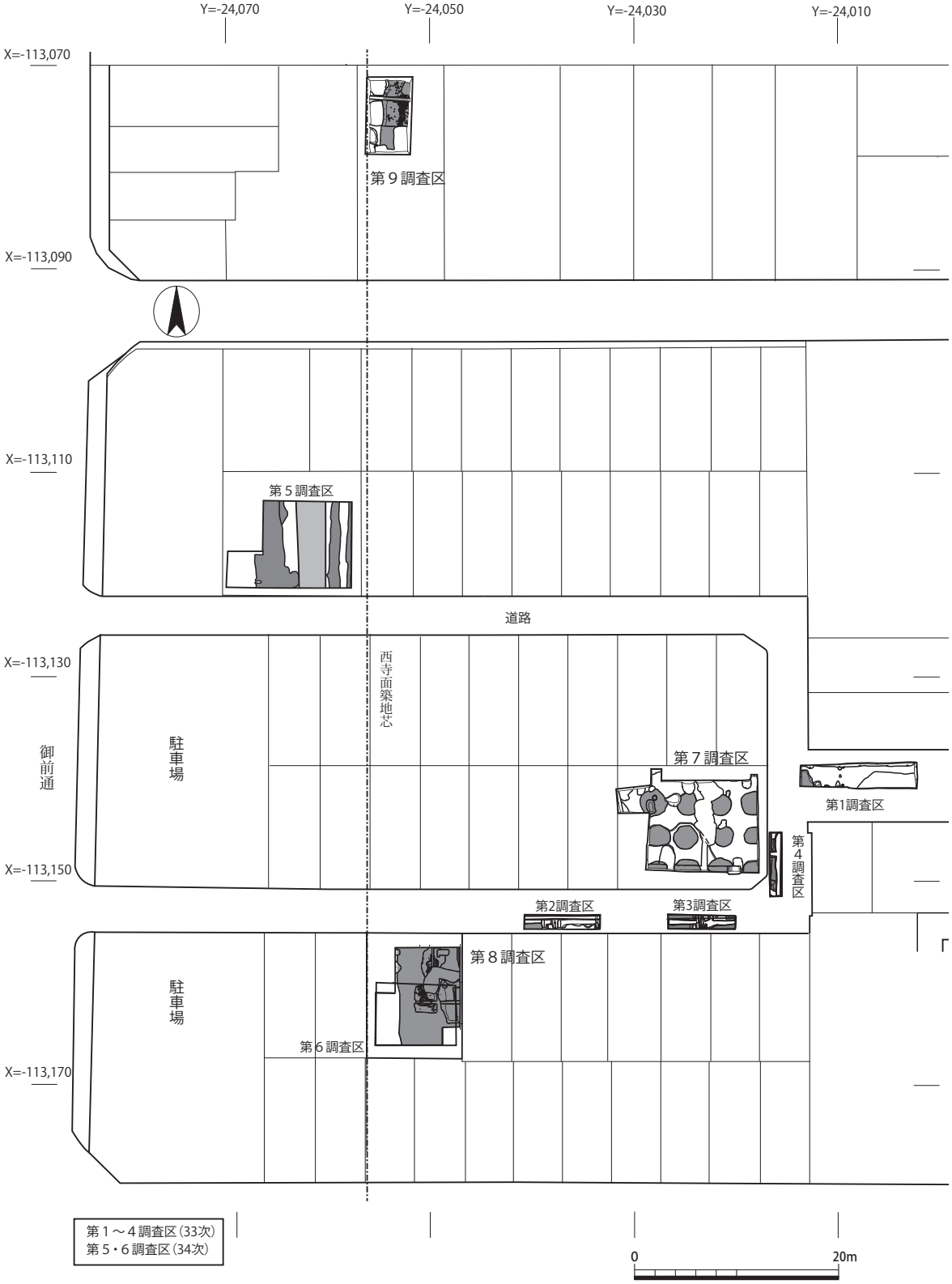


図２　調査区配置図（１：600）

２．遺　跡

（１）歴史的環境

西寺は延暦13年（794）に平安京遷都に伴って，平安京右京九条一坊九町から十六町に建立さ

れた寺院である。おおよそ南半４町に伽藍の中心堂塔が，北半４町に寺院経営を支える家政機関が置かれたとされている[1]。創建に関する史料は乏しく造営経過は明確ではないが，『類聚国史』によれば，延暦16年（797）４月４日に笠人朝臣江人が「造西寺次官」に任命され，平安京遷都から間もなくして造寺に着手したことが分かる[2]。弘仁３年（812）には，屏風一帖・障子四十六枚が施入され，東大寺の官家功徳の封二千戸が東西二寺へ移譲されており[3]，一定の堂舎の完成と造寺の継続が窺える。翌年（813）には，諸大寺に準じる布施を得て両寺院で「坐夏」を行うことを定めている[4]。天長元年（824）には大僧都勤操が北院で死去したとの記録があり[5]，諸施設の存在が明らかとなる。天長９年（832）に講堂が完成する[6]。貞観６年（864）に僧綱所が薬師寺から西寺へと移管され，西寺において僧尼名籍と寺院資財の管理などが行われている[7]。元慶６年（882）に「塔料及び三宝布施料として稲6,000束、穀250石を充てる」とあり，この頃に塔の造

図３　第７調査区調査前全景（東から）

図４　第７査区作業風景（西から）

図５　山下主任調査官現地指導（北から）

図６　第８調査区遺構養生状況（北西から）

図７　第９調査区埋め戻し（北から）

図８　現地説明会風景（西から）

営を開始した可能性が高い。正暦元年（990）に主要堂舎が焼失し，再建されるまでの間，国忌が東寺へと移されている[8]。再建に関する記事がほとんど無く，11世紀代の様相は判然としないが，再び西寺で国忌が執りおこなわれていることから，ある程度の再建がなされたと推測されている[9]。しかし，仁平元年（1151）には，「西寺荒廃」を理由に僧綱の儀式が東寺で行われるようになる[10]。建久年間（1190～1199）には文覚によって西寺の塔が修理されるが，天福元年（1233）に焼失し，以後再建されることがなかった[11]。

（２）既住の調査（図９・表１～３）

これまでに実施された西寺跡関連発掘調査成果については『平成29年度京都市内遺跡発掘調査報告』[12]，西面築地については『平成30年度京都市内遺跡発掘調査報告』[13]でまとめた。そこで本節では塔跡及び鋳造関連遺構及の調査事例について述べる。なお，以下で述べる調査次数はⅣ章66～69頁表1・図6に対応している。

これまでに4次，33次で塔跡推定地の調査を実施している。また，15次・34次で鋳造関連遺構・遺物を確認している。

塔跡（4次・33次）1962年に行なわれた一連の発掘調査（４次）中で，西寺の塔が東寺と同じく伽藍地の南東隅地にあったと想定し発掘調査を実施している。しかし，塔に関連する遺構は確認されず，東西方向の溝の検出にとどまった。このため，報告された伽藍配置復元図に塔の記述がなく，将来の課題としている。また，４次の隣接地で行なわれた16次では，南北方向の築地基底部とそれに伴う溝，門跡などが検出された。南北方向の溝は４次で発見された東西方向の溝と接し，伽藍地南東隅に築地によって囲われた空間があったことが明らかになった。東寺には伽藍地南西隅に築地によって囲われた灌頂院があり，防災施設工事に伴う一連の調査によって五重塔の周囲には築地が巡らないことが明らかにされている。このようなことから，西寺には伽藍地南東隅地に何らかの院が形成されていたことが明らかになり，塔が伽藍地南西隅地に建立されたと考えられるようになった。さらに，西寺と東寺の伽藍配置が朱雀大路を境にして左右対称に計画されていた可能性が高まった。33次ではこれらの成果を受けて，初めて伽藍地南西の推定塔跡付近で発掘調査を実施したが，塔跡に関連する明確な遺構の確認はされなかった。しかし，一定の量の瓦が出土したことから，調査地周辺に瓦葺建物が存在していたと推測している。

鋳造関連遺構（15次・34次）　付属地の北東側で確認された梁間３間，桁行15間以上の掘立柱建物跡と伴に大量の鞴の羽口が出土している（15次）。直接鋳造に関連した遺構は確認できていないが，家政機関において鋳物の生産が行われていたと想定されている。34次では，鋳型と炉壁，鋳型の原材料となる粘土などが混在する土坑を確認している。しかし，鋳型と炉壁が混在して出土していることから，土坑が生産に直接関わる遺構であったとは断定していない。ただ，９世紀後半頃に伽藍地の南西隅地で鉄製品の生産が行なわれていたことが明らかになった。

3. 遺　構

（1）基本層序

第７調査区（図11）　基本層序は調査区東壁を代表として述べる。現地表面から0.2ｍまで現代盛土及び旧耕作土で，その直下が地業と浅黄色粗砂（東壁30層）・にぶい黄色細砂～微砂の無遺物層となる（東壁31層）。さらに無遺物層は，灰白色粗砂～細砂（東壁32層）と灰白色砂礫に分けることができる。断面図には現れていないが，調査区中央部にはシルト質の土壌が広がり，無遺物層が複雑に堆積している。遺構検出はこれらの無遺物層の直上で実施した。遺構検出標高は18.67ｍである。

第８調査区（図13）　基本層序は調査区北壁を代表して述べる。現地表面から0.14ｍまでアスファルト及び現代盛土で，その直下が西面築地内溝埋土と灰黄褐色泥砂～シルトの無遺物層（北壁６層）となる。遺構検出は無遺物層の直上で実施した。遺構検出標高は18.6ｍである。

第９調査区（図15）　基本層序は調査区西壁を代表して述べる。本調査区は他の調査区と異なり現代盛土が厚く，現地表面から0.3～0.7ｍほどある。その直下が旧耕作土・床土となり，調査区北側では地表面から0.66ｍで明黄褐色泥砂の整地層（西壁４層），0.76ｍで灰黄色シルトの整地層（西壁５層），0.84ｍでにぶい黄橙色泥砂～細砂の無遺物層（西壁６層）となる。遺構検出は整地層の直上で実施した。遺構検出標高は18.5ｍである。

（2）遺　構

全ての調査区において，西寺に関連する遺構を確認することができたが，本調査が遺構の保存を目的とした範囲確認調査であることから，遺構の掘削は撹乱を最大限利用した断割りにとどめている。そのため，各遺構から得られる情報は非常に限定的であり，出土遺物も限られることから遺構の年代については時期幅をもたせて報告する。

第７調査区（図９～11）

建物の地業などを13箇所確認した。

地業38　調査区の中央南側で検出した地業である。壺地業ヘ・チ・リによって掘り込まれている。検出面で長辺4.6ｍ以上，短辺４ｍ，深さ約1.1ｍである。遺構は調査区外に展開する。撹乱を利用して断割り調査を行った。

地業は検出面から深さ約１ｍまで掘下げ，北肩口寄りの底部に0.3ｍ程度の石を疎らに据えている。その後，層厚が0.04～0.16ｍとなるように版築工法によって埋め戻す。最下層には帯水を示

表１　遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代	地業38，壺地業イ～ヲ，鋳造関連土坑１・２・５，内溝３，内溝１，整地層２，土坑４	西寺関連遺構

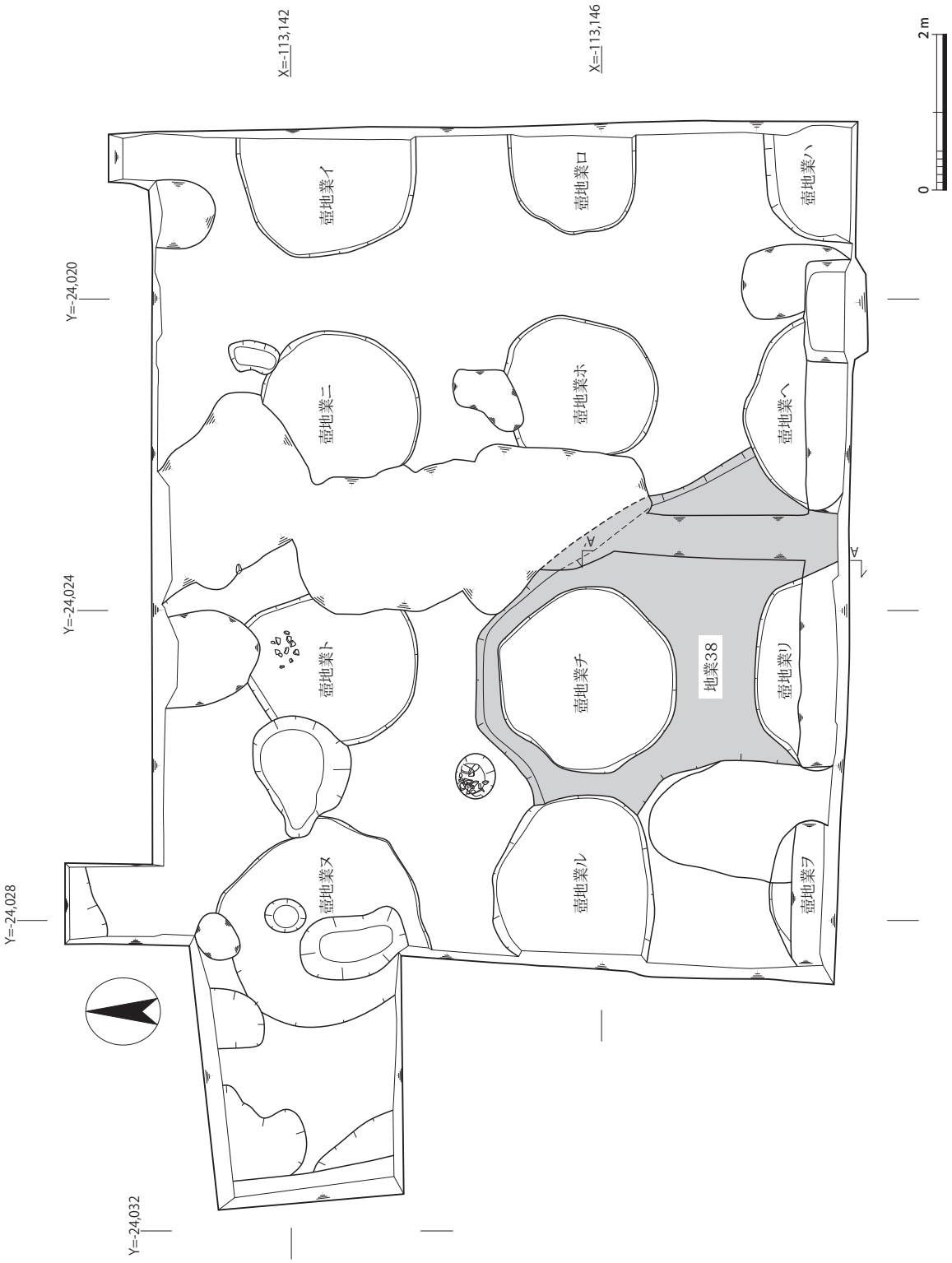


図９　第７調査区平面図（１：80）

す灰色泥砂（図11-52層）がある。僅かに遺物を含むが，後述する壺地業に比べて少ない。壺地業ヘ・チ・リ・ルによって掘り込まれているが，基壇建物に伴う一連の地業と考えられる。９世紀中頃から後半にかけて施工されたと推測する。

壺地業イ～ヲ　調査区の全域で検出した12基の壺地業である。今回の遺構検出面が，第５調査区の西大宮大路犬行の貼石や第６・８調査区の鋳造関連土坑の検出標高値とほぼ同じであり，検

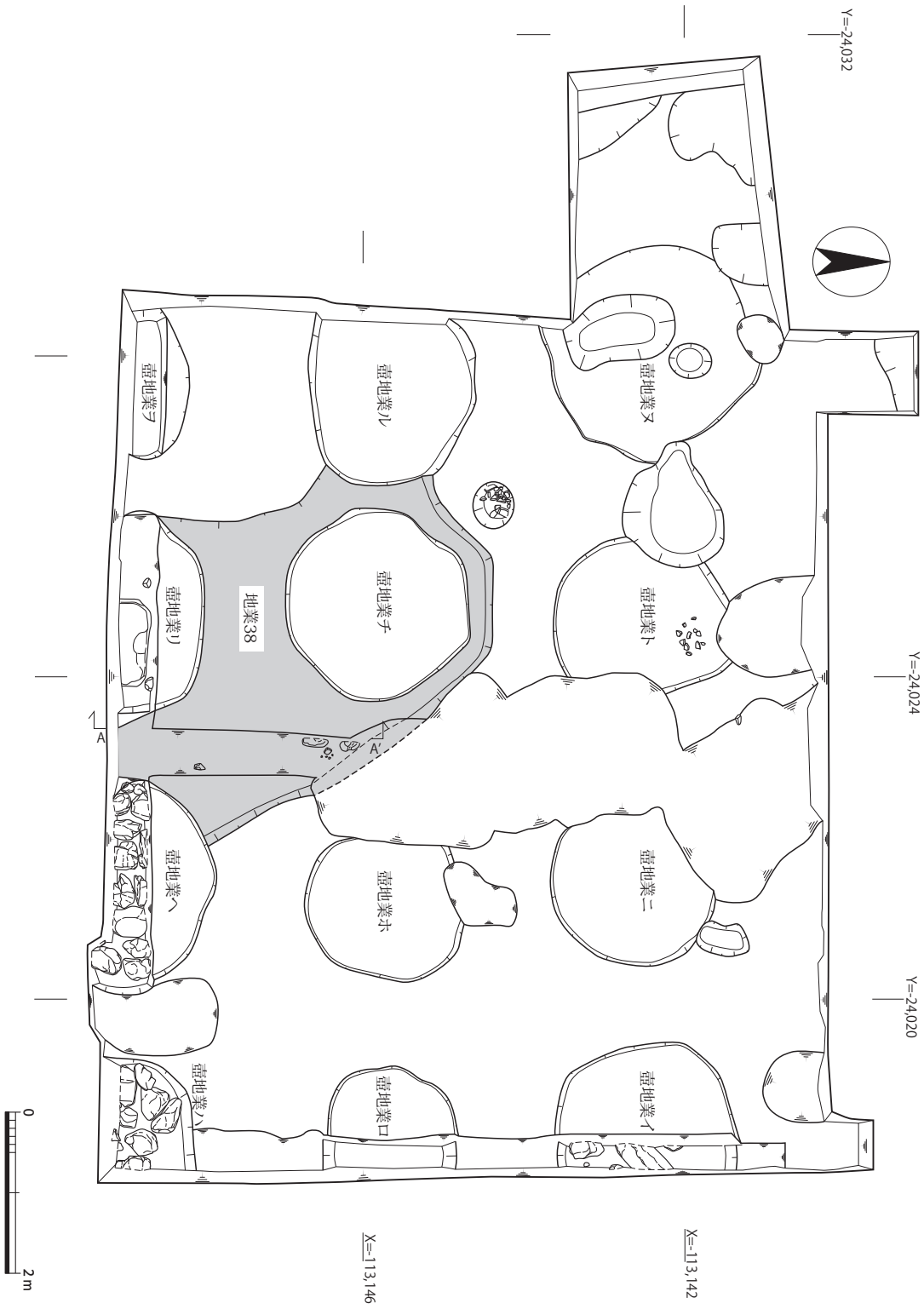
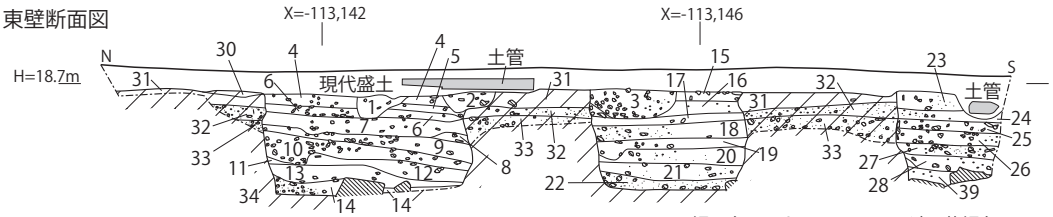


図10　第７調査区断割り後平面図（１：80）

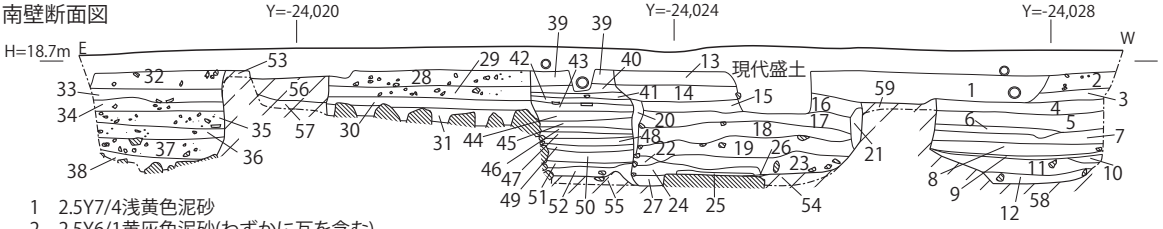
出面で礎石や根石等を確認することができなかったことから，壺地業は地表面上や低い基壇に礎石を据えるための据付穴ではなく，ある程度の高さのある基壇建物に伴う地業と判断した。地業内から古墳時代の須恵器，平安時代土師器・須恵器・瓦類などが出土したが，いずれも小片である。古墳時代の遺物も含むが，主体は９世紀中頃から後半にかけてのものである。したがって，壺地業は９世紀中頃～後半以降に施工されたと推測できる。

東壁断面図



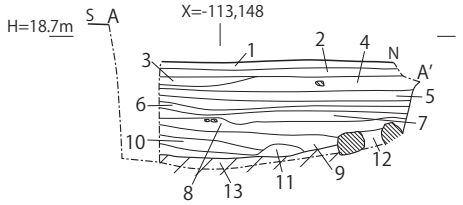
1 10YR5/2灰黄褐色泥砂(瓦・礫を含む)
2 10YR4/2灰黄褐色泥砂
3 7.5YR6/6橙色泥砂(礫を多く含む)
4 7.5YR6/4にぶい橙色泥砂
5 7.5YR5/2灰褐色泥砂
6 7.5YR5/3にぶい褐色泥砂(礫・瓦を含む)
7 10YR5/4にぶい黄橙色泥砂(炭化物・瓦・礫を含む)
8 10YR5/2灰黄褐色砂泥(瓦・礫を含む)
9 10YR6/4にぶい黄橙色泥砂(瓦・礫を多量に含む)
10 2.5Y5/1黄灰色泥砂(瓦・礫を多量に含む)
11 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂(瓦・拳大の礫を含む)
12 2.5Y4/1黄灰色砂泥
13 2.5Y6/3にぶい黄色砂泥
14 5Y5/4オリーブ色砂泥～粗砂
【壺地業イ】
15 7.5YR6/6橙色泥砂(礫を含む)
16 10YR6/6明黄褐色泥砂(瓦・炭化物を含む)
17 10YR6/2灰黄褐色泥砂(瓦を含む)
【壺地業ロ】
18 10YR6/1褐灰色シルト～10YR4/3にぶい黄褐色泥砂泥砂(ブロック状に見える)
19 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂(瓦・礫を含む)
20 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂(わずかに礫を含む)
21 2.5Y5/6黄褐色泥砂
22 2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂～砂泥
【壺地業ロ】
23 2.5Y6/2灰黄色泥砂(瓦・礫を含む)
24 2.5Y5/1灰黄色泥砂
25 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂(礫・瓦を含む)
26 5Y5/1灰色泥砂(礫を含む)
27 5Y6/1灰色泥砂(礫を含む)
28 2.5Y4/1黄灰色砂泥(礫を含む)
29 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂
【壺地業ハ】
30 2.5Y7/4浅黄色粗砂
31 2.5Y6/3にぶい黄色細砂～微砂
32 2.5Y7/1灰白色粗砂～細砂
33 2.5Y7/2灰白色砂礫
34 5Y4/3暗オリーブ色粗砂
【地山】

南壁断面図



1 2.5Y7/4浅黄色泥砂
2 2.5Y6/1黄灰色泥砂(わずかに瓦を含む)
3 2.5Y5/1黄灰色泥砂
4 5Y5/1灰色砂泥
5 7.5Y5/1灰色シルト～砂泥
6 5Y6/1灰色泥砂
7 7.5Y4/1灰色泥砂(地山ブロックを含む)
8 10YR5/1褐灰色シルト(わずかに遺物を含む)
9 10YR4/2灰黄褐色シルト
10 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂
11 2.5Y5/1黄灰色泥砂
12 5Y4/3暗オリーブ色砂泥
【壺地業ヲ】
13 7.5YR5/4褐灰色泥砂
14 10YR6/4にぶい黄橙色泥砂
15 10YR6/1褐灰色泥砂(Mg・東端に礫を多量に含む)
16 2.5Y6/1黄灰色泥砂(礫・Mg・瓦を含む)
17 2.5Y5/1黄灰色泥砂(礫を多く含む)
18 10YR6/1褐灰色泥砂(礫を多く含む)
19 10YR5/2灰黄褐色泥砂(礫を多く含む)
20 10YR6/4にぶい黄橙色シルト
21 10YR5/1褐灰色泥砂(礫を含む)
22 2.5Y6/2灰黄褐色(礫を含む)
23 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂
24 2Y5/3黄褐色泥砂
25 N5/0灰色泥砂
26 2.5Y6/8明黄褐色砂礫
27 19YR5/3にぶい黄褐色粗砂
【壺地業リ】
28 10YR5/1褐灰色泥砂(礫を多く含む)
29 5Y5/1灰色泥砂
30 2.5Y4/1黄灰色砂泥
31 2.5Y3/1黒褐色泥砂
【壺地業ヘ】
32 2.5Y6/2灰黄色泥砂(瓦・礫を含む)
33 2.5Y5/1灰黄色泥砂
34 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂(礫・瓦を含む)
35 5Y5/1灰色泥砂(礫を含む)
36 5Y6/1灰色泥砂(礫を含む)
37 2.5Y4/1黄灰色砂泥(礫を含む)
38 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂
【壺地業ハ】
39 10YR5/2灰黄褐色泥砂
40 10YR6/2灰黄褐色泥砂
41 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂
42 10YR5/2灰黄褐色泥砂
43 2.5Y6/2灰黄色泥砂
44 10YR4/1褐灰色粗砂～砂礫
45 2.5Y5/1黄灰色シルト(Mgを含む)
46 2.5Y7/2灰黄色砂泥
47 2.5Y6/1黄灰色砂泥
48 5Y6/1灰色砂礫
49 2.5Y5/4黄褐色粗砂～砂泥(Mgを含む)
50 2.5Y7/1灰白色泥砂
51 2.5Y6/2灰黄色泥砂
52 N6/0灰色泥砂
【地業38】
53 N5/0灰色泥砂
54 2.5Y6/6明黄褐色粗砂
55 2.5Y6/4にぶい黄色砂礫
56 10YR6/4にぶい黄橙色泥砂
57 10YR4/4褐色砂礫
58 10YR5/6明黄褐色泥砂
【地山】

セクション壁断面図



1 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂
2 10YR5/2灰黄褐色泥砂
3 2.5Y6/2灰黄色泥砂
4 10YR4/1褐灰色粗砂～砂礫
5 2.5Y5/1黄灰色シルト(Mgを含む)
6 2.5Y6/1黄灰色砂泥
7 5Y6/1灰色砂礫
8 2.5Y5/4黄褐色粗砂～砂泥(Mgを含む)
9 2.5Y7/1灰白色泥砂
10 2.5Y6/2灰黄色泥砂
11 N6/0灰色泥砂
12 2.5Y7/1灰白色泥砂
13 2.5Y6/4にぶい黄色砂礫【地山】
【地業38】

0 2m

図11　第７調査区断面図（１：50）

壺地業は東西方向の４基を１列とし，南北方向に３列分の合計12基確認した。調査区の西側及び北側に拡張区を設けて，壺地業の展開状況を確認したところ，西側及び北側には展開しないことが明らかになった。したがって，基壇建物は東西３間，南北２間以上の基壇建物であったことが分かる。また，調査区東・南壁で検出したイ・ロ・ハ・ヘ・リ・ヲで断割り調査を実施した。

壺地業の規模は，いずれも検出面で径2.0～2.8ｍ，深さ1.0～1.2ｍあり，平面形が楕円形を呈す。断割り調査を行った６基の壺地業のうち，イ・ハ・ヘ・リには直径約0.3～0.4ｍの砂岩やチャート，一辺が1.1ｍの花崗岩が据えられていた。ただし，地業ごとに石の据付方法が異なる。イは地業底に，0.3～0.4ｍの花崗岩と砂岩が重ならないように据えられているのに対し，ハ・ヘは地業底に0.3～0.4ｍの砂岩などが重なるように据えられている。さらに，ヘのみ一度石の天端まで版築で埋め戻した後に再び重なり合うように砂岩を据える。リは地業底に１辺1.1ｍの花崗岩が一石のみ据えられている。一方，ロ・ヲには石が据えられていない。地業の埋土は厚さ0.1～0.2ｍで固く締まっており，版築工法によって埋め戻している。なお，埋土には無遺物層由来の土壌に小片の遺物が混在しており，壺地業の掘削土を版築土に利用している可能性が高い。

以上の観察結果から，壺地業は以下のような３種類の異なる工程で行なわれたと推測することができる。

①イ・ハ・リは地山もしくは地業38を楕円形に掘削する。この時掘削土は地業周辺に溜めておく。イは掘削底に砂岩と花崗岩が重ならないように据える。ハは掘削底に砂岩が重なり合うように据える。リは掘削底に花崗岩を一石のみ据える。その後，版築で埋め戻す。

②ヘは地山と地業38を楕円形に掘削する。掘削土は①と同様である。掘削底に砂岩などが重なり合うように据え，版築で石の天端まで埋め戻す。再び石が重なりあるにように据えて版築で埋め戻す。

③ロ・ヲは地山を掘込み，小礫や小片の遺物が混じる土を用いて突き固めながら埋め戻す。

第８調査区（図12・13）

平安時代

内溝３　調査区の東側で検出した南北方向の溝である。大部分が昨年度の第６調査区内溝３と重複する。検出位置及び昨年度の調査成果から，西寺西面築地の内溝と判断した。西肩のみを検出し，幅が約6.26ｍ，深さ0.1～0.56ｍで，調査区外に展開する。調査区北端の断面観察では溝底は西側（西面築地寄り）付近が最も深く，後述する鋳造関連土坑４を挟んで浅くなる。中央部分から東側にかけては鋳造関連土坑１・２・５によって掘り込まれている。埋土はにぶい黄橙色もしくはにぶい褐色シルト～砂泥で，硬く締まっており人為的に埋め戻したと考えられる。

鋳造関連土坑１　昨年度確認した鋳造関連土坑１である。北側が撹乱土坑によって削平されていたが，検出面で東西2.5ｍ以上，南北2.65ｍ以上となり隅丸方形状の土坑である。土坑には粘土ブロックとともに表面に固化物（ガラス質）が付着した炉壁片や鋳型片などが多量に散在している。そのため，溶解炉と鋳型の判別はできない。また，携帯型成分分析計（エネルギー分散型蛍光

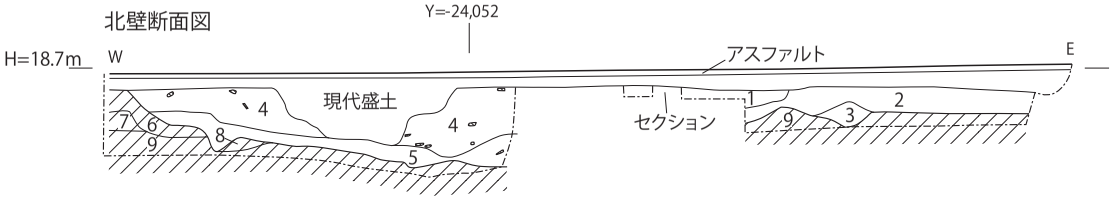
図12　第８調査区平面図（１：50）

Ｘ線分析装置）による簡易測定によれば，炉壁に付着している成分が明らかに銅よりも鉄の値が高く，鉄製品を生産していたと考えられる[14)]。

鋳造関連土坑２　昨年度の調査で確認した鋳造関連土坑２である。検出面で東西2.34ｍ以上，南北4.24ｍ，深さ0.89ｍ以上の方形の土坑である。内溝３の埋没後に成立する。土坑の底部が一段深くなり，埋土には炉壁や炭化物・焼土・鋳型の細片が混在する。底部が一段深くなる肩口付近に地山に類似する砂礫（図13-36層）や粗砂（図13-39層）が堆積しており，何らかの理由で地山の一部が崩落している可能性が考えられる。遺構の全容把握には至らず，溶解炉と鋳型の判別ができない。

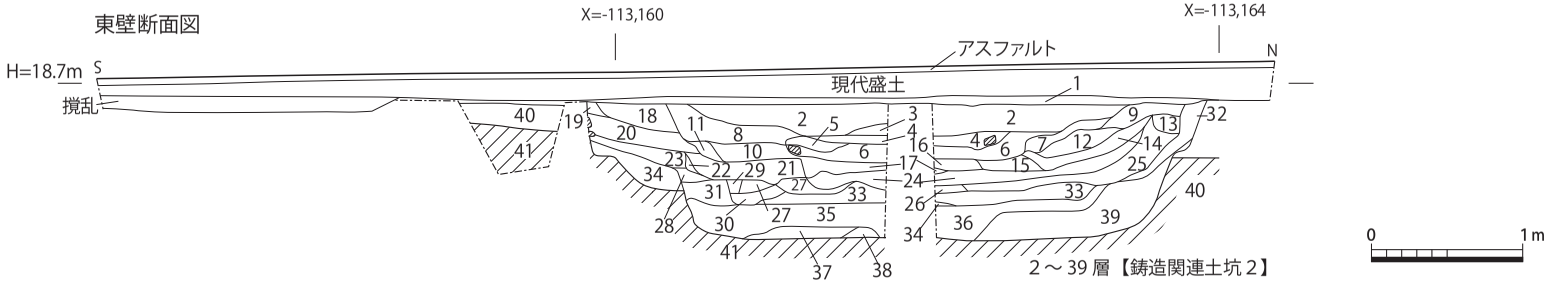
鋳造関連土坑５　調査区中央北側で検出した鋳造関連土坑である。南側が削平されているが，検

北壁断面図



1　10YR6/4にぶい黄橙色泥砂(炭化物を含む)【鋳造関連遺構】
2　10YR5/4にぶい黄橙色砂礫～泥砂
3　10YR7/3にぶい黄橙色泥砂(わずかに炭を含む)
4　10YR7/4にぶい黄橙色シルト～泥砂(炭・瓦を含む)
5　10YR4/4褐色泥砂～シルト
【内溝３】
6　10YR6/2灰黄褐色泥砂～シルト
7　2.5Y6/2灰黄色砂礫
8　2.5Y5/2暗灰黄色粗砂
9　2.5Y4/1黄灰色砂礫
【地山】

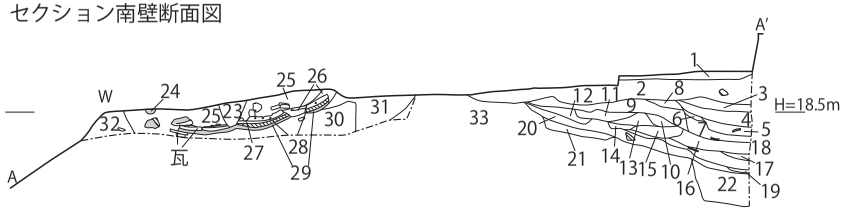
東壁断面図



2～39 層【鋳造関連土坑２】

1　10YR6/1褐灰色泥砂【旧耕土】
2　2.5Y6/4にぶい黄色泥砂(炭・焼土を含む,良く締まる)
3　10YR5/1褐灰色泥砂
4　7.5YR5/2灰褐色泥砂(炭化物・炉壁を含む)
5　10YR7/1灰白色(鋳型)
6　7.5YR4/2灰褐色泥砂(炭化物・炉壁を含む)
7　10YR5/3にぶい黄褐色泥砂
8　10YR5/2灰黄褐色泥砂(炭化物・粘土・炉壁小片を含む)
9　10YR6/2灰黄褐色泥砂(炭化物を含む)
10　10YR6/4にぶい黄橙色泥砂(炭化物・粘土を含む)
11　10YR7/4にぶい黄橙色泥砂
12　10YR5/4にぶい黄褐色泥砂(炭化物を含む)
13　10YR5/2灰黄褐色泥砂(炭化物を含む)
14　10YR2/1黒色炭層(わずかに粘質土を含む)
15　10YR7/3にぶい黄橙色泥砂(粘土を含む)
16　10YR3/1黒褐色炭層
17　10YR4/3にぶい黄褐色泥砂(炭化物・炉壁を含む)
18　10YR8/3浅黄橙色シルト(わずかに炭化物を含む)
19　10YR6/2灰黄褐色シルト
20　10YR7/2にぶい黄橙色泥砂(炭化物・粘土を含む)
21　2.5Y5/2暗灰黄色泥砂(炭化物・粘土を含む)
22　2.5Y5/3黄褐色泥砂
23　5Y5/1灰色泥砂(炭化物・粘土を含む)
24　7.5YR5/1褐灰色泥砂(炭を含む)
25　10YR4/4褐色泥砂(炭化物を含む)
26　5Y8/3淡黄色シルト
27　5Y6/3オリーブ黄色泥砂(粘土・炭化物を含む)
28　5Y5/2灰オリーブ色泥砂(炭化物を含む)
29　2.5Y8/3淡黄色泥砂(粘土を含む)
30　2.5Y6/2灰黄色泥砂
31　2.5Y7/2灰黄色泥砂(炭化物を含む)
32　7.5YR4/2褐灰色泥砂(炭化物・粘土を含む)
33　10YR5/3にぶい黄橙色泥砂
34　5Y6/1灰色粗砂～泥砂(炭化物を含む)
35　5Y7/2灰白色粗砂
36　10YR4/2灰黄褐色礫混じりシルト
37　5Y7/1灰白色砂泥(炭化物を含む)
38　5Y8/1灰白色粘土
39　7.5YR5/4にぶい褐色粗砂
40　10YR5/2灰黄褐色泥砂【内溝３】
41　2.5Y8/1灰白色砂礫【地山】

セクション南壁断面図



1　7.5YR7/1暗灰褐色泥砂
2　2.5Y6/4にぶい黄色泥砂(炭・焼土を含む,良く締まる)
3　7.5YR5/2灰褐色泥砂(炭化物・炉壁を含む)
4　7.5YR4/2灰褐色泥砂(炭化物・炉壁を含む)

1～22 層【鋳造関連土坑２】　23～32 層【鋳造関連土坑１】

5　10YR3/1黒褐色炭層
6　2.5Y8/2灰白色シルト
7　10YR4/3にぶい黄褐色泥砂(炭化物・炉壁を含む)
8　10YR7/2にぶい黄橙色シルト
9　2.5Y6/2灰黄色砂泥(良く締まる)
10　10YR8/4浅黄橙色シルト
11　2.5Y6/1黄灰色泥砂(良く締まる)
12　2.5Y5/3黄褐色泥砂(2.5Y7/4浅黄色シルトを含む)
13　10YR6/3にぶい黄橙色シルト
14　10YR3/1黒褐色炭層
15　10YR6/2灰黄褐色泥砂(炭を含む)
16　7.5YR5/1褐灰色砂泥(炭を含む)
17　5Y8/3淡黄色シルト
18　10YR5/3にぶい黄橙色砂泥
19　5Y7/2灰白色粗砂
20　5Y5/2灰オリーブ色泥砂(炭化物・5Y7/1灰白色粘土を含む)
21　5Y5/1灰色泥砂(炭を含む)
22　10YR4/2灰黄褐色礫混じりシルト
23　10YR8/2灰白色砂泥(炭化物を含む)
24　5YR7/6橙色泥砂(鋳型)
25　10YR8/1灰白色砂泥～10YR6/3にぶい黄橙色泥砂(炭化物・鋳型粘土を含む)
26　7.5YR6/3にぶい褐色粘土(炭化物・鋳型を含む)
27　2.5Y6/2灰黄色粘土
28　2.5Y3/1黒褐色泥砂
29　2.5YR5/6明赤褐色粘土(焼土)
30　2.5Y6/3にぶい黄色粘土(炭化物を含む)
31　10YR7/3にぶい黄橙色泥砂(粘土を含む)
32　10YR8/2灰白色泥砂(炭化物を含む)
33　2.5Y7/4浅黄色泥砂【内溝３】

図13　第８調査区断面図（１：80）

図14　第９調査区平面図（１：40）

出面で東西2.2ｍ，南北2.9ｍ以上となる。炉壁片や鋳型片などが散在している。また，携帯型成分分析計（エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置）による簡易測定によれば，炉壁に付着している成分が銅よりも鉄の値が高く，鉄製品を生産していたと考えられる。

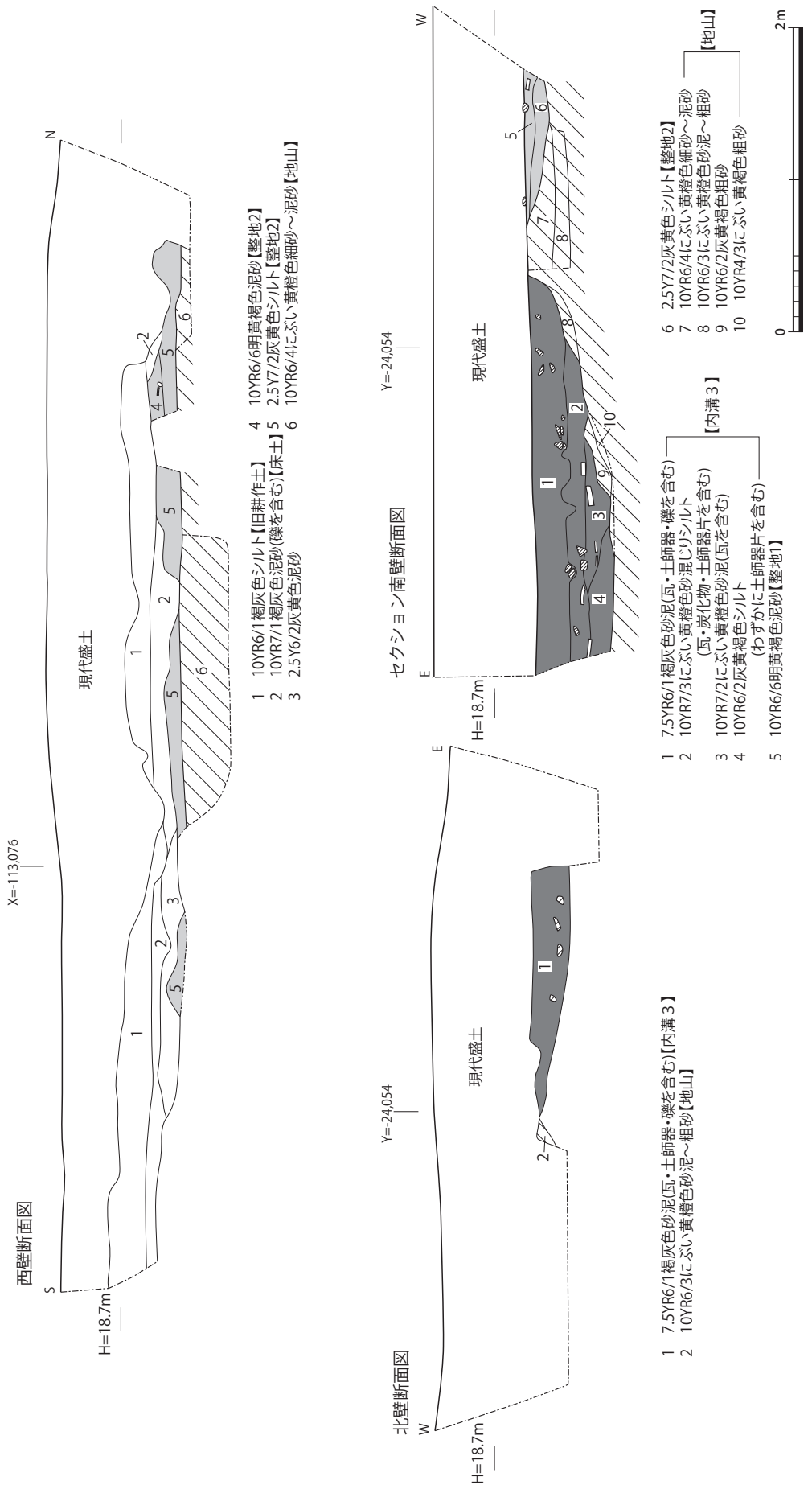


図15　第９調査区断面図（１：40）

土坑４　昨年度の発掘調査で確認した土坑４である。検出面で南北1.9ｍ以上，東西0.5ｍ以上，深さ0.23ｍ以上であり，多くが近代撹乱によって削平されている。

第９調査区（図14・15）

平安時代

内溝１　調査区の中央から東側にかけて検出した南北方向の溝である。検出位置から西寺西面築地の内溝と判断した。幅が約２～2.6ｍ，深さが約0.5ｍで調査区外に展開する。溝の西肩は緩やかに下がり，底部に凹凸が認められる。埋土は大きく①～④層に分層することができ，最下層は滞水を示す灰黄褐色シルト（図15-セクション南壁４層）であるが，主体は瓦片・土師器片・礫を含む褐灰色泥砂（図15-セクション南壁２層）やにぶい黄橙色砂混じりシルト（図15-セクション南壁３層）である。また，内溝は人為的に埋め戻され，途中で瓦などを投棄されたと考えられる。埋土から９世紀後半頃の土師器片や瓦片が出土している。

整地２　調査区の中央から西側にかけて検出した整地層である。検出範囲が築地基底部から犬行にかけてであることから，西寺の造寺に伴う整地層と判断した。整地層は部分的に明黄褐色泥砂（図15-西壁４層）と灰黄色シルト（図15-西壁５層）に分けることができる。

４．遺　物

（１）遺物の概要（表２）

出土した遺物は整理箱にして20箱である。内訳は弥生～古墳時代の土師器・須恵器，平安時代の土師器・須恵器・輸入陶磁器・瓦類などであるが，８割以上が西寺所用瓦である。今回は西寺に関連する遺物のみ報告する。なお，第８・９調査区では内溝１・３から平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器が出土しているが，細片であり図化することができなかった。小片での観察ではあるが，昨年度調査で出土した土器類と同じ時期に属するものと判断した。

（２）土器類（図16）

第７調査区

壺地業　古墳時代の土師器・須恵器，平安時代の土師器・須恵器などが出土した。版築土に混在していたため，細片が多く図化することができた資料は非常に少ない。平安時代の土器類の使用・

表２　遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代	土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦類		土師器１点，須恵器５点，灰釉陶器１点，瓦類13点，		
合計		19箱	20点（２箱）	11箱	６箱

※コンテナ箱数の合計は，整理後，Ａランク遺物の抽出，詰め直しのため，出土時より２箱多くなっている。

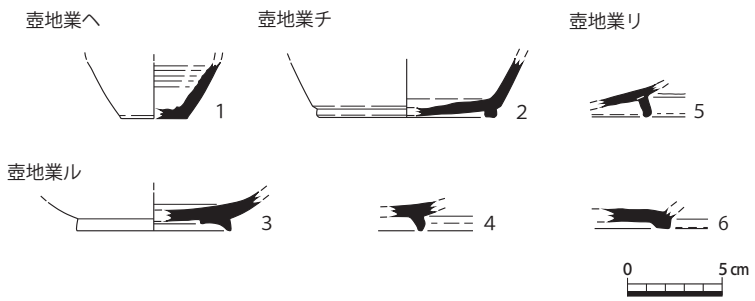


図16　第７調査区壺地業出土土器実測図（１：４）

生産年代はおおよそ９世紀中頃に限定することができる。遺構の説明で述べた通り，版築土内には瓦片も含まれており，硬質な須恵器なども構築材として利用している可能性がある。１は須恵器の壺の底部である。底部には糸切痕が残り，内面はナデている。京都Ⅱ期古に属する。２は須恵器杯Ｂの底部である。高台は削り出している。京都Ⅱ期中に属する。３・４は灰釉陶器椀の底部である。釉薬が残されていないが灰釉陶器と判断した。３は蛇ノ目高台で，４は貼り付け輪高台である。京都Ⅱ期中に属する。５は灰釉陶器椀の底部である。内面に僅かに釉薬が残る。京都Ⅱ期古に属する。６は須恵器杯の底部である。京都Ⅱ期古に属する。

また，点数は少ないが古墳時代の須恵器も出土しており，唐橋遺跡に関わる遺構は確認できなかったが，近接した住居域からの流入と考えられる。

（３）瓦類

瓦類は，軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土している。最も出土量が多いのは第９調査区内溝１で，である。その他に壺地業内からも出土するが小片が多い。

軒丸瓦（図17）

１　複弁蓮華文軒丸瓦である。中房は大きく平坦で１＋６の蓮子を配す。花弁は子葉が盛り上がり，輪郭線は中房圏線と間弁が接す。外区には珠文が巡り，周縁との境に段がある。周縁内側が傾斜する。瓦当成形は瓦当貼り付けで，瓦当裏面に補足粘土を加える。瓦当側面にナデ，裏面にナデを施す。胎土は少量の砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は灰色を呈す。第７調査区土坑44から出土した。時期は平安時代前期である。

２　複弁蓮華文軒丸瓦である。中房は平坦で蓮子を配す。花弁は子葉が盛り上がる。外区には珠文が巡る。周縁との境に段差がある。胎土は砂粒を含み，焼成は硬質。２次焼成を受ける。第９調査区内溝１から出土。

３　複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房は凹型で１＋６の蓮子を配す。花弁の輪郭線は圏線に接する。瓦当成形は瓦当貼り付けで，瓦当裏面に補足粘土を加える。胎土は多量の砂粒を含み，焼成は軟質で，色調は灰色を呈す。第７調査区土坑９から出土。

４　複弁蓮華文軒丸瓦である。中房は凸型で１＋６の蓮子を配す。花弁は細弁で輪郭線は間弁と接する。外区には圏線と珠文が巡る。周縁との境に段がある。周縁内側が傾斜する。瓦当成形は瓦当貼り付けで，丸瓦接合部に溝を設け，瓦当裏面に補足粘土を加える。瓦当側面下半部は周縁に沿ってナデ，上半部は縦ナデ，瓦当裏面にナデを施す。一部の瓦当側面の瓦当側に凹みが認められる。裏面胎土は多量の砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は灰色を呈す。第９調査区溝１から出土。

軒平瓦（図17）

5　唐草文軒平瓦である。唐草が外側に向かって展開し各単位が独立する。主葉は大きく巻き込む。外区に珠文が巡る。顎部は横ナデ，顎部裏面から平瓦部凸面にかけて縦ケズリを施す。胎土は多量の砂粒を含み，焼成は硬質で色調は褐色を呈す。第９調査区内溝１から出土。

6　唐草文軒平瓦である。唐草が外側に向かって展開し各単位が独立する。主葉は巻き込み，先端が水滴状になる。外区に珠文が巡る。瓦当部から平瓦部凹面にかけて横ナデ，顎部に横ナデ，顎部裏面から平瓦部にかけて縦ケズリを施す。胎土は多量の砂粒を含み，焼成は硬質で色調は灰色を呈す。瓦当左側に笵傷が認められる。第７調査区土坑５から出土。

7　均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは三葉と左右から上向きに唐草が派生する。外側に向かって展開する唐草文の各単位は離れ，主葉は大きく巻き込み，先端は水滴状になる。支葉の先端はＹ形を呈す。外区に珠文が巡り僅かに圏線と接する。凸面側の周縁内側が傾斜する。凹面は布目を残し，瓦当付近に横ナデ，側面側は僅かに面取りを施す。顎部裏面から平瓦凸面にかけて縦ケズリ，側面にケズリを施す。胎土は多量の砂粒を含み，焼成は硬質で色調は黒色を呈す。第７調査区重機掘削中に出土。

8　唐草文軒平瓦である。残存状況が悪く文様構成はほとんど明らかではないが，唐草文である。唐草の先端は大きく巻き込み，支葉の先端がＹ形を呈す。外区には珠文が巡る。第７調査区土坑５から出土。

9　唐草文軒平瓦である。残存状況が悪く文様構成はほとんど明らかではないが，中心飾りは対向した「C」字で，外側に向かって唐草が展開する。外区には珠文がなく圏線のみが巡る。凹面は布目を残し，瓦当部よりに横ナデを施す。胎土は砂粒を含み，焼成は硬質で色調は灰色を呈す。第９調査区内溝１から出土。

10　均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは上向きの唐草を配し，外側に向かって唐草が展開する。各単位は独立し主葉の先端が水滴状になる。凹面は布目を残し，瓦当部よりに横ナデ，顎部に横ナデ，裏面から平瓦凸面にかけて縦ケズリ，側面にケズリを施す。胎土は多量の砂粒を含み，焼成は硬質で色調は灰色を呈す。第８区調査区撹乱から出土。

平瓦　（図18）

11は凸面は縄叩き，凹面に布目を残し「西寺」を押印する。端面付近は横ナデを施す。狭端面ナデを施す。多量の砂粒を含み，焼成は硬質。第７調査区土坑４から出土。

12は凸面は縄叩き，凹面は布目を残し，側面側に縦ナデを施す。凹面の広端よりに「西浄」の押印が認められる。側面はケズリ，狭端面にナデを施す。多量の砂粒を含み，焼成は硬質。第９調査区内溝１から出土。

13は凸面縄叩きとナデ，凹面に布目が残る。側面の凹面側に分割截面，凸面側に分割破面が残る。胎土は砂粒を含み，焼成は硬質。第７調査区土坑５から出土。

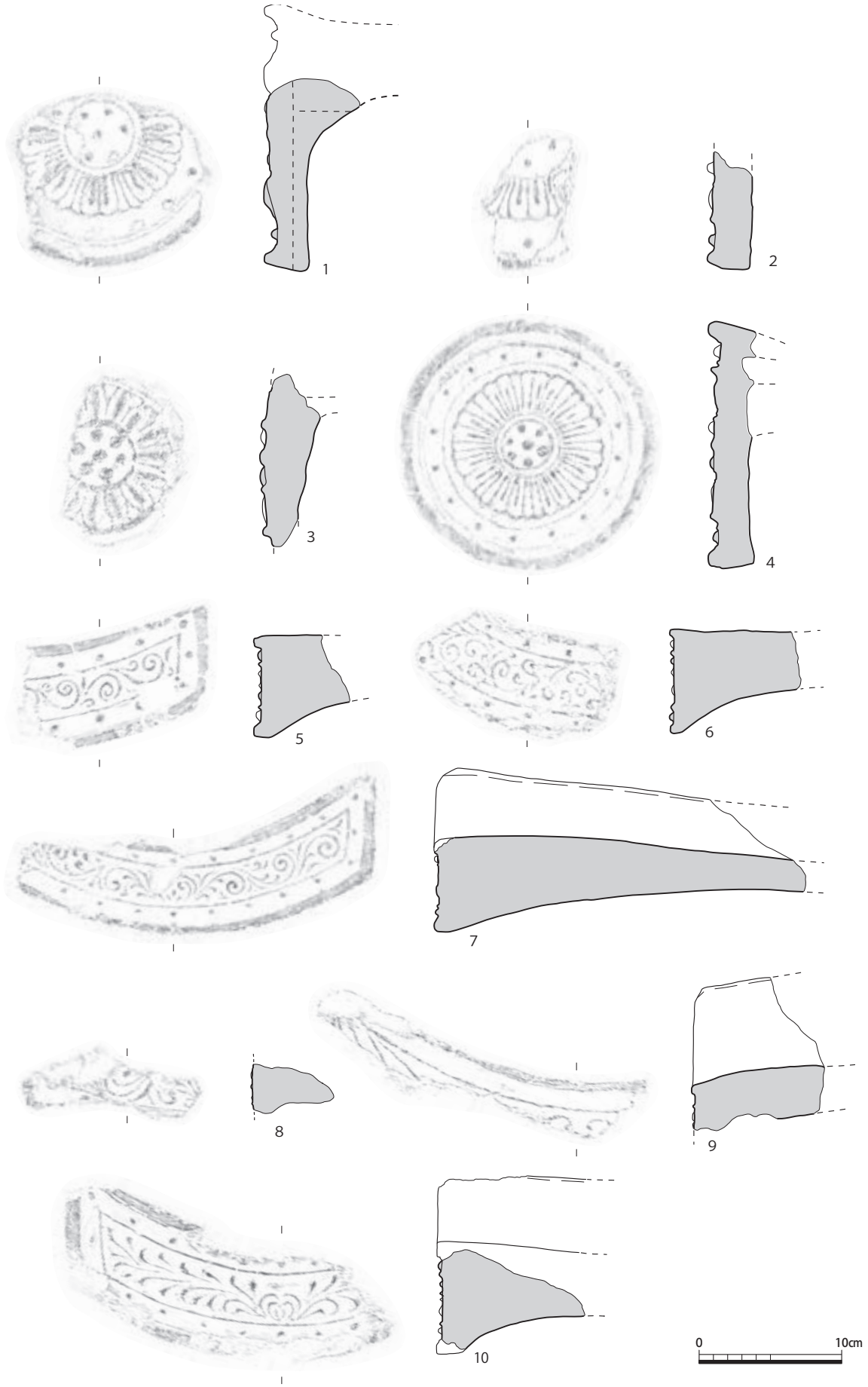


図17　出土軒瓦実測・拓影図（1：4）

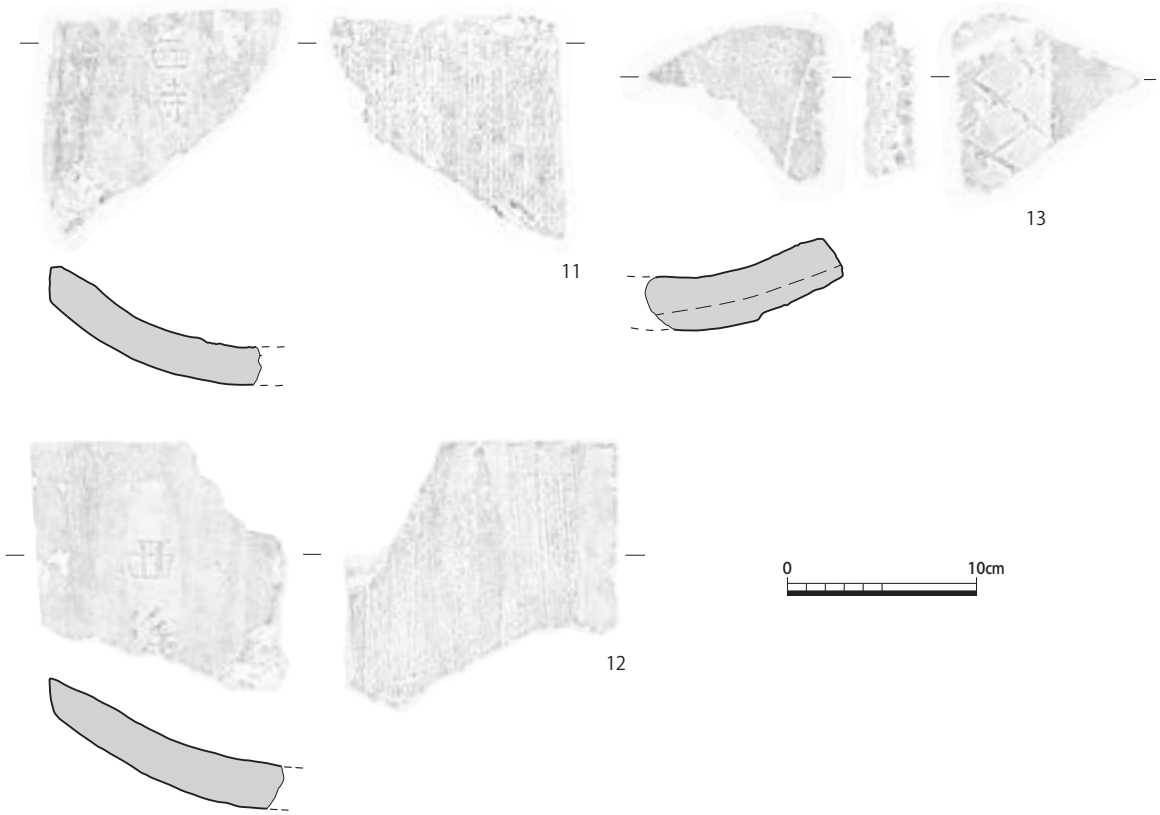


図18　出土平瓦実測図・拓影（1：4）

（4）その他

鋳造関連土坑５から炉壁が出土した。

炉壁　炉壁は厚いスサ入り粘土を紐状にして積み上げて構築している。凸面には指圧痕が残る。また，一部の凹面には溶解痕が認められることから，炉の底部付近の可能性がある。厚さは平均にして７㎝であり，昨年度出土したものより薄いが，弧がほとんど認められないことから，大型の炉であった可能性が高い。

5．まとめ

本調査によって伽藍地の南西に基壇建物があったことが明らかになった。さらに，鋳造関連遺構の規模が確定し，寺域西限に関する新たな成果も得ることができた。最後にこれまでの調査成果を踏まえてこれらについて整理しておく。

（1）基壇建物の規模（図19・表３）

第１・４調査区（34次調査）で壺地業を確認していないことから，壺地業が第７調査区東端の１列よりも東側に展開することはない。したがって，東西規模は３間で確定する。一方，壺地業を確認していない第３調査区とは約４ｍの間隔があり，壺地業の芯々距離が約３～3,3ｍ（9.9～10.89尺）あることを踏まえると，当該敷地の南境に壺地業がもう１列分成立している可能性がある。したがって，南北規模が南側にさらに１間多い３間であったとも考えられる。すなわち，基壇

建物規模は東西３間，南北２間もしくは南北３間であったと推測できる。詳細は後述するが，基壇建物が塔であったと推測できることから，後者の可能性が最も高いと考える。

柱間寸法は壺地業に礎石や根石などが残されていないことから正確な数値は明らかではないが，仮に塔跡とし壺地業の中心に礎石があったとすると中央間の芯々が約3.3ｍ（10.89尺）で，脇間の芯々が約３ｍ（9.9尺）となる。仮に南北３間だとすると一辺が約9.3ｍ（30.69尺）の建物に復元することができる。

（２）堂塔の比定

古代における地方寺院の中には，いわゆる定型化した伽藍配置を採用せずに，地形に合わせて建物が配置されている場合がある。一方，西寺は平安京内に建立が認められた国家寺院であり，とくに従前から東寺と同じ基本計画のもとに同形式の堂塔が建てられていたと考えられてきた[15]。しかし，講堂の発掘調査（36次）では，西寺講堂の規模と構造が東寺講堂と異なることが明らかにされた（Ⅳ章参照）。その一方で堂の位置は朱雀大路を境にしてほぼ左右対称の位置にあることも確認された。このようなことから，従前のように直ちに西寺の堂塔が東寺の堂塔と同規模と同構造であったと考えることはできなくなったが，堂舎の位置関係がほぼ同じであることから，両寺院の基本的な造営計画は共通していたと考える。そこで，東寺の堂塔を参考にしながら基壇建物の堂塔比定を行う。

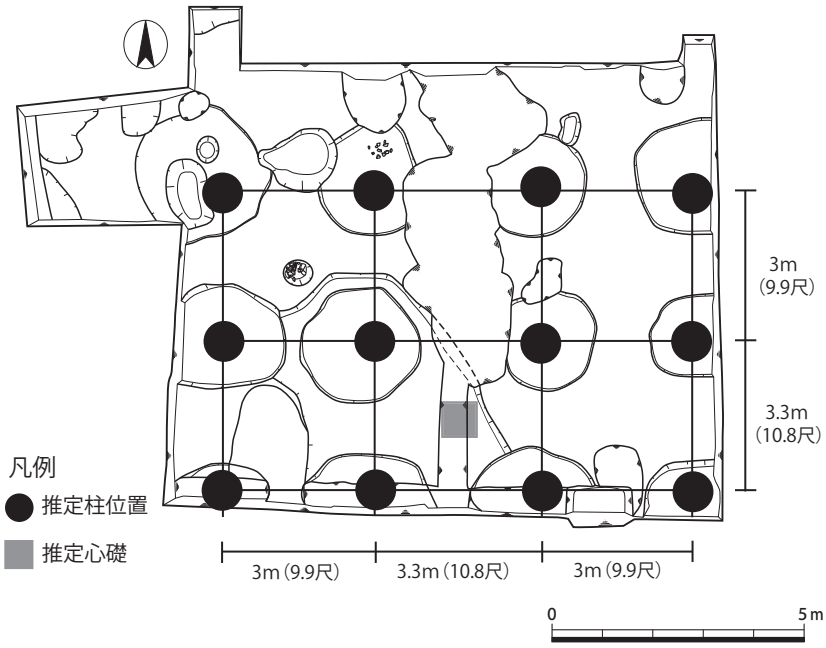


図19　礎石建物推定柱位置（１：150）

堂塔比定　今回確認した壺地業は楕円形を呈しているが，径が約２～2.8ｍあり平面形が異なるものの平安宮豊楽殿とほぼ同規模である[16]。勿論，地業の規模は基盤土壌に影響されるが，講堂や食堂などの大型の堂舎に伴う地業が確認さ

表３　平安時代創建の主要塔柱間寸法一覧

寺院	所在	年代	柱間寸法		備考
			側柱 - 四天柱	四天柱 - 四天柱	
西寺塔	京都府京都市	９世紀中頃～後半	（３ｍ（9.9尺））	（3.3ｍ（10.8尺））	本調査
東寺五重塔	京都府京都市	1644年に再建	3.06ｍ（10.1尺）	3.34ｍ（11.0尺）	創建は９世紀中～後半
醍醐寺五重塔	京都府京都市	952年	2,12ｍ（７尺）	2.42ｍ（８尺）	現存
当麻寺西塔（三重塔）	奈良県葛城市	９世紀	1.60ｍ（5.3尺）	2ｍ（6.6尺）	現存
大安寺西塔	奈良県奈良市	８世紀後半～９世紀初頭	3.93ｍ（13尺）	4.24ｍ（14尺）	発掘調査成果

れていないことを勘案すれば，本調査で確認した建物が基礎に過大な負荷のかかる構造であったと推測できる。一方，推定建物規模は一辺9.3ｍと講堂などに比べると小規模である。したがって，平面規模が小さく基礎構造に荷重のかかる中高層建物であった可能性が高い。

また，柱間寸法が現存している東寺の五重塔とほぼ同規模である（表３）。現存の東寺五重塔は，寛永21年（1644）に再建されているため[17]，直ちに同一建物があったとすることはできないが，史料には五重塔の移築に関する記述はなく，創建時から位置は変わっていないと考えられている。勿論，再建時に基壇上面や基壇化粧などと供に礎石も修理されている可能性はあるが，全ての礎石を新たに据え替えたとは考え難く，仮に不同沈下などによる礎石の大規模補修があったとしても，位置を大きく移動することはない。このようなことから，柱間寸法の僅かな変更は考慮に入れるべきではあるが，礎石の位置に大きな変更はないものと推定できる。

総柱建物としては宝蔵などの可能性もあるが，構造が平屋であり柱間寸法なども大きく異なることから，基壇建物は塔の可能性が最も高いと判断する[18]。

心礎　塔と仮定すると問題となるのが心礎である。古代の塔における最大の特徴は，建物の中心に心柱があることであり，基壇上面には心柱を支える心礎が据えられる。しかし，本調査では，推定心礎の位置に壺地業や心礎据え付け穴を確認することが出来なかった。我が国初の本格的寺院である飛鳥寺の塔は，心礎が地表面の下部に据えられる「地下式心礎」であるが，箱崎和久氏が全国の塔跡の発掘調査成果を集成した表を見ると，８世紀頃から徐々に地表面より上部に心礎が据えられる「地上式心礎」に変化していくことが確認できる[19]。とくに，平安時代の塔はほぼ全て「地上式心礎」であり，現存する醍醐寺五重塔や東寺五重塔も全て「地上式心礎」である。したがって，西寺の塔も「地上式心礎」であった可能性が高く，心礎据え付け穴の掘削深度が地表面まで達しなかったと考えられる。また，古代の塔は構造的に心柱が塔身から独立しており，塔の荷重は四天柱と側柱によって支持されているとする[20]。つまり，心礎は心柱自重と相輪の荷重のみが加わっていることとなり，心礎の位置に壺地業を施工されなかったと推測する。

（３）壺地業と地業

壺地業は建物規模や土地条件に合わせて工法が異なっていたことが指摘されている[21]。本調査では基壇が残っていなかったことから，地業と基壇との関係は不明であるが，現存する東寺五重塔の基壇高が約1.5ｍであり，西寺の塔基壇も同規模であったと仮定すると，壺地業の底から基壇上面までの高さが約2.6ｍとなる。壺地業の平面規模が大きく基壇上面からの掘削も可能ではあるが，ほぼ垂直に掘り込まれていること，開削後に石を据えながら版築を行なうことを勘案すれば，基盤土もしくは基壇構築途中で壺地業を施工したと推測できる。

ところで，壺地業は平安宮豊楽殿などの宮城域の大型建物，寺院では薬師寺食堂（奈良県）[22]で確認されているが塔での確認事例は無い[23]。とくに，京都市内では，平安時代に創建された塔の発掘調査事例が少なく，塔に関わる土木技術がどのようなものであったのかは不明である。このような中にあって，奈良時代に造営された塔には見られない工法を用いて地業がなされているのは，奈

良時代から平安時代にかけての土木技術の変遷を検討する上で貴重な成果と言える。

地業38　地業38は壺地業ヘ・チ・リ・ルによって掘り込まれていること，版築の単位が0.04～0.16ｍと壺地業と比べて緻密であることから，塔の造営以前の何らかの建物に伴う地業であった可能性がある。しかし，掘削底が壺地業とほぼ同じ約1.1ｍであり，底部に石を据えて，版築工法によって埋め戻しているなどの工法上の共通点が多く認められる。したがって，地業38も塔に関わる地業と推測した。地業の検出当初は地業範囲が推定心礎の位置と重複することから，心礎に伴う地業とも考えた。しかし，範囲の大半が心礎位置から外れ推定四天柱（壺地業ヘ・チ・リ）まで広がることから，可能性は低いと判断した。地業の範囲が調査区外に展開する上に，断割り調査範囲が限られていることから結論は避けるが，地業は地下水を遮断する効果を期待していたと想定する。西寺境内ではこれまでに数箇所で井戸跡を確認しており（２・12・18・22・25次），井戸底の標高値がおおよそH=17.2～17.8ｍである。今回確認した壺地業の底がH=17.4～17.6ｍであり，井戸底の標高値と大きく変わらない。したがって，壺地業の底部は湧水層に達していたと考えられ，掘削時に地業内には水が湧き出していたと推測できる。とくに壺地業リには地業底部に帯水の可能性のある堆積土（図11-南壁25層）を確認することができる。さらに，第１・３・４調査区では数箇所で落込みを確認しており，幾筋も地下水の道があったと考えられる。このような基盤土壌の条件の中，壺地業を効率良く施工するために，予め地下水の道付近の土を開削し，壺地業よりも精緻な版築を施すことによって地下脈を遮断した可能性を指摘しておく。

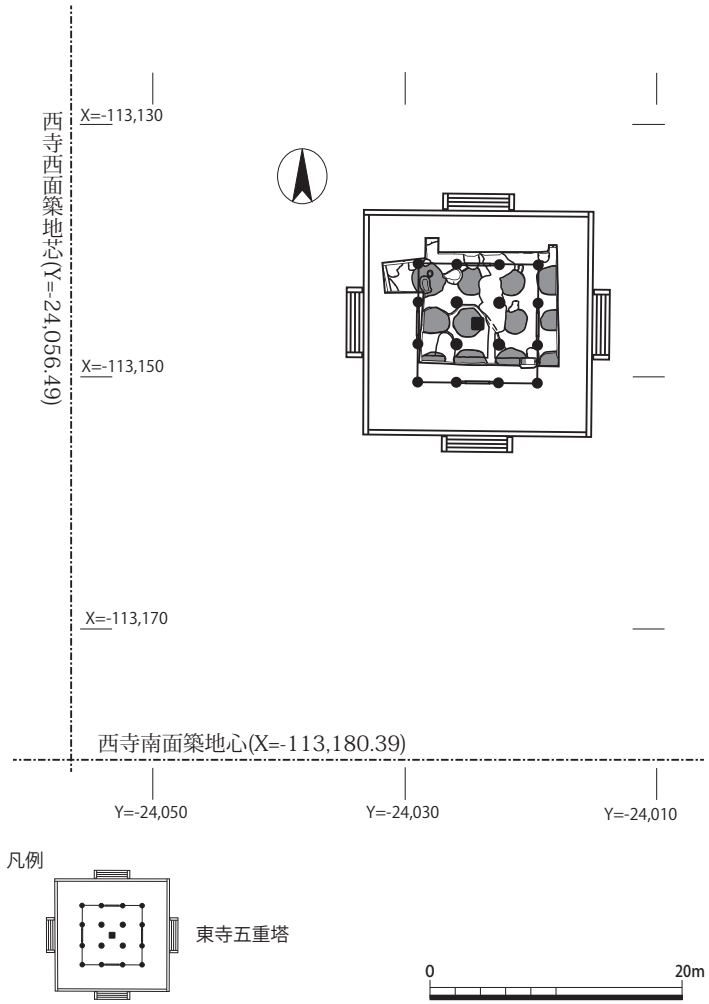


図20　西寺壺地業と東寺五重塔平面図の重ね合わせ図（１：100）

（４）塔の位置（図20）

本調査によって，西寺の塔が東寺とは左右対象地に建立されていた可能性が高まった。壺地業のほぼ中心に礎石が据えられていたとすると，塔の北側柱列（東西）の位置がX=-113,142.52ｍとなり，西側柱列（南北）の位置がY=-24,027.6ｍとなる。当該地付近の推定九条大路北築地芯（西寺南面築地芯）がX=-113,180.39ｍで，推定西大宮大路東築地芯（西寺西面築地芯）が

Y=-24,056.49ｍである。したがって，塔の西側柱列が西面築地芯から東に28.89ｍに位置し，北側柱列が南面築地芯から北に37.87ｍの位置にあたる。一方，東寺五重塔の北側柱列がX=-113,137mとなり，東側柱列がY=-22,937.8ｍとなる。推定九条大路北側築地芯（東寺南面築地芯）がX=-113,175.95ｍで，発掘調査で明らかになった東寺東面築地芯（東大宮大路西築地芯）が，Y=-22,910.28ｍである。したがって，塔の東側柱列が東面築地芯から西に27.52ｍ，北側柱列が南面築地芯から北に38.95ｍの位置にあたる。このように，東寺と西寺では平安京条坊復元モデル60[24)]を基準にしてそれぞれ隣接する築地芯から塔の柱位置までの距離を比較すると，おおよそ１～1.3ｍの誤差が生じる。平安京条坊復元モデル60は約１ｍの施行誤差があるとされていることから，今回の明らかになった誤差は施工誤差の範囲として理解することができる。今後は，主要堂塔及び回廊等で礎石の位置が明らかになっている事例を精査し，西寺と東寺の造寺基準が一致しているのか否かを明らかにする必要がある。

（５）西寺西面築地内溝

第８・９調査区で西面築地内溝を確認することができたことにより，今回の一連の範囲確認調査では合計３か所において内溝を確認したことになる。しかし、いずれの調査区においても内溝の東肩口を確認することができなかった。内溝の検出幅は２～6.26ｍあり，21次調査を踏まえると最大で東西6.8ｍ以上で開削されたことになる。ただし，未報告ではあるが26次調査では幅約2.5ｍの内溝を検出しており，九条坊門小路や信濃小路に開口していた門を境にして，内溝の規模が変わっていた可能性が示唆される。勿論，26次調査で確認された内溝の年代についての報告がなされていないため，時期の異なる内溝を比較している可能性があり，今後の課題である。

内溝の底は西肩から２～４ｍ辺りが最も深くなり，緩やかに東側に向って上っていく。また，溝底は北側から（21次，第９調査区，第６・８調査区），H=18.4ｍ，18.1ｍ，18.05ｍと南側に向って低くなっていることから，寺域内の排水が地形に沿って北から南へ行なわれていたと推測できる。ただし，第９調査区から第６・８調査区にかけての高低差が殆どなく排水機能は低かったと考えられる。出土遺物は平安時代前期の瓦類が中心であるが，９世紀中～後半頃の土器類も含まれており，内溝が遅くとも９世紀後半には埋め戻されたと推測できる。また，瓦類は内溝の西肩付近から底部にかけて散在し，多くが破片である。したがって，西面築地の傾倒に伴って瓦が散在したのではなく，内溝を埋め戻す際に人為的に投棄したものと考えられる。また，内溝の埋土は固く締まっており，人為的な埋め戻しの可能性を補強する。

（６）鋳造関連遺構

鋳造関連遺構は，昨年度の調査と合わせて３か所で確認した。炉跡や鋳型片の携帯型成分分析したところ，鉄分を示す値が非常に高く鉄製品を生産していたことが明らかになった。さらに，遺構埋土や遺構周辺に鍛造剥片が認められないことから鍛造ではなく，鋳造による生産であったと推測できる。また，鋳造関連遺構１・４から大型の炉壁や鋳型片が出土するのに対し，鋳造関連遺構

２は炭化物や炉壁や鋳型の小片が多量に出土する。攪乱を利用して断面観察したところ，鋳造関連土坑１の遺構深度が明らかに鋳造関連土坑２より浅く，両遺構の性格が異なる可能性が高い。一般的に鋳造製品は溶解炉で溶解した液体を鋳型に流し込んで生産することから，遺構深度の浅い鋳造関連遺構１が溶解炉，遺構深度の深い鋳造関連遺構２が鋳型の可能性を想定することができる。仮に鋳造関連遺構２が鋳型を据えた土坑だと仮定すると一辺が約4.2ｍと大きく，大型の鉄製品を生産していた可能性がある。

昨年度の調査成果にあるように，鋳造関連土坑は９世紀後半に埋没した内溝を掘り込んで成立していることから，９世紀後半以降に生産を開始したと考えられる。第７調査区で確認した推定塔跡も９世紀後半頃に造営を開始したと考えられ，塔に関わる鉄製品を生産していた可能性が高まったと言える。（鈴木久史）

註

1）西寺には講堂北側に東西方向の築地が巡り（中仕切り築地塀），南側と北側の空間を区別している。杉山氏は八町すべてを　指し示す用語として「寺域」を用い，南側は仏と直接それに関わる僧侶の場所（聖域）とし，北側は寺院経営するのに必要な事務管理を行う場所（俗域）であったとする。さらに南都諸寺の資財帳や発掘調査成果から，北側には大衆院・政所院・花園院・倉垣院があったとする（「東寺と西寺」『平安京提要』㈱角川書店　1994年）。一方，古代寺院では，外周の区画内を「寺院地」とし，南大門からの区画内を「伽藍地」，寺院地から伽藍地を除いた空間を「付属地」と称することがある（山路直充「寺の空間構成と国分寺‐寺院地・伽藍地・付属地」『国分寺の創建思想・制度編』，吉川弘文館，2011年）。杉山氏が比定した院ついては，再検討する余地があると考えるため，本報告では個別具体的な堂塔を示さない限り，中仕切り築地塀から南側を伽藍地，北側を付属地と称す。また，とくに断りのない限り，伽藍配置及び堂塔の復元は杉山信三　「東寺と西寺」『平安京提要』，㈱角川書店，1994年に拠る。

2）『類聚国史』巻一〇七 左右京職 延暦十八年四月四日条。

3）鈴木嘉吉「三．寺宝概説（建築）」『新東宝記』，真言宗総本山東寺，1995年。

4）『日本後紀』弘仁四年一月十九日条。

5）『元亨釈書』巻二慧解一。

6）『日本紀略』天長九年七月五日条。

7）『日本三代実録』貞観六年二月十六日条。

8）『日本紀略』正暦元年二月二日条，同年八月二十六日条。

9）杉山信三『史跡　西寺跡』鳥羽離宮跡調査研究所，1979年。

10）追塩千尋「西寺の沿革とその特質」『北海学園大学人文論集』第23・24号，北海学園大学人文学会，2003年。

11）『明恵上人行状（漢文行状）』巻中，『百錬抄』天福元年十二月四日条，『明月記』天福元年十二月二十五日条。

12）鈴木久史「Ⅰ平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡・唐橋遺跡」『平成29年度京都市内発掘調査報告』京都市文化市民局　2018年。

13）鈴木久史「Ⅰ平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡」『平成30年度京都市内発掘調査報告』京都市文化市民局　2019年。

14）エネルギー分散型蛍光X線による分析にあたって北野信彦教授（龍谷大学）にご協力して頂きました。帰して感謝を申し上げます。

15）註９と同じ。

16）西森正晃「Ⅳ　平安宮豊楽殿跡・鳳瑞遺跡」『平成30年度京都市内発掘調査報告』京都市文化市民局　2016年。

17）山岸常人「五重塔」『新東宝記』，真言宗総本山東寺，1995年。

18）東寺宝蔵の柱間寸法は梁間1.96ｍ（6.5尺），桁行2.27ｍ（7.52尺）である。

19）箱崎和久「古代寺院の塔遺構」『文化財論叢Ⅳ 奈良文化財研究所学報第92冊』奈良文化財研究所　2012年。

20）西澤英和・金多潔「層塔の構造形式に関する力学的な考察-鉄骨による構造補強を巡って-」『建築史学第13号』1989年。

21）國下多美樹「基礎構造からみた古代都城の礎石建物」『長岡京代文化論叢Ⅱ』中山修一先生喜寿記念事業会　1992年。

22）箱崎和久ほか『薬師寺 旧境内保存整備計画にともなう発掘調査概報』（独）奈良文化財研究所 2013年

23）註19の箱崎論文では，下野薬師寺の塔が壺地業に分類している。確かに断面図を見ると壺地業とも考えられる掘り込みを確認できるものの，報文では掘込み地業としていることから，本報告では掘込み地業として認識しておく（大川清ほか『栃木県南河内町下野薬師寺跡 史跡整備に伴う発掘調査』『南河内町埋蔵文化財調査報告第11集』南河内町教育委員会 1996年）。

24）条坊遺構の統計的解析と平面直角座標系による平安京条坊復元案。

Ⅵ　山科本願寺跡（23次）

1．調査経過（図１～７）

本調査は，京都市山科区西野山階町37-2，37-3地内で実施した山科本願寺跡の範囲確認調査で，23次調査となる。今回の調査は平成22年度から平成26年度にかけて行なわれた山科本願寺の中核となる御本寺内の調査（16～21次調査）の北側で，「御本寺」の北端部にあたる。また西隣接地には，「京都を彩る建物や庭園」に指定（㈹１-047号）されている浄土真宗本願寺派西宗寺の檀家総代である奥田家の住宅が現存している。奥田家は敷地の北と西を土塁に囲まれており，土塁を取り込んだ主庭園と茅葺の主屋をはじめ上ノ蔵，下ノ蔵，正面には土塀を巡らせた重厚な長屋門を備えている。建物の主部の建築年代は元禄15年（1702）とされている。このことから今回の調査では，土塁との関係性を踏まえた，「御本寺」の北端部の土地利用の解明が期待された。

調査は平成29年12月３日から27日まで実施した。調査面積は駐車場部分の71㎡と土塁部分の646㎡，計717㎡である。調査の結果，山科本願寺期の柵列や土坑のほか，山科本願寺造営以前に遡る可能性のある遺構を検出した。また土塁は地形測量と断面観察を行ない，土塁の現状記録と構築方法を確認した。なお保存を前提とした確認調査であることから，遺構の掘削は埋没時期や性格を解明するための最低限度にとどめ，埋め戻しの際には土嚢と砂で遺構面を保護している。

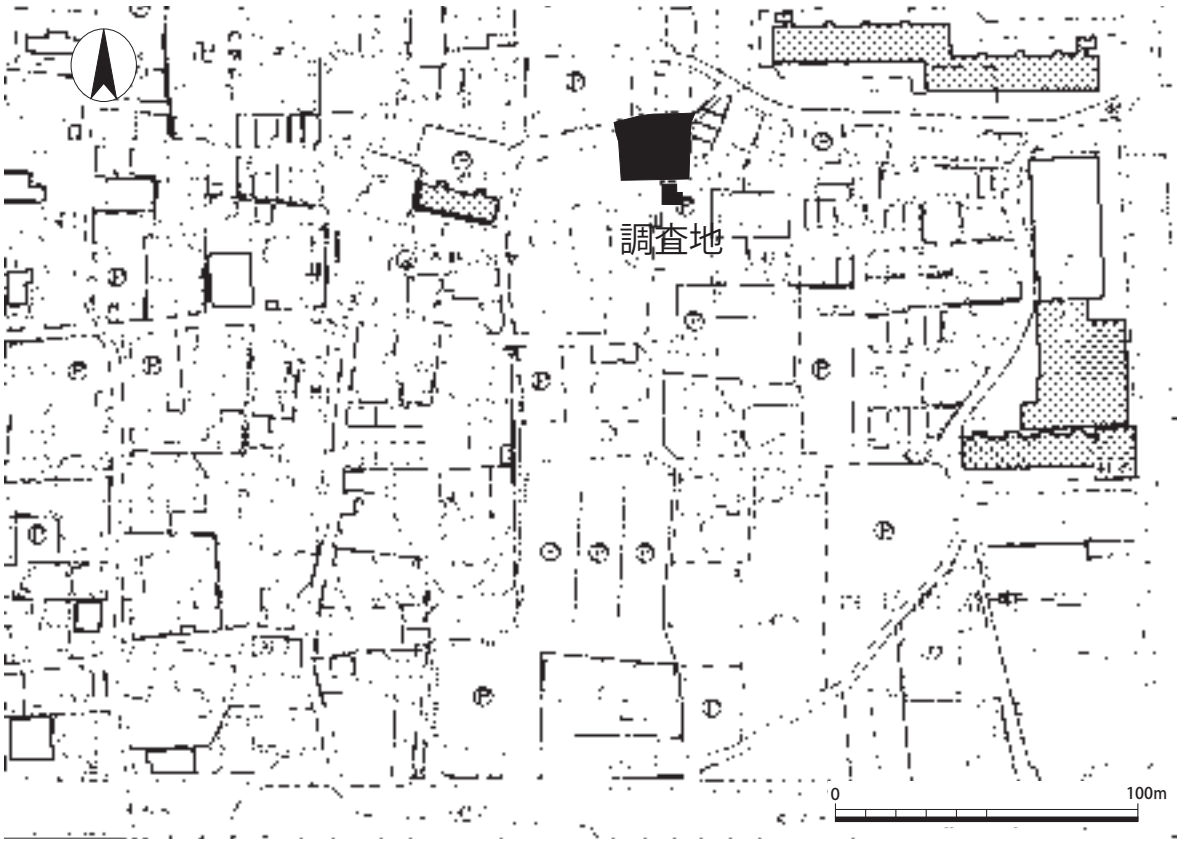


図１　調査地と周辺調査位置図（１：2,500）

図２　調査前全景（南から）

図３　調査地と土塁の関係（南東から）

図４　調査風景（南西から）

図５　埋め戻し風景（北東から）

図６　埋め戻し風景（南西から）

図７　土塁調査風景（南西から）

２．遺　跡

（１）地理的環境と歴史的環境

山科本願寺跡は，山科盆地の中央やや西寄りに位置し，山科川，四ノ宮川，音羽川，安祥寺川などにより形成された扇状地の先端にあたり，周囲より標高が高く，比較的安定した地盤を形成している。遺跡の北側には京と東国を結ぶ旧東海道があり，また東海道から分岐する奈良街道や渋谷街道が通る交通の要衝であった。遺跡の東を限る山科川は醍醐，六地蔵を経て巨椋池に流れ込み，桂

川・宇治川・木津川と合流し淀川となって大阪湾まで通じており，山科本願寺は，水運の面から見ても利便性の高い立地にあったと考えられる。

山科本願寺は，文明10年（1478）に浄土真宗中興の祖・蓮如上人によって造営が開始された寺内町である。文明12年（1480）には「御影堂」の棟上，翌13年には「阿弥陀堂」の棟上が行われ，文明15年（1483）までに「向所」「寝殿」などを含めた主要堂舎が揃ったと考えられる。寺域は主要堂舎のある「御本寺」を中心に，有力末寺の坊舎が置かれた「内寺内」，門徒の居住区などがある「外寺内」が広がる３つの郭で構成され，要所には「折れ」を設け，それぞれの郭を土塁と濠で囲み，自然河川を利用して防御施設とした環濠城塞都市でもあった。その範囲は南北約１km，東西約0.8kmにおよぶ。また延徳元年（1489）には，山科本願寺から東へ約１kmの場所に蓮如の隠居所である山科本願寺南殿が造営された。蓮如は明応８年（1499）に南殿で没している。京が応仁の乱で荒廃し混乱が残るなか，山科本願寺は大いに繁栄するが，天文元年（1532），法華宗を中心として，管領細川晴元の配下，近江守護職六角定頼などの連合軍による攻撃により焼亡した。豊臣秀吉の命により山科に寺領を回復するが，本願寺が山科に戻ることはなかった。現在は遺跡の中心部を国道１号線と東海道新幹線が東西に通り，それに沿って市街地化が進んでおり，国道１号線を挟んだ北側，南側で土塁や濠の一部が山科本願寺の痕跡として，わずかに残るのみである。そのうち，山科中央公園内に残る「内寺内」と「外寺内」を限る土塁と南殿跡が平成14年に「山科本願寺南殿跡附山科本願寺土塁跡」として国史跡に指定されている。平成28年にはこれまでの発掘調査成果を基に，「御本寺」と呼ばれる本願寺の宗主空間の南側にあたる範囲を追加指定し，「山科本願寺跡及び南殿跡」に名称変更した。

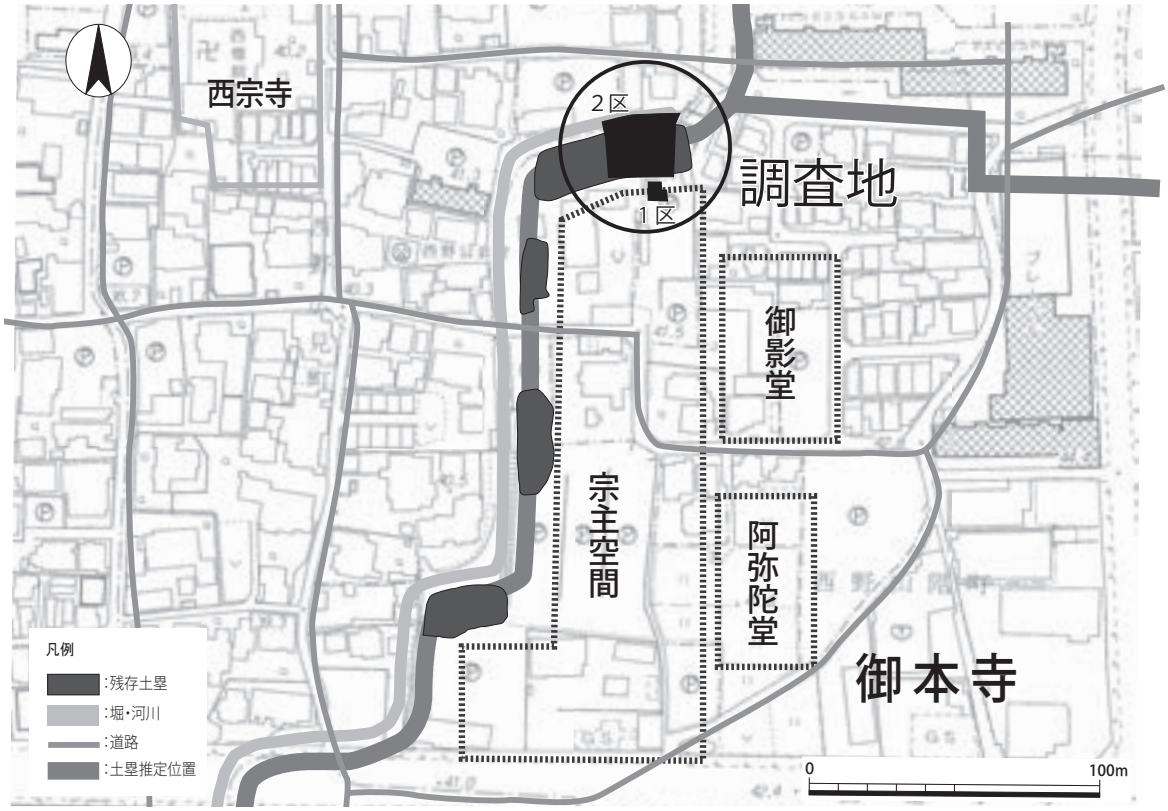


図８　調査地と山科本願寺主要施設配置想定（１：2,500）

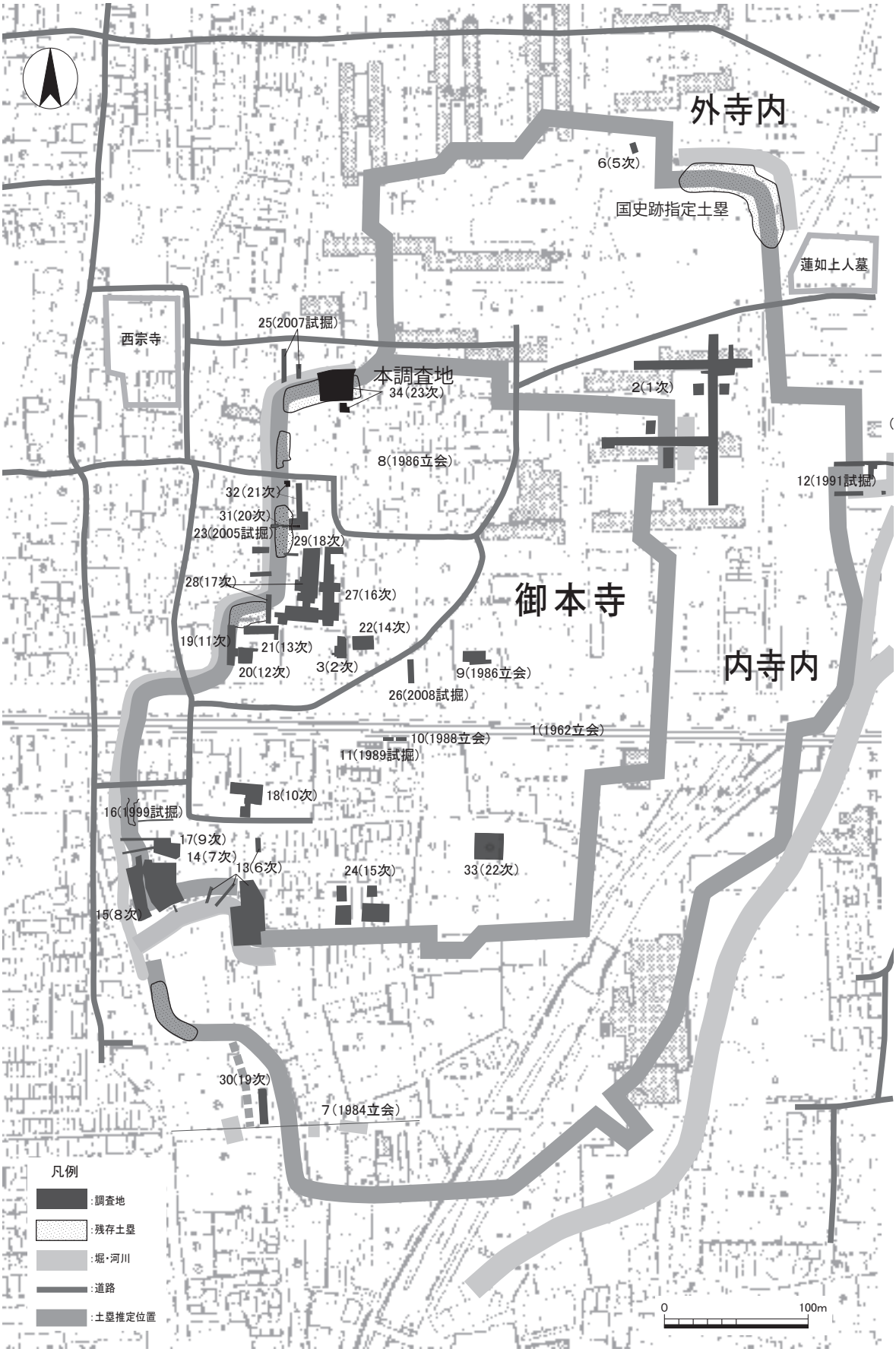


図９　主要調査位置図（１：4,000）

表１　近隣調査事例一覧（図１に対応）

No.	次数・調査名(調査記号)	所在地：山科区	調査期間	方法	概　要	文献
1	新幹線立会	西野左義長町・山階町・離宮町	1962.8.9～11.11	立会	南北方向の石組溝，暗渠，南北方向の土塁	1
2	１次調査	西野阿芸沢町・山階町・離宮町	1973.5.21～8.4	発掘	建物・鍛冶場，石垣，柵，南北方向の堀・土塁	2
3	２次調査	西野山階町	1974.10.9.～11.3	発掘	石組溝，石室，庭園の一部	2
4	３次調査(76RT-YG001)	西野今屋敷町９（安祥寺中学校）	1976.11.17～11.30	発掘	旧耕作土層	3
5	４次調査(76RT-YG002)	西野大手洗町20（山階小学校）	1977.2.14～3.5	発掘	江戸時代以降の落込み	4
6	５次調査(76RT-JN001)	西野阿芸沢町（山科中央公園）	1978.10.30～11.13	発掘	撹乱のみ	5
7	下水立会(83RT-SW061)	西野左義長町・東野舞台町ほか	1984.3.6～11.17	立会	東西および南北方向の堀，土坑群	6
8	下水立会(85RT-SW054)	西野大手洗町・今屋敷町ほか	1986.4.1.～1987.5.16	立会	南北方向の堀と土塁，土坑	7
9	(86BB-RT0109)	西野山階町12	1987.1.27～1.30	立会	東西方向の石組溝	8
10	(88BB-RT005)	西野山階町29	1988.5.30～6.2	立会	東西方向の石組溝	9
11	(89BB-RT021)	西野山階町29	1989.10.2～10.14	試掘	東西方向の石組溝	10
12	(91RT-AH001)	西野大手洗町20（山階小学校）	1991.8.2～10.18	試掘	土塁と堀の屈曲部	11
13	６次調査(96RT-HG001)	西野左義長町16ほか	1997.4.20～7.10	発掘	東西および南北方向の堀，東西方向の土塁，暗渠，建物，井戸	12
14	７次調査(97RT-HG002)	西野左義長町23	1997.7.16～9.18	発掘	鉤型に曲がる土塁と堀，建物，井戸，鍛冶場	13
15	８次調査(98RT-HG003)	西野左義長町23-1，23-4	1998.8.17～11.9	発掘	南北方向の堀と土塁，暗渠	14
16	(センターNo.60)	西野左義長町19-1ほか	1999.10.28	試掘	南北方向の土塁を測量	15
17	９次調査(00RT-HG004)	西野左義長町19-1ほか	2000.5.10～6.30	発掘	建物，溝，暗渠，土塁基底部	16
18	10次調査(04RT-HG006)	西野左義長町13-2	2005.1.17～3.18	発掘	東西および南北方向の堀，塀，柵	17
19	11次調査(04RT-HG007)	西野山階町30	2005.3.1～3.15	発掘	土塁基底部の構築状況を調査	17
20	12次調査(05RT-HG008)	西野山階町30	2005.5.11～5.25	発掘	土塁内側斜面と暗渠	18
21	13次調査(05RT-HG009)	西野山階町30	2005.5.30～7.2	発掘	土塁屈曲部，泉状遺構，炉，土取穴，暗渠	17
22	14次調査(05RT-HG010)	西野山階町28-5，28-6	2005.11.11～12.16	発掘	焼成土坑，庭園遺構，柱列，多量の輸入陶磁器，ガラス玉出土	17
23	(保護課No.05Ｓ208)	西野広見町31-1ほか	2005.9.20	試掘	御本寺西側を限る堀の西肩口	19
24	15次調査	西野左義長町25-4ほか	2006.7.31～9.15	発掘	御本寺南側を限る堀状の落込，土坑，井戸，溝，柱穴	20
25	(保護課No.07Ｓ274、275)	西野広見町5-7，5-10	2007.9.25	試掘	御本寺北側を限る堀の北肩部	21
26	(保護課No.08Ｓ103)	西野山階町11-5ほか	2008.9.1	試掘	GL-0.4mで整地層を確認	22
27	16次調査(10RT-HG012)	西野山階町30-1ほか	2011.1.11～3.11	発掘	整地面，焼土の堆積，通路状遺構	23
28	17次調査(11RT-HG013)	西野山階町30-1ほか	2011.7.21～9.30	発掘	整地面，石組溝，土塁など	23
29	18次調査(12RT-HG014)	西野山階町30-1ほか	2012.7.17～10.4	発掘	石組井戸，風呂関連遺構群，塀状遺構，土塁など	24
30	19次調査(13RT-HG016)	東野舞台町20，20-4	2013.10.28～11.25	発掘	中世の盛土または整地土，平安時代中期の建物，溝，土坑など	25
31	20次調査(13RT-HG017)	西野山階町35ほか	2014.1.20～2.7	発掘	整地土，土塁裾部	26
32	21次調査(14A001)	西野山階町35ほか	2014.7.22～9.30	発掘	整地面，土塁，堀，溝，柱穴など	27
33	22次調査(14S612)	西野離宮町40	2015.7.30～9.18	発掘	建物，埋甕，土坑などの酒造遺構，堀	28
34	23次調査(18A007)	西野山階町37-2，37-3	2018.12.3～12.27	発掘	整地土，柵，土坑など，土塁地形測量及び断面観察	本報告

（2）既往の調査（図９，表１）

山科本願寺跡では，今回の調査を含めて23次もの発掘調査とこれ以外にも多数の試掘調査，立会調査が行われ，山科本願寺に関わる整地土や遺構が見つかっている（図９・表１）。

今回の調査地周辺では，山科本願寺跡２・11～14・16～18・20・21次の調査が実施されている。２次調査では，石室や石組溝，礎石など，11・12次調査では宗主空間の南西部で南北方向の土塁基底部と石組暗渠，13次調査では，土塁の際で泉状遺構や石組溝からなる庭園遺構や小規模な炉，土取穴など，14次調査では池や石敷きからなる庭園遺構や礎石列などが確認されている。また14次調査では遺構埋土や遺構を覆う焼土層から多量の輸入陶磁器や堆黒・蒔絵などの高級漆芸品が出土している。16・17次調査では通路状遺構，柱列，集石遺構，石組溝群，土塁屈曲部，刀埋納遺構，また同敷地内の18次調査では石組井戸，風呂関連遺構群，塀，土塁などが確認されている。20・21次調査では宗主空間の中央部で南北方向の土塁基底部と整地土のほか，建物や山科本願寺期の現存土塁構築以前に遡る可能性のある堀が確認されている。

以上のように，調査地周辺では山科本願寺「御本寺」に関連する遺構が多数検出され，建物の密度の高さや庭・風呂遺構などから，調査地の南側一帯が宗主一族の居住空間および本願寺の実務空間にあたると想定されている。そしてその東側に阿弥陀堂や御影堂などの主要堂舎が位置すると推測されている。この他，「御本寺」を囲む土塁についても調査が進められている。７次調査のように土塁構築と整地が同時に行われていることが確認されている箇所もあるが，11・12・17・20・21次調査のように整地後に土塁が築かれていることが確認されている。またこれらの調査成果により，現在複雑な折れをもつ堀や土塁で囲まれる山科本願寺は，創建当初にはその姿ではなく，いくつかの変遷を経て形成されたことが明らかになるなど，新たな知見が得られている。

文献一覧（表１の文献番号と一致）

1　杉山信三・堤圭三郎「山科本願寺」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』日本国有鉄道，1965年。

2　岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第８集，1985年。

3　「山科本願寺跡１」『昭和51年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2008年。

4　「山科本願寺跡２」『昭和51年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2008年。

5　「山科本願寺跡」『昭和53年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2011年。

6　平方幸雄「山科本願寺跡」『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1987年。

7　百瀬正恒・吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年』京都市文化観光局，1988年。

8　百瀬正恒「山科本願寺跡」『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1989年。
9　久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局，1989年。
10　久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』京都市文化観光局，1990年。
11　本弥八郎「山科本願寺跡」『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1995年。
12　永田宗秀・近藤知子「山科本願寺跡１」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1999年。
13　近藤知子「山科本願寺跡２」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1999年。
14　吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成10年度』京都市文化市民局，2000年。
15　長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成11年度』京都市文化市民局，2000年。
16　吉崎　伸「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成12年度』京都市文化市民局，2001年。
17　小檜山一良・清藤玲子・柏田有香「山科本願寺跡（１）（２）（３）（４）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成17年度』京都市文化市民局，2006年。
18　柏田有香『山科本願寺跡』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2005年。
19　長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成17年度』京都市文化市民局，2006年。
20　未報告（古代文化調査会による調査）
21　家原圭太「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成19年度』京都市文化市民局，2008年。
22　堀　大輔「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成20年度』京都市文化市民局，2009年。
23　柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成23年度』京都市文化市民局，2012年。
24　柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成24年度』京都市文化市民局，2013年。
25　近藤奈央「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成25年度』京都市文化市民局，2014年。
26　近藤章子「山科本願寺跡（１）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成26年度』京都市文化市民局，2015年。
27　新田和央・馬瀬智光「山科本願寺跡（２）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成26年度』京都市文化市民局，2015年。
28　佐藤好司『山科本願寺跡・左義長町遺跡－建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』イビソク京都市内遺跡調査報告第14輯　株式会社イビソク，2017年。

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
室町時代以前	下層溝状遺構	
室町時代	整地土，柵１～３，土坑42・43，ピット群，土塁	
江戸時代～近代	土坑１～３	

３．遺　構（図10～15）

今回の調査地は奥田家東側の駐車場部分（１区）と北側の現存土塁（２区）の２箇所である。また１区は土置き場の都合上，反転調査を行った。遺構は将来的な再検証のため，完掘はせず，半裁や断割りにとどめたものが多い。そのため規模や深さの値は，確認できた範囲の値になる。以下，主要遺構について報告する。

（１）１区（駐車場部分）

基本層序

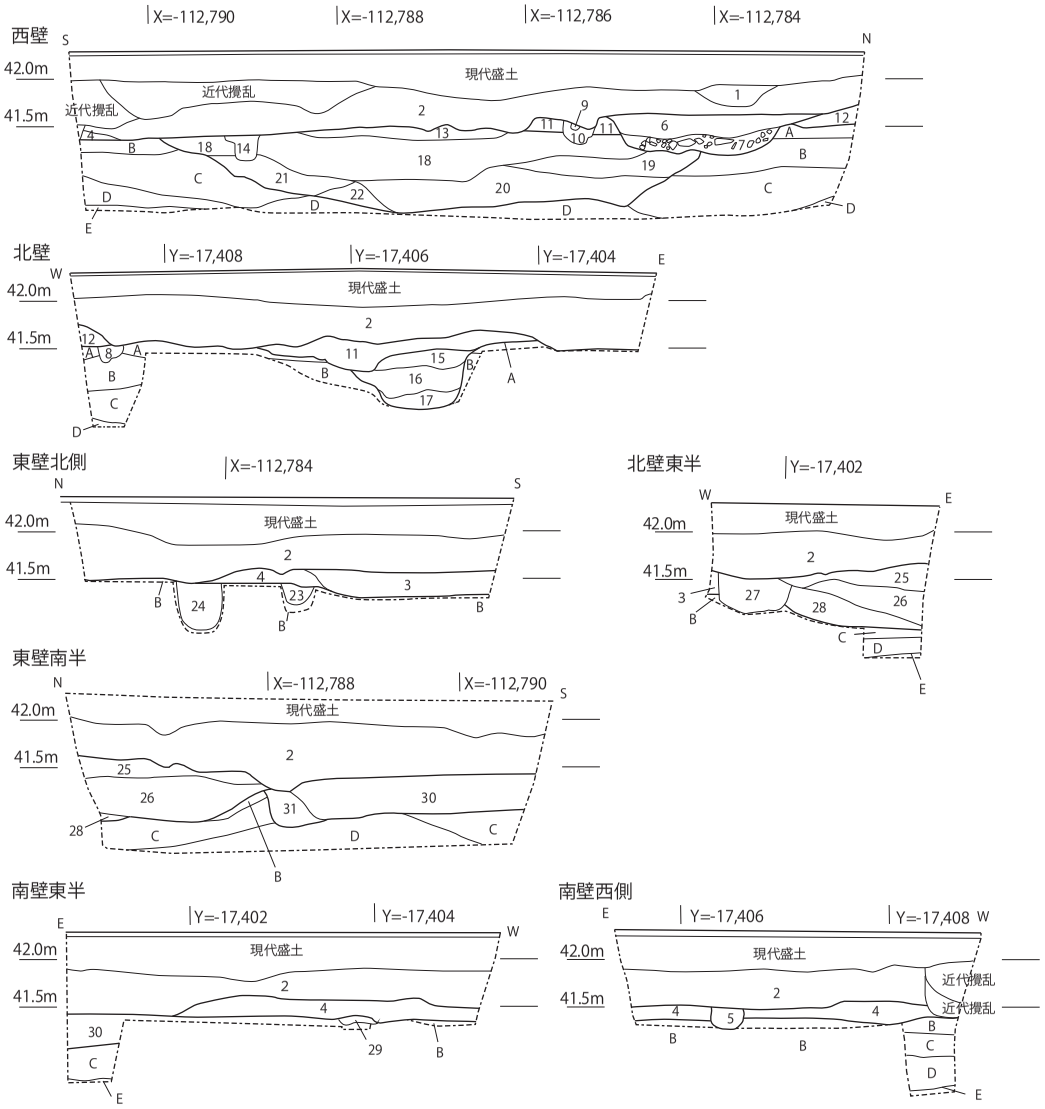
アスファルト・砕石・現代盛土の下，厚さ0.2～0.4ｍの近世包含層を挟み，GL-0.6ｍで整地土と考えられる暗褐色粘質土ブロックや炭化物が混じる黒褐色粘質土，GL-0.8～0.9ｍで小礫混じりの黒褐色粘質土や灰黄褐色粘質シルトの地山に至る。整地土と考えられる堆積土は，調査区の北西部に部分的にしか確認できず，面的に広がりを確認することはできなかった。このため，整地土部分は層位関係の把握に留め，地山上面で遺構検出を行なった。遺構検出面の標高は，北壁側で標高41.58ｍ，南壁沿いで41.38ｍと，北から南に緩やかに傾斜している。

検出遺構

検出した遺構は，土坑，柵，落込み（下層溝状遺構），柱穴などである。先述したが，北壁沿いの一部で整地土を確認し，この上面で土坑１～３を検出している。また壁断面のみでの確認となったが，西壁断面にて整地土（10層）を切り込む柱穴（9層）が確認できることから，本来遺構面は，整地土を挟んで２面存在していたと考えられる。しかし整地土の遺存範囲が狭く，遺構検出は整地土下にあたる小礫混じりの黒褐色粘質土や灰黄褐色粘質シルトの上面で行なった。

土坑１～３　調査区北西部で検出した土坑である。部分的に残る整地土の上面にて成立すると確実に判断できる遺構である。土坑１は南北1.6ｍ，東西1.2ｍ以上の方形で，深さ0.4ｍである。断面は緩やかな逆台形で，埋土は上下層に区分でき，上層はにぶい黄褐色粘質土，下層は拳大の礫を多く含む灰黄色粘質土である。土坑２は土坑１の東側に位置する。南北0.9m，東西0.8mの方形で，深さ0.2～0.25mである。埋土は拳大の礫が混じるにぶい黄色粘質土である。土坑３は土坑２の北西隅に重複する土坑である。直径0.5～0.6mで，深さ0.3mである。埋土は拳大の礫を多く含む浅黄色粘質土である。いずれの埋土にも拳大の礫が多く入る。

土坑42・43　調査区北壁中央部に並ぶ２基の土坑で，東側が土坑42，西側が土坑43である。土坑42は南北0.8ｍ以上，東西1.3ｍの不整形な方形で，深さ0.5ｍである。断面は逆台形で，埋土は土器や炭化物を多く含む灰黄褐色粘質土である。土坑43は南北1.0ｍ，東西0.9ｍのやや不整形な円形で，深さ0.5ｍである。断面は逆台形で，埋土は炭化物や焼土片を少し含むにぶい黄褐色粘質土である。両土坑とも遺物が確認できるが，特に土坑42からはまとまって出土している。埋土は単層であるが，遺物は上部に多く認める傾向がある。



1　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（焼土・炭化物・レンガあり）【近代かまど】
2　2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土（炭化物・土器片あり）
3　10YR3/3 暗褐色粘質土
4　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（粘性強い）
5　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土粘質土（小礫・炭化物を含む）【柱穴】
6　2.5YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（炭化物・土器片入る・やや粘性強い）【土坑１】
7　10YR5/2 灰黄褐色粘質土（拳大礫多く含む・黄褐色粘質土ブロック混じる）【土坑１】
8　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（炭化物含む）【柱穴】
9　5Y6/4 オリーブ色粘質土【柱穴：柱あたり】
10　10YR5/2 灰黄褐色粘質土（やや粘性弱い）【柱穴：掘方】
11　10YR3/2 黒褐色粘質土（炭化物・小礫と２～３㎝大の暗褐色粘質土ブロック混じる）【整地土】
12　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（粘性ややあり）【土塁関連堆積土か？】
13　10YR3/3 暗褐色粘質土（小礫と暗褐色粘質土ブロック混じる【整地土】）
14　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（炭化物・土器片含む）【柱穴】
15　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（炭化物・土器片含む）【土坑 42】
16　10YR3/3 暗褐色粘質土（にぶい黄褐色シルトブロックが点在・炭化物・土器片あり）【土坑 42】
17　10YR3/3 暗褐色粘質土（炭化物・土器片あり）【土坑 42】
18　10YR3/2 黒褐色粘質土（小礫混じる・やや締りなし）【下層溝状遺構】
19　10YR3/2 黒褐色粘質土（小礫混じる・粘性ややあり）【下層溝状遺構】
20　10YR3/2 黒褐色粘質土（小礫多く混じる・やや締りなし）【下層溝状遺構】
21　10YR4/4 褐色粘質土（小礫少量混じる）【下層溝状遺構】
22　10YR4/4 褐色粘質土（小礫少量混じる）【下層溝状遺構】
23　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（炭化物含む）【柱穴】
24　10YR4/4 褐色粘質土（小礫少量混じる）
25　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土（にぶい黄褐色粘質土ブロック・炭化物・礫少量混ざる）【土坑 46 の上】
26　2.5Y4/2 灰黄褐色粘質土（土器片・炭化物混ざる）【土坑 46 の上】
27　2.5Y4/2 灰黄褐色粘質土（土器片・炭化物混ざる）【土坑】
28　10YR3/3 暗褐色粘質土（５㎝大の礫多く混ざる・炭化物・土器小片混ざる）【土坑 46】
29　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土【柱穴】
30　10YR3/2 黒褐色粘質土（小礫混ざる・やや締りなし）【下層溝状遺構】
31　10YR3/2 黒褐色粘質土【下層遺構か】

A　10YR3/2 黒褐色粘質土（小礫混じり・B の土壌化したもの）
B　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト（小礫混じり・C の土壌化）
C　2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質シルト（締まりあり）
D　2.5Y5/3 黄褐色砂礫（５～10 ㎝大の礫）
E　2.5Y5/4 黄褐色砂礫（1 ～ 3 ㎝大の礫）

0　2m

図10　調査区断面図（１：80）

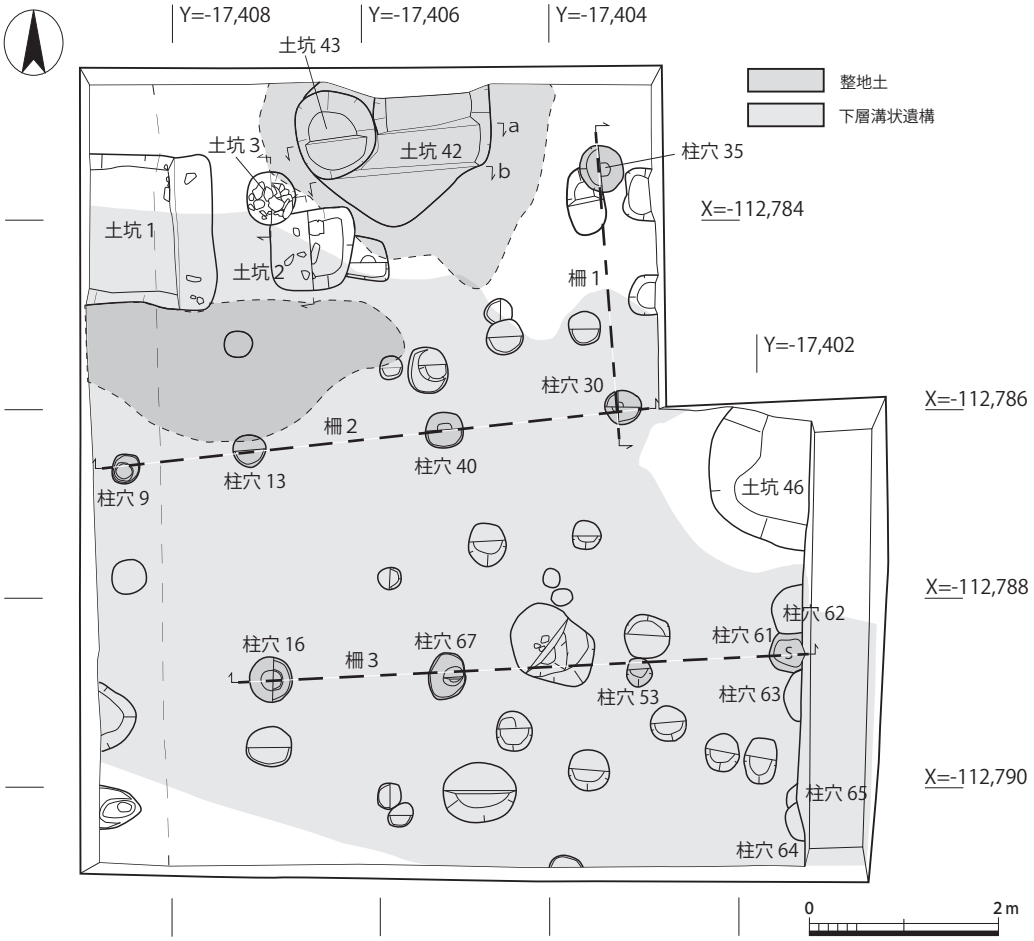
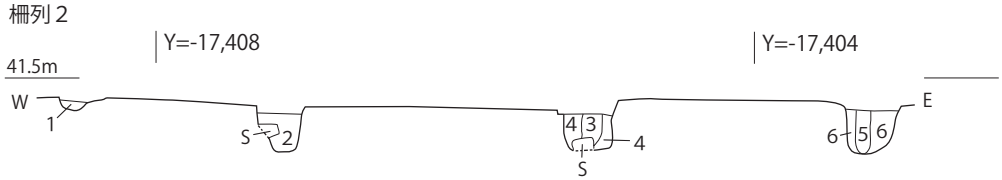


図11　調査区平面図（1：80）

柵1～3　柵1は調査区の北東部，東壁沿いに位置する南北方向の柵（柱穴30・35）である。柱間は2.6m。両柱穴とも掘方と柱痕跡が確認できる。柵2は調査区の中央部で検出した3間以上の柵（柱穴9・13・40・30）である。柱間は1.8m。柱痕跡や根石が確認できるものもある。柵3は調査区の中央部やや南で検出した4間以上の柵（柱穴16・67・53・61）である。柱間は1.8m。柱痕跡が確認できるものもある。

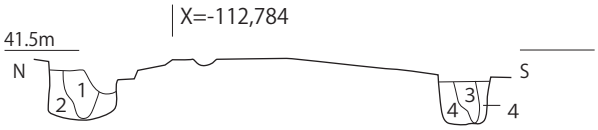
下層溝状遺構　調査区の北西から南東方向にのびる溝状の遺構である。平面形は概ね溝状であるが，肩部は不定形で，幅4～6m，深さ0.4～0.9mである。断面は逆台形と認められる箇所があるが，一様ではない。埋土は西側の方が厚く，東側の方が薄い。堆積土は西壁では少なくとも3回の作業単位が確認できるが，東壁では1回しか確認できない。埋土は基本，小礫の混じる黒褐色粘質土で，一部地山に似た褐色粘質土が確認できるが小礫を含む。堆積土は締りがなく，また確認できる小礫の並びに規則性が見いだせない。小礫自体も角があるものや丸いものなど多様で，どの層も自然堆積とは考えにくいため，人為的に埋められたものと考える。底の標高は，西壁沿いで41.6m，東壁沿いで40.9mとやや下る。谷や落込みなど，もともとの地形を整地作業の一環として人為的に埋めた可能性を検討したが，表層をめくると肩口がしっかりとしており，また確認した箇所の掘削底が砂礫層（図10‐D・E層）で止まっていること，最下層に溝や落込みとして機能して

柵列２



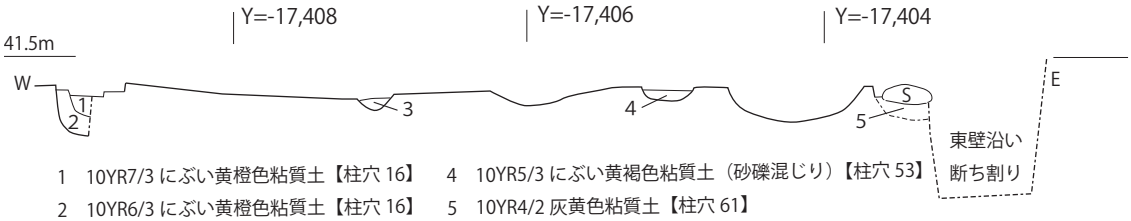
1　10YR7/4 にぶい黄色粘質土【柱穴 9】
2　10YR7/4 にぶい黄色粘質土【柱穴 13】
3　10YR7/3 にぶい黄橙色粘質シルト（締りなし）【柱穴 40】
4　10YR6/2 灰黄褐色粘質土（小礫混じり）【柱穴 40】
5　10YR7/3 にぶい黄橙色粘質シルト（締りなし）【柱穴 30】
6　10YR6/2 灰黄褐色粘質土（小礫混じり）【柱穴 30】

柵列１



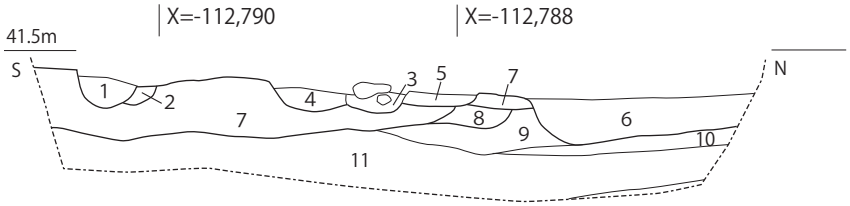
1　10YR7/3 にぶい黄橙色粘質シルト（締りなし）【柱穴 35】
2　10YR6/2 灰黄褐色粘質土（小礫混じり）【柱穴 35】
3　10YR7/3 にぶい黄橙色粘質シルト（締りなし）【柱穴 30】
4　10YR6/2 灰黄褐色粘質土（小礫混じり）【柱穴 30】

柵列３



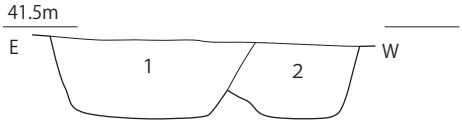
1　10YR7/3 にぶい黄橙色粘質土【柱穴 16】
2　10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土【柱穴 16】
3　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土【柱穴 67】
4　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土（砂礫混じり）【柱穴 53】
5　10YR4/2 灰黄色粘質土【柱穴 61】

東壁沿い断ち割り



1　10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土【柱穴 64】
2　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土【柱穴 65】
3　10YR4/2 灰黄褐色粘質土【柱穴 61】
4　10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土【柱穴 63】
5　10YR5/2 灰黄褐色粘質土（砂礫混じる）【柱穴 62】
6　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土（5 ～ 10 ㎝大の礫入る）【土坑 46】
7　10YR3/2 黒褐色粘質土（小礫混じり）【下層溝状遺構】
8　10YR3/2 黒褐色粘質土（砂礫少量混じる）【下層遺構】
9　10YR4/4 灰黄褐色粘質シルト（小礫混じり）
10　2.5Y5/4 黄褐色砂礫（1 ～ 3 ㎝大の礫）
11　2.5Y5/3 黄褐色砂礫（5 ～ 10 ㎝大の礫）

土坑 42・43（a）

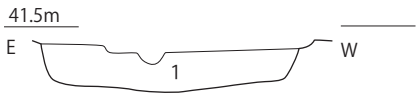


1　10YR6/4 灰黄褐色粘質土【土坑 42】
2　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土（炭化物・焼土片含む）【土坑 43】

土坑２

1　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土（炭化物・焼土片含む）【土坑２】

土坑 42（b）



1　10YR6/4 灰黄褐色粘質土【土坑 42】

土坑３

1　2.5Y7/3 浅黄色粘質土【土坑３】

図12　各遺構断面図（1：50）

いた時に生じる自然堆積層が確認できなかったこと，対象地内で確認している地山が粘質土や粘質シルトなど（図10‐Ａ～Ｃ層）の比較的，土塁に適すると考えられる土であることから，土塁形成時に土取りとして利用され，その凹みを埋めたものであると考えた。形状が溝状になっているのは，効率の為，土塁に沿って掘削をしたためと考えられる。埋土にはわずかに弥生土器片が確認できたのみで，遺物はほぼ含まない。

調査区東壁断面（図10－31層）　下層溝状遺構の北肩口で確認した土層である。上面の大半が下層溝状遺構と重複しており，平面検出時には確認出来ず，東壁の断割りを行い，断面観察により確認したため平面形状は不明である。埋土は黒褐色粘質土で，小礫はほとんど含まない。このため下層溝状遺構ではなく，別遺構である可能性がある。埋土から弥生土器の細片がわずかに出土している。本調査内では最も古い遺構となる。

ピット群　段下げを行い遺構確認を行った結果，調査区全体で41基の柱穴を確認した。段下げ後，必要に応じて半裁を行ったが，遺物は細片で量も少なく，埋没時期の決定を行えるものは少ない。直線的に並ぶものについては柵（柵１～３）として復元をしたが，今回の調査区内では，建物などの復元はできなかった。

（２）２区（現存土塁）

現存する東西方向の土塁に対して設けられた南北方向の切通しを利用し，露出部分の土層観察を行った。東西方向の土塁を南北方向に切通した状況である。表面を覆う腐植土を除去し，断面検出を行った。土塁上面には様々な樹木が生息しており，その根や腐植土などにより一部改変されている部分もあるが，概ね土塁の現状が把握できる。今回は，東西約29ｍ，南北23ｍの範囲を調査した。断面観察は切通しの東面と西面の一部で行った。現状確認できる土塁の裾幅は17～18ｍである。頭頂部には幅1.8～2.5ｍの人が行き交うことが可能な広さの平坦面が確認でき，主軸は約10度西に振る。標高は46.7～46.9ｍである。上面の平坦面北端より土塁北側裾部まで（土塁の外側）の幅は７～９ｍ，上面の平坦面南端より土塁南側裾部まで（土塁の内側）の幅は５～６ｍとやや北側が広い。断面観察を行なった部分の頭頂部では46.85ｍ，土塁内側の裾部で42.3ｍ，土塁外側の裾部で41.85ｍと比高差は北側では約５ｍ，南側では約4.55ｍとなる。また断面より推測できる傾斜角度は北側で35～36度，南側で53～54度である。

東面の断面観察では，土塁の構築土は概ね粘質シルトや粘質土に小礫が混じる土で構成されている。しかし図14の30～32層は均一な粘質シルトを主体とし，粗砂を混ぜた同質の土を15～20㎝の厚さで積み，固く締めている。またこの堆積を境に土の堆積方向が変化することから土塁の核である可能性がある。この核の外側に３～５㎝大の礫を多く含む層と２～３㎝大の礫を含む層を斜め積みし，この後，核の内側に先ほどの堆積を覆う形で３～５㎝大の礫を多く含む層，その上に１～３㎝大の礫を多く含む層，最後に，シルトを主体とした層を斜め積みする。南側の裾付近である図14の７・８層は均質なにぶい黄色粘質シルトが主体であり，堆積土の裾留めの役割をはたし

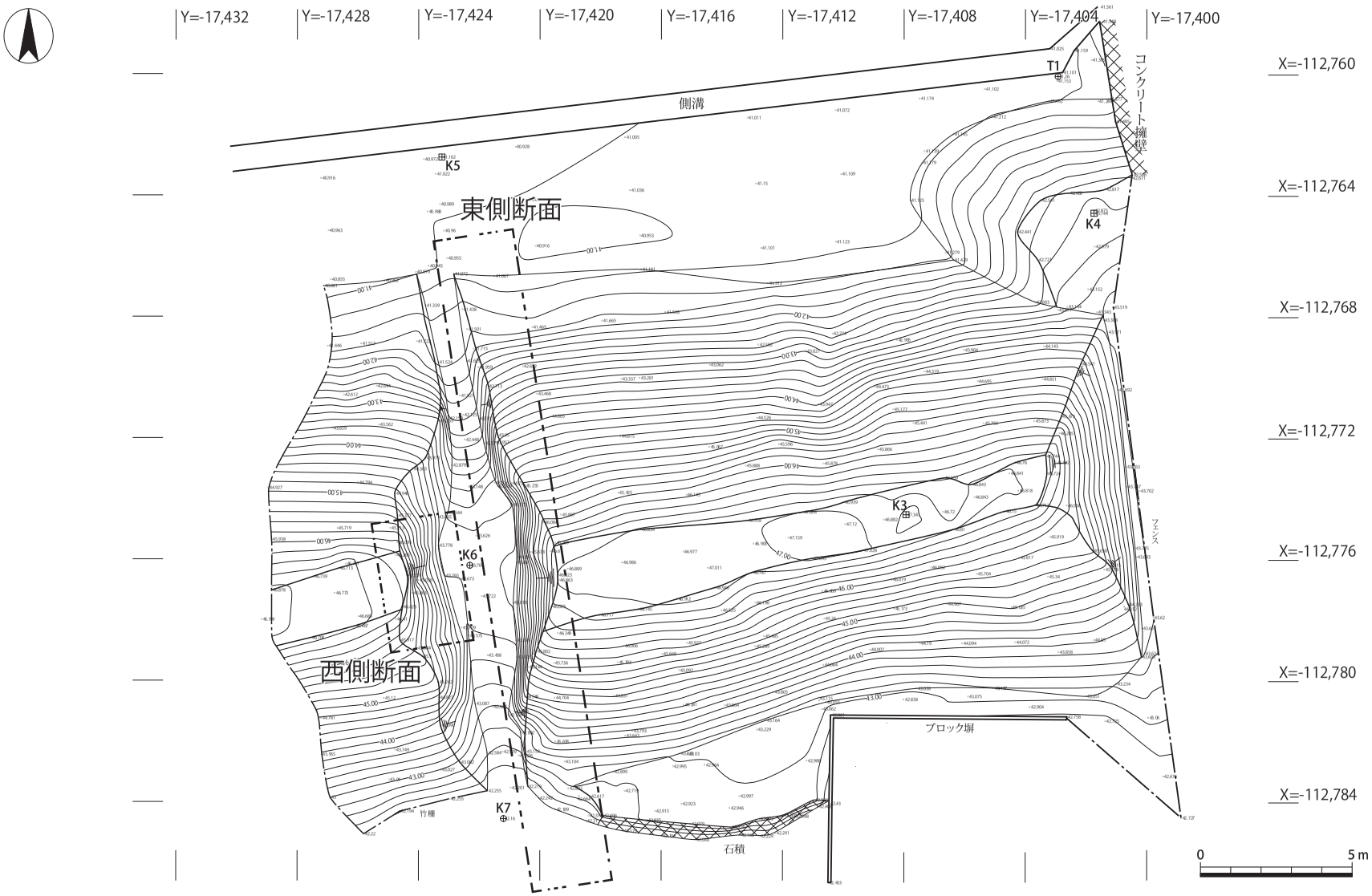
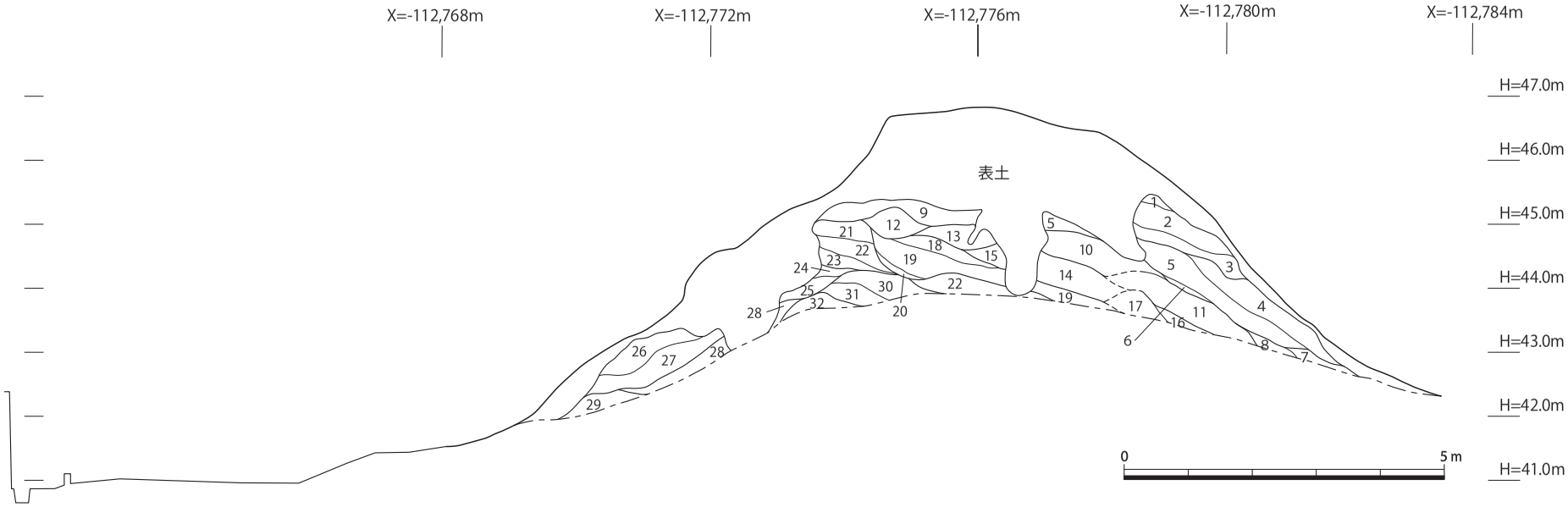
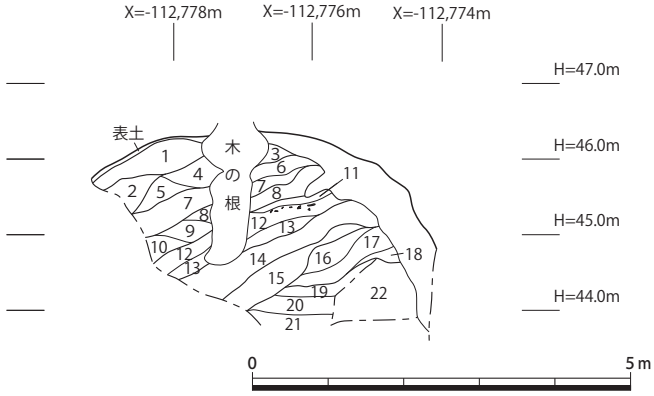


図13　土塁地形測量平面図（1：200）



1　2.5Y8/2 灰白色シルト（5～10㎝大の淡黄色シルトブロックが点在）
2　2.5Y8/3 浅黄色シルト（黄色シルトの拳大のブロックが点在）
3　2.5Y8/3 浅黄色シルト（細砂混じり・黄色シルトの拳大のブロックが点在）
4　2.5Y7/4 浅黄色粘質シルト（2～3㎝大の礫を多く含む）
5　2.5Y7/4 浅黄色粘質シルト（細砂と3～5㎝大の礫を多く入る）
6　2.5Y7/4 浅黄色粘質シルト（細砂が混じる）
7　2.5Y7/4 浅黄色粘質シルト（1～3㎝大の礫を多く含む・締りあり）
8　2.5Y7/4 浅黄色粘質シルト（3～5㎝大の礫を多く含む）
9　2.5Y7/3 浅黄色粘質シルト（2～3㎝大の礫多く含む）
10　2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト（3～5㎝大の礫を多く含む・やや締りなし）
11　2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト（3～5㎝大の礫を少し含む・やや締りあり）
12　2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト（1～3㎝大の礫を含む）
13　2.5Y6/2 灰黄色粘質土（3～5㎝大の礫を含む・やや締りなし）
14　2.5Y6/2 灰黄色粘質土（3～5㎝大の礫を含む・締りあり）
15　2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト（3～5㎝大の礫を少し含む・やや締りなし）
16　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト（1～3㎝大の礫を多く含む）
17　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト（1～3㎝大の礫を含む）
18　2.5Y7/3 浅黄色粘質シルト（1～3㎝大の礫多をく含む）
19　2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト（1～2㎝大の礫を多く含む）
20　2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト（1～2㎝大の礫を含む）
21　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト（3～5㎝大の礫を多く含む・やや締りなし）
22　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト（3～5㎝大の礫を多く含む・やや締りなし）
23　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト（3～5㎝大の礫を多く含む・やや締りなし）
24　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土（3～5㎝大の礫を含む・やや締りなし）
25　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土（3～5㎝大の礫を少し含む・やや締りなし）
26　2.5Y7/3 浅黄色粘質土（2～3㎝大の礫を多く含む）
27　2.5Y7/3 浅黄色粘質土（2～5㎝大の礫を多く含む）
28　2.5Y6/2 灰黄色粘質土（2～3㎝大の礫を多く含む・締りあり）
29　2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土（2～3㎝大の礫を多く含む・締りあり）
30　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト（5㎝大の礫を多く含む・シルトブロックが混じる）
31　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト（5㎝大の礫を多く含む）
32　2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルト

図14　土塁東壁断面図（1：100）



1　2.5Y8/2 灰白色シルト（５～10㎝大の淡黄色シルトブロックが点在）
2　10YR7/3 にぶい黄橙色粘質シルト（２～３㎝大の礫入る・締りあり）
3　2.5Y7/2 灰黄色砂礫（３～５㎝大の川礫・灰黄色粘質シルトが少し混じる）
4　2.5Y7/2 灰黄色砂礫（５～10㎝大の川礫）
5　2.5Y7/2 灰黄色砂礫（10㎝大の川礫・灰黄色粘質シルトが混じる）
6　2.5Y6/2 灰黄色細砂混じり粘質シルト（２～３㎝大の礫多く混じる）
7　2.5Y6/2 灰黄色細砂混じり粘質シルト（２～３㎝大の礫混じる）
8　2.5Y8/4 浅黄色シルト（細砂混じる）
9　2.5Y8/4 浅黄色シルト（拳大のブロック状になったものが積み重なる）
10　2.5Y8/4 浅黄色シルト（細砂が混じり、拳大のブロック状になったものが積み重なる）
11　2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土
12　2.5Y7/4 浅黄色粘質土シルト（２～３㎝大の礫・土器片と炭化物を含む）
13　2.5Y7/4 浅黄色粘質土シルト（２～３㎝大の礫多く含む）
14　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト（３～５㎝大の礫多く含む）
15　2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト（２～３㎝大の礫多く含む）
16　2.5YR7/3 浅黄色砂礫（２～３㎝大の礫）
17　2.5YR7/3 浅黄色砂礫（５～10㎝大の礫）
18　2.5YR7/3 浅黄色砂礫（５～10㎝大の礫）
19　2.5YR7/2 灰黄色砂礫（２～３㎝大の礫）
20　2.5YR7/2 灰黄色砂礫（２～３㎝・５㎝大の礫）
21　2.5YR7/2 灰黄色砂礫（２～３㎝大の礫）
22　2.5YR7/2 灰黄色砂礫（２～３㎝大の礫）に 2.5YR7/2 灰黄色粘質シルトが混じる

図15　土塁西壁断面図（１：100）

ていたと考えられる。それぞれの単位の厚みは60～70㎝である。これらの単位内でも下位から上位に向かい，大きい礫から細かい礫，シルトブロックの混ざる目の細かい土へと変化する傾向があり，この単位も層厚が概ね20～30㎝の３～４層に区分できる。同質の堆積土が重複している箇所もあったが，層に含まれる礫の堆積方向が異なることから，積み方の一単位として区分した。

西側の断面観察では東壁同様，３～５㎝大の礫を多く含む層，その上に１～３㎝大の礫を多く含む層，最後にシルトを主体とした層を斜め積みする。また，これらの単位内でも下位から上位に向かい，大きい礫から細かい礫，シルトブロックの混ざる目の細かい土へと変化する傾向があり，この単位の層厚は概ね20～30㎝に区分できる。全ての堆積が北から南へと傾斜しており，土塁内側へ向かって斜め積みされているものと考えられ，核にあたる堆積は確認できなかった。

このほか図15の12層には土器細片と炭化物が確認できたが，この他の堆積土からは遺物などは確認できなかった。

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
室町時代以前	縄文土器，弥生土器		縄文土器１点，弥生土器２点	１箱	３箱
室町時代	土師器，瓦器，焼締陶器，施釉陶器，輸入陶磁器，瓦，塼，金属製品		土師器54点，瓦質土器４点，施釉陶器２点，焼締陶器４点，焼締陶器２点，輸入陶器２点，輸入陶磁器２点，塼４点		
江戸時代～近代	土師器，焼締陶器，施釉陶器，瓦				
合　計		６箱	74点（２箱）	１箱	３箱

※　コンテナ箱数の合計は，整理後，Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より３箱多くなっている。

4．遺　物（図16・17・表3）

今回の調査では，土坑42を主に整理箱に６箱の遺物が出土した。大半は土器・陶磁器であり，瓦や塼なども少量出土している。古い時代でいえば，弥生土器片が少量確認できるが，山科本願寺期の遺物が大半を占めている。遺物は土坑42でまとまって出土している以外は点数が少なく，小片が多い。以下では遺構に伴うもの，かつ図化できたものを中心に概説する。

整地土（１～９）　整地土からは土師器が出土している。１～４は土師器皿である。口径は9.3～9.5㎝の小皿と口径14.6㎝の大皿がある。底部と体部の境が不明瞭で，口縁部は直線的に開く。３の口縁部には煤が付着しており，燈明皿として使用されていたと考えられる。５・６は瓦質土器である。５は鉢で直線的に立ち上がり，端部は短く外反する。外面には唐草文のスタンプが施されている。６は風炉である。７は青磁椀，８は常滑焼の甕の口縁部である。９は塼である。縦9.0㎝以上，横7.6㎝以上，厚み2.8㎝である。京都Ｘ期古段階に帰属すると考えられる。

土坑１（10）　10は陶器の瓶の肩部である。厚みは0.4～0.5ｍと薄く，非常に硬く焼き締まる。胎土は灰褐色である。韓半島からの輸入陶器の可能性がある。

土坑２（11・12）　11・12は土師器皿である。11の口径は10.8㎝，12の口径は12.8㎝であり，口縁が緩やかに外反する。端部にはナデによる段が認められる。京Ｘ期古段階に帰属する。

土坑３（13）　13は瀬戸美濃の天目茶碗である。

柱穴35（14）　14は白磁椀である。口縁部内面に櫛描が施される。

平面精査時（15）　瀬戸美濃の香炉である。口径は6.2㎝，器高は3.0㎝。底部には３箇所の小さな脚がつく。

下層溝状遺構（16～18）　16は縄文土器，17・18は弥生土器である。17は甕の口縁部で受け口状になる。18は甕の底部である。底部外面中央部はやや凹み，内外面にハケ痕跡が残る。

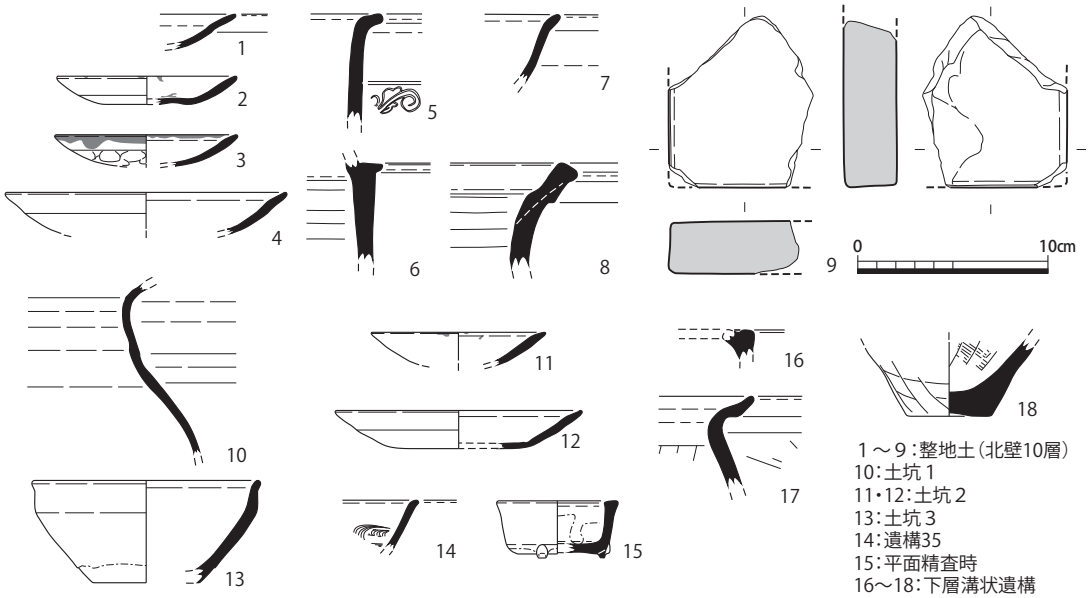


図16　出土遺物１（１：４）

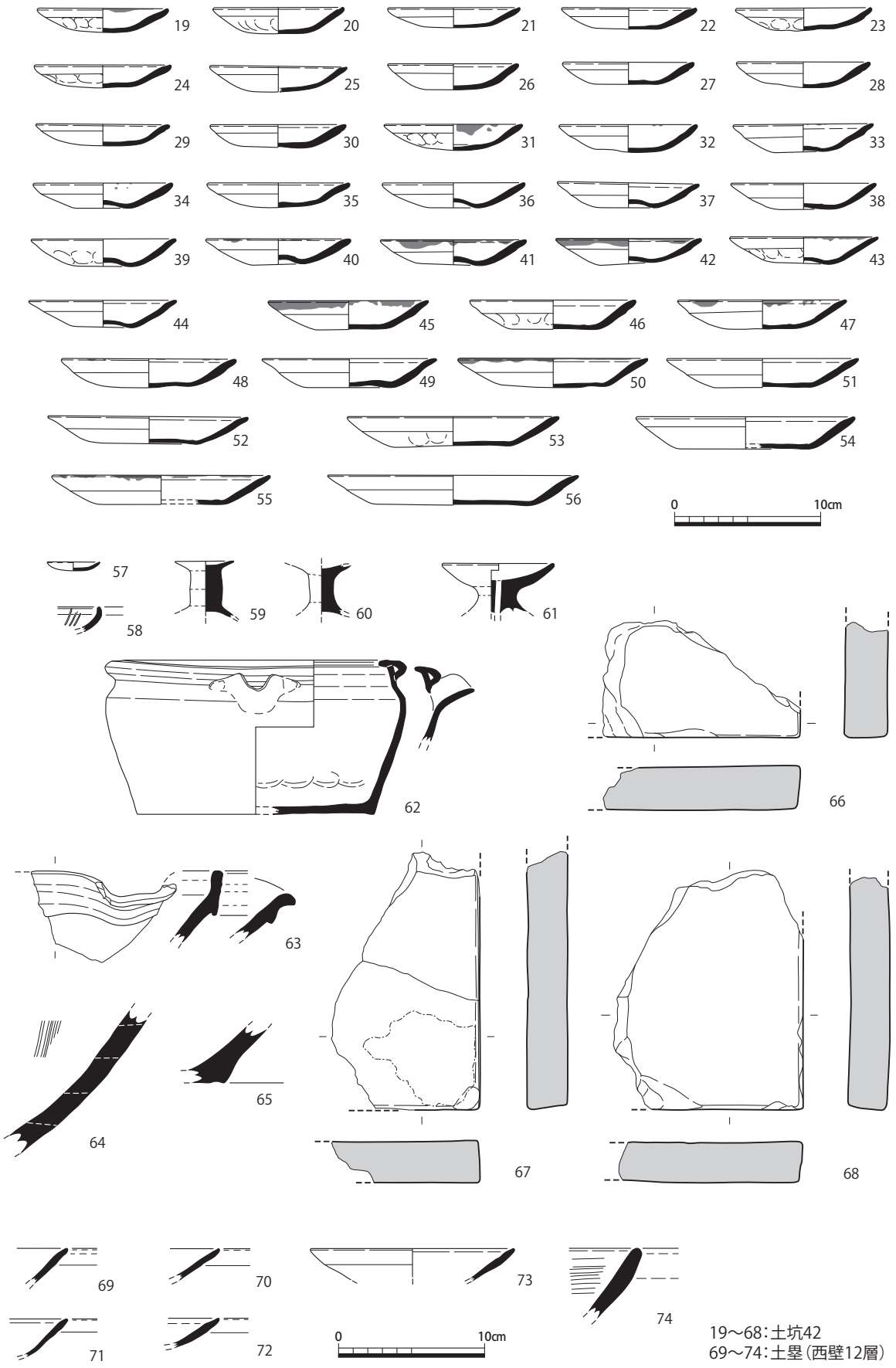

19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
0
10cm
57
58
59
60
61
62
66
63
64
65
67
68
69
70
73
74
71
72
0
10cm
19～68：土坑42
69～74：土塁（西壁12層）

図17　出土遺物２（１：４）

土坑42（19～68）　土師器皿と判別できた破片数は1226点，このうち大皿が113点，中皿が570点，小皿が543点に区分できる。いずれの法量にも燈明皿は確認できたが，特に小皿の使用割合が多い。また底部を押し上げるいわゆる「ヘソ皿」は破片を少量確認したのみである。この計測を基に法量傾向を表すことができ，かつ図化できるものを抽出した。

19～56は土師器皿である。口径が8.8～10.0㎝，10.8～13.7㎝，14.8～17.0㎝の分布に区分できる。いわゆる白色系であるが，火を受けたのか黒色のものがある（21・30）。基本的に口縁部に一段ナデを施し外反する。中～大皿では底部と体部の境が明瞭で，口縁端部は外反するが，概ね直線的に開く。見込み部外側には口縁部成形時のナデによるドベが確認でき（36～39・42・45～47・49・51～56），また燈明皿として使用されていたものも確認できる（19・31・33・34・40～43・45・47・48・50・55）。57～60はミニュチュア土器である。57は土師器皿，58は鉢，59は高杯である。58の内面には３条の条線が確認でき，鉢ではなく，すり鉢の可能性がある。61は瓦質土器の瓦灯の蓋の頂部である。中央部は直径１㎜程度の空洞になっている。62は輸入陶器の片口の甕である。口縁部は粘土を継ぎ足し，端部上面に広めの平坦面を施す。底部内面時は二枚貝を使用した貝目積み痕跡が３箇所確認でき，表面には小さな火ぶくれが認められる。63は備前焼の擂鉢口縁部，64・65は信楽焼すり鉢である。64は内面に４条のすり目が施され，下部は使用による磨滅痕が確認できる。66～68は塼である。66は縦8.0㎝以上，横13.5㎝以上，厚さ2.9㎝，67は縦17.0㎝以上，横10.2㎝以上，厚さ2.8㎝，68は縦16.4㎝以上，横13.0㎝以上，厚さ2.8㎝である。このほか，平瓦や焼土片，巻貝，鉄滓，金属製品が出土している。金属製品の種別は，釘や小刀の刃などであるが，細片で図化するには至らない。このうち折り曲げた後切断したような痕跡が認められるものもある。いずれの土器にも表面には炭化物などで汚れた痕跡や二次焼成の痕跡はなく，何かしらの廃棄に伴う一群と想定できる。京都Ｘ期古段階に帰属すると考えられる。

土塁（西壁12層）（69～74）　69～73は土師器皿である。いずれも白色系である。全体を知れるものは少ないが，いずれも器高が2㎝以上であることから，小皿ではない。74は瓦質土器鉢である。口縁部はナデにより丸く仕上げ，内面にはミガキを施す。京都Ｘ期古段階に帰属すると考えられる。

5．まとめ

今回の調査では，これまで確認されていたような土塁の内溝や焼亡時の火災痕跡の検出を想定していた。しかし焼亡時と想定できる焼土層は確認できず，また土塁内溝の想定位置では東西方向の柵を，土塁の裾に想定できる範囲では山科本願寺期の土坑と整地土と考えられる土層を確認した。このほか調査区の大半で厚い近世以降の包含層を確認した。この包含層については過去の調査でも確認されており，本願寺廃絶後の様相を示すものとして取り上げられている[1)]。周辺調査では，この近世以降の包含層が存在することにより山科本願寺期の遺構面が保護され，焼土面を含む

山科本願寺期の遺構面が良好に遺存している傾向があったが，今回の調査区内では，近世以降の整地土直下で山科本願寺期以前の遺物を少量含む溝状遺構が検出できるなど，焼土層及び整地土は削平されてしまったと考えるべきであろう。

土坑42は地山上面に形成され，埋没後に，整地土で覆われていること，またこの整地土上面でピットが成立することを確認している。この重複関係から，土坑42の形成→土坑42の廃絶→上面を整地→柱穴や土塁などの形成という遺構変遷が想定できる。すなわち土塁の成立時期は，土坑廃絶以降かつ土塁埋土出土の遺物が示す時期と想定できる。土坑42出土土器群は，京都Ｘ期古段階で概ね1500年から1532年の年代観であり，焼亡以前の約30年間に収まるものと考えられる。このほか，土塁の断面観察を行なった結果，小片ではあるが遺物が確認できた。土塁出土土器群は京都Ｘ期古段階のものと想定できる。このことから，土坑埋没から整地，柱穴及び土塁形成が概ね1500年から1532年の焼亡以前の約30年の間に想定できる。これまでも土塁の規模や時期についての検討は行われており，山科本願寺造営当初に土塁が存在しなかったことや，現在の形状になったのが永正年間（1504～1521）ではないかとの指摘[2)]がある。今回の調査では，土塁裾想定位置で土坑42を確認し，かつ上面で整地土を確認していることから，現在の土塁の規模になった時期については1500年前後以降と考えられ，これまでの見解と矛盾しない結果となった。

これまでの調査で，本願寺門主の私的空間である「宗主空間」内の様相は少しづつ明らかになっているが，御影堂や阿弥陀堂などの痕跡は確認できていない。今回の調査でも堂に関する遺構は確認できなかったが土坑42からは塼が出土しており，周辺に堂などの構築物が存在した可能性が考えられる。この他，地山上面で検出した溝状遺構の埋土には山科本願寺期の遺物が混じらないことから，山科本願寺期の遺構が展開する前に形成されたものである可能性が高い。この場所が宗主空間と想定できる場所で，かつ，土塁の側であることから，山科本願寺形成の初期段階の整地作業，もしくは，山科本願寺が拡大していく中で新たに取り込まれた場所で行なわれた整地作業を示すものであり，山科本願寺の成り立ちを考えるうえで重要な遺構であると考える。

（奥井　智子）

註

1）　柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成24年度』京都市文化市民局　2013年。

2）　草野顕之「創建時山科本願寺の堂舎と土塁について」『中世の寺院体制と社会』吉川弘文館　2002年。
柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成24年度』京都市文化市民局　2013年。

Ⅶ　山科本願寺南殿跡第（６～８次）

１．調査に至る経緯と経過

（１）調査に至る経緯（図１）

本件は，山科本願寺南殿跡（以下，南殿跡）において実施した発掘調査３件（第６次・第７次・第８次）に係る報告である。調査地は，いずれも京都市山科区音羽伊勢宿町内に位置する。第６次・第７次の調査地は隣接しており，ともに南殿跡の外郭土塁およびこれに付随する堀の推定ライン上に位置する。また第８次調査地は，南殿跡の内郭南西角地付近に相当し，中枢区画である内郭の土塁とその堀と推測される地点にあたる。

平成31年３月，以上の地点において住宅の建替えが計画され，埋蔵文化財発掘の届出が提出された。当課では，当該地点について，上記のとおり山科本願寺南殿跡に関する遺構の残存が見込まれることから，本発掘調査が必要であると判断した。これを受けて，平成31年１月に第６次調査を，同４月に第７次調査を，令和元年７月に第８次調査を計画し，国庫補助事業として実施した。

（２）調査の経過と調査方法（図２～５）

第６次調査の現地調査期間は，平成31年１月７日～１月18日である。調査対象は，住宅建設予定範囲のうちの15㎡で，建物の長軸にあわせて掘削範囲を設定した。第７次調査の現地調査期間

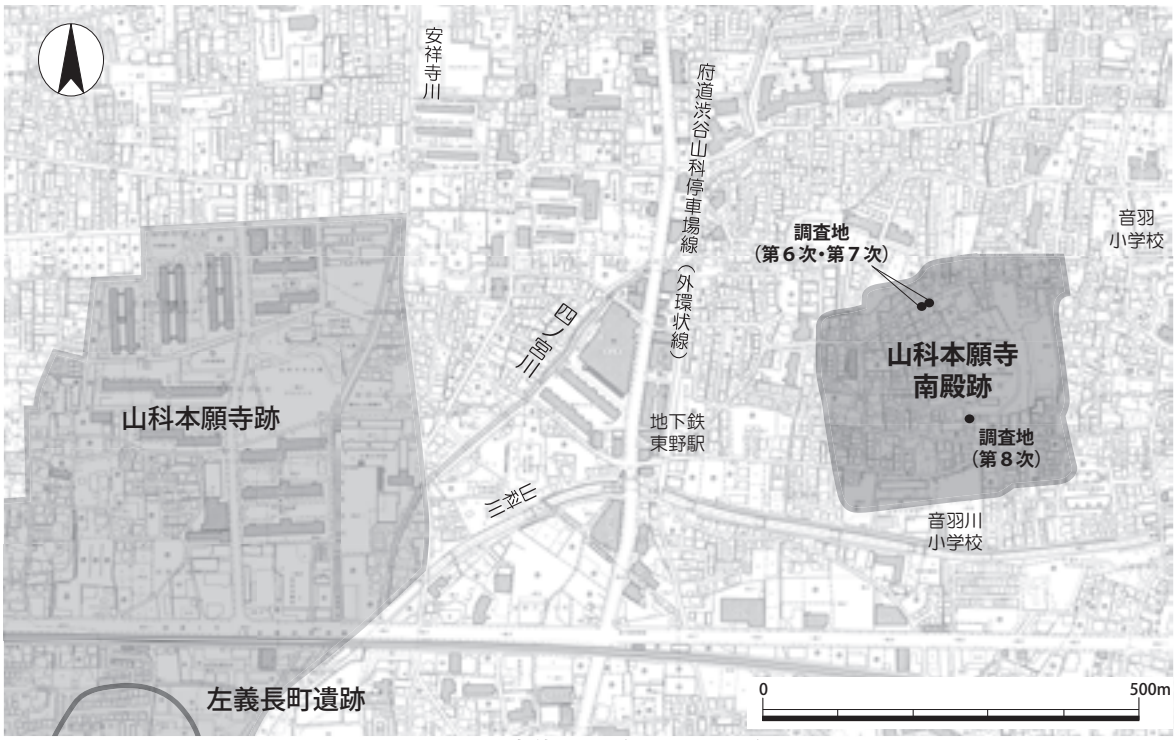


図１　調査位置図（１：10,000）

は，平成31年４月８日～19日のうち７日間である。調査対象は，住宅建設予定範囲のうちの15㎡で，第６次調査と並行して調査区を設定した（図６）。第８次調査の現地調査期間は，令和元年６月17日～７月５日のうち９日間である。調査区は，住宅建設予定範囲のうちの28.0㎡を設定した。

現地調査では，重機（バックホウ）を用いて表土，盛土，近現代の撹乱土の除去を終えた後，近世包含層以下の土層を人力にて掘削した（図２・３）。人力掘削作業にはショベルやジョレン，ツルハシ等を用いた。また，層相の変化ごとに遺構面の検出に努め，遺構を検出した際には個別に掘削を行った。検出した遺構面では，全景写真の撮影や検出遺構の個別写真撮影，平面図の作成，標高値の計測，遺構実測等，一連の記録作業を行った（図４）。

なお，今回の工事計画では予め掘削限界（KBM-0.5ｍ）が設定されていたため，これ以下の掘削は調査区の一部にとどめた。下層確認を終了した段階で埋め戻しを行い，遺構保存を図った。

このほか現地では，第７次・第８次調査時に京都橘大学歴史遺産学科の学生を対象として現地見学および体験学習（遺構検出）を実施した（図５）。

続く整理作業では，出土遺物の洗浄，選別（抽出），遺構図の精査，版組，トレースを行い，報告書としての体裁を整えた。一連の作業は，本報告の刊行をもって終了した。なお，本報告の文責は章節ごとに文末に示した。（黒須）

図２　機械掘削作業状況（第６次）

図３　人力掘削作業状況（第７次）

図４　断面実測作業状況（第６次）

図５　大学生現地見学・体験学習状況（第８次）

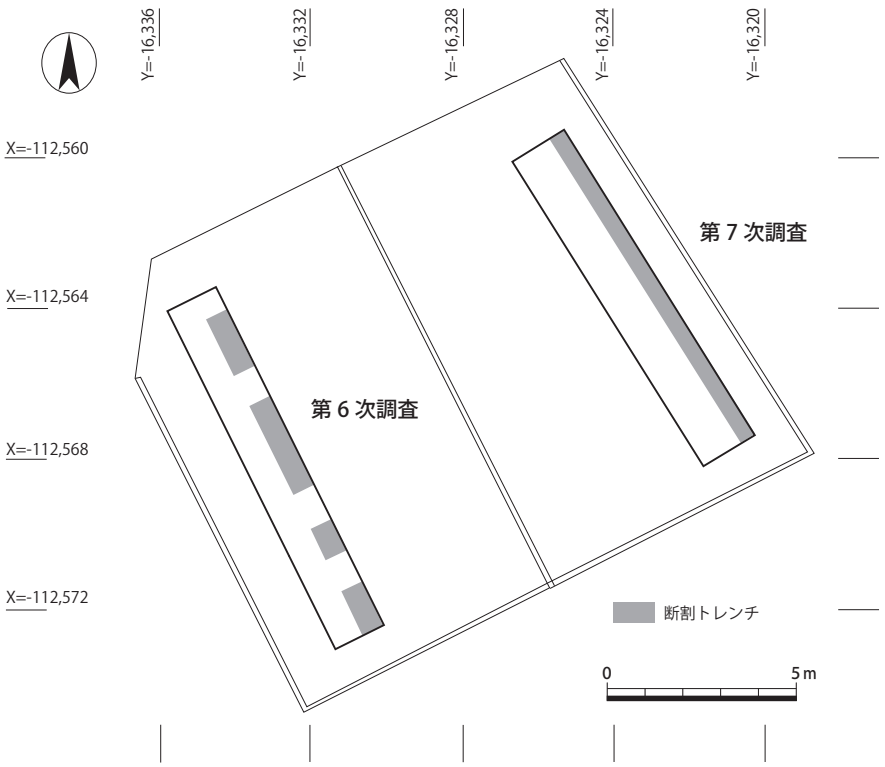


図６　第６次・第７次調査区配置図（１：200）

２．位置と環境

（１）遺跡の立地と地理的環境

山科区音羽伊勢宿町は京都市の東辺，山科盆地の東北部に位置する。音羽山の南麓に相当し，北東から南西へ緩やかに傾斜する地形にある。当地の南には音羽川が西流しており，当地の南西にて四ノ宮川と，次いで安祥寺川と合流して山科川となり，後に宇治川から淀川水系へと繋がる。

かつては山城国宇治郡山科郷に属しており，平安京の近郷として位置付けられたことから，複数の街道が整備された。東は近江国へ，西は京都盆地へ，南は宇治を経て大和国へと通じる主要な街道が交差する，まさに交通要衝として発展を遂げた地域と言える。

古代から音羽という地名は存在したようであるが，その発祥は不明である。平安時代には「音羽荘」が設置され，中世以降は近隣の小山・竹鼻を合わせて「音羽郷」となり，山科七郷を構成する一郷に数えられた。音

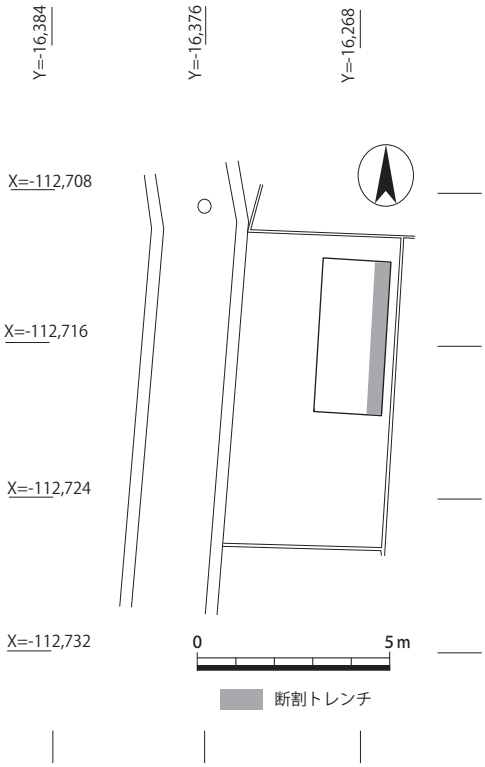


図７　第８次調査区配置図（１：200）

羽郷は，応仁２年（1468）に清閑寺領となるものの，依然として山科七郷の領家的立場である山科家の支配下にあったと考えられている。

山科本願寺南殿は，文明10年（1478）に山科盆地内の野村にて本願寺第８世蓮如が山科本願寺の造営を開始した後，延徳元年（1489）に蓮如の隠居所として音羽に設けられた邸宅である。南殿と称する由来は，東山大谷に本願寺が所在していた頃，本殿を北殿，隠居所を南殿と称したためと伝わる。南殿は，天文元年（1532）におこった法華宗徒による焼き討ちにより，山科本願寺とともに焼失した。天文５年（1536），泉水山光称寺がその跡地に建てられたが，元亀元年～天正８年（1570～1580）に及ぶ織田信長との抗争の中で再び焼き討ちを受け，灰燼に帰した。その後，南殿旧地の傍らに仮堂を建てて復興され，光照寺として現在に至る。（廣冨・黒須）

（２）周辺の調査

昭和31年（1956），奈良国立文化財研究所庭園班により光照寺内に残る築山，苑池，建物基壇跡などの測量調査が行われた。その結果，光照寺に残る「御在世山水御亭図」（図８）と一致する部分が極めて多いことが報告された。「御在世山水御亭図」は東を上にした縄張り図で，内郭に持仏堂や山水亭，これに連結する第二郭に事務所や井戸等が描かれている。また，その周囲を大きく土手と堀がめぐっている。

南殿跡内での発掘調査は，これまでに計５回行われている（第１次～５次）。また，外郭付近の市道部における立会調査の報告がある（図９№101地点）。第１次調査は，平成14年度に外郭の北東部において個人住宅の建設が計画されたため実施された。その結果，現存する内郭土塁及び堀の延長部と，その北側に設けられた建物跡や溝，土坑等が確認された。遺構群は，室町時代後期に遡ることから南殿設営時のものと判断され，平成14年の史跡指定へと繋がった。

続く，平成18年度（2006）と同25年度には，南外郭において同じく個人住宅建設に伴う発掘調査が行われた（第２次・第３次）。その結果，第２次調査区において，室町時代後期の建物，溝，土坑などが検出され，外郭にも居住空間が広がることが明らかとなった。

一方，平成27年・28年に，内郭北西角及び第二郭内郭で実施された発掘調査（第４次・第５次）では，内郭の土塁と堀が屈曲して延びる状況が確認された。これにより，内郭の規模が南北約125ｍ，東西約100ｍに及ぶことが確定した。

以上の通り，調査は回数を重ねたことにより，南殿内郭の状況は徐々に明らかとなってきた。ただし，外郭辺部の状況については立会調査以外に情報を得られておらず，土塁の規模や堀の有無等，不明な点が多い。このため第６次・第７次調査では，外郭北辺の土塁及び堀の状況を解明することを主目的とした。（黒須）

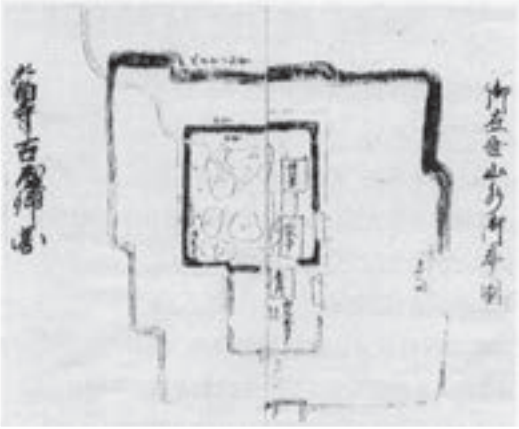


図８　御在世山水御亭図（上が西）

表１　既往の調査一覧

次	調査番号	推定地	調査期間	種類	住所	調査遺構・出土遺物	調査機関	文献
1	01S003 01S241	内郭土塁 内郭堀 北外郭	2001/11/12 ～ 2002/01/25	本調査	山科区音羽伊勢宿町 38-1　他	室町後期／土塁，堀，暗渠，建物，土坑，溝 江戸時代／土坑，溝，柱穴 出土遺物／土師器，瓦器，焼締陶器，施釉陶器，青磁，瓦，銭貨	(財）京都市埋蔵文化財研究所	出口 2003
2	06S016	南外郭	2006/06/19 ～ 2006/07/13	本調査	山科区音羽伊勢宿町 26-6	室町後期／建物，土坑，溝 出土遺物／土師器，瓦質土器，須恵器，青磁，染付，弥生土器	(財）京都市埋蔵文化財研究所	平田 2007
3		南外郭	2013/09/24 ～ 2013/10/31	本調査	山科区音羽伊勢宿町 26-3	室町後期／ピット，柱穴，土坑 江戸時代／ピット，土坑，溝 出土遺物／縄文土器，弥生土器，須恵器，瓦器，磁器，施釉陶器，焼締陶器，瓦，	(財）京都市埋蔵文化財研究所	近藤 2014
4	14S279	第二郭	2015/01/26 ～ 2015/02/20	本調査	山科区音羽伊勢宿町 32-102	室町時代／溝，瓦溜り，礎石 江戸時代／溝（湿地化） 出土遺物／土師器，焼締陶器，瓦，砥石	京都市文化財保護課	平田 2016
5	15S582	内郭土塁 内郭堀	2016/05/09 ～ 2016/05/31	本調査	山科区音羽伊勢宿町 32-22	平安時代／ピット 室町時代／土塁，貼石 江戸時代／溝（湿地化） 出土遺物／土師器，焼締陶器，輸入陶磁器，国産施釉陶器，瓦	京都市文化財保護課	赤松 2017
6	18S578	北外部	2019/01/07 ～ 2019/01/18	本調査	山科区音羽伊勢宿町 32-11	室町時代／溝 江戸時代／溝 出土遺物／土師器・須恵器・白磁・施釉陶器・焼締陶器・染付	京都市文化財保護課	本書にて報告
7	18S854	北外部	2019/04/08 ～ 2019/04/16	本調査	山科区音羽伊勢宿町 32-106	室町時代／溝 江戸時代／ピット，溝 出土遺物／須恵器，土師器，白磁，青磁，瓦器，瓦質土器，施釉陶器，焼締陶器，染付	京都市文化財保護課	本書にて報告
8	18S815	南外部	2019/06/18 ～ 2019/07/05	本調査	山科区音羽伊勢宿町 35-52	室町後期／土坑 江戸時代／土坑，溝 出土遺物／須恵器，土師器，青磁，施釉陶器，焼締陶器，染付，銭貨	京都市文化財保護課	本書にて報告
		北外部	1987/04/01 ～ 1988/05/16	立会	山科区音羽伊勢宿町 地内	ＧＬ -1.4 mで土坑および２段積みの石垣を検出。 出土遺物／土師器，瓦質土器，須恵器，国産陶器，青磁，白磁，瓦	(財）京都市埋蔵文化財研究所	(財）京都市埋蔵文化財研究所 1989

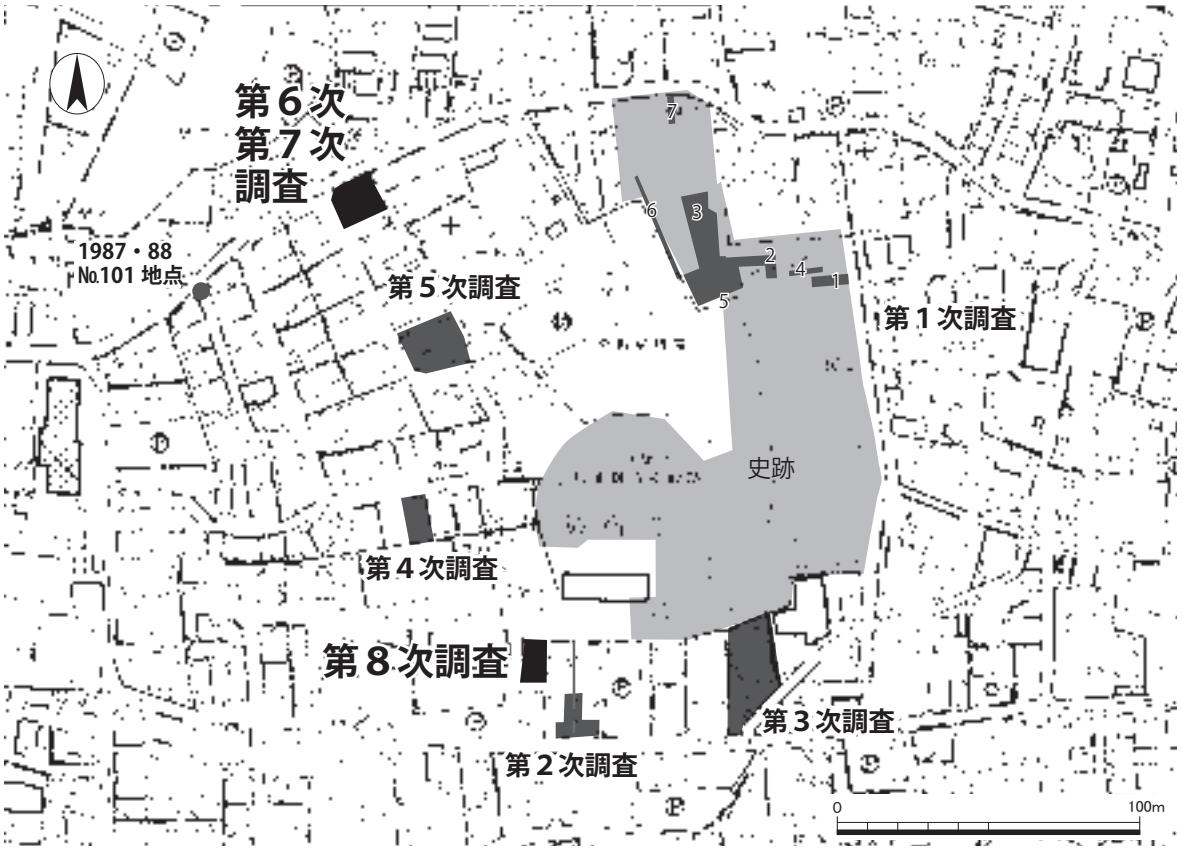


図９　既往の調査位置図（１：2,500）

3．調査成果

（1）第６次調査

基本層序（図10）

基本層序は，現代攪乱・盛土，耕作土，近世整地層，南殿の時期の可能性がある整地層，地山である。当地の地表面の標高は57.6～57.9ｍである。

現代攪乱・盛土は，地表面から0.3～0.6ｍの厚さで存在する。その下に近世以降の灰色粘質土（耕土）が約0.1～0.2ｍ残存する。その下に近世整地層が堆積している。今回の調査では，耕土の下面もしくは近世整地層の上面が掘削限界深度であったため，４箇所で断割を行った。南から断割１，２，３，４とする。断割１では，近世整地層である４層（黄褐色シルト）と５層（黄灰色粘質シルト）が約0.2ｍ堆積し，その下から溝１の埋土となる。

断割２～４では，近世整地層の下層にもう１層整地層が存在することを確認できた。断割３及び４では，２つの整地層の更に下層で地山が見つかった。その結果を受けて，断割２では整地層上面で掘削を停止した。近世整地層と地山の間で見つかった整地層からは土師器の小片が２点見つかったのみであったため，年代は不明である。ただし，後述する溝１が南殿跡外郭北辺堀である可能性が考えられることから，この整地層は山科本願寺南殿造営時の整地層の可能性が考えられる。

断割２では，５層と６層（褐色シルト）が0.2～0.3ｍ程堆積する。その下には，南殿造営時に造作された可能性がある整地層（13層（固く締まっている灰赤色シルト））が存在する。

断割３では，近世整地層である７層（にぶい黄褐色シルト）と８層（礫混じりの砂質シルト）が0.3～0.4ｍ程堆積している。その下に南殿の時期に造作された可能性のある整地層（14層（オリーブ褐色粘質シルト））が0.2～0.3ｍあって，固く締まった暗赤褐色シルトもしくは暗褐色シルトの地山に至る。

断割４では，近世整地層の８層と９層（黄褐色シルト）が0.3～0.4ｍ程堆積しており，その下に南殿の時期の可能性がある整地層である15層（暗オリーブ褐色シルト）が存在する。15層は，0.2～0.3ｍ程の厚さである。その下層は固く締まった暗褐色シルトの地山である。

（廣冨）

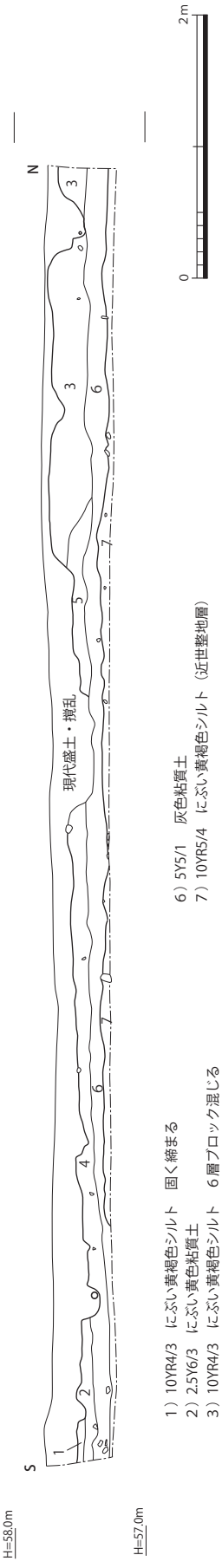
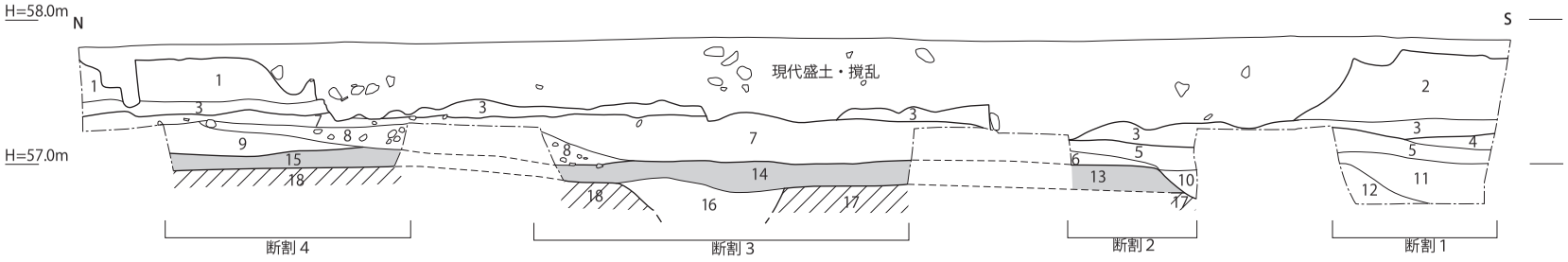


図10　第６次調査区西壁断面図（１：50）

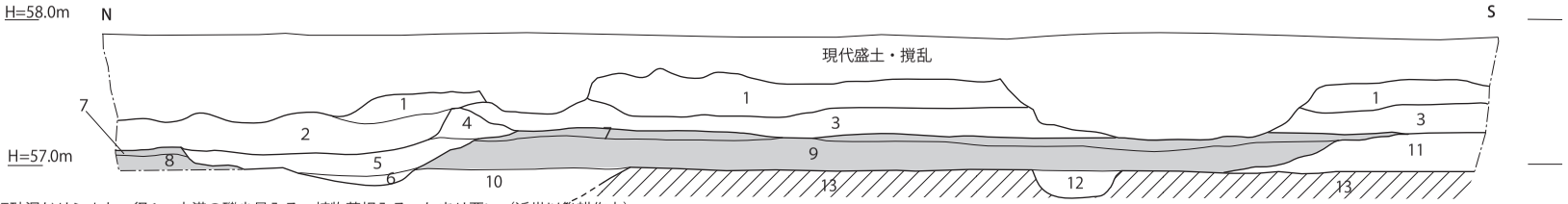
【第６次調査区　東壁】



1　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　６層のブロック混じる
2　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト　径１～８㎝の礫混じる
3　5Y4/1 灰色粘質土
4　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（近世整地層）
5　2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト（近世整地層）
6　7.5Y4/3 褐色シルト（近世整地層）
7　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（近世整地層）
8　10YR2/2 黒褐色礫混じりの砂質シルト　径１～10㎝の礫多量入る（近世整地層）
9　2.5Y5/4 黄褐色シルト（近世整地層）
10　10YR3/1 黒褐色粘質シルト　しまり悪い（溝１）
11　10YR3/1 黒褐色粘質シルト　炭化物入る　しまり悪い（溝１）
12　10YR3/4　暗褐色粘質シルト　しまり悪い（溝１）
13　2.5YR4/2 灰赤色シルト　やや固くしまる（中世整地層？）
14　2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質シルト（中世整地層？）
15　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト（中世整地層？）
16　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土（溝２）
17　5YR3/2 暗赤褐色シルト　固くしまる（地山）
18　5YR3/6 暗褐色シルト　固くしまる　径３～５㎝の礫入る（地山）

0　2m
中世末期整地層

【第７次調査区　東壁】



1）10YR3/3　暗褐色細砂混じりシルト　径1㎝未満の礫少量入る　植物茎根入る　しまり悪い（近世以後耕作土）
2）2.5Y3/3　暗オリーブ褐色細砂混じり粘土質シルト　径1㎝未満の礫少量入る　やや悪い　やや軟質（近世耕作土）
3）2.5Y3/2　黒褐色微砂まじりシルトに　下層ブロック10%程度入る　径2㎝未満の礫少量入る　しまり悪い（溝１）
4）2.5Y4/2　暗灰黄色微砂まじりシルトに　下層ブロック10%程度入る　径2㎝未満の礫少量入る　しまり悪い（溝２）
5）2.5Y3/2　黒褐色粗砂まじりシルトに　下層ブロック10%程度入る　径2㎝未満の礫少量入る　ややしまり悪い（溝２）
6）2.5Y3/2　黒褐色粗砂まじりシルトに　地山ブロック10%程度入る　径2㎝未満の礫少量入る　ややしまり悪い　やや軟質（溝２）
7）10YR2/3　黒褐色粗砂まじりシルト　径0.5㎝未満の礫多量入る　しまり良い　鉄分沈着（中世整地層）
8）10YR2/2　黒褐色粗砂まじりシルトに　地山ブロック10%程度入る　径0.5㎝未満の礫少量入る　しまり良い（中世整地層）
9）10YR2/1　黒色粗砂まじりシルトに　地山ブロック10%程度入る　径1㎝未満の礫少量入る　しまり良い（中世整地層）
10）2.5Y2/1　黒色粗砂まじりシルトに　地山ブロック10%程度入る　径0.5㎝未満の礫少量入る　ややしまり悪い（堀埋土？）
11）10YR2/1　黒色礫まじりシルトに　2.5Y2/1　黒色シルトブロック30%程度入る　人頭大の礫少量入る　しまり良い（整地層または土塁？）
12）2.5Y2/1　黒色粗砂まじりシルトに　地山ブロック10%程度入る　径0.5㎝未満の礫少量入る　ややしまり悪い（ピット？）
13）10YR3/3　暗褐色微砂まじりシルト　径2㎝未満の礫少量入る　しまり良い（地山）

図11　第６・７次調査区壁断面図（１：50）

遺構と遺物（図12）

今回検出した遺構は溝２条のみである。掘削限界深度であるGL-0.6ｍまで掘り下げたが，遺構を各印することができなかった。このため，調査区東壁に沿って４箇所断割を設け，下層の状況の確認を行ったところ，溝6-1と溝6-2の存在が明らかとなった。

溝6-1　溝6-1は，断割１及び断割２において検出した東西溝である。埋土は，締まりの悪い黒褐色粘質シルトと暗褐色粘質シルトである。断割２にて北肩部を確認できたが，南肩は見つけられなかった。５層下面から0.4ｍ程掘り下げたが，底を確認することはできなかったため，ボーリング調査を行ったところ，掘削底から約0.6ｍ下層で安定する地層が存在することがわかった。よって，溝の南北幅は2.0ｍ以上，深さは推定1.0ｍ前後となる。なお，遺物は上層からのみ出土しており，土師器，白磁，焼締陶器など近世のものを含む。しかし，が，南殿跡の外郭北辺の推定ライン付近にあたることから，外郭堀の可能性が考えられる遺構である。

溝6-2　溝6-2は，断割３において検出した溝である。埋土はオリーブ褐色粘質土である。幅は約1.0ｍ，深さは0.4ｍ以上あり底まで掘削は達していない。整地層下面において成立しており，南殿造営以前の遺構と考えられる。遺物は出土していない。

近世整地層　南殿廃絶後，周辺を整地した際に形成された土層である。堆積状況を見ると，北から南に向かって傾斜させるように土を流し込み，整地していること自然地形が南または西へと傾斜する状況にあることから，最も標高が高い北東側に高さを合せて盛土・整地を行ったと考えられる。

（廣冨・黒須）

（２）第７次調査

基本層序（図11下段）

基本層序は，現代盛土・撹乱，近世以後耕作土，近世整地層，中世整地層，地山である。第６次調査とはやや層厚に差があるものの，堆積層は近似する。

現地表面はほぼ平坦で，T.P.57.9ｍを測る。各層までの深度は，GL-0.3ｍまで現代盛土，-0.5ｍまで暗褐色細砂まじりシルトを主体とする近世以後耕作土（第１層），-0.7ｍまでブ

表２　第６次・第７次調査遺構概要表

時代	遺構	備考
室町時代	溝	6-1、7-2（外郭堀の可能性）
	ピット	7-3、7-4
江戸時代以降	溝	6-2、7-1

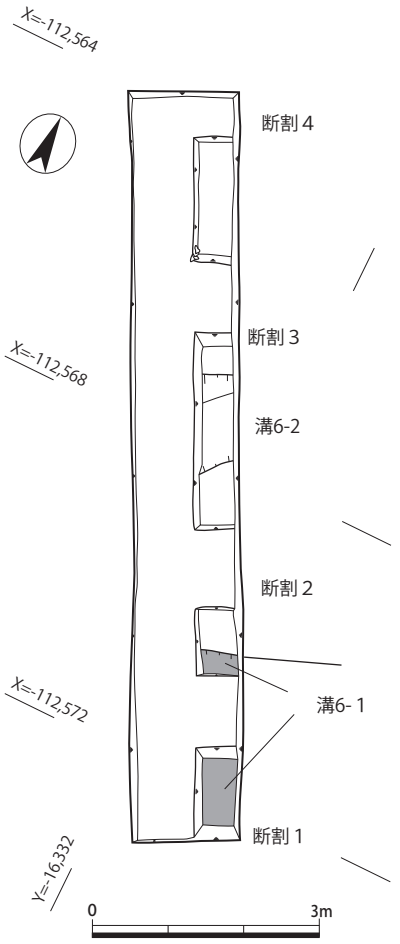


図12　第６次第２面全体図（１：100）

ロック土を含む暗灰黄色微砂まじりシルトを主体とする近世整地層（第２層），-0.9ｍまで黒褐色粗砂まじりシルトを主体とする中世整地層であり（第３層），以下，暗褐色微砂まじりシルトを主体とする地山へと続く。遺構面は，第１層の下面で第１面（近世遺構面）を，第２層の下面で第２面（中世後期遺構面）を検出した。第１面はGL-0.5ｍ，第２面はGL-0.75ｍの深度である。

第１層からは，土師器皿，青磁椀，瀬戸美濃焼椀，染付椀が出土した。第２層からは白磁盤，瓦質土器，施釉陶器，焼締陶器等の小片が出土した。第３層からは，須恵器甕，土師器皿，瓦器椀の破片が出土した。（黒須）

遺構と遺物（図13）

第１面　第１面は近世以後に形成された耕作土（第１層）を除去して検出した遺構面である。第６次調査で確認された近世整地層の上面に相当することから，その存続時期は近世後期と推定される。第１面では屈曲する溝を１条検出した。

溝7-1　調査区南端及び東辺において検出した遺構である。調査区の南東角で屈曲し，南西と北東方向へのびる。今回は西肩と北肩の一部を検出したにすぎないが，掘方は明確であり，人為的な遺構と判断される。検出長はあわせて8.0ｍ，最大深度は0.3ｍを測る。埋土は黒褐色微砂混じシルトを主体とする。近世期に機能した用水路の可能性がある。

第２面　第２面は，第２層を除去して検出した遺構面である。この基盤層は，中世後期整地層（第３層）であり，南殿創建時と目される時期に相当する。第２面では，溝１条とピット２基を検出した。

溝7-2　調査北端を北東－南西方向にのびる溝である。検出長は1.4ｍ，最大幅は2.2ｍを測る。断面形状は歪な逆凸形で，中央を一段深く掘り下げる。最大深度は0.4ｍを測る。埋土は，黒褐色粗砂まじりシルトを主体とし，底面付近の土壌は軟質で，滞水した状況を示す。遺物の出土は確認できていない。

第７次調査第２面は，第６次調査第２面に連続すると考えられるが，第６次調査区内には溝7-2の延長となる遺構は確認できていない。

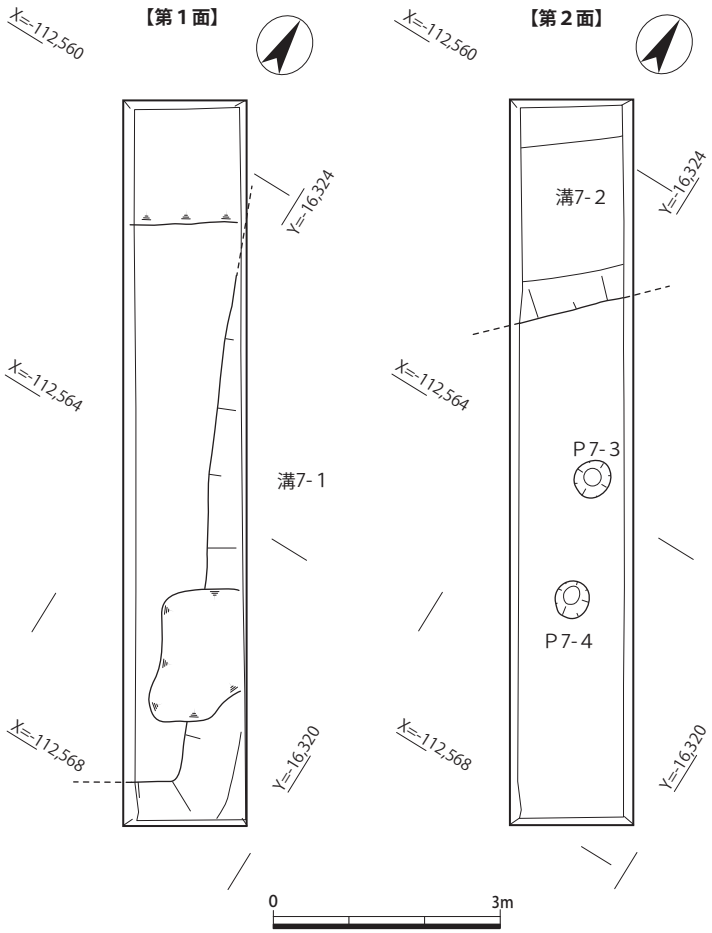


図13　第７次第１面・第２面全体図（１：100）

同じく，第６次調査の溝6-1の延長に対応する遺構も第７次調査区内で確認できていない。ただし，溝6-1，溝7-2はその規模や埋没状況が近似することから，屈曲して連続する可能性がある。

ピット7-3　調査区中央に検出した遺構である。平面形状は，径0.5ｍを測る円形を呈する。断面形状は椀形，最大深度は0.2ｍを測る。埋土は黒色粗砂まじりシルトを主体とする。埋土から信楽焼甕の破片（16世紀）が出土した。

ピット7-4　調査区南半部において検出した遺構である。平面形状は楕円形で，長径0.5ｍ，短径0.4ｍを測る。断面形状は浅い椀形で，最大深度は0.1ｍを測る。埋土は黒色粗砂まじりシルトを主体とし，地山ブロックが少量混じる。遺物の出土は確認できなかった。

（３）第８次調査

基本層序（図14）

第８次調査区は，内郭の南西角部に想定される地点である。第２次調査が東側隣接地で実施されており，層厚0.1ｍの近世包含層上面で近世遺構面，下面で南殿期遺構面が検出されている。

今回の調査地の標高はT.P.59.2ｍで，ほぼ平坦に整形されている。基本層序は，現代盛土・撹乱，近世以後堆積層，近世包含層，整地層，無遺物層である。第２次調査の堆積層とほぼ共通する。

各層までの深度は，GL-0.3ｍまで現代盛土，-0.5ｍまで灰黄褐色粗砂混じりシルトを主体とする近世以後堆積層（第１層），-0.6ｍまで褐灰色礫まじりシルトを主

表３　第８次調査遺構概要表

時代	遺構	備考
室町時代	土坑	8-3、8-4
江戸時代以降	土坑	8-1（井戸？）
	落込	8-2
	集石遺構	

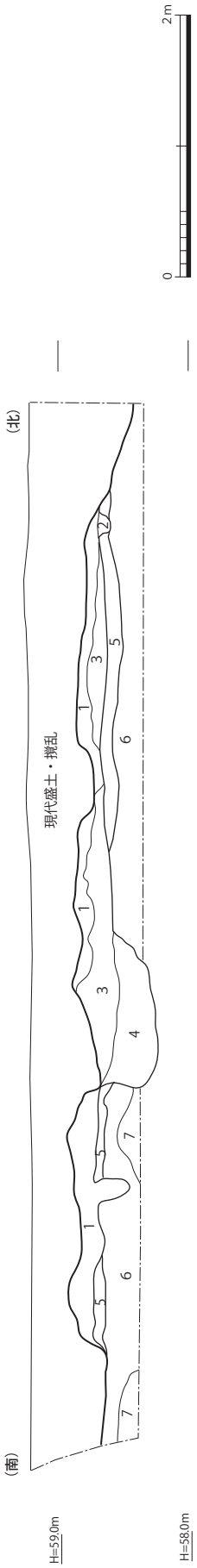


図14　第８次調査区壁断面図（１：50）

体とする近世包含層（第2-1層），-0.7ｍまで黄褐色ブロック土を含む褐灰色細砂混じりシルトを主体とする近世整地層（第2-2層）であり，以下，掘削底である-0.9ｍまで黒色微砂まじりシルトを主体とする無遺物層（第３層）が続く。第１層はしまりが悪く，地山とは断定できなかった。

遺構面は，第２層の上面で第１面（近世遺構面）を，第２層の下面で第２面（中世後期遺構面）を検出した。第１面はGL-0.45～-0.55ｍ，第２面はGL-0.55～-0.65ｍの深度である。

第１層からは，土師器皿，信楽焼鉢，青磁碗，染付碗が出土した。第2-1層からは土師器皿，染付碗，銭貨「元豊通寶」が，第2-2層からは須恵器甕，土師器皿の小片が出土した。

遺構と遺物（図15）

第１面　第１層・第2-1層を除去した段階で検出した遺構面である。北がやや高く，南へむかって僅かに下がる。第１面では土坑１基と，落込，集石遺構を検出した。

土坑8-1　調査区東辺において検出した遺構である。東半部は調査区外に続くものの，概ね径1.1ｍの円形に復元できる。断面形状は歪な椀形で，最大深度は0.4ｍを測る。埋土は径３㎝未満の礫を多量に含む灰色シルトを主体とする。遺構の性格は明らかではないが，井戸もしくは水溜め等の可能性が考えられる。遺物の出土は確認できていない。

落込8-2　調査区北半部において検出した東西方向の溝である。検出長3.5ｍ，最大幅2.9ｍを測る。断面形状は皿形で，最大深度は0.2ｍである。埋土は，小礫を多く含む褐灰色シルトを主体とする。溝状遺構であるが，埋土に流水痕跡は確認できない。埋土が硬くしまることから，人為的に

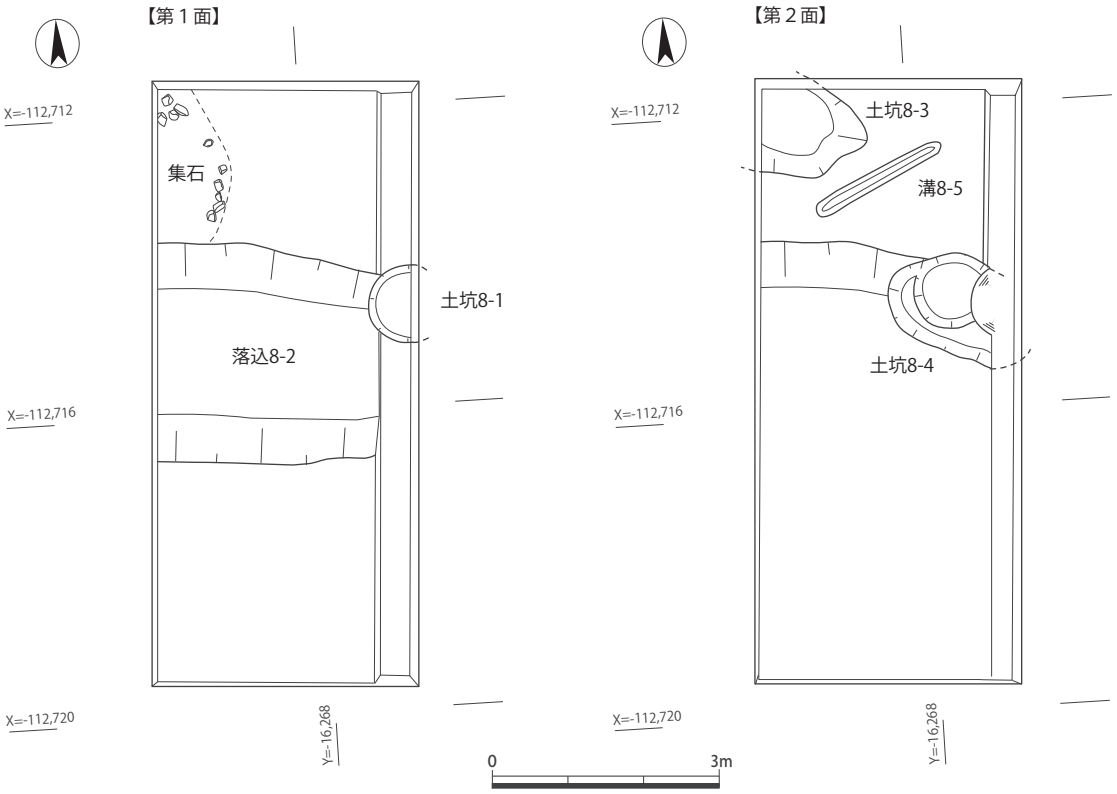


図15　第８次調査全体図（１：100）

表４　遺物概要表

次	時代	内容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
第６次	平安時代	土師器・須恵器・白磁		0		
	江戸時代	土師器・施釉陶器・焼締陶器・染付				
	合計		０箱	０点（０箱）	０箱	１箱
第７次	平安時代～鎌倉時代	須恵器，土師器，瓦器，白磁		0		
	室町時代	青磁，陶器、瓦質土器				
	江戸時代	焼締陶器，施釉陶器，染付				
	合計		０箱	０点（０箱）	０箱	１箱
	平安時代	須恵器，銭貨		0	1	
第８次	室町時代	土師器，青磁				
	江戸時代	土師器，焼締陶器，施釉陶器，染付				
	合計		０箱	０点（０箱）	１箱	１箱

埋め戻された可能性がある。埋土から土師器釜の小片が出土した。

集石遺構　調査区北西角部において検出した遺構である。拳大の礫が集積する遺構で，掘方は確認できない。調査区外へ続くため，全体の規模は不明である。落込8-2と同じく整地の一単位か。遺物の出土は確認できなかった。

第２面　近世整地層である第2-2層を除去して検出した遺構面である。北が高く，南へ向かって緩やかに下がる。第２面では土坑，溝を検出した。

土坑8-3　調査区北西角において検出した遺構である。平面形状は不定形で，南北長1.1ｍ，東西幅21.5ｍを測る。埋土は灰黄褐色礫まじりシルトで，最大深度は0.2ｍを測る。遺構の性格は不明である。埋土から，信楽焼鉢，土師器羽釜の小片が出土した。

土坑8-4　調査区東辺において検出した遺構である。平面不定形な土坑の一部が円形状に一段下がる。検出長は東西1.9ｍ，南北1.3ｍ，最大深度は0.3ｍを測る。円形部を水溜め，不定形部をその掘方と考えると，井戸として機能した可能性が考えられる。円形部の径は1.0ｍを測り，上面で検出した土坑8-1とは近似値を示す。新旧の井戸と捉えるべきか。掘方埋土からは，土師器皿の小片が出土した。

溝8-5　調査区北半部で検出した小溝である。検出長1.8ｍ，最大幅0.2ｍ，最大深度0.1ｍを測る。北東－南西方向に主軸をもつ。遺構の性格は不明である。（黒須）

４．まとめ（図16）

以上，山科本願寺南殿跡の調査成果を記述した。最後に南殿跡の復元案について，これまでの調査成果とあわせて示す。

図16は，南殿跡周辺地図に「御在世山水御亭図」に描かれた情報と，現存する土塁，堀跡のほ

か，調査成果を重ね合わせたものである。第１次，第４次，第５次調査により内郭の規模が確定されたことから，外郭の位置も凡そ推定されることとなった。これを見ると，やはり第６次・第７次調査地は，外郭の北辺ラインに相当することとなる。

今回の調査では，南殿の外郭北堀の可能性がある溝を検出した。調査地の東には光照寺があり，その北辺には外郭北堀と推測される堀状の落込みが存在する。溝7-2は，これに連続する位置にあり，溝6-1は溝7-2と同一遺構である可能性が高い。すなわち，溝6-1が屈曲して北へのび，溝7-2と連続して光照寺北堀へつながることが想定される。「御在世山水御亭図」に描かれた外郭にも「折れ」が存在しており，この付近で堀が屈曲する可能性は高いと言えよう。

ただし「御在世山水御亭図」には，内郭に「ホリ」は描かれているものの，外郭にその表記はない。溝6-1，溝7-2ともに近世期には埋没していたことから，「御在世山水御亭図」が描かれた段階では，すでに形骸化していたと推測される。

一方，南外郭に相当する第８次調査では，第２次調査同様，硬くしまった整地層や井戸等を検出

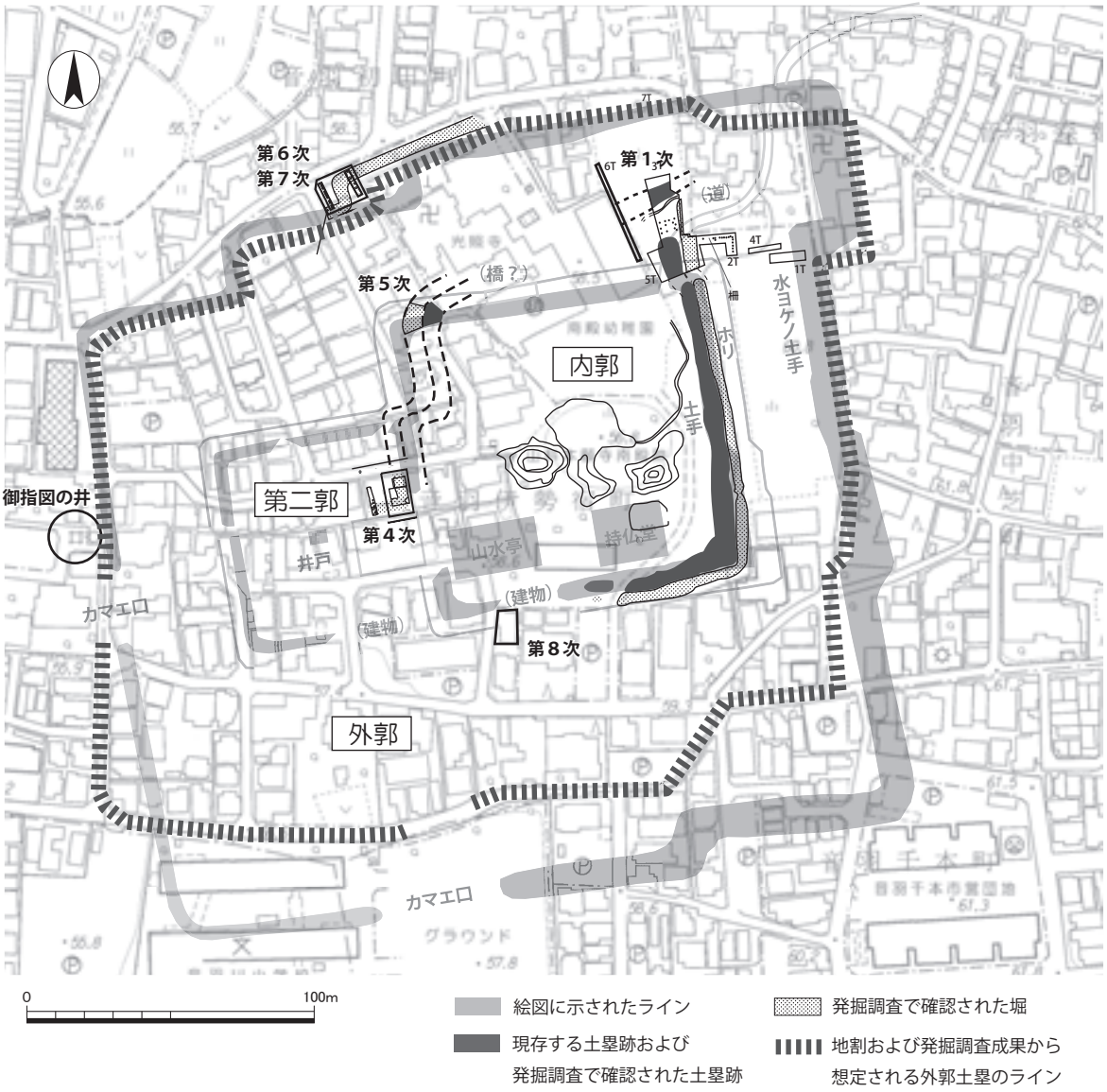


図16　山科本願寺南殿新復元案（１：2,500）

した。この地点は，「御在世山水御亭図」には，内郭の土塁や堀の延長上にあたるものの，それらは描かれておらず，門らしき屋根の表現が認められるのみである。これを重視するならば，第８次調査区内に堀の痕跡が確認できなかったことは，積極的に評価できる。硬くしまった整地層が居住域や通路として利用された痕跡として捉えることもできるだろう。

なお，今回の一連の調査では，掘削範囲や掘削深度などが制限された状況であったため，南殿跡の一端を明らかにしたに過ぎない。特に，南外郭については発掘調査が及んでおらず，その復元も想定の域を出ない。また，本来内郭にあるべき「御指図の井」が西外郭の外側にあるなど，解決すべき課題も多い。調査地周辺は閑静な住宅街であり，発掘調査も限られた規模であることが多いため，調査成果の累積が遺跡理解のための最大の手段となる。今後の調査成果が待たれるところである。

（黒須亜希子・廣冨亮太）

註

1）ここでは既報告に従い，中心区画を「内郭」，連結する小区画を「第二郭」，その周囲を「外郭」と称しておく。

参考文献・引用文献

1　第１次調査：出口　勲　「Ⅰ山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成14年度　京都市文化市民局　2003年。

2　第２次調査：平田　泰　「Ⅳ山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成18年度　京都市文化市民局　2007年。

3　第３次調査：近藤奈央　「Ⅹ山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成25年度　京都市文化市民局　2014年。

4　第４次調査：赤松佳奈　「Ⅶ山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成27年度　京都市分化市民局　2016年。

5　第５次調査：赤松佳奈　「Ⅲ山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成28年度　京都市文化市民局　2017年。

6　立会調査：（財）京都市文化財研究所『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』　1989年。

7　濱崎一志　「第13章　山科寺内町の構と本願寺」『都市空間の変遷に関する歴史的考察』　1994年。

Ⅷ　中臣遺跡（92次）

1．調査経過

（1）調査経過

本件は，個人住宅兼共同住宅新築に伴う発掘調査である。調査地は山科区勧修寺西金ヶ崎250，251に所在し中臣遺跡に該当する。平成30年4月5日に文化財保護法93条第1項に基づく届出が提出され，隣接地にて過去に発掘調査が行われていることから，協議の上，翌令和元年6月17日～7月11日に発掘調査を行った。中臣遺跡の第92次調査にあたる。

既存建物に地下ピットがあったため調査区を対象範囲の東側に設定し遺構検出を行った結果，竪穴建物1棟と南西にむかって低くなる地形変化を確認した。遺構の広がりを追証することを目的とし，7月1日より調査区を北東へ拡張した。最終的な調査面積は120㎡である。

2．遺　跡

（1）立地と歴史的環境

中臣遺跡は山科区栗栖野および勧修寺周辺に広がる旧石器時代～中世までの複合遺跡である。東に山科川，西に旧安祥寺川が流れ，その合流地点を南限とする三角地の丘陵一帯に弥生時代・古

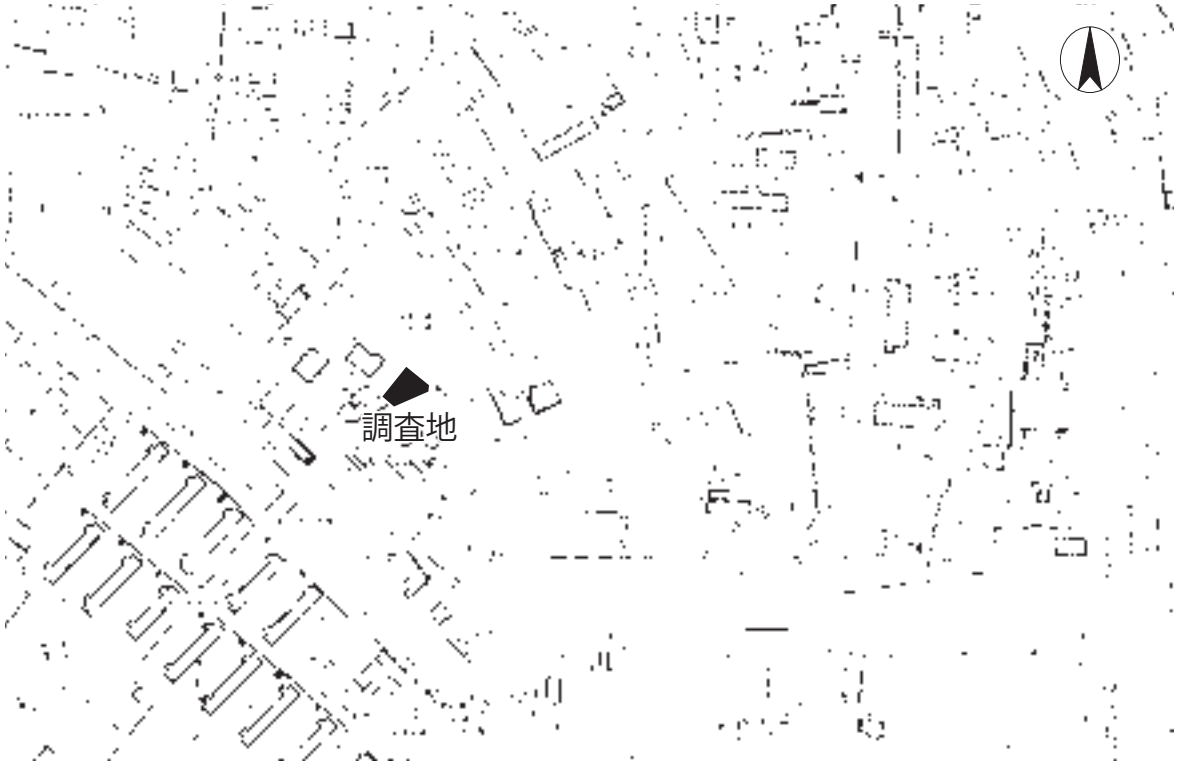


図1　調査位置図（1：5,000）

図２　調査前風景（北東から）

図３　作業風景（北から）

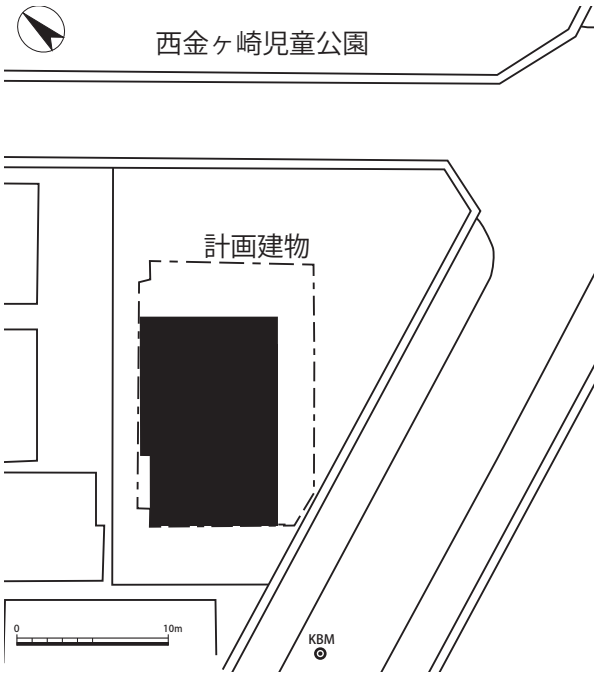


図４　調査区配置図（１：500）

墳時代の墳墓・集落跡や古代～中世の遺跡が展開する。弥生時代の遺跡は昭和44年に当時高校一年生であった岡本氏が弥生土器を採集したことをきっかけに発見された。昭和46年の住宅建築に伴う第１次調査では弥生時代中期の方形周溝墓や古墳の基底部が確認された[1)]。それから50年が経過した現在では多数の調査が行われ，栗栖野中臣町付近から北西・南東方向に向かって低くなる丘陵の裾部に多数の竪穴建物が展開する事などがわかりつつある。

本調査地は中臣遺跡内で初めて竪穴建物が発見された２・３次調査と同じ丘陵裾部の平坦地にあり，学史上も重要な場所に位置した。２次調査などが行われた昭和48年当時は周囲に水田が広がっていたが現在は市街地化している。今回の成果では竪穴建物を検出できたことも重要だが特筆すべきは地形の変化を確認できたことで，道路を挟んで南に位置する第12次調査では遺構は検出されておらず，調査所見も周辺より低くなる地形から遺構は存在していなかったとする。現地形も当該地より西は旧安祥寺川に向かって低くなっており，これらの状況から今回検出した竪穴建物は当該平坦地に展開した集落の南端にあたると推定される。

（２）周辺の調査（図５・６・12・表１）

中臣遺跡ではこれまで３～４世紀の竪穴建物，墳墓，６～７世紀の竪穴建物，古墳などが確認されている。遺跡南半の３～４世紀の竪穴建物には弥生時代後期のものと古墳時代初期のものがあり，丘陵の南裾に分布する。

当該地は中臣遺跡の南西側にひらけた丘陵裾部の平坦面の一部で，これまで３～４世紀の竪穴建物や６～７世紀の竪穴建物・掘立柱建物などが検出されている。

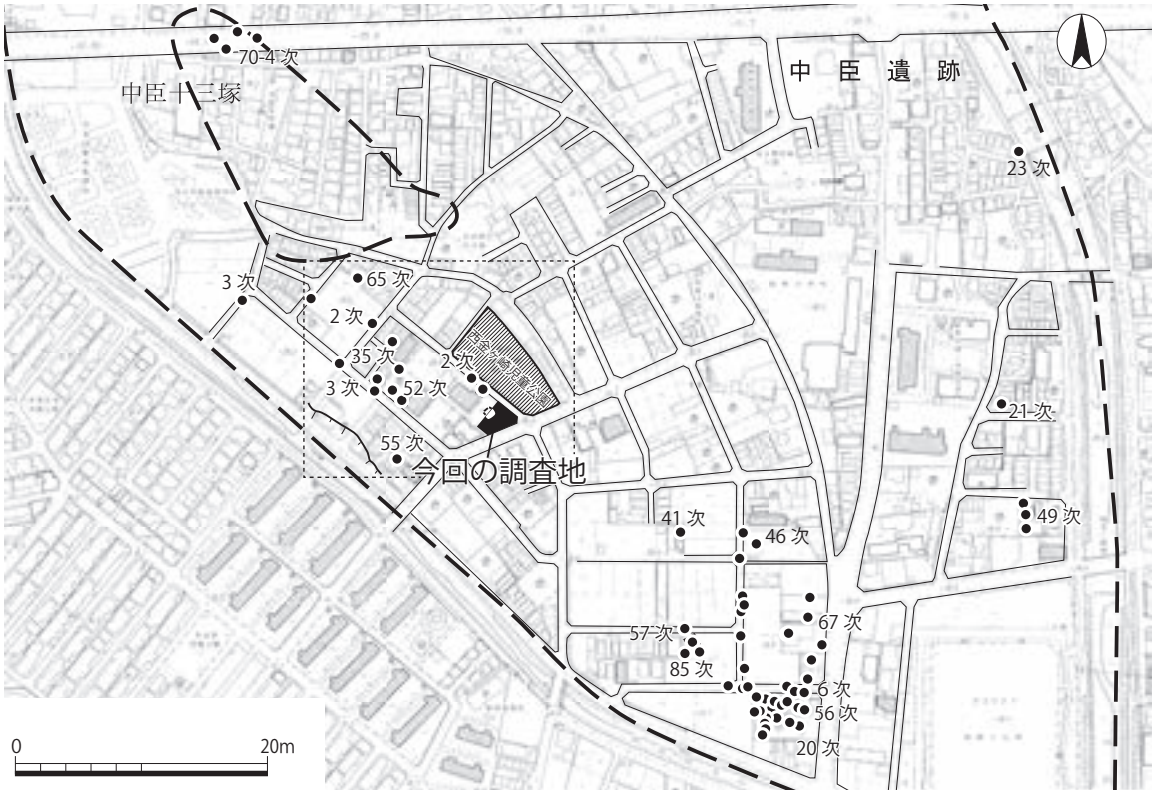


図５　中臣遺跡南半で検出された３～４世紀の竪穴建物（１：6,000）

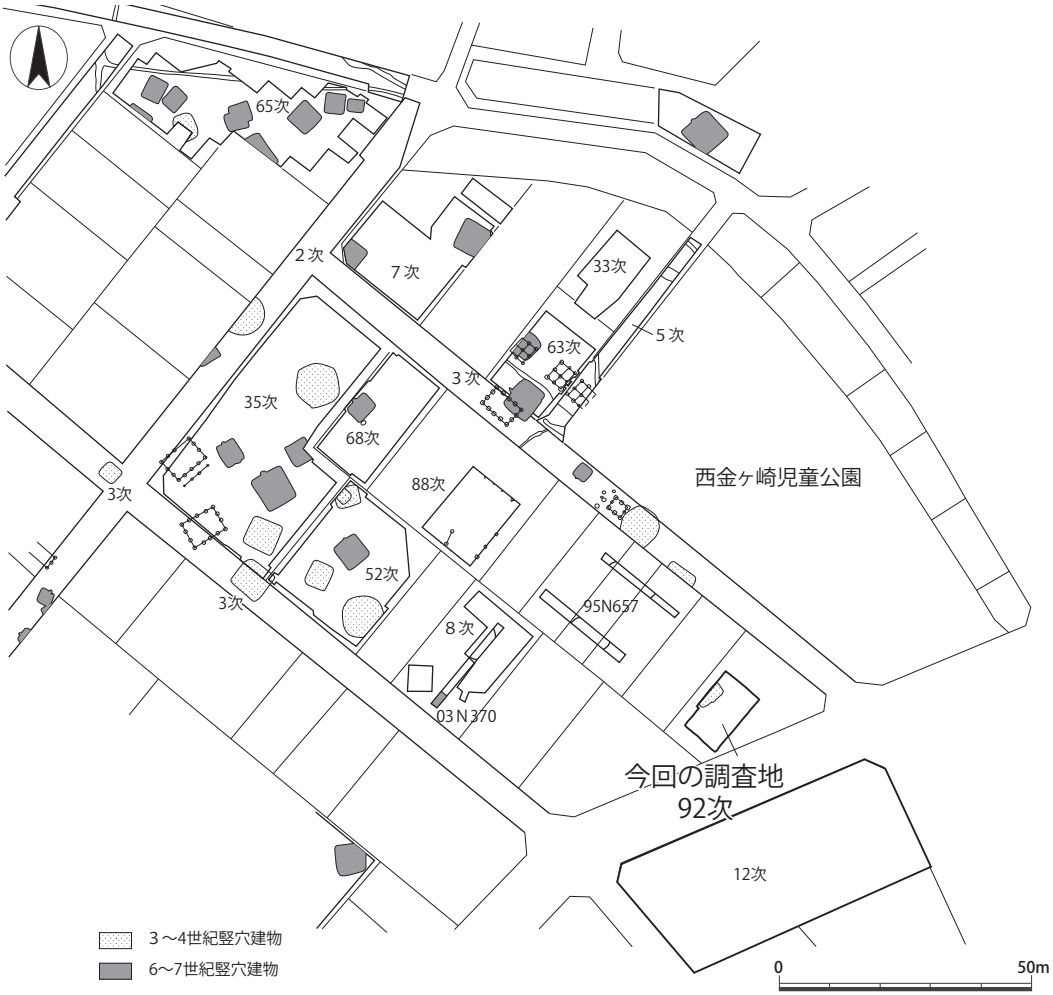


図６　周辺調査位置図（１：1,500）　　H26京都市発掘調査報告図５に加筆

表１　中臣遺跡南半で３～４世紀の竪穴建物を検出した調査一覧

次数	調査員	文献１	文献２	略記号
２次 ３次	桃野・丹羽・和田・本・大矢・永田・川西・吉川・牛嶋・岡本	『中臣遺跡　1973』京都市埋蔵文化財年次報告　1973-Ⅲ　中臣遺跡調査団・京都市文化観光局文化財保護課　1974	『中臣遺跡発掘調査概要』財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　1977	中臣遺跡調査団による発掘調査
６次	清水・菅田・丹羽・和田・牛嶋	『中臣遺跡発掘調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1977		土地区画整理道路 C-5
７次	菅田	『京都市埋蔵文化財研究所概報集 1977－Ⅰ』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977	『昭和 51 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2008	76RT-NK007
10 次	菅田	『中臣遺跡』文化庁国庫補助による発掘調査概要 1977 年　京都市文化観光局（財）京都市埋蔵文化財研究所　1979	『昭和 52 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2011	77RT-NK010
20 次	前田	『中臣遺跡』文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要　1979 年度　京都市文化観光局（財）京都市埋蔵文化財研究所　1980	『昭和 54 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2012	79RT-NK020
21 次	菅田・前田	『中臣遺跡』文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要　1979 年度　都市文化観光局（財）京都市埋蔵文化財研究所 1980	『昭和 54 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2012	79RT-NK021
23 次	菅田・吉村・前田・家崎	『中臣遺跡』昭和 54 年度山科川中小河川改修事業に伴なう発掘調査の概要 1979 年度	『昭和 54 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2012	79RT-NK023
35 次	平方	『中臣遺跡発掘調査概要』昭和 55 年度 京都市埋蔵文化財調査センター・（財）京都市埋蔵文化財研究所　1981	『昭和 55 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2011	80RT-NK035
41 次	本	『中臣遺跡発掘調査概要』昭和 55 年度 京都市埋蔵文化財調査センター・（財）京都市埋蔵文化財研究所　1981	『昭和 55 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2011	80RT-NK041
46 次	磯部・平方	『中臣遺跡発掘調査概要』昭和 56 年度 京都市埋蔵文化財調査センター・（財）京都市埋蔵文化財研究所　1982	『昭和 56 年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1983	81RT-NK046
49 次	平方	『中臣遺跡発掘調査概要』昭和 56 年度 京都市埋蔵文化財調査センター・（財）京都市埋蔵文化財研究所　1982	『昭和 56 年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1983	81RT-NK049
52 次	平方・辻裕	『中臣遺跡発掘調査概報』昭和 57 年度 京都市埋蔵文化財調査センター・（財）京都市埋蔵文化財研究所　1983	『昭和 57 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1984	82RT-NK052
55 次	平方・辻裕	『中臣遺跡発掘調査概報』昭和 58 年度 京都市埋蔵文化財調査センター・（財）京都市埋蔵文化財研究所　1984	『昭和 58 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1985	83RT-NK055
56 次	平方・辻裕	『中臣遺跡発掘調査概報』昭和 58 年度 京都市埋蔵文化財調査センター・（財）京都市埋蔵文化財研究所　1984	『昭和 58 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1985	83RT-NK056
57 次	平方・辻裕	『中臣遺跡発掘調査概報』昭和 58 年度 京都市埋蔵文化財調査センター・（財）京都市埋蔵文化財研究所　1984	『昭和 58 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所	83RT-NK057
65 次	丸川・木下	『中臣遺跡発掘調査概報』昭和 61 年度 京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所　1982	『昭和 60 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988	85RT-NK065
67 次	菅田・平方	『中臣遺跡発掘調査概報』昭和 61 年度 京都市文化市民局・（財）京都市埋蔵文化財研究所　1982	『昭和 61 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1989	86RT-NK067
70 次	平方・高	『平成３年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1995		91RT-NK070
85 次	柏田	『京都市内遺跡発掘調査報告』平成 21 年度　文化市民局　2010		2008RTNK085
試掘	梶川・馬瀬	『京都市遺跡試掘調査概報　平成８年度』京都市文化市民局　1997		96N657
試掘	北田・馬瀬	『京都市遺跡試掘調査概報　平成 15 年度』京都市文化市民局 2004		03N370

3．遺　構

（1）基本層序（図7）

本調査地は北が高く南西が低い地形で，長辺約14ｍの調査区内での比高は0.5ｍに及んでいた。検出した竪穴建物は調査区の北端にあり，南西にむけて低くなる傾斜面では遺構が確認できなかった。

壁面の層序は，高低差と堆積層の把握のため統一の層名を使用した。最も低い場所に位置する南西壁面（B-A”）には北側よりも厚く堆積層が残っており，高い側のA-A’断面には遺存していないが，層４以下を調査対象と判断した。層４からは顕著な遺物が出土しなかったため時期は不明だが，放棄された竪穴建物に最終的に溜まった土である層①と近似しており，竪穴建物廃絶後から近世までに堆積した地層と推測される。地山は北側では現地表化0.7ｍ，南側では同1.0ｍで検出した。上部（７）が明黄褐色シルト，下部（８）が褐色砂礫である。低い場所ではその上に層厚10～40㎝の褐色泥砂が堆積する（層４，６，10）。南西壁ではGL-0.6mで近現代耕作土である層２を確認したが高い側では現代攪乱に削平されて遺存していなかった。

（2）遺　構（図8～12・表2）

竪穴建物１棟と土坑２基を検出した。

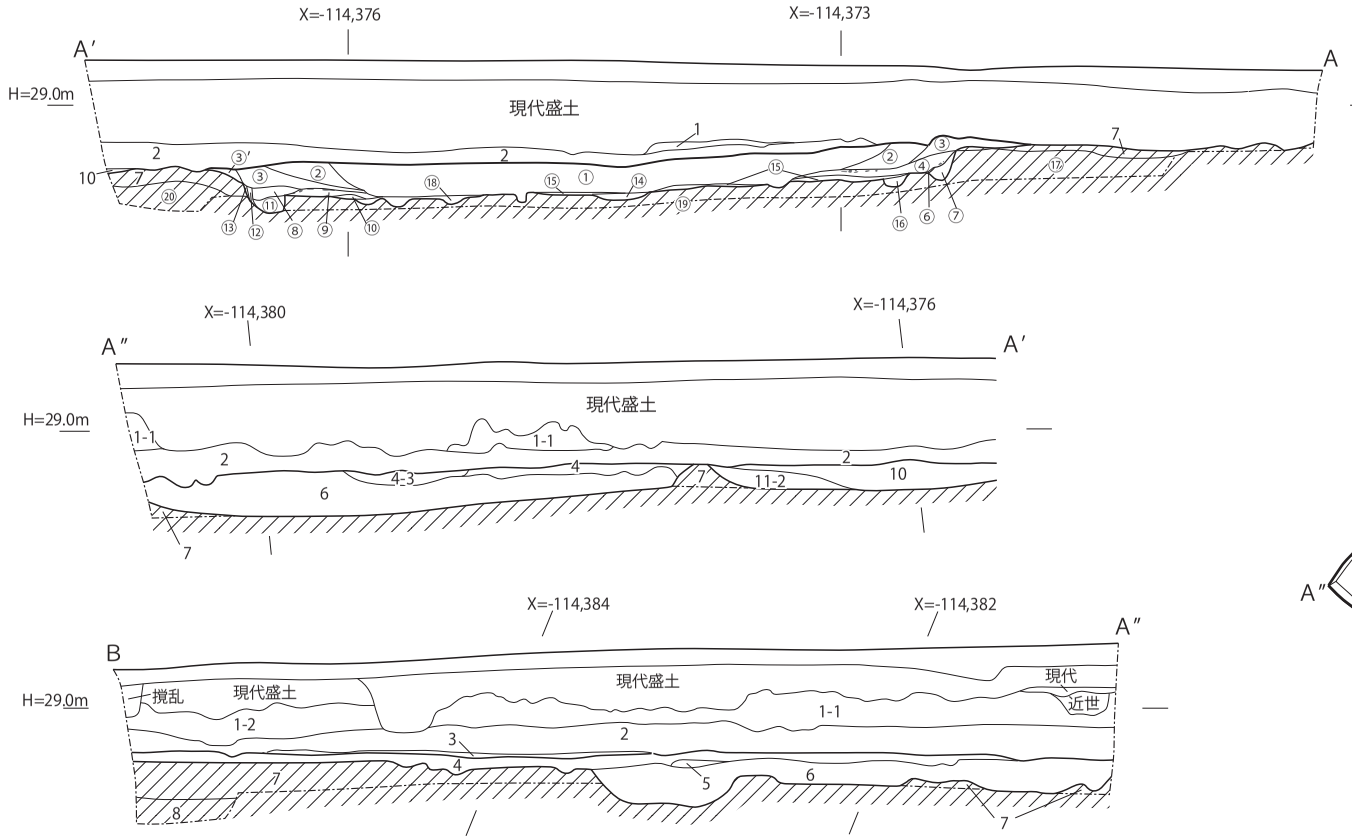
竪穴建物１　調査区の北半で検出した竪穴建物で地形に合わせて中心軸が北で西に40度振っている。調査区の北に広がる平坦面に建てたと考えられ，傾斜地にかかっている調査区内で検出できたのは，建物の南東半のみであった。隅丸方形で１辺の長さは約5.5ｍである。深さは0.3ｍある。主柱穴は２基検出した。径0.4m，深さ0.4ｍ，埋土は黒褐色泥土である。主柱穴は４基あったと推定される。

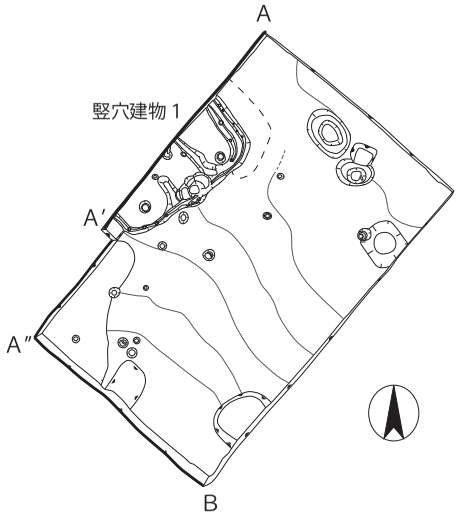
調査区の限界があり中心部まで検出できなかったため明確な炉は見つからなかったが，中央付近の凹み（X）に炭が溜まっていたことから炉があった可能性もある。また主柱穴の内側に小穴２基を検出した。小穴の径は0.2ｍ，深さ0.1ｍで埋土は暗褐色泥土であった。

南東辺には貯蔵穴が設けられていた。長辺1.4ｍ，短辺１ｍの不整方形で0.1ｍほど全体を掘り下げた後に中央部に穴をあけている。中央穴は径0.5ｍの不整円形で床面からの深さは0.3ｍである。埋土は黒褐色砂泥であった。浅い部分は平らに掘られており蓋などを被せた可能性がある。また，中央穴の埋土上面で土器や石を検出した。石や割れた甕の破片を敷いたような状態で，埋め戻した後に人為的に置いた可能性がある。貯蔵穴の埋土である（図10）セクション断面4.5層からは顕著な遺物が出土しなかった。土も洗ったが記述すべきものは特になかった。

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
弥生時代	竪穴建物１，土坑２・３	





【断面位置　模式図】

図７　調査区断面図（１：150）

壁面土層

1-1　2.5Y5/3黄褐色砂泥(1～5cm大礫含む)
1-2　2.5Y5/2暗灰黄色泥砂(砂質強い)
2　10YR3/2黒褐色泥砂(1～5cm大礫,ブロック分)【近現代耕作土】
3　10YR3/3暗褐色泥砂【近現代耕作土・床土の名残か】
4　10YR3/1黒褐色泥砂:溜り
4-2　10YR3/3暗褐色泥砂
4-3　10YR3/1黒褐色泥土
5　10YR3/1黒褐色泥砂
6　7.5YR4/3褐色泥砂:土壌化
7　10YR6/6明黄褐色シルト【地山】
8　10YR4/4褐色砂礫【地山2】

竪穴建物１埋土及び周辺の地層

①　10YR3/1黒褐色砂泥【廃絶後埋土】
②　10YR4/1褐灰色泥土【廃絶後埋土】
③　10YR4/3にぶい黄褐色泥土(地山ブロック含む)【廃絶後埋土】
③′　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
④　10YR4/2灰黄褐色砂泥(炭多量に含む)
⑤　10YR5/4にぶい黄褐色
⑥　10YR5/2灰黄褐色泥土
⑦　10YR4/2灰黄褐色シルト【壁溝】
⑧　10YR4/2灰黄褐色泥土
⑨　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(炭多量に含む)
⑩　10YR5/4にぶい黄褐色シルト
⑪　10YR4/2灰黄褐色シルト【壁溝】
⑫　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥【壁板痕か】
⑬　10YR5/4にぶい黄褐色シルト
⑭　10YR2/1黒色砂泥(炭多量に含む)【X】
⑮　10YR6/6明黄褐色シルト【床】
⑯　10YR4/2灰黄褐色シルト【壁溝】
⑰　10YR6/5明黄褐色シルト～砂礫【地山】
⑱　10YR5/1褐灰色シルト(2～3cm大礫含む)
⑲　2.5Y8/6黄色シルト/3～10cm大礫(下方に向かって礫)【地山】
⑳　10YR6/4にぶい黄橙色シルト/砂礫(2～3cm大礫含む)

0　2m

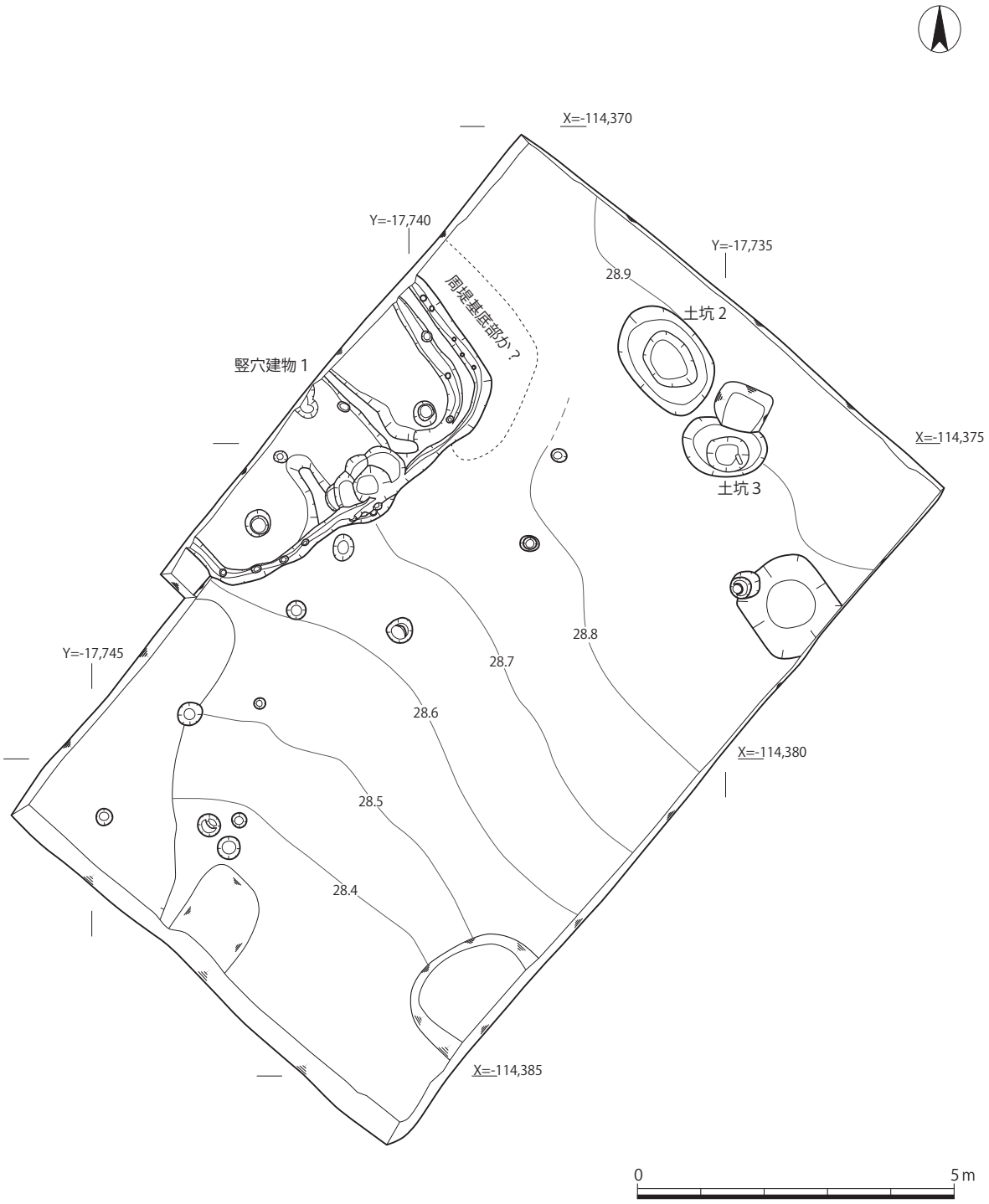


図８　遺構平面図（１：100）

床面は基本的に地山を利用しており，部分的に貼土を検出した。貯蔵穴のそばでは堤状の高まりを検出した。床面に高低差があるための処置かもしれない。床面は北東から南西にむけて傾斜しており，ある程度平らな面を確保するためか段を持って下がる（図10断面）。一段ごとの段差は２～５㎝，北東端と南西端の差は10㎝ある。傾斜地に建てた事，地山下部が砂礫層である事などが原因と推定される。

壁溝は幅0.2ｍ，床面からの深さ0.1ｍで，壁面に沿って全面巡っていたと推測される。壁溝内では間隔が不均等な径0.1ｍの壁を留めていた杭跡と考えられる小穴を検出した。

本調査で検出した竪穴建物は廃絶後自然に埋まったような堆積状況を示し，比較的遺存状態が良好であった。床面では安置された状態の土器や炭化材を検出した。

炭化材は，中心部に対して放射状に検出された。屋根材の一部が炭化したものと考えられ材質は広葉樹で散孔材と環孔材が含まれる[2)]。周辺の調査で見つかった竪穴建物でも炭化材が出土しており，焼失住居と推定される。ただし，今回調査では焼けた土や被熱面などは確認できなかった。

土器は竪穴建物の南側で集中的に見つかった。甕，鉢，高坏などがあった。甕５と甕６は置かれた状況を保ったまま埋まっていた。口縁部を床側に向けた甕６の上に小甕５が安置されていた。割れた甕を器台に代用したのだろう。

竪穴建物廃絶後の埋土は，壁際と中央部で異なっていた。調査区北壁AA’断面の②・③層が竪穴建物内の壁際に堆積した埋土，①が中央部の埋土にあたる。埋土②・③は外側から流入したような堆積状況を示し，中央部はさらにその上から堆積したものである。またこれとは別に竪穴建物北東壁の外側では周堤基底部の可能性がある痕跡を検出した（破線）。北東壁外側の痕跡を積極的にとれば，周堤があったと推測される。

土坑２　調査区の北東端で検出した楕円形の土坑で長辺1.8ｍ南北1.2ｍ深さは0.2ｍであった。埋土は黒褐色泥砂で弥生土器が小量出土した。

土坑３　調査区の北東端で検出した楕円形の土坑で長辺1.3ｍ南北0.8ｍ深さは0.2ｍであった。埋土は黒褐色泥砂で弥生土器が少量出土した。

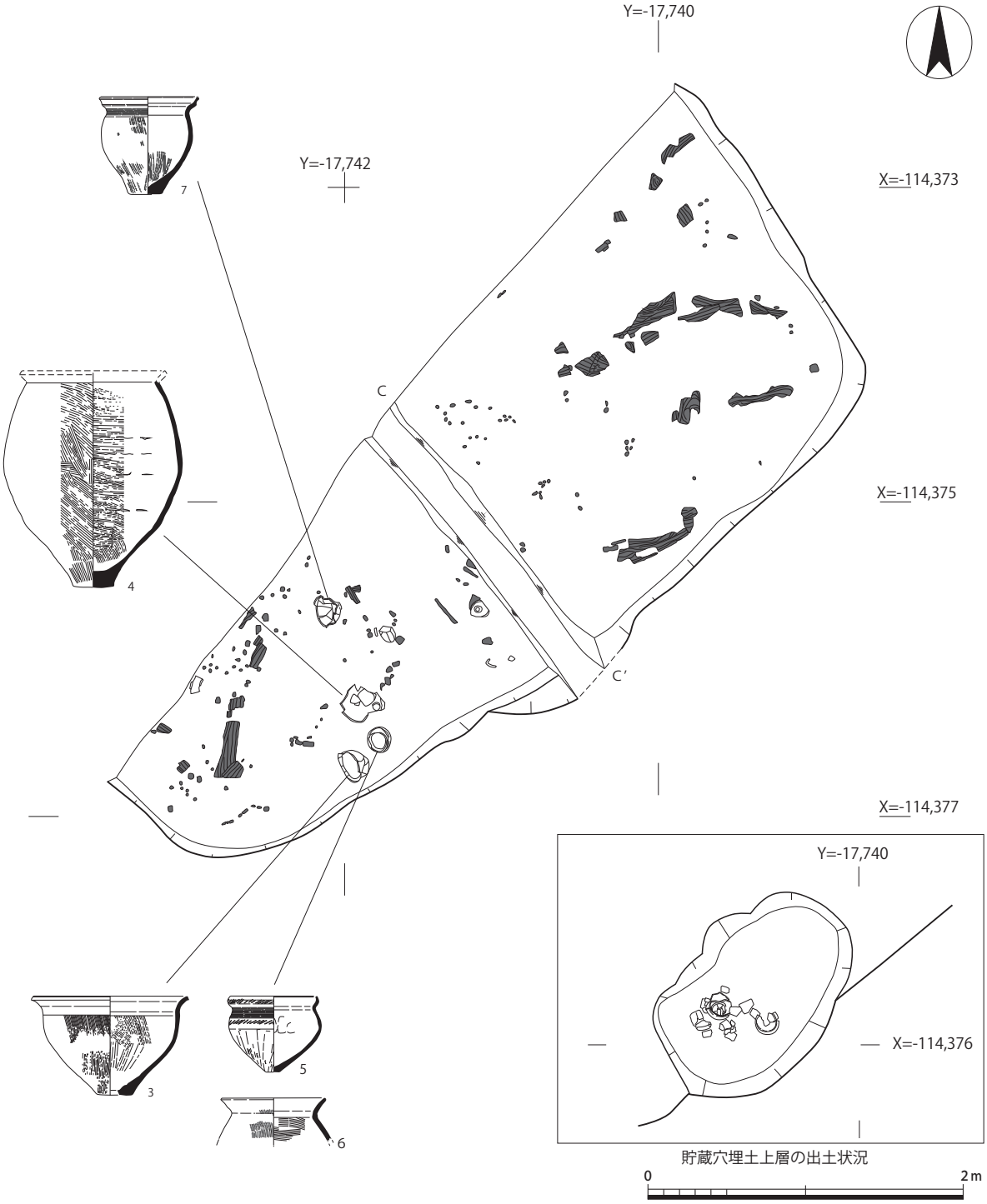
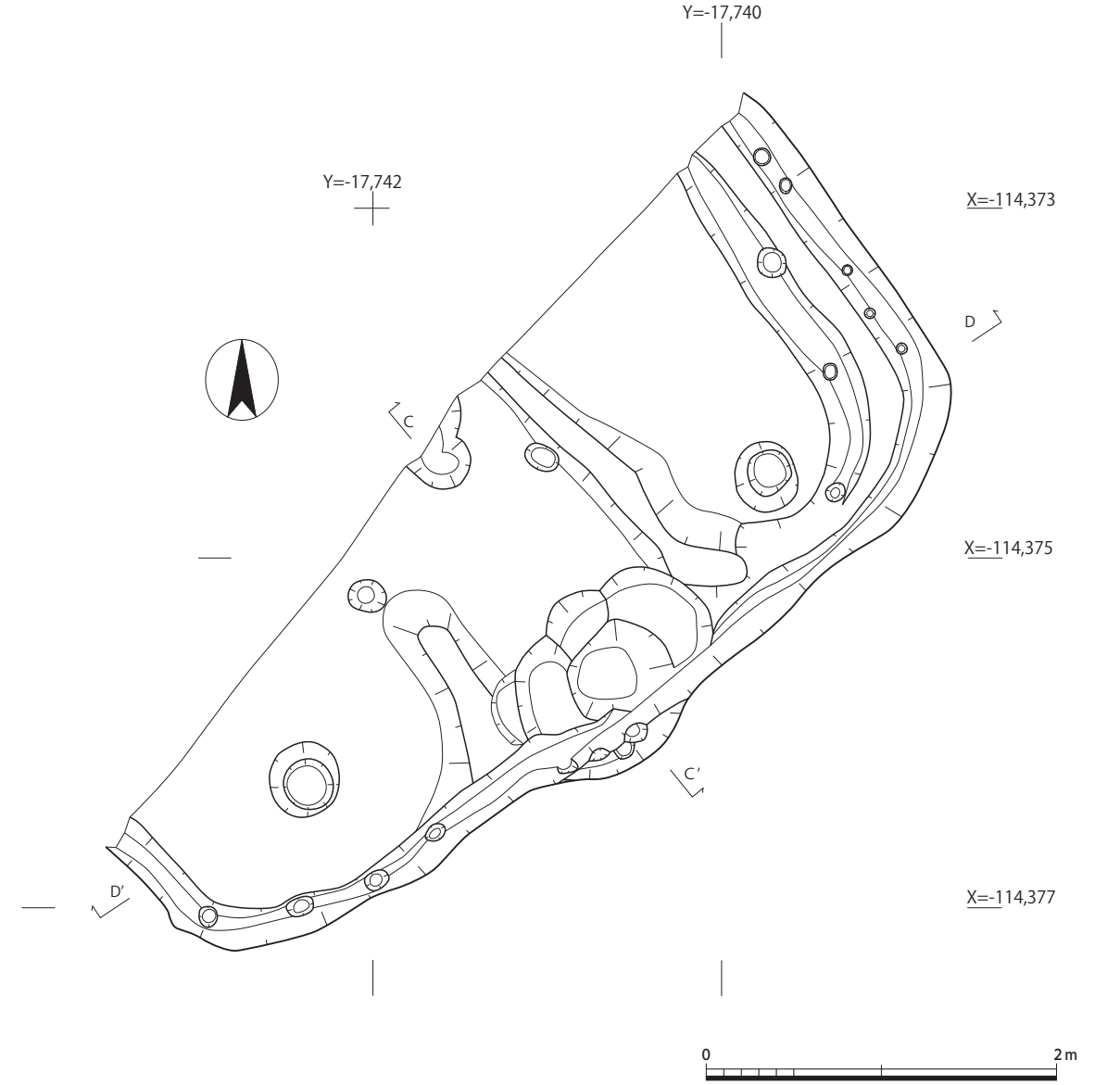
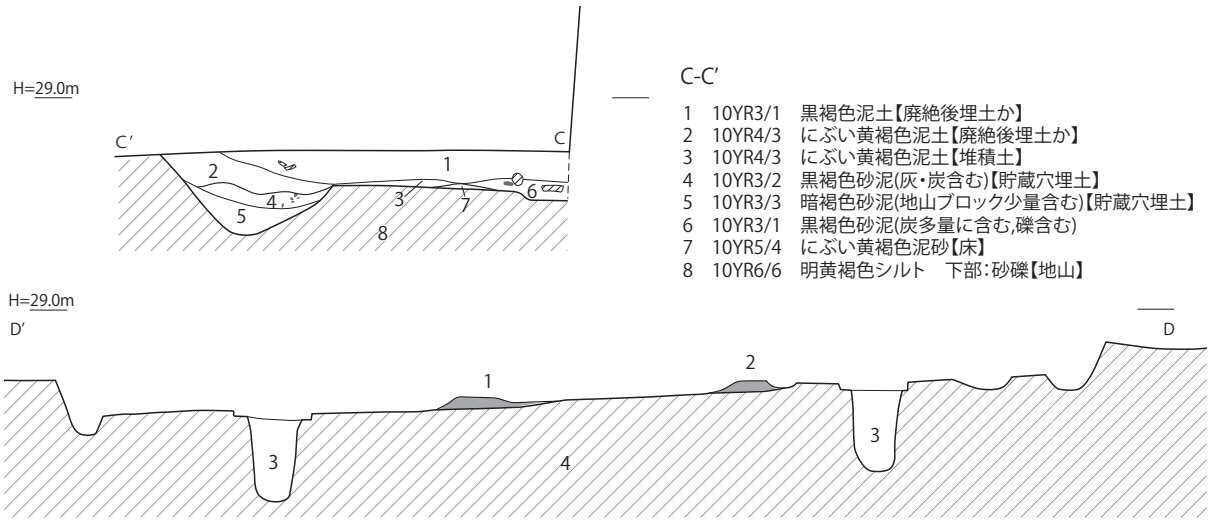


図９　竪穴建物１床面　平面図（１：40）

図10　甕５・６出土状況（北東から）

図11　貯蔵穴　遺物出土状況（北東から）





C-C′

1　10YR3/1　黒褐色泥土【廃絶後埋土か】
2　10YR4/3　にぶい黄褐色泥土【廃絶後埋土か】
3　10YR4/3　にぶい黄褐色泥土【堆積土】
4　10YR3/2　黒褐色砂泥(灰・炭含む)【貯蔵穴埋土】
5　10YR3/3　暗褐色砂泥(地山ブロック少量含む)【貯蔵穴埋土】
6　10YR3/1　黒褐色砂泥(炭多量に含む,礫含む)
7　10YR5/4　にぶい黄褐色泥砂【床】
8　10YR6/6　明黄褐色シルト　下部:砂礫【地山】

D-D′　1　10YR3/6　黄褐色泥土(砂・小礫混じる)　3　10YR3/1黒褐色泥土
2　10YR4/4　褐色砂泥(小礫含む)　4　10YR6/6明黄褐色シルト　下部:砂礫【地山】

図12　竪穴建物1　平・断面図（1：40）

４．遺物（図13・表３）

遺物は基本的に竪穴建物１から出土した。１・２は貯蔵穴から，３～７は床面直上で出土した（図13）。

貯蔵穴からは他にも甕の破片が出土したが，図化できたものは２点（１・２）であった。

１は受口状口縁甕で簡略化した文様が施される。口縁部外面には列点文，体部最上端には櫛描の凹線文，その下には櫛描の波状文が施される。全体的に器面が磨滅しているため残りは良くないが口縁端部には沈線がまわる。

２は高杯である。杯部と脚部は接合点が無いが胎土・調整・大きさから同一個体と考えられる。

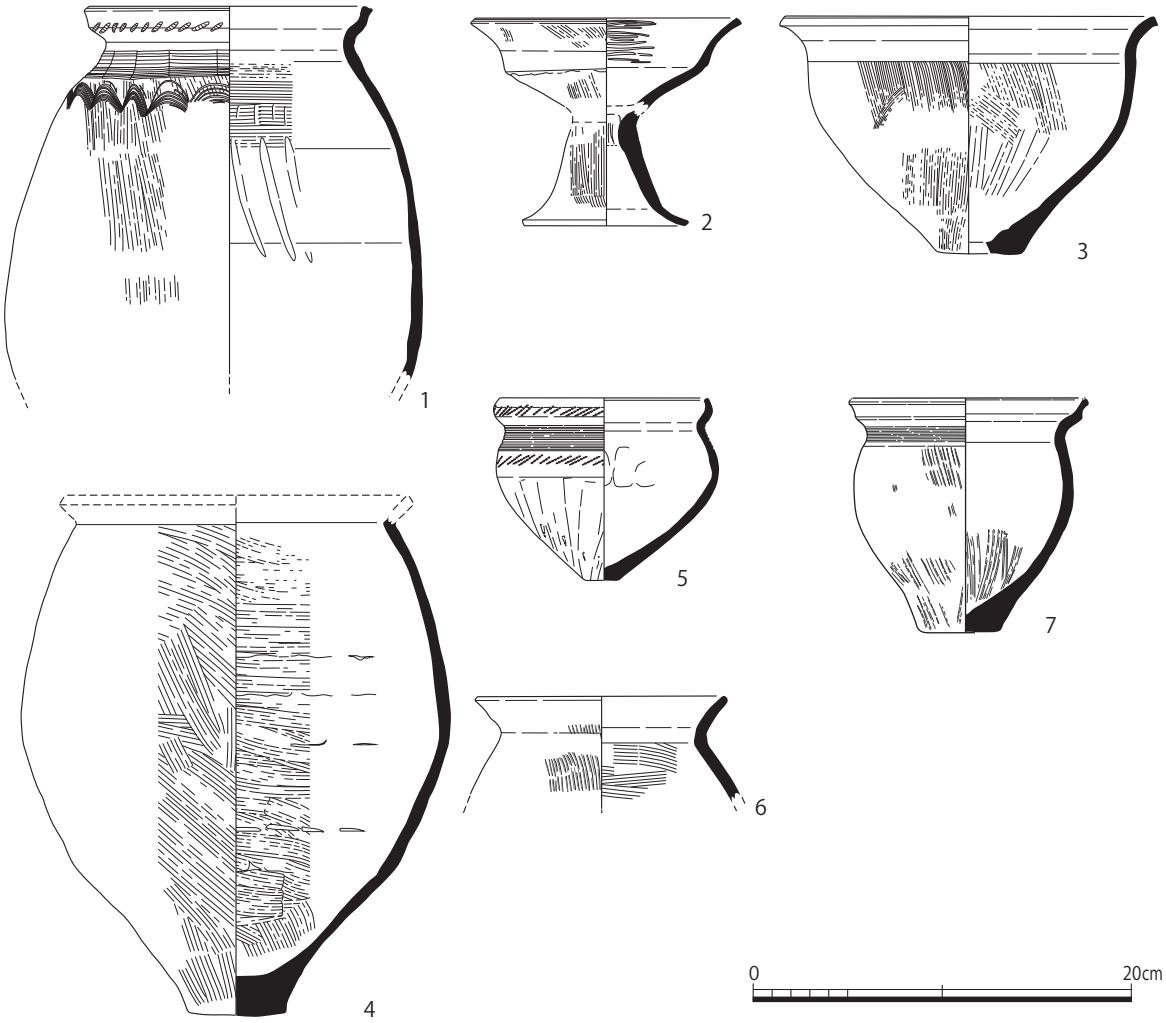


図13　出土遺物（１：４）

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
弥生時代	弥生式土器		７点(2箱)		１箱
合　計		1箱	７点(2箱)	０箱	１箱

甕と比較して胎土がやや精良で赤色の砂粒を含む。

床面から出土した資料は５点（3～7）である。

3は鉢の大型品で口径20.0㎝，ハケメで仕上げられている。底部に穿孔がある。４は「く」の字状口縁の甕で粘土紐の痕跡が内面に残る。５は小型の鉢で口縁部に列点文，体部上端に７条の凹線文，その下に列点文が施される。体部外面下半は縦方向のケズリが施され底部径は小さい。６は「く」の字状口縁の甕である。出土時は口縁部を下にして器台替わりに使用されていた。７は受口状口縁の小型の甕である。やや磨滅しているが頸部に櫛ナデが施されている。弥生時代後期末（山城Ｖ－５様式[3]）に位置づけられる資料である。

５．まとめ（図14）

今回の調査地は中臣遺跡の南西に位置し，西を限る旧安祥寺川へ向かう傾斜地に位置していた。周辺は中臣遺跡内で弥生時代の竪穴建物を初めて検出した学史上も重要な地点である。中臣遺跡は北側の栗栖野中臣町付近が高く，この丘陵を取り囲むように流れる二つの川，山科川と旧安祥寺川の合流地点を南限とする。弥生時代の住居跡等は丘陵の裾部で多く見つかっている。昭和11年の地図に当てはめてみると当該地はかつて旧安祥川が西に大きく蛇行していた丘陵裾張出し部に位置し，その平坦面上に展開していた集落であったことがわかる。この平坦部の南限に位置する本調査地は調査区の大半が傾斜地で，竪穴建物は北端に一棟確認できたのみであった。当該地よりも南に位置する中臣遺跡第12次調査では遺構が検出されなかったことからも当該地から旧安祥寺川に向けては広義の河川域であった可能性があり，今後，竪穴建物が見つかる可能性は低いと思われる。この意味で本調査の最も重要な成果は地形の確認であったとも言えるだろう。

（赤松　佳奈）

註

１）家原圭太「京都市所在中臣遺跡の性格と変遷―第一次調査の報告から―」『郵政考古紀要』第60号（通巻69冊）　大阪・郵政考古学会　2014年。

２）炭化材の樹種鑑定は公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の関晃史氏にお願いした。

３）森岡秀人「山城地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ　木耳社　1990年

参考文献

家原圭太「Ⅳ　中臣遺跡」『平成26年度　京都市内遺跡発掘調査報告』京都市文化市民局　2015年。

第12次調査　『中臣遺跡（1978）』―文化庁国庫補助事業による発掘調査概要―　京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1979年。

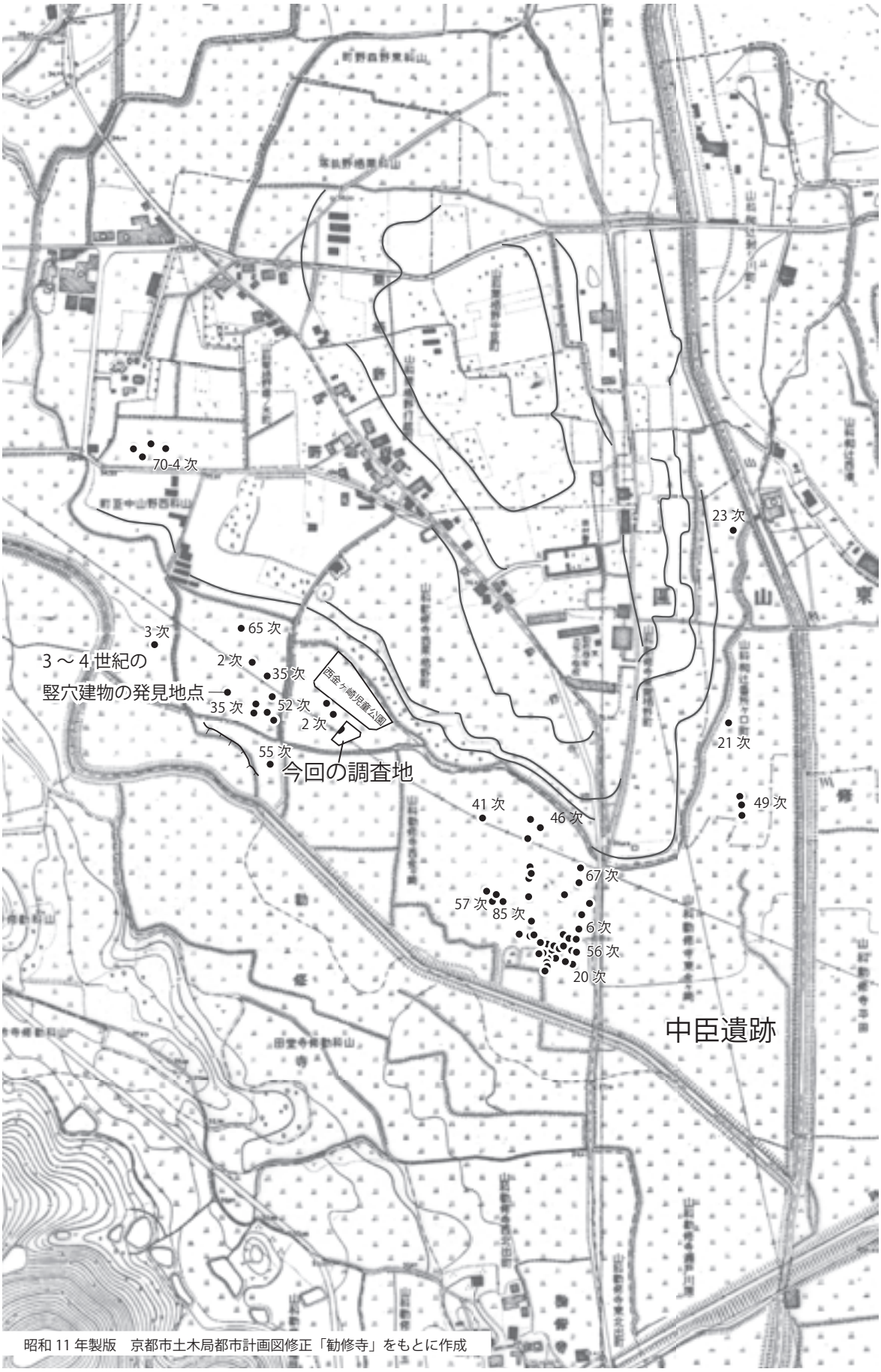


図14　周辺調査位置図（1：1,500）

Ⅸ　伏見城跡・桃山古墳群

1．調査経過（図１～３）

調査地は，伊達街道と丹波橋通の交差点の北東，桓武天皇陵（柏原陵）の参道の北側にあたる伏見区桃山町永井久太郎55-１，55-２に所在し，周知の埋蔵文化財包蔵地である「伏見城跡」「桃山古墳群」に該当する。ここに個人住宅新築の計画がなされ，平成31年４月５日付けで文化財保護法第93条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が行われた。届出された計画では，遺構面に影響が及ぶため発掘調査が必要であると判断し，記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

現況は東西方向に上下段のある地形である。このため調査区は，建物計画範囲のうち東側の上段に東西５m，南北８mの調査区，西側の下段に東西7.5m，南北６mの調査区を設定した。また今回の工事に伴い新たに埋設管の布設が予定されていたため，敷地西端から東西７m，南北２mの調査区の計３か所の調査区を設定した。１・２区の掘削深度については計画建物掘削範囲内とし，一部必要に応じて断ち割りなどを行った。また３区については計画掘削深度よりも深い位置で遺跡を確認したため，調査後に，土嚢などで養生して，埋め戻しを行った。調査面積は99㎡，調査期間は令和元年７月22日～８月14日である。

図１　調査風景１（北西から）

図２　調査風景２（北東から）

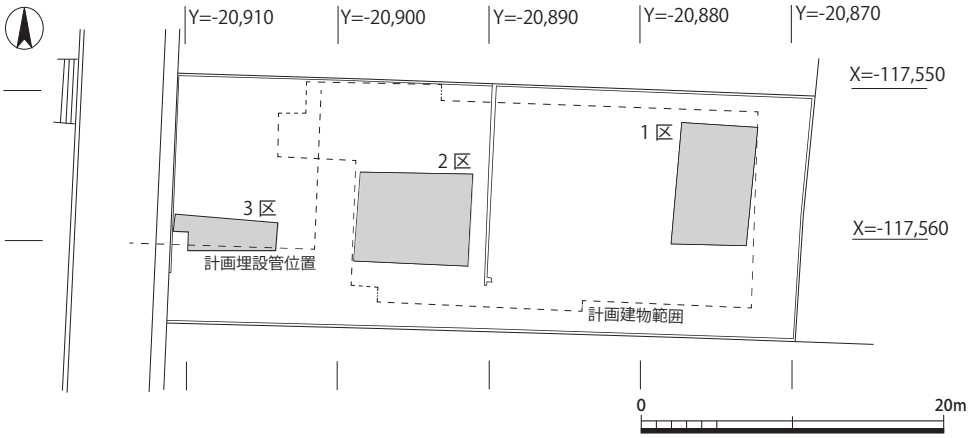


図３　調査区配置図（１：500）

2．遺　跡

（1）地理的環境と歴史的環境

調査地は，京都盆地の東側を画する東山の南端，桃山丘陵西側の北東から南西に向かう緩斜面地の中腹に立地し，標高は約46～47ｍである。この緩斜面には所々に平坦部分が存在し，伏見城築城の造成時に地形が大きく改変された際の名残りと考えられている。この地形改変により調査地周辺では室町時代以前の痕跡を確認することは少ないが，古くは縄文土器の散布地である金森出雲遺跡や古墳時代の桃山古墳群（永井久太郎古墳），奈良時代前期の瓦が確認されている御香宮廃寺などが想定されている[1)]。また，室町時代の濠や土塁状の高まり，柱穴，井戸なども確認されるなど[2)]，部分的ではあるが伏見城築城以前の痕跡を確認でき，当時の様子を知ることができる。文献上では，平安時代後半になると橘俊綱による伏見殿が建立され後に，皇室御領となる伏見荘が形成されるた土地であったことも知られている。

伏見城は，築城から廃城までの約30年に４つの画期（Ⅰ期：指月屋敷，Ⅱ期：指月城，Ⅲ期：豊臣期木幡城，Ⅳ期：徳川期木幡城）があると考えられている。文禄元年（1592），現在の観月橋団地一帯に想定されている「指月丘」に，甥の秀次に関白職を譲った豊臣秀吉が隠居所として指月屋敷を築きはじめたことに始まる（Ⅰ期）。翌年の文禄二年（1593）の秀頼誕生を機に，指月屋敷を本格的な城郭として改築し始め，指月城を築城することとなる（Ⅱ期）。文禄四年（1595）には秀吉が聚楽第の破却を命じたことにより，これまで聚楽第周辺に屋敷を構えていた大名たちも指月城下に屋敷を構え始める。しかし，慶長元年（1596）の大地震により，指月城や大名屋敷が倒壊するなどの甚大な被害を受けた。これを受け秀吉は，翌年の慶長二年（1597）に，近隣の木幡山を中心

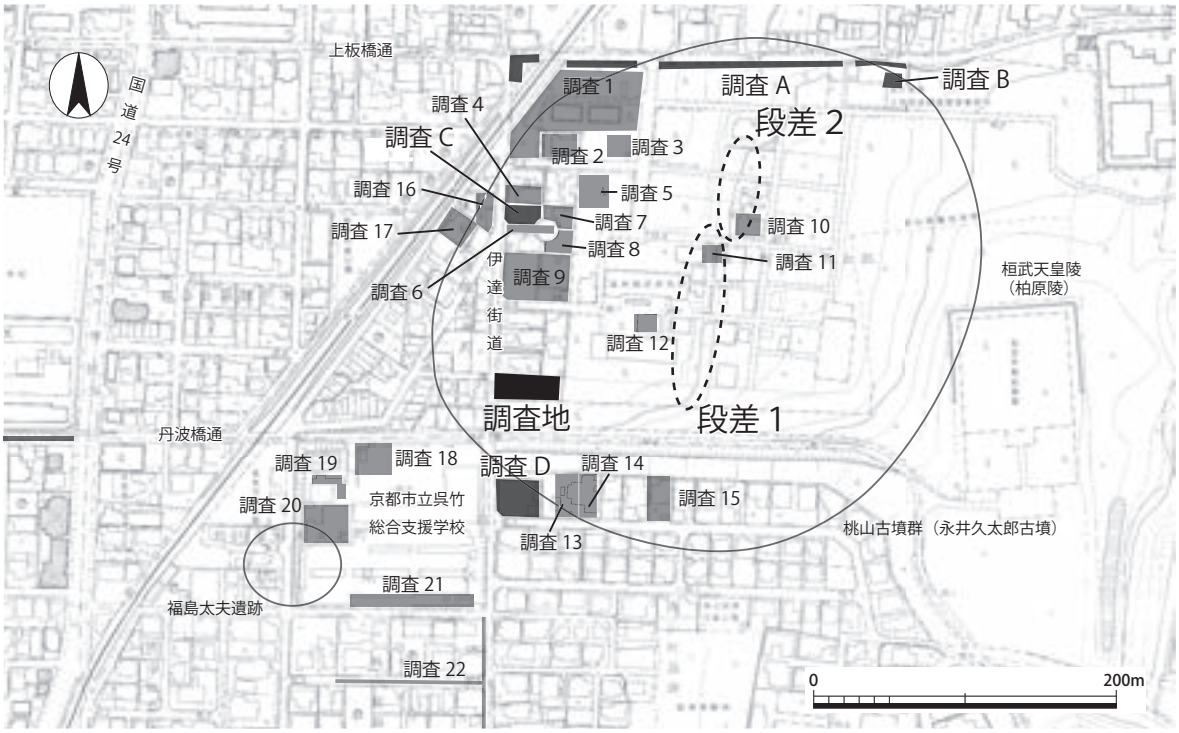


図４　調査地および近隣関連調査位置図（１：2,500）

として新たに城を築きはじめる（Ⅲ期）。この際に，城下西側を中心に武家屋敷や商工業者が集まる城下町の一体整備も行った。秀吉は晩年をこの再建した城で過ごし，慶長三年（1598）に生涯を閉じることとなる。その後，慶長四年（1599）に徳川家康が秀吉の後に入城するが，慶長五年（1600）の関ヶ原の合戦の前哨戦で主要な建物は焼失。同年の関ヶ原の戦いで勝利をおさめた徳川家康により，翌年（1601）には同じ場所に伏見城の再建が始められ（Ⅳ期），慶長八年（1603）には征夷大将軍宣下をこの城で受けている。二条城が造営され，元和元年（1615）の大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡したことにより，伏見城は城郭としての役割を終え，元和九年（1623）の徳川家光の三代将軍宣下を最後に廃城となる。廃城の際には，石垣一石まで破却せよとの厳命が下ったため構築物は破却され，その遺材の一部は大坂城，淀城，二条城，本願寺唐門の修築などに使用されたと伝えられる。その後，奉行所などの一部機関を残し，江戸にその拠点が移され，周辺の武家屋敷もその役目を終えることとなる。

（２）周辺の調査（図４・５・表１）

調査地は，上板橋通と丹波橋通に挟まれ，かつ伊達街道沿いに位置する。伏見城下の大名屋敷配置を記した『伏見御城郭並武家屋敷取図』（桃山城所蔵）や『伏見御城絵図』（中井家所蔵）では，「右同人（堀久太郎）下屋敷」と記されている（図５）。絵図上ではややスケール感が異なるが，調査地東側で確認できる段差（図４の段差１）と絵図の段差（図５の段差１），調査地北東側で確認できる段差（図４の段差２）と絵図の段差（図５の段差２）は同一であると想定できる。久太郎とは堀秀治の通称であることから，堀秀治の屋敷地と考えられる。

推定堀屋敷跡地内[3]では，これまで２件の調査（調査Ｃ・６・９）が行われている（図４・表Ａ）。また南に隣接する「島津屋敷」跡（調査Ｄ），北に隣接する「山内屋敷」跡（調査Ａ）でも調査が行なわれている。ここでは，調査地に近接する調査事例のうち発掘調査を中心に主な調査成果について述べる。

調査Ａ　平成10年に上板橋通と伊達街道の拡幅工事に伴い行われた発掘調査では，各通りに並行して石垣と石組み溝が確認されている。石垣石は地山を掘り込んで据えつけられており，石組み溝は両面とも底部に底石を敷き，両端に側壁石を据えている。伊達街道と上板橋通の交差点付近では，上に蓋石を乗せ暗渠としている。犬走りは石垣の基底部根石が据えられ，かつ石組み溝の掘形の上面に整地し造られていることが明らかとなっている。石組み溝の掘形からは瓦や焼土が確認されているため，関ヶ原の合戦以後，慶長七年（1601）に徳川家康によって再建された伏見城のものと考えられている。また石組溝の下層では同方向の素掘りの溝が確

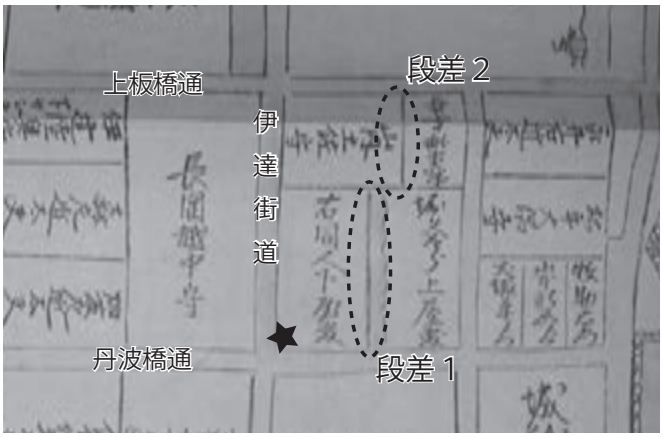


図５　伏見御城郭並屋敷取之絵図（上が北，★が調査地）

認されている。

調査６　昭和63年（1988）に行われた試掘調査では，伊達街道沿いと推定屋敷地内の２箇所で調査が行なわれている。伊達街道沿いの調査では，概ねGL-1.3ｍで屋敷地の西端である石垣，その前面に犬走りをはさみ石組み溝，石組み溝の西側では伊達街道の路面が確認されている。屋敷地内の調査では，GL-0.4～1.1ｍで炭化物を多く含む整地土（焼土層），-0.7～1.4ｍで黄褐色砂泥と砂礫の造成土，-0.9～1.6ｍで明黄褐色泥砂の地山に至る。主に造成土上面で東西７間以上，南北２間の礎石建物跡が確認されており，地面の変色や炭化した木材痕跡のほか，焼米などを含む焼土層が覆うように広がり，火災痕跡と考えられている。このほか，地山は道路付近で急激に落ち込んでいることが確認されており，伊達街道にあわせてひな壇造成が行われていたことが想定できる。

調査９　平成元年（1989）に行われた試掘調査では，GL-1.0ｍで伊達街道の旧路面と道路側溝としての石組み溝が確認されている。

調査Ｃ　平成29年に行われた発掘調査で，調査６の北隣接地にあたる。この調査では，調査６で確認されている石垣や石組み溝の延長が想定されたため，伊達街道沿いと屋敷地内の２箇所で調査が行われている。伊達街道沿いでは，概ねGL-1.6ｍで屋敷地の西端にあたる石垣，その前面に犬走りをはさみ石組み溝が確認された。この石垣と石組み溝は調査６で確認されている遺構の延長部分にあたる。石垣，石組み溝ともに造成土上面で形成され，地山の確認には至っていない。屋敷地内の調査では，GL-1.6ｍで炭化物を多く含む整地土（焼土層），-1.7～2.1ｍで明黄褐色泥砂やシルトの造成土を確認された。造成土上面で遺構検出が行われたが，建物などの遺構は確認されていない。

調査Ｄ　平成28年に行われた発掘調査で，本調査地の南側にあたる。伊達街道沿いと屋敷地内の２箇所で調査が行われている。伊達街道沿いの調査区で石垣と石垣の基底部，裏込めが確認されている。屋敷地内ではGL-0.4ｍの造成土上面とGL-0.6ｍの地山上面の２面が確認され，整地土上面で南北方向の石垣の抜き取り穴が，また造成土上面には化粧土も確認されている。これらのことから，屋敷地内には石垣を用いたひな壇造成が行われていたことがわかった。

以上のように，調査地周辺では伏見城期の整地層のほか，建物や焼土層，伊達街道沿いに伏見城期の屋敷地西端の石垣，犬走りを挟んだ西側に石組み溝，路面が確認されている。今回の調査地でも同様の遺構が想定されることから，伊達街道との屋敷地との関係や，下屋敷の様相を把握することを目的として調査を行った。

註

1）「104　丹波橋」『京都市遺跡地図　平成26年度版』京都市，2016年。
『史料　京都の歴史』第16巻　伏見区　京都市，1991年。

2）「伏見城跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1994年。
「伏見城跡」『京都府中世城館跡調査報告書第３冊　‐山城編１‐』京都府教育委員会，2015年。

3）伏見御城郭並屋敷取之絵図より

表１　近隣関連調査一覧

番号	遺跡名	調査区分	調査内容	出典
A	伏見城跡・桃山古墳群	発掘	上板橋通り及び伊達街道の拡幅工事に伴い，それぞれの道路沿いで，伏見城期の武家屋敷に伴う東西石垣，南北石垣，石組溝，犬走，路面，溝を確認。	「伏見城跡」『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2000
B	伏見城跡・桃山古墳群	発掘	伏見城期の礎石建物や井戸を確認。古墳時代の須恵器や円筒形埴輪，形象埴輪が確認でき，古墳の存在がうかがえる。	「伏見城跡」『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1989
C	伏見城跡・桃山古墳群	発掘	伊達街道沿いに南北方向の石組溝や焼土層，炭化米などを確認した。	「伏見城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成29年度』京都市文化市民局　2017
D	伏見城跡・桃山古墳群	発掘	伏見城城下町の伊達街道に伴う石垣，雛壇造成に伴う石垣抜き取り痕跡，造成土などを確認。	「伏見城跡・桃山古墳群」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2015-10　2016
1	伏見城跡・桃山古墳群	試掘・立会	試掘：GL-.025m以下で伏見城に伴う造成土，-1.88mで明黄褐色泥砂の地山を確認。遺構・遺物なし。 立会：Gl-0.76～1.17mまで造成土。造成土最上層には炭化物多く含む。	京都市内遺跡試掘調査報告　平成29年度　調査一覧表：調査№.FD-067　京都市文化市民局　2018 京都市内遺跡立会調査報告　平成29年度　調査一覧表：調査№.17FD318　京都市文化市民局　2018
2	伏見城跡・桃山古墳群	立会	GL-0.5mで焼瓦・炭を含む桃山の土坑（土師器，陶器，瓦，鉄釘，焼壁土）。土坑内の南壁と底部南半分が堅く焼き締まる。	京都市内遺跡立会調査概報　平成9年度　調査一覧表：調査№.FD-122　京都市文化市民局　1998
3	伏見城跡・桃山古墳群	立会	GL-0.27mまで盛土。	京都市内遺跡詳細分布調査報告書　平成21年度　調査一覧表：調査№.FD-356　京都市文化市民局　2010
4	伏見城跡・桃山古墳群	立会	巡回時終了。	京都市内遺跡立会調査概報　平成11年度　調査一覧表：調査№.FD-356　京都市文化市民局　2000
5	伏見城跡・桃山古墳群	立会	GL-0.6mで黄褐色砂礫，-0.88mで黒褐色砂泥を検出。遺構，遺物は検出できず。	京都市内遺跡立会調査概報　平成16年度　調査一覧表：調査№.FD-265　京都市文化市民局　2005
6	伏見城跡・桃山古墳群	立会	伊達街道沿いに伴う石垣，石組溝や屋敷地内では火災をうけた礎石建物，火災処理の整地層などを確認。	「Ⅵ　伏見城跡（FD32）」『京都市遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』　京都市文化観光局　1989
7	伏見城跡・桃山古墳群	試掘	検出できず。	京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度　調査一覧表：FD-11　京都市文化市民局　1989
8	伏見城跡・桃山古墳群	立会	GL-0.33mまで盛土。	京都市内遺跡詳細分布調査報告書　平成27年度　調査一覧表：調査№.16FD302　京都市文化市民局　2017
9	伏見城跡・桃山古墳群	試掘	GL-1.0mで伊達街道旧路面，石組みの側溝。	京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度　調査一覧表：FD-12　京都市文化市民局　1989
10	伏見城跡・桃山古墳群	立会	GL-0.65mで時期不明の包含層。	京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度　調査一覧表：FD-31　京都市文化市民局　1990
11	伏見城跡・桃山古墳群	立会	GL-0.6まで盛土。	京都市内遺跡立会調査概報　平成12年度　調査一覧表：調査№.FD242　京都市文化市民局　2001
12	伏見城跡・桃山古墳群	立会	GL-0.45mで淡黄褐色砂礫。遺構は検出できず。	京都市内遺跡立会調査概報　平成5年度　調査一覧表：調査№.FD-233　京都市文化市民局　1994
13	伏見城跡・桃山古墳群	立会	GL-0.45mで橙色粗砂（伏見城期造成土），-1.44mで明赤褐色泥砂（炭含む，伏見城期造成土），-1.54～1.9mで明る黄褐色粗砂（地山）。	京都市内遺跡詳細分布調査報告書　平成29年度　調査一覧表：調査№.FD-203　京都市文化市民局　2018
14	伏見城跡・桃山古墳群	立会	GL-0.44mで明黄褐色砂礫混粘質土の伏見城期造成土。	京都市内遺跡詳細分布調査報告書　平成30年度　調査一覧表：調査№.FD-607　京都市文化市民局　2019
15	伏見城跡・桃山古墳群	立会	BM-0.1m以下，明黄褐色砂泥の地山。	京都市内遺跡立会調査概報　平成19年度　調査一覧表：調査№.FD-461　京都市文化市民局　2008
16	伏見城跡・桃山古墳群	立会	GL-0.3mまで盛土。	京都市内遺跡詳細分布調査報告書　平成24年度　調査一覧表：調査№.FD-007　京都市文化市民局　2013
17	伏見城跡・桃山古墳群	立会	斜面地を削平して，造成。検出なし。	京都市内遺跡試掘，立会調査概報　昭和56年度　調査一覧表：FD-31　京都市文化観光局，財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1981
18	伏見城跡	立会	盛土のみ。	京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成2年度　調査一覧表：FD-007　京都市文化市民局　1991
19	伏見城跡	立会	GL-1.15mまで現代盛土。	京都市内遺跡立会調査概報　平成14年度　調査一覧表：調査№.FD-160　京都市文化市民局　2003
20	伏見城跡・福島太夫遺跡	試掘	なし。	京都市内遺跡試掘・立会調査概報　昭和54年度　調査一覧表：FD-474　京都市文化観光局文化財保護課　1980
21	伏見城跡	立会	検出できず。	京都市内遺跡立会調査概報　平成3年度　調査一覧表：調査№.FD-004　京都市文化市民局　1992
22	伏見城跡	立会	伊達街道沿いに南北方向の溝を確認。	「伏見城（２）」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所

3. 調査成果

今回の調査では，計画範囲に沿って東から１～３区の調査区を設定した。基本的には工事計画の掘削深度内で調査を行った。しかし１・３区については，工事掘削深度では盛土中や包含層中に収まることから，協議を行い了承を得た後，遺構検出深度まで調査を行った。調査内容から１・２区と３区で区分し，報告を行う。

（１）１・２区（図６～８）

１区は対象地東側に位置する宅地範囲の調査区である。掘削深度は事前協議の上，計画基礎掘削深度（GL-0.4ｍ，標高55.5ｍ）範囲での調査である。計画深度のGL-0.4ｍまで掘削を行ったが，表土の下，近代の遺物を含む灰黄褐色礫混じり砂質土中で掘削深度に達した。これを受け，再度協議し，対象地の北東隅，南東隅，北西隅部に３箇所を断割り，土層の確認を行った。

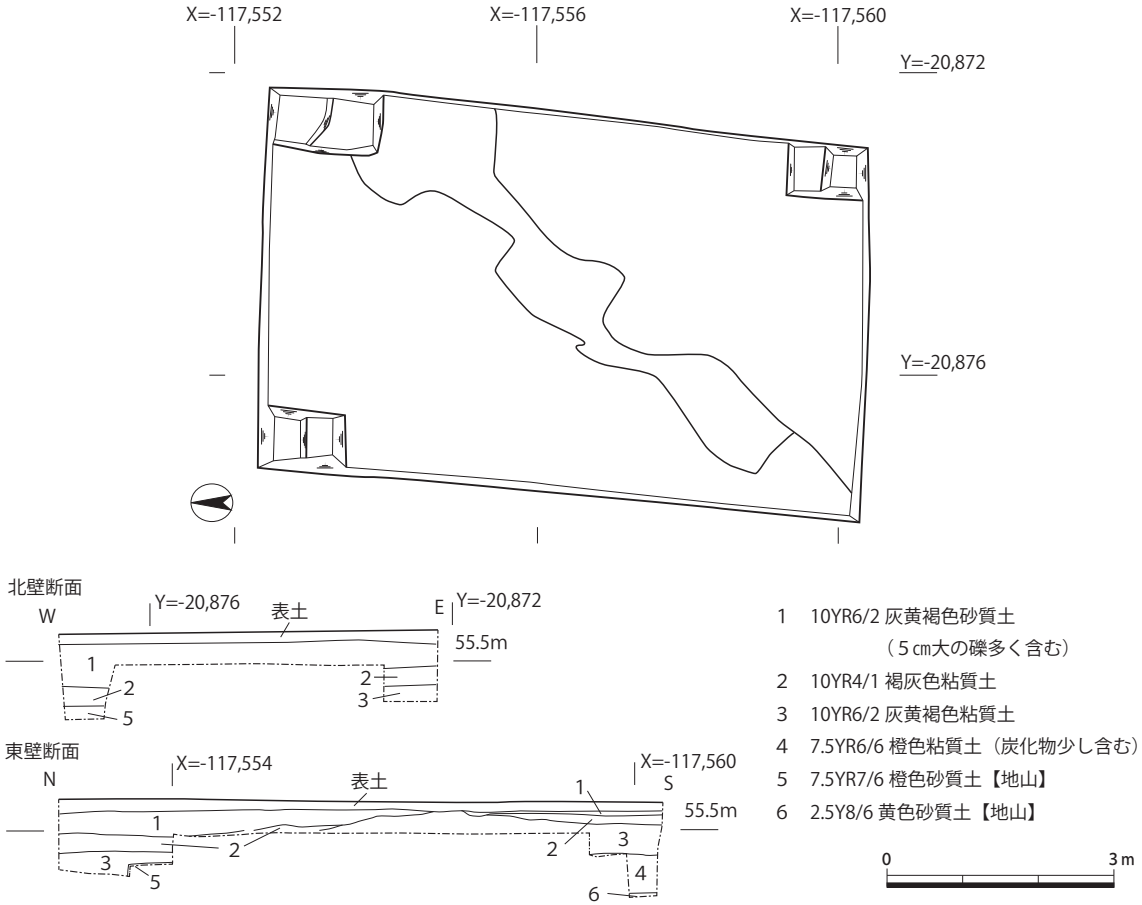


図６　１区　平面図・断面図（１：100）

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
伏見城期	石垣１・２，石組み溝，土坑，柱穴，整地土２・３	
伏見城廃絶後 （江戸時代～近代）	土坑，整地土１	

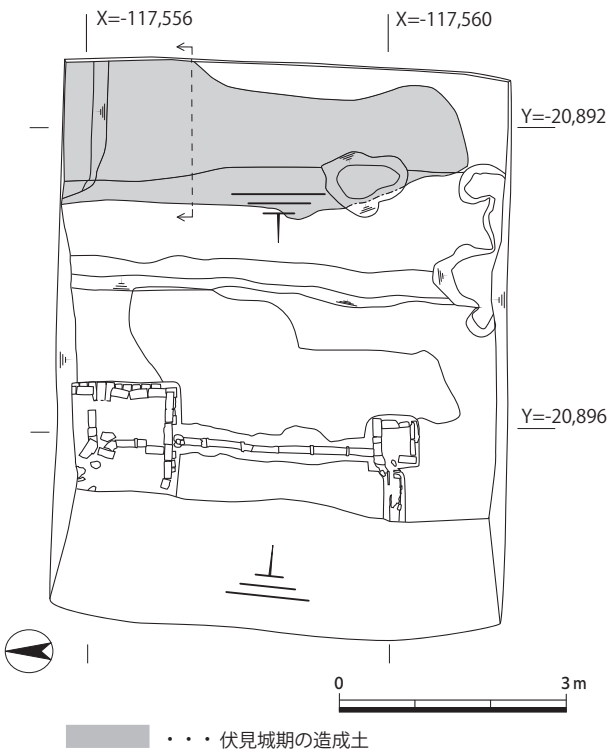


図７　２区平面図（１：100）

この結果，近代の遺物を含む褐灰色粘質土や灰黄褐色粘質土の下，GL-0.9ｍ（標高55.0～55.1ｍ）で橙色砂質土や黄色砂質土の地山を確認したものの，伏見城期に伴う遺構・遺物は確認できなかった。

２区は対象地中央に位置する宅地範囲の調査区である。掘削深度は事前協議の上，計画基礎掘削深度（GL-1.6～1.8ｍ，標高52.25ｍ）範囲での調査である。調査区の東端では，表土の下，GL-0.2ｍ（標高53.8ｍ）で近代包含層である灰黄褐色粘質土，-0.4ｍ（標高53.6ｍ）で伏見城期の造成土である橙色粘質土，-0.2～0.3ｍ（標高53.25～53.7ｍ）で橙色粘質シルトの地山に至る。調査区の西側2/3ほどは大きく近現代盛土に削平されており，造成土は確認できず，地山上面で煉瓦とモルタルで構築された導水管や桝などの排水施設を確認した。伏見城期の造成土が遺存していたのは，東側1/3ほどのわずかであり，この造成土以外の伏見城期に関わる遺構や遺物は確認できなかった。

１・２区の変遷を明らかにするため，国土地理院の近代地図などで対象地を確認すると，大正の地図では「御料地」と記載されている。次に昭和28（1963）年の国土地理院の航空写真では，伊達街道沿いに住宅がいくつか建ち並び，その東側にテニスコートが確認できることから，今回，１区で確認した近代包含層，２区で確認した排水施設や近代包含層は，この地図上で確認できる宅地及びテニスコート造成時のものと考えられる。

（２）３区（図９～11）

３区は対象地西側に位置する埋設管布設範囲の調査である。掘削深度は事前協議の上，工事掘削深度（GL0.9～1.2ｍ，標高52.05ｍ）範囲で行った。掘削深度のGL-0.9～1.2ｍまで掘削したが，表土の下，近代の遺物を含む灰黄褐色礫混じり粘質土中で掘削深度に達した。当該地では，周辺調査事例から西面を向く南北方向の石垣と石組み溝の検出が見込まれていたため，再度協議を行ない，掘削深度以下の調査を実施した。地形は東から西へ緩やかに傾斜している。

基本層序　層序は，近現代盛土の下，GL-1.0～1.4ｍ（51.5～52.2ｍ）で伏見城期の整地土１，GL-1.1～1.6ｍ（51.5～52.0ｍ）で伏見城期の整地土２，GL-1.3～1.5ｍ（51.3～52.0ｍ）で橙色粘質シルトの地山に至る。遺構検出は，伏見城期廃絶後の整地土１（第１面），伏見城期の整地

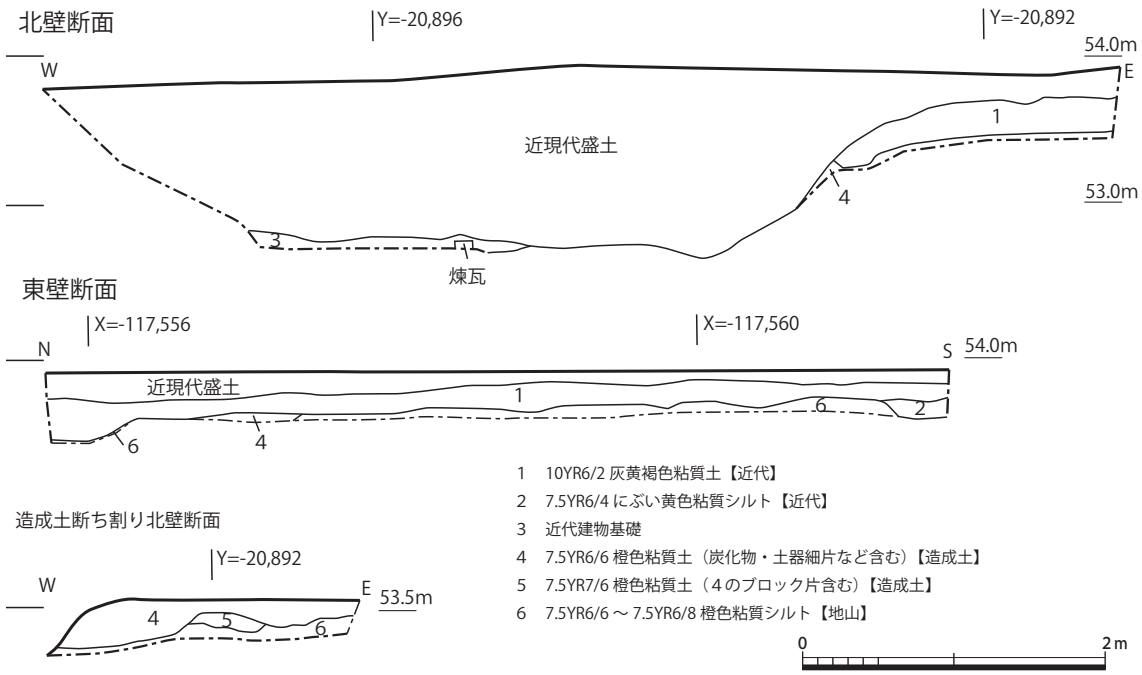


図８　２区断面図（１：50）

土２（第２面）と整地土３（第３面）の３面で行なった。第１面では目立った遺構などは確認できず，第２面では石垣１，第３面では石垣２及び石組溝，犬走りなどを確認した。

遺　構

第２面検出遺構　整地土２上面で石垣１と土坑を確認した。

石垣１　調査区中央やや西寄りの北壁沿いで１石のみ検出した。検出した石の規模は，南北60㎝，東西45㎝である。石材は花崗岩と考えられる。石の上面及び東側には裏込めと考えられる５㎝～拳大の石を確認している。この石[1)]は，幅0.7ｍ，深さ0.15ｍの細砂や３㎝大の礫を多量に詰めた上に据えている。断面で石の状況を観察する限り，当初は西面を向いていたと想定できる石が，検出時はやや前倒しており，石垣の２段目以上の石の抜き取り時の影響と考えられる。この石垣１は後述する石垣２よりも1.5ｍほど西に位置しており，屋敷地の拡張の際にやり直されたものと考えられる。

土坑　調査区中央やや西寄りの南壁沿いで検出した土坑である。石垣の据付溝を削平して成立する。南北1.0ｍ以上，東西0.9ｍの不定形で，埋土は拳大の礫や少量の炭化物などを含む褐色粘質土である。この土坑自体も石垣石が１石混じる近代攪乱により削平をうけている。層序関係から，石組溝廃絶後に成立し，近代までに廃絶したものと考えられる。

第３面検出遺構　整地土３上面で石垣２と犬走り，石組み溝，柱穴などを確認した。

石垣２　西面する南北方向の石垣を確認した。検出長は1.2ｍ，検出最大高は0.3ｍで，主軸は北に対して東へ8.5°振れる。基底部である１段目の３石分を確認した。石材は花崗岩と考えられる。石の規模は，幅40～50㎝，長さ65～80㎝である。地山を掘込み，底部に平坦面を造り，厚さ0.1ｍ程の整地をおこなった後，石を据えている。石の下部には厚さ0.1ｍ程の細砂や３㎝大の

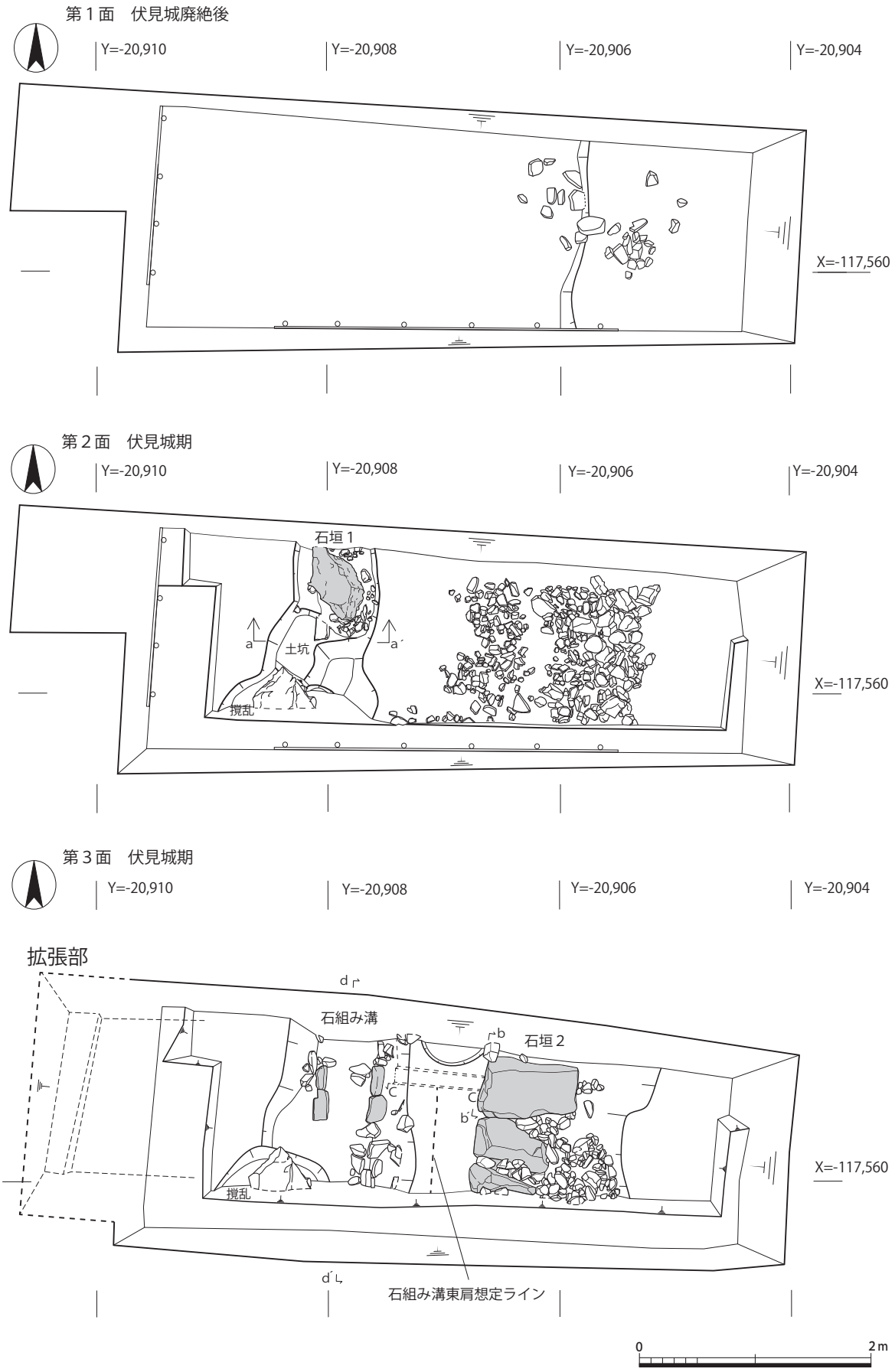
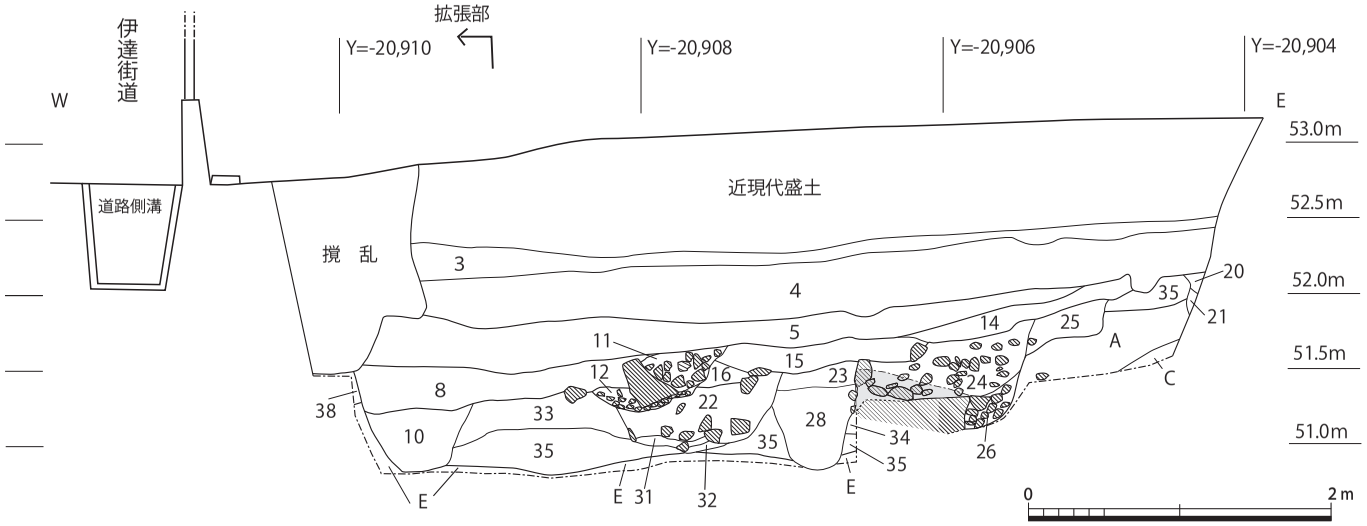

第１面　伏見城廃絶後
Y=-20,910
Y=-20,908
Y=-20,906
Y=-20,904
X=-117,560
第２面　伏見城期
Y=-20,910
Y=-20,908
Y=-20,906
Y=-20,904
石垣１
a
a´
土坑
撹乱
X=-117,560
第３面　伏見城期
Y=-20,910
Y=-20,908
Y=-20,906
Y=-20,904
拡張部
d
石組み溝
b
石垣２
c
c´
b´
撹乱
X=-117,560
d´
石組み溝東肩想定ライン
0
2m

図９　３区平面図（1：50）



1　10YR6/2 灰黄褐色粘質土【近代造成土】
2　10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土【近代造成土】
3　10YR8/6 黄橙色粘質シルト【近代造成土】
4　10YR4/2 灰黄褐色粘質土【近代造成土】
5　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（小礫多く含む）【近代造成土】
6　7.5YR6/6 橙色粘質土
7　7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土（細砂・炭化物などを含む）
8　7.5YR5/4 にぶい橙色粘質土
9　7.5YR4/4 褐色粘質土（炭化物・拳大礫・土器片含む）
10　7.5YR6/4 にぶい橙色粘質土（細砂・拳大礫・灰色粘質土ブロックを少し含む）【溝状遺構】
11　7.5YR5/4 にぶい橙色粘質土（拳大礫少し，3cm 大の礫多く含む）【上層石垣石の裏込め】
12　7.5YR6/4 にぶい橙色粘質土（細砂と 3cm 大の礫を多く含む）【上層石垣石の据え付け】
13　7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土（拳大礫含む）
14　7.5YR6/6 橙～7.5YR4/4 褐色粘質土（細砂多く混じり，炭化物・小礫・地山ブロック小片を含む）【下層石垣廃絶後の造成土】
15　7.5YR6/4 にぶい橙色粘質土（炭化物・小礫・地山ブロック小片・瓦片を含む）【下層石垣廃絶後の造成土】
16　7.5YR5/6 明褐色粘質土（炭化物・土器片・小礫・細砂含む）【下層石垣廃絶後の造成土】
17　7.5YR5/2 灰褐色粘質土
18　7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土（拳大礫多く含む，礫と土が半々ほど）
19　7.5YR5/4 にぶい橙色粘質土（細砂少し含む）
20　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（地山ブロックで僅かに点在）【Pit 埋土】
21　10YR7/6 明黄褐色粘質土【Pit 埋土】
22　7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土（瓦・土器・拳大礫などを含む）【石組溝廃絶後の埋め土】
23　7.5YR6/4 にぶい橙色粘質土（細砂・炭化物・1cm 大の礫を含む，締まりあり）【犬走り】
24　7.5YR6/4 にぶい橙色粘質土（拳大礫多く含む。礫が大半を占める）【崩落した石垣裏込め】
25　7.5YR6/4 にぶい橙色粘質土（拳大礫少し含む）【石垣石掘形】
26　7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土（拳大礫多く含む，礫が大半を占める）【下層石垣石の裏込め】
27　7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土（2～3cm 大の礫を多く含む）【下層石垣石の据え付け】
28　7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土（細砂・炭化物・小礫を含む，締まりなし）【柱穴】
29　7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土（細砂・小礫を含む。）【石組み溝構築土】
30　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土（2～3cm 大の礫少し含む）【整地土】
31　7.5YR6/4 にぶい橙色粘質シルト（細砂含む，締まりあり）【石組溝構築時積土】
32　7.5YR6/4 にぶい橙色粘質シルト（粘性ややあり）【石組み溝構築時積土】
33　7.5YR6/4 にぶい橙色粘質土【造成土】
34　75YR5/4 にぶい褐色粘質土【造成土】
35　7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土【造成土】
36　10YR7/6 明黄褐色粘質土【造成土】
37　10YR6/6 褐色細砂【伊達街道路面に関する堆積か】
38　7.5YR6/6 橙色粘質土（1cm 大の礫含む）【伊達街道路面に関する堆積か】

A　7.5YR7/6 橙色粘質シルト（小礫少し含む）【地山】
B　7.5YR5/2 灰褐色粘質土（粘性強い）【地山】
C　7.5YR6/4 にぶい橙色粘質土（拳大の礫含む）【地山】
D　7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土（粘性強い）【地山】
E　7.5YR7/6 橙色粘質シルト【地山】

図10　3区北壁断面図（1：50）

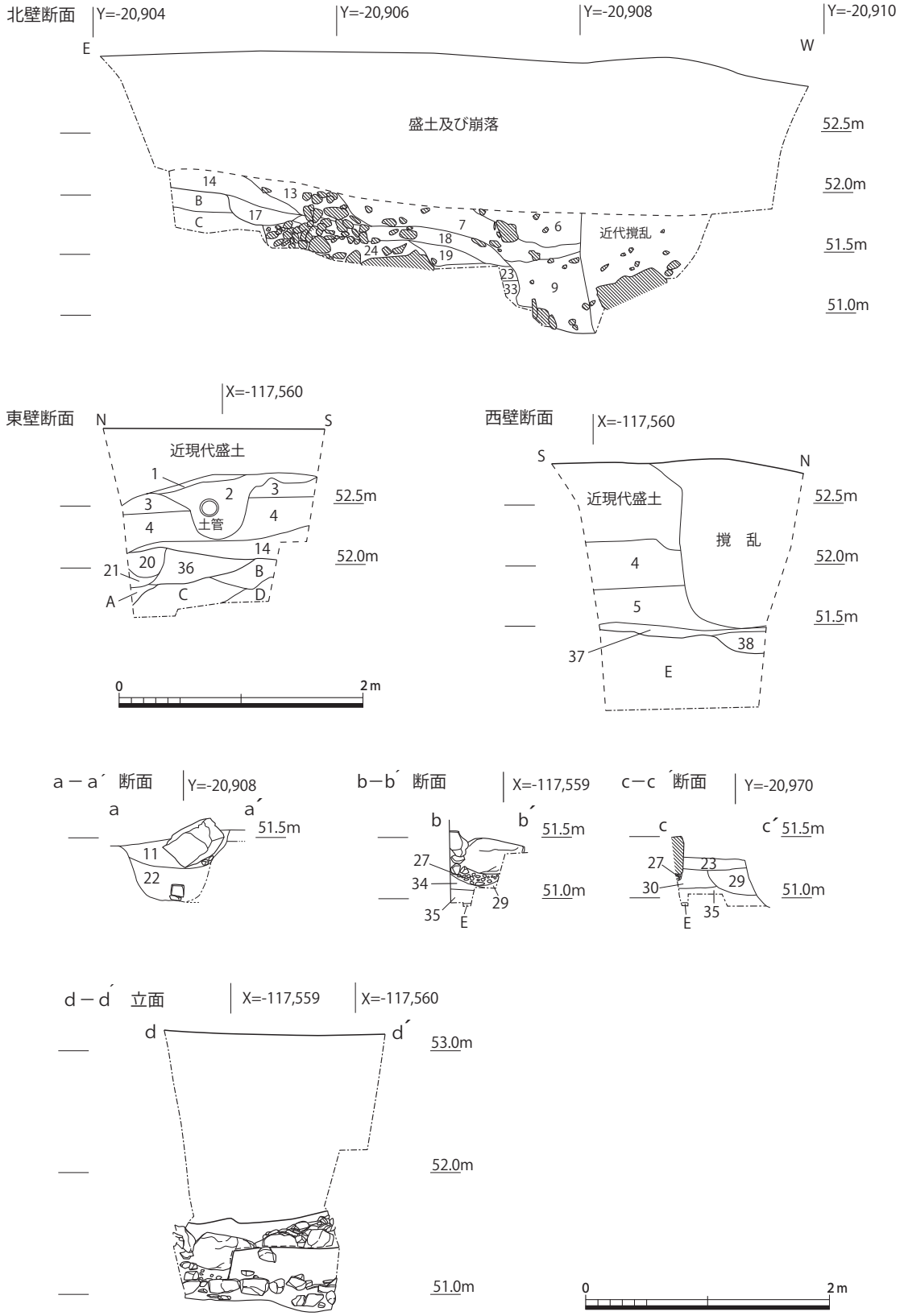


図11　3区　南・東・西壁断面図，各断面図・立面図（1：50）

礫を多量に詰めた据付痕跡，裏込めとして，幅0.3ｍ，深さ0.3ｍの掘込みに５㎝～拳大の石が詰められているのが確認できた。石の上面には裏込めと考えられる５㎝～拳大の石が散在しており，２段目以上の石の裏込めが石を抜き取った際に散在したものと考えられる。

犬走り　石垣２の前面に幅0.5～0.6ｍ，検出長1.3ｍの犬走りを検出した。厚さ0.1ｍの細砂や炭化物が混じるにぶい橙色粘質土で構築されるが，堆積土内で版築などは認められなかった。表面には硬化面が確認できる。石組み溝の東肩が犬走り構築土の下で確認できることから，石組み溝構築後に犬走りができたことがわかる。

石組み溝　北壁断面では，石組み溝の掘方は抜き取り痕跡により壊されており，その規模は確認できないが，石垣前面の断割南壁断面にて犬走り構築土より下で石組み溝掘方の東肩を検出した。調査では便宜上，犬走りを保存するため抜き取り痕跡のみを掘削しており，石組み溝掘方は部分的にしか確認できていない（東肩想定ライン：図９最下段平面図内の破線）。石組み溝は，概ね幅1.1ｍ，深さ0.5ｍの南北溝を掘形とし，その底部に厚さ約２㎝のにぶい橙色粘質シルトを積み，その上に幅10～15㎝，長さ20～25㎝の石を２石づつ並べ，石組み溝の側石としている。溝内側底には石などは確認できなかった。平面上，側石の近辺に同様の規模の石が確認でき，石組み溝を構築していた石と考えられるが，先述の４石以外は，いずれも原位置は留めていない。また溝の深さと石の高さから，何段か積まれていたものと想定できる[2)]ものの，断面観察からは底部で確認した一段以外の痕跡は確認できず不明である。

柱穴　石垣前面の北壁沿いで確認した直径0.5ｍの柱穴である。埋土は細砂や炭化物を含むにぶい褐色粘質土である。締りはなく，犬走り構築前に形成されている。石組み溝との関係は明らかでない。調査区内では対になるものはなく，性格は不明である。

遺　物（図12・表２）

今回の調査では，３区を主に整理箱に４箱の遺物が出土した。大半は土器・陶磁器であり，瓦なども少量出土している。以下では各遺構に伴うもの，かつ図化できたものを中心に概説する。

土坑１（１～９）　１・２は土師器皿である。３は瓦質土器蓋の頭頂部である。外面は丁寧にナデが施される。蓋との接合部には，工具で断面を粗く引っ掻いた後が残る。４は瀬戸・美濃の菊皿の口縁部である。５は備前焼の擂鉢の口縁部である。口縁部は上下に拡張し外側に２～３本の沈線が入る。６は焼締陶器の短頸壷で，茶壺と考えられる。７・８は軒丸瓦である。ともに８葉

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
伏見城期	土師器，瓦器，焼締陶器，施釉陶器，輸入陶磁器，瓦		土師器４点，瓦質土器１点，施釉陶器３点，焼締陶器４点，瓦５点	１箱	２箱
伏見城廃絶後（江戸時代～近代）	土師器，焼締陶器，施釉陶器，瓦				
合　計		４箱	17点（１箱）	１箱	２箱

※コンテナ箱数の合計は，Ａランクの遺物の抽出などの整理を行なったため，出土時より１箱少なくなっている。

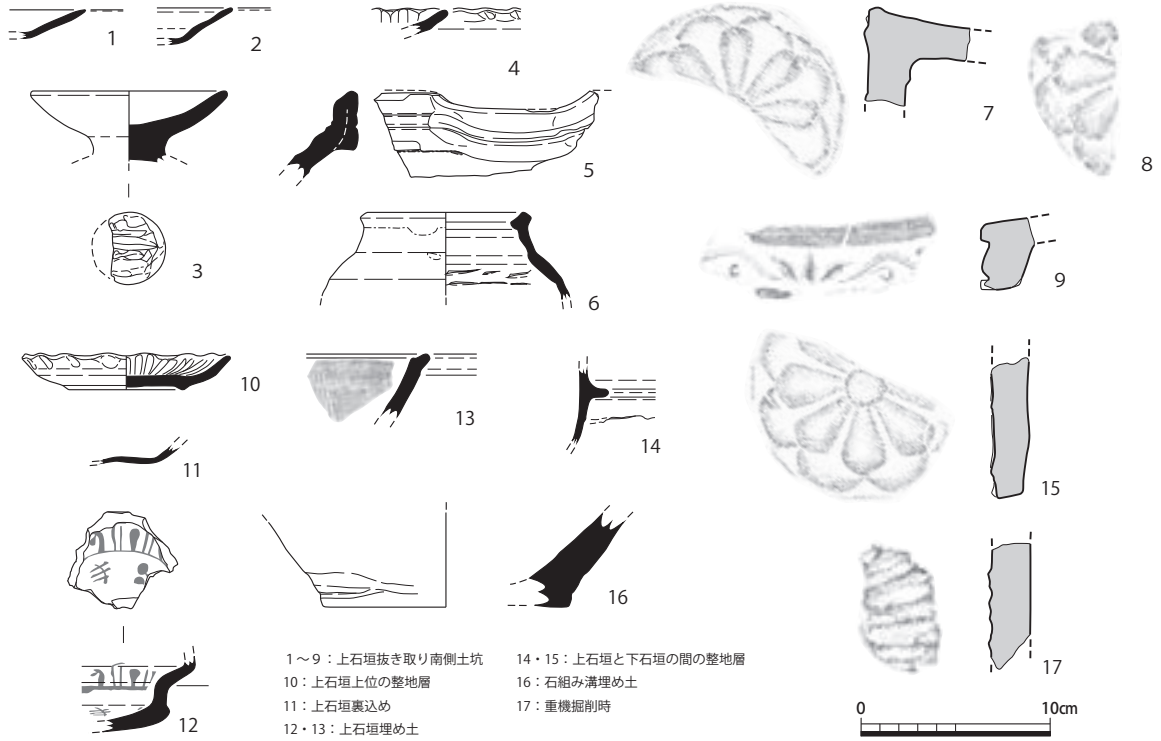


図12　出土遺物（1：4）

２重の菊文で，周縁はない。花弁の中央部が　少し凹む。９は軒平瓦である。16世紀後半から17世紀前半のものと考えられる。

整地土１（10）　10は瀬戸・美濃の菊皿の口縁部。やや焼きが甘く，部分的に表面が剥げている。16世紀後半と考えられる。

石垣１の裏込め（11）　11は土師器皿である。底部から口縁部の立ち上がり部分である。内面に圏線は認められず，緩やかに立ち上がる。

石垣１の埋め土（12・13）　12は織部焼の向付である。13は信楽焼擂鉢である。口縁端部はつまみ出しにより段がつくられ，内面上部まで４条以上のすり目が施される。16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

整地土３（14・15）　14は土師器羽釜である。胎土が精緻で鍔が短く水平に施される。16世紀末から17世紀初頭と考えられる。15は軒丸瓦である。８葉２重の菊文で，周縁はない。花弁の中央部は少し凹む。

石組み溝の埋土（16）　16は信楽焼擂鉢の底部である。内面は使用による磨滅が著しく，摺目などは確認できなかった。

重機掘削時（17）17は飾瓦である。鯱の一部の可能性がある。

４．まとめ

今回の調査では，伊達街道と堀秀治下屋敷地との関係や，下屋敷地内の様相を把握することを目的として調査を行った。屋敷地想定範囲内での遺構検出密度は低く，顕著な遺構は確認できなかった。また周辺調査で確認されている焼土層などは確認できず，屋敷地内の様相把握には至らなかっ

た。しかし伊達街道と屋敷地境にて，２時期の石垣，石組み溝や犬走り，それに伴う地業などの遺構を確認した。今回確認した石垣２は地山を掘り込んで基底部を据え，石組み溝を構築し，整地により屋敷内を造成している。これまで確認されている石垣は，この石垣２に相当すると考えられる。その後，石垣２と石組み溝を覆うように整地土で埋め，石垣１を据え直し，屋敷地を西へ1.5m拡張していると考えられる。今回の調査では，石組み溝の埋土や整地土からは少量の炭化物は確認できるものの，焼土片や焼け瓦などは確認できていない。石垣は一段しか確認できず，既存調査では少なくとも２～３段確認されていることから，火災面がすでに削平を受けている可能性があり，この拡張の時期や契機[3]を明らかにするまでには至らず，課題を残す結果となった。

今後も新資料の蓄積と過去の調査成果の検討を重ね，伊達街道および街道沿いの屋敷の様相を明らかにしていく必要があると考える。

（奥井　智子）

註

１）１石のみであり平面的に確認できていないが，土層観察から，構造的に石垣と考えられる。

２）周辺調査（表１‐A・C・D・６）では，２～３段の石が確認されている。

３）これまでの調査では，石組み溝廃絶時の埋め土内から焼け瓦などの火災痕跡のある遺物や建物礎石の上面に炭化物や焼土を多量に含む整地土が確認されていることが多い。ただ今回の調査では石組み溝廃絶時の埋土などにも，焼土片や焼け瓦なども確認できなかったことから，火災範囲がここまで及んでいない，もしくは，被災するような建物が存在していないため火災痕跡が認められない，また，被災前に屋敷地の拡張が行なわれているなども考えられるが，いずれにも決め手を欠く。既存調査報告（文献：調査６）の際には，史料調査成果をまとめ，対象地周辺では少なくとも２回の火災が確認されている（文献：調査６図30）。『言経卿記』の慶長３年（1598）には「･･･寅刻伏見羽柴久太郎家焼失，･･･」とあり，『義演准后日記』の慶長４（1599）年には「一，早暁伏見江戸宰相殿・森右近家等火事也，右近ヨリ出也云々，･･･」とある。もし，火災前（1598・1599）に屋敷地の拡張を行なっているのならば，慶長元年（1596）の大地震の後，慶長２年（1597）以降に伏見城や武家屋敷を整備しており，火災前に拡張するとなれば整備して直後に拡張することとなるため，被災前の拡張については，現時点でも難しいと考えている。

X　伏見城跡・指月城跡

1．調査経過（図１～10）

調査地は，京都市伏見区桃山町泰長老所在の近畿財務局桃山東合同宿舎内および泰長老公園内に位置し，周知の埋蔵文化財包蔵地である「伏見城跡」・「指月城跡」に該当する。当該地は近年の調査によって指月城跡の中枢部になると想定されているものの，遺構の残存状況を含め不明な点が多い。当課では平成28年度から遺構の残存状況およびその内容を確認する目的で範囲確認調査を実施しており，今回の調査は第４次調査となる。

今回の調査では，現状の傾斜地形の形成時期を確認する目的で７区（図１：21-1）・９区（同：21-3）を，城跡推定範囲北東部の土地利用の状況を明らかにする目的で８区（同：21-2）を設定した。調査の結果，伏見城期の石積や厚い造成土，陸軍工兵隊による塹壕跡などを検出した。最終的な調査面積は約143㎡である。調査は令和元年８月19日から開始し，10月４日に現地での全ての作業を終了した。なお，９月20日に報道機関向けの成果発表，９月23日に現地説明会をおこない，調査成果の公表に努めた。現地説明会には約550名の参加を得た。また，調査期間中６名の学生ボランティアを受け入れた。

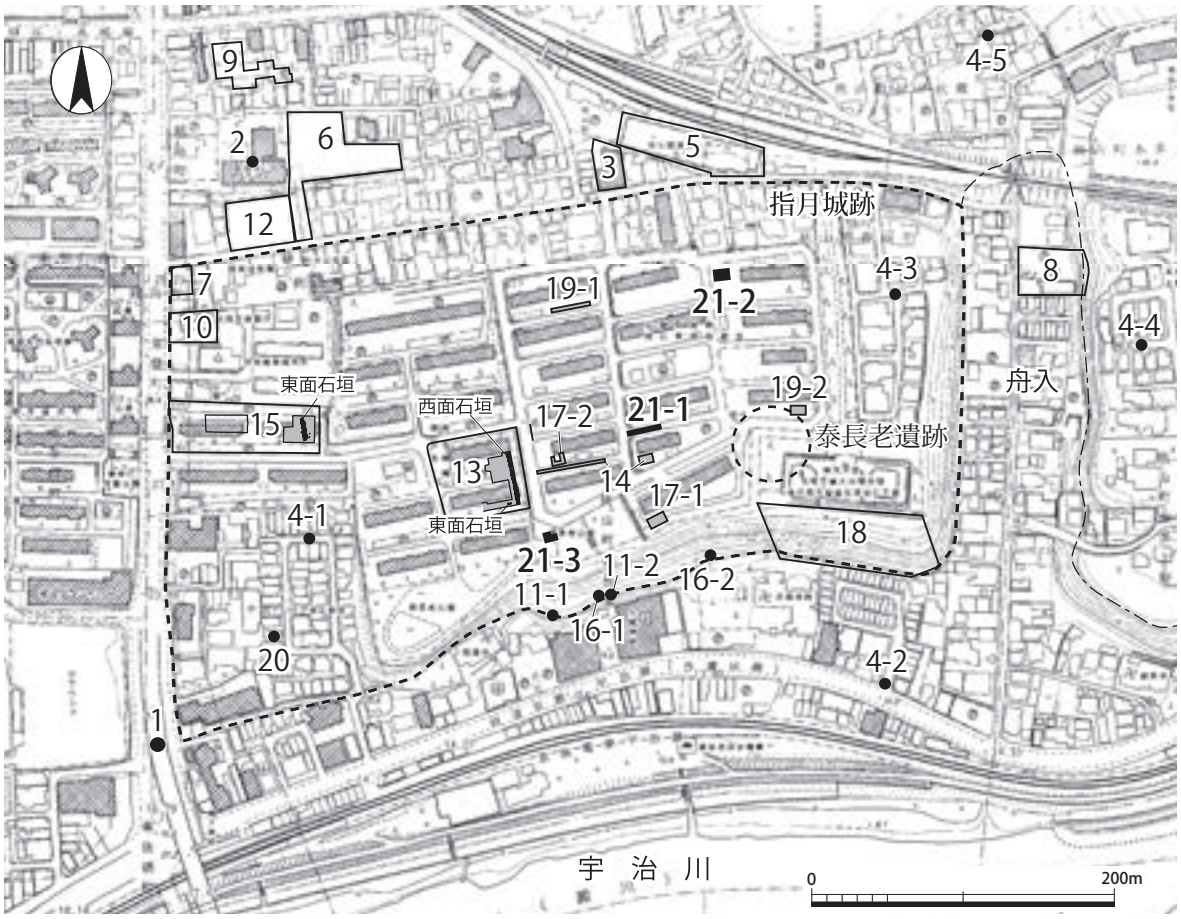


図１　調査地と周辺調査位置図（1：5,000）

2．遺　跡

（1）立地と歴史的環境（図11）

調査地は，桃山丘陵南端の丘陵上に位置する。調査対象敷地の南側は，宇治川に面した急峻な斜面であり，高低差は約25ｍである。現在の標高は７区で38.3～40.3ｍ，８区で41.1～41.2ｍ，９区で33.1～35.5ｍである。

近隣では，伏見城築城以前の遺構検出例は多くないが，埴輪などの古墳に関わる遺物が複数地点

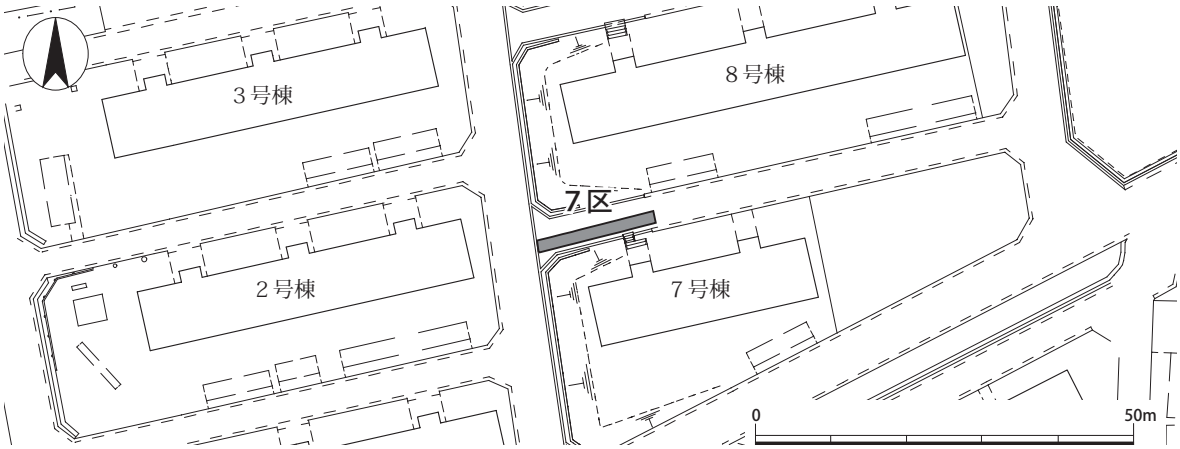


図２　７区配置図（１：1,000）

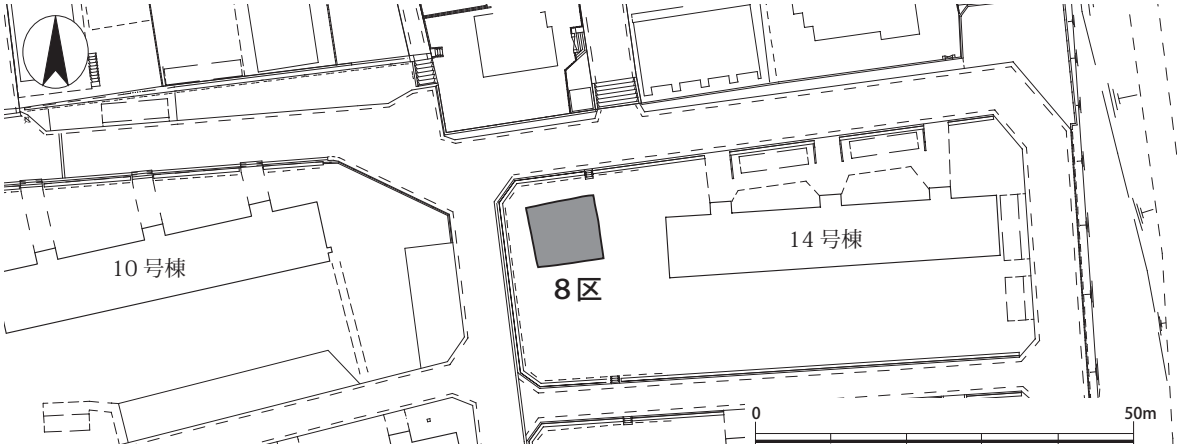


図３　８区配置図（１：1,000）

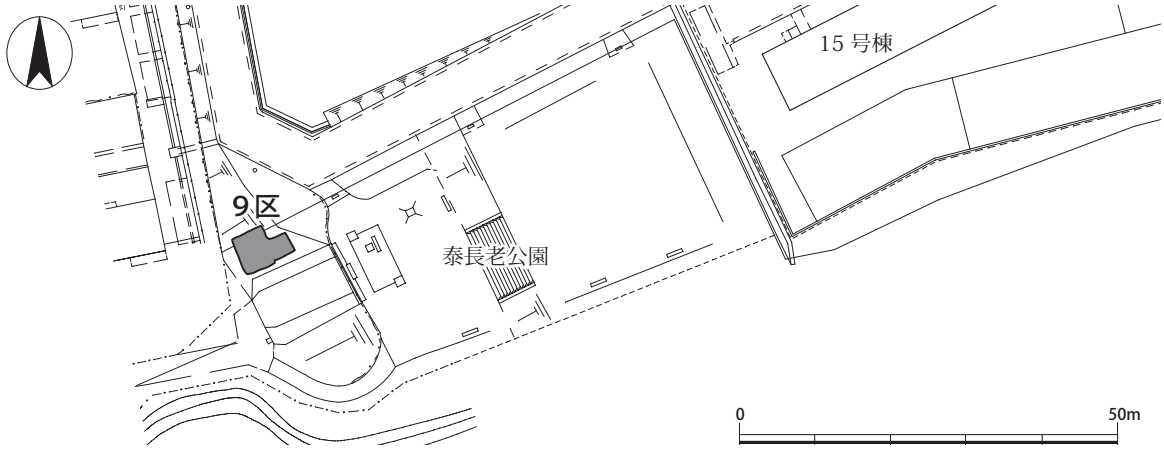


図４　９区配置図（１：1,000）

図５　７区調査前全景（西から）

図６　８区調査前全景（北東から）

図７　９区調査前全景（南西から）

図８　８区作業風景（南から）

図９　現地説明会風景（東から）

図10　９区石積養生状況（南から）

で検出されており，丘陵地にかつて古墳が存在したことが推察されている[1)]。９区の所在する泰長老公園付近では，昭和11年に陸軍工兵隊作業場に掘られた塹壕内で，藤岡謙二郎・星野猷二両氏が貝塚を不時発見しているが，詳細は明らかではない[2)]。平安時代には，調査地付近に橘俊綱の山荘が営まれ，その後，白河上皇領となって以降，天皇家，とりわけ持明院統に伝領された。その中で，後白河上皇の御所や後深草上皇の「伏見殿」が造営され，南北朝時代に光厳天皇らが居住した

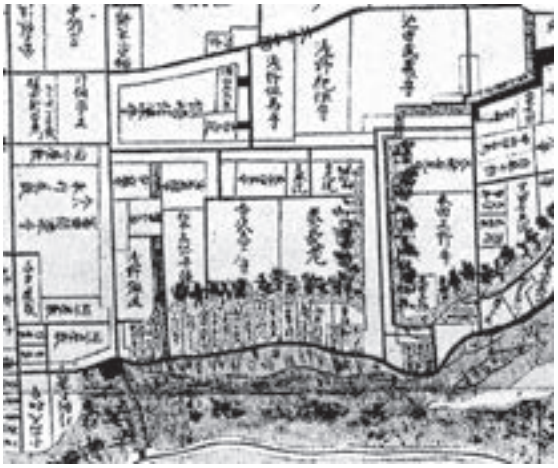


図11　「伏見古御城絵図」調査地周辺

後，伏見宮家に伝領される。調査地南東に位置し，現在，光明天皇，崇光天皇の御陵及び治仁王の墓とされる大光明寺陵は，伏見殿と関連して営まれた大光明寺の旧地が当地であったと考えられていたことから，幕末から大正期に順次治定されたものである[3]。

伏見城の歴史は，文禄元年（1592），甥の秀次に関白職を譲った豊臣秀吉が指月丘に隠居屋敷を構えたことに始まり，４時期に分けて理解されている。すなわち，第１期（豊臣期指月屋敷），第２期（豊臣期指月城），第３期（豊臣期木幡山城），第４期（徳川期木幡山城）[4]である。文禄２年（1593），大坂城に秀頼が誕生すると，秀吉は伏見に転居し，文禄３年（1594）正月から屋敷の大幅な改修を開始する【第２期】。また，文禄の役終結のために来日する明の使節との接見に合わせ，さらに豪華に修築を行った。しかし文禄５年（1596）閏七月十三日に発生した大地震（慶長伏見地震）によって，完成して間もない指月城は倒壊した。秀吉は本丸を木幡山に移し，ただちに城の再建を開始する【第３期】。秀吉は，慶長３年（1598）に亡くなるまでこの城で晩年を過ごした。秀吉亡き後，徳川家康が大老の名目で入城していたが，慶長５年（1600），関ヶ原の戦いの前哨戦で焼失してしまう。関ヶ原の戦いで勝利し政権の座に就いた家康は，伏見城の再建に取り掛かった【第４期】。慶長８年（1603）には，家康はこの城で征夷大将軍宣下を受けることとなる。大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡すると，伏見城はその役割を終え，元和９年（1623）に三代将軍家光がこの地で将軍宣下を受けた後は，廃城となった。

指月城の範囲は，南北約250ｍ・東西約500ｍに復元する案[5]と，南北約250ｍ・東西約400ｍに復元する案[6]が存在する。今回の調査地は，いずれの案でも第１・２期伏見城（指月屋敷・指月城）の中枢部に位置する。木幡山に城が移転した後（第３・４期）は大名屋敷地になり，「伏見古御城絵図」（図11）[7]では，当該地付近西半を「寺沢志摩守」（初代唐津藩主・寺沢広高），東半を「泰長老」（相国寺僧・西笑承兌）の屋敷としており，調査地一帯の地名である「桃山町泰長老」はこれに由来する。伏見城廃城後の土地利用に関する詳細は不明だが，明治初め頃には畠になっていたようである。明治27年（1894）には陸軍練兵場が設置され，大正～終戦までは工兵隊作業場として塹壕掘りなどが行われていた[8]。戦後，1960年代後半から団地が立ち並び，ほぼ現在の景観となった。

（２）周辺の調査（図１・表１）

指月城の中枢部には団地や陵墓などが存在することから，面的な調査に限界があるが，地形の観察や近隣の調査事例をもとに復元を進めてきた。以下で主要な調査を紹介する。No.３では，指月城の北堀北肩と考えられる落込み[9]を確認した。一方，その北東にあたるNo.５では木幡山城期の遺構の下層には遺構が確認できず，指月城の堀の外にあたると考えられている。No.７では，指月城北西角と推定される石垣が確認され，その北側は北堀と想定できる。No.13-1では，西面石垣（東側石垣）と東面石垣（西側石垣）を確認している。西側石垣は，出土状況から慶長伏見地震で倒壊した指月城の石垣，東側石垣は，No.13-2の調査成果から，地震後の整地以降に建てられた大名屋敷に伴う石垣である蓋然性が高い。No.15では堀に伴う東面石垣を良好な状態で検出した。堀

表１　近隣調査事例一覧（図１に対応）

No.	調査年度	調査方法	所在地：伏見区	調　査　概　要	文献番号
1	1974	発掘	豊後橋町地内	東西方向の石垣および旧路面，金箔瓦を含む土坑を確認。	1
2	1978	発掘	桃山町鍋島2-1他	伏見城期の整地層，室町時代前期の遺構面を確認。	2
3	1987	発掘	桃山町立売21-4	焼土層を挟んで，桃山時代の２面の遺構面を確認。築地状遺構を境に南と北で様相が異なる。２面目下層で，大規模な落込みを確認。水分の多いシルト層で，桃山時代に埋没していることが判明。	3
4	1989	立会	桃山町泰長老地内他	4-3で包含層と地山，4-2・5で舟入りに関連する湿潤な堆積を確認。	4
5	1999	発掘	桃山町立売1-6他	江戸時代の立売通路面と北側溝，立売通に面した町屋の跡，町屋と武家屋敷の境界を示す石垣の痕跡を確認。また，慶長10年の火災面を確認し，町屋が火災によって焼失したことが判明。	5
6	2006	試掘	桃山町立売44他	伏見城期の造成土を確認。	6
7	2009	詳細	鍋島町24	北と西に面をもつ石垣の北西角を確認。石垣の北側は堀と推定される。	7
8	2009	試掘	桃山町本多上野9-1	濠状遺構及び斜面の造成過程，郭を三箇所確認。	8
9	2013	発掘	桃山町鍋島1-1	掘立柱建物５棟などを確認。武家屋敷の一部か。	9
10-1	2014	試掘	桃山町泰長老179-1他	石垣の裏込めと考えられる石材と造成土を確認。	10
10-2	2015	詳細	同上	10-1の補足調査。２面の遺構面を確認。各面で成立する土坑を確認。	10
11	2015	詳細	桃山町泰長老地内	金箔瓦を含む土坑を確認。	11
12	2015	試掘	桃山町立売44-1	町屋と武家屋敷を区切る段差を確認。	12
13-1	2015	発掘	桃山町泰長老176-6	西面する石垣（東側石垣）と，東面する石垣（西側石垣）の２時期の石垣などを確認。	13
13-2	2015	詳細	同上	13-1の補足調査。西側石垣の裏込めを確認。西側石垣の上面を造成土が覆っていること，東側石垣を構築するための造成土中に金箔瓦が含まれることなどを確認。	13
14	2016	発掘	桃山町泰長老地内	伏見城期の造成土，石垣，旧地表面を確認。	14
15	2016	発掘	桃山町泰長老176-5他	東面する石垣と堀を確認。石垣は最大７段の石が残存し，長さ14.5m以上，高さ2.8m以上である。	15
16	2017	詳細	桃山町泰長老地内	16-1で石垣を、16-2で伏見城期の造成土を検出。	16
17	2017	発掘	桃山町泰長老地内	17-1で伏見城期の造成土と土坑・溝などを検出。17-2で溝を検出。	17
18	2017	測量	桃山町泰長老地内	大光明寺陵南側の斜面を測量。	18
19	2018	発掘	桃山町泰長老地内	指月城期に特有の地割を確認。	19
20	2019	詳細	桃山町泰長老83-5	平安時代末～鎌倉時代の土坑を確認。	20
21	**2019**	**発掘**	桃山町泰長老地内		**本章**

の中から木製品や瓦が出土しており，地震後に埋められたと推定できる。南斜面地で実施したNo.16-1では，崖の裾部で南面石垣を検出し，No.16-2では裏込めと造成土を確認した。No.18の測量調査では竪堀状の遺構を確認しており，南側斜面部に遺構が遺存していることが近年の調査で判明してきている。

平成28年度から文化財保護課で実施している指月城跡の範囲確認調査では，桃山町泰長老の地内で伏見城期の遺構を検出している。平成28年度に実施したNo.14では，伏見城期の造成土と北面石垣を確認し，平成29年度のNo.17-1地点では，伏見城期の造成土や土坑，溝などを検出している。平成30年度のNo.19-２地点では指月城跡推定範囲に特有の地割を確認しており，その城域が徐々に明らかとなってきている。

指月城は，南を宇治川に面した急峻な斜面，東を大規模な舟入で城域を画しており，発掘調査成

果から北側には堀が存在した可能性が高い。一方，内部構造については不明な点が多く，近年確認された石垣などが復元のための重要な資料となる。

3．遺　構（表2）

今回の調査は，遺跡の保存を目的としているため，伏見城にかかわると判断した遺構は完掘せず，半掘や部分的な掘り下げにとどめている。したがって，各遺構についての規模や深さは掘削した範囲において確認できた数値である。以下，７区から順に主要遺構を報告する。

表２　遺構概要表

時　　代	７区	８区	９区
桃山時代以前	Pit1・2		石積, 造成土
伏見城廃城以降	大規模落込み	塹壕1・2, 溝3	近代掘り込み

（１）７区（図12）

基本層序

調査区は東が高く，西が低い傾斜地に設定しており，調査前の地表面は東側で約40.3ｍ，西側で約37.3ｍである。この傾斜は，当初伏見城段階の地形を反映しているものと推定したが，調査の結果，団地造成時と考えられる盛土によって形成されており，西半では盛土よりも下の層がほぼ水平に堆積していることが確認できている。東半では，盛土が厚く，標高37.9ｍ程度で混じりの少ない褐色泥土層を確認した。この層の上面が遺構面となる可能性があるが，埋設管などの影響により，ごく一部分の確認にとどまり，かつ掘り下げることができなかったため，可能性の指摘にとどめる。東半では標高37.5ｍ程で水平堆積する暗褐色泥土層，37.3～37.4ｍでにぶい黄橙色シルト層，37.1ｍ程で拳大の礫を多量に含んだ灰白色泥砂層となる。暗褐色泥土層は２区（平成28年度調査）で「無遺物層」としている層と対応しており，にぶい黄橙色シルト層以下が地山である。

遺構

検出遺構は西半のピット２基と調査区中央の大規模落込みである。ピットはいずれも半掘にとどめている。

Pit 1　東西0.24ｍ，南北0.35ｍで南北方向を長軸とする楕円形である。検出面からの深さは0.19ｍであり，柱当たりは認めなかった。埋土は検出面構成土の上層に堆積していた北壁９層と同一である。

Pit 2　東西0.30ｍ，南北0.29ｍの円形である。検出面からの深さは0.24ｍであり，柱当たりは認めなかった。Pit 1 と同じく，埋土は検出面構成土の上層に堆積していた北壁９層と同一である。

大規模落ち込み　調査区中央付近で検出した。検出できたのは西辺のみで，南は調査区外，北は埋

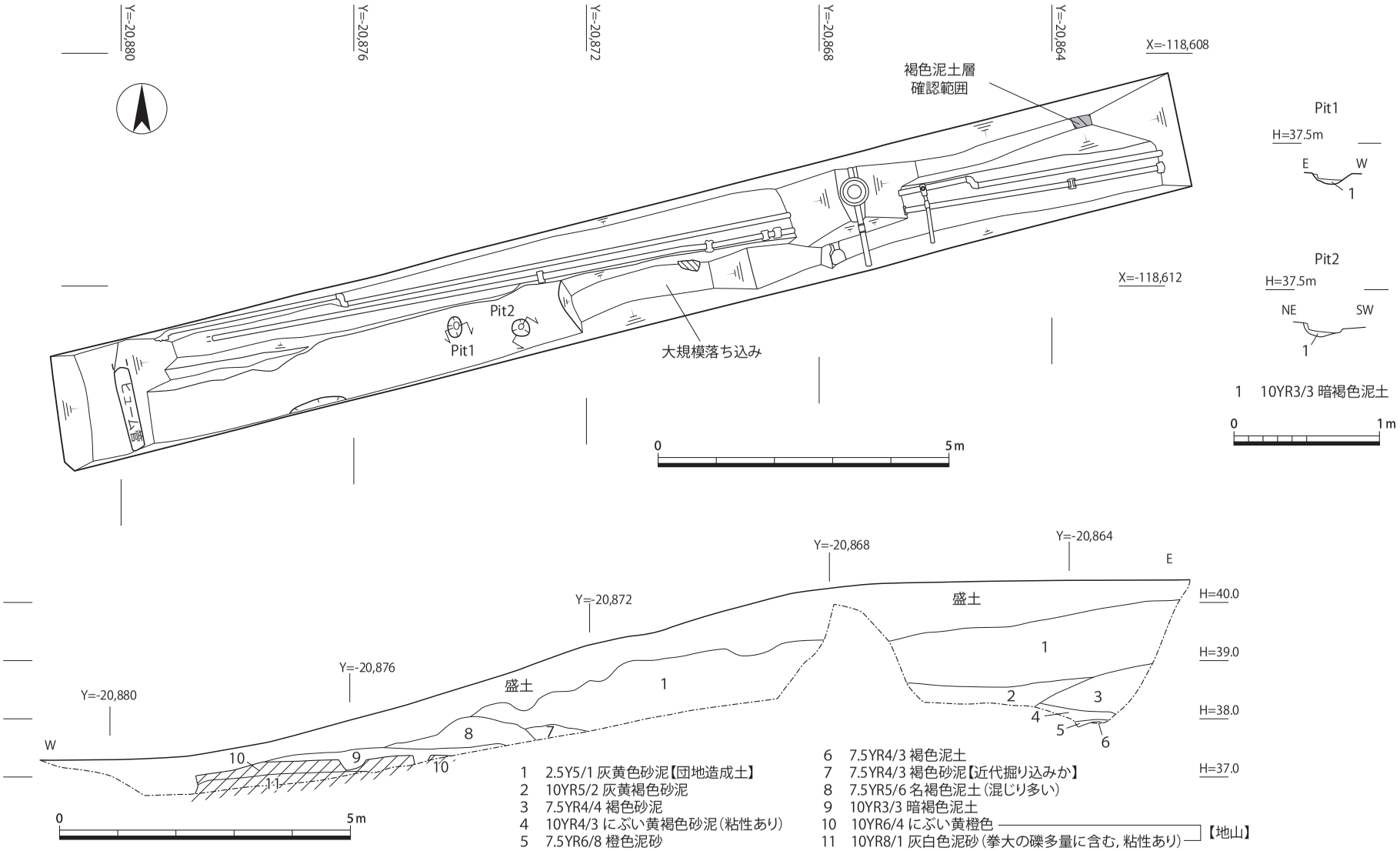


図12　７区平面図・北壁断面図・遺構断面図（１：40，１：100）

設管（北壁７層に対応か），東は傾斜面となり，安全性を考慮して掘削しなかった。地山検出レベル（標高37.35ｍ）から約1.0ｍの深さ（標高36.35ｍ）まで掘り下げたが，地山は確認できていない。西辺は下層でオーバーハングしている。遺物は出土していないが，団地造成土下面から掘り込まれており，陸軍工兵隊による掘り込みと想定している。

（２）８区（図13）

基本層序

調査区は調査開始前の標高が約41.1ｍのほぼ平らな面に設定した。北側は大きく落ち込んでおり，現況地形からは城域北端に近いことが推定できる。現地表面から0.4ｍ前後の厚さで現代盛土が堆積し，その下層には灰黄褐色泥砂層が0.25～0.8ｍ程度で堆積している。この下面は地山面となり，検出レベルは40.1～40.6ｍである。地山上面で遺構検出を行い，近現代の塹壕等を確認した。後述するように，塹壕の遺存状況から，団地造成段階に削平を受けていると考えられ，伏見城期の遺構は確認できていない。

遺構

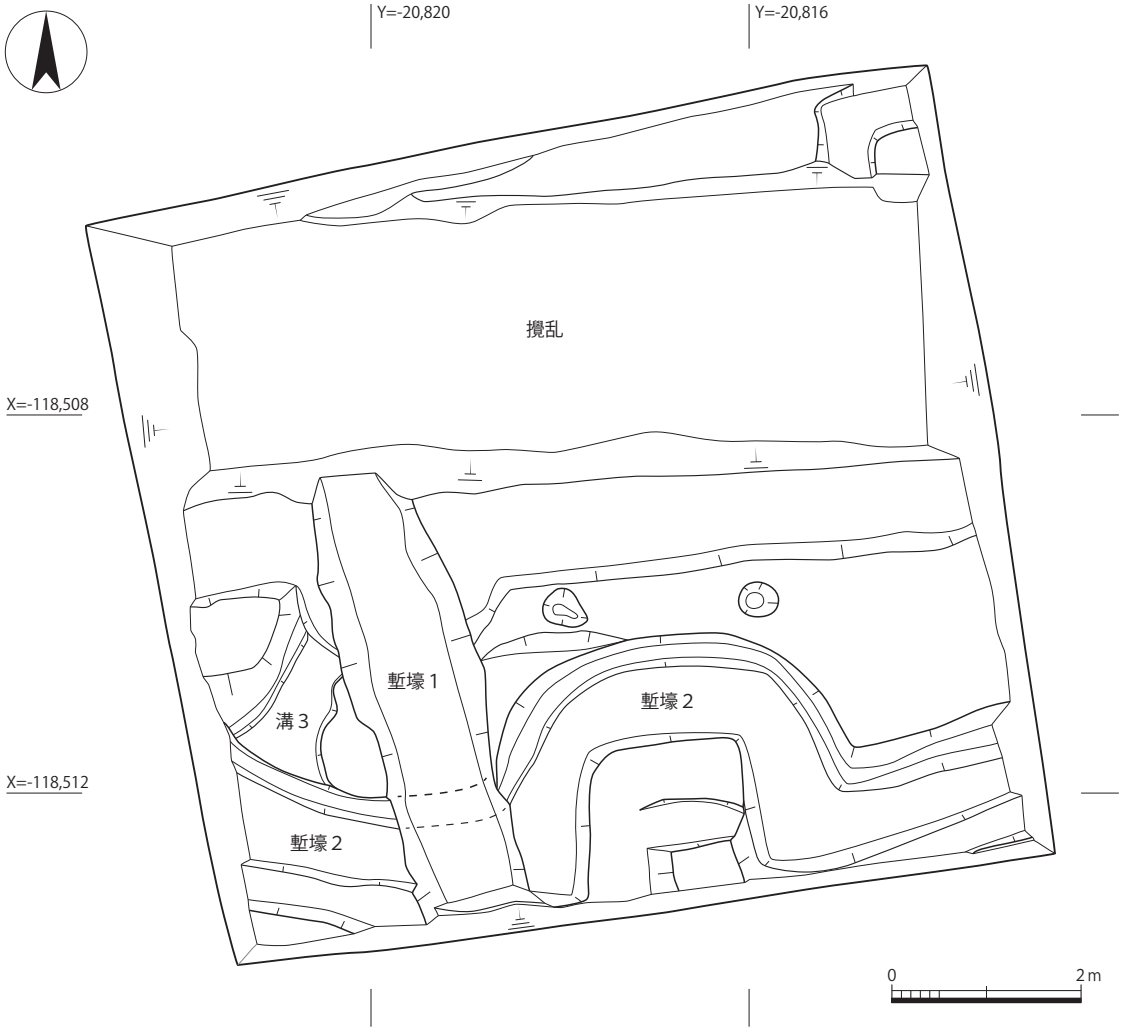
塹壕　塹壕を２条確認した。大正期から終戦まで，作業場としてここを用いた陸軍工兵隊の訓練によるものであろう。南北方向のもの（塹壕１）と東西方向のもの（塹壕２）が存在し，塹壕２が塹壕１を切っている。塹壕１は南壁のわずかに北側で一段高くなるため，南壁断面における深さは0.6ｍ程度であるが，地山検出レベルと掘削底では約1.0ｍの高低差となる。塹壕２は調査区中央付近で北側に弧を描くように屈曲している。砲弾や手榴弾の爆発被害を軽減するための構造である。塹壕内の北側には幅の狭い溝が掘られているが，排水のためのものであろう。また，南側には少なくとも１段の段差を設けており，これを出入りのための階段として用いたと見れば，北側に敵陣を想定した塹壕掘削訓練であったと言えよう。塹壕２の遺存深度は最深部で約0.7ｍであり，中で立ち上がると腰程度までとなる。一般的な立射式の塹壕は立ち上がって銃を据えるために，胸部程度までの深度を必要とすることから，今回検出した塹壕は本来的にはもう少し地表面が高く，深さがあったのではないかと考えられる。したがって，工兵隊作業場としての利用よりも後，恐らくは団地造成段階で本来の地表面は削られてしまっている可能性が高い

溝３　調査区西側で検出した南北方向の溝である。塹壕１・２に切られている。溝の西辺は一段低く，より幅の狭い溝となっており，塹壕２と同様の構造であることから，これも塹壕であった可能性もある。

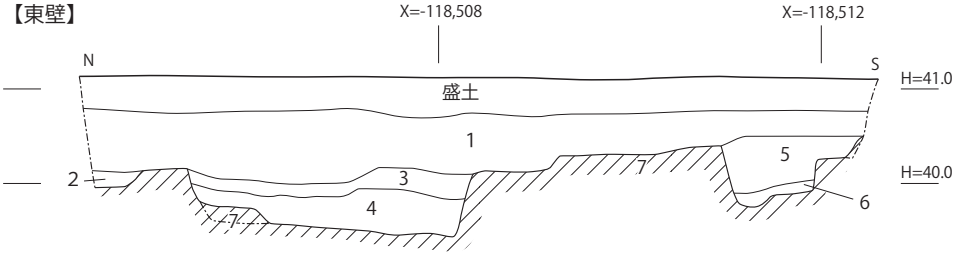
（３）９区（図14）

基本層序

調査区は北東が高く，南西が低い傾斜地に設定しており，調査開始前の地表面は北東で約35.5ｍ，南西で約33.1ｍである。北東部では厚さ約0.25ｍの現代盛土下で橙色泥土の土層を確認した。瓦片を含み，この層上面で石積が成立していることから，広義の伏見城期の造成土と判断してい

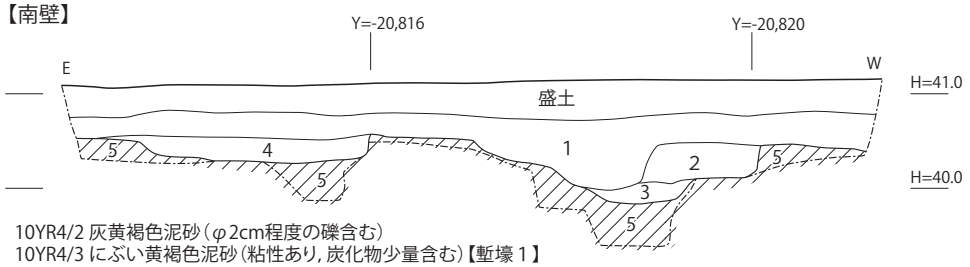


【東壁】



1　10YR4/2 灰黄褐色泥砂（φ2cm程度の礫含む）
2　10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂
3　2.5Y6/2 灰黄色砂泥
4　2.5Y5/1 黄灰色泥砂（粘性あり）
5　10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂（粘性あり，炭化物少量含む）【塹壕１】
6　2.5Y5/2 暗灰黄色シルト（粘性あり）【塹壕１】
7　10YR7/6 明黄褐色砂質土（拳大の礫含む，固く締まる）【地山】

【南壁】



1　10YR4/2 灰黄褐色泥砂（φ2cm程度の礫含む）
2　10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂（粘性あり，炭化物少量含む）【塹壕１】
3　10YR5/2 灰黄褐色泥砂【塹壕２】
4　10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂（粘性あり，炭化物少量含む）【塹壕１】
5　10YR7/6 明黄褐色砂質土（拳大の礫含む，固く締まる）【地山】

図13　８区平面図・断面図（１：80）

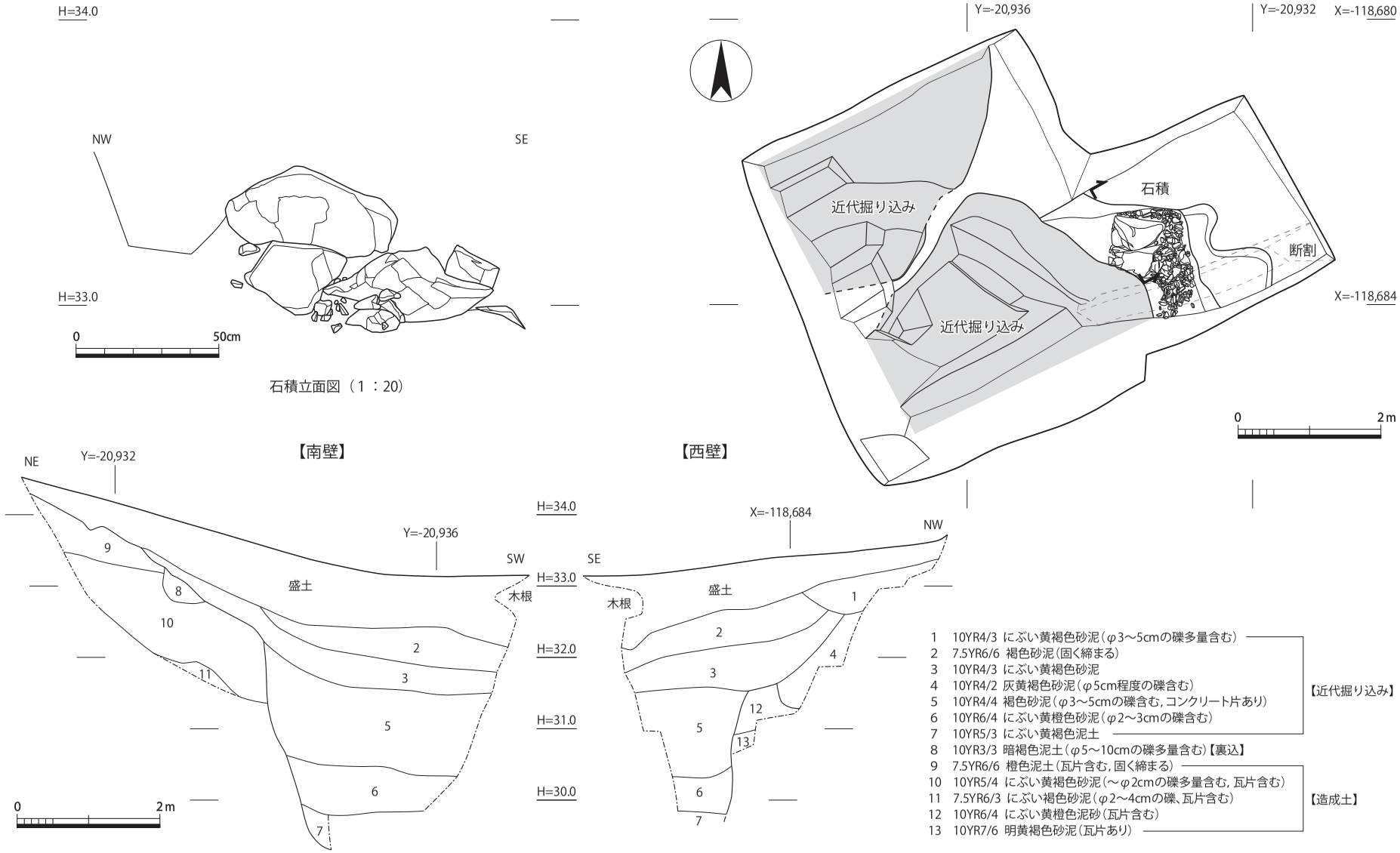


図14　9区平面図・断面図，石積立面図（1：20，1：80）

る。調査区西半は大きく掘り込まれており，その埋土から大正～昭和初期の銭貨や近代磁器が出土していることから，工兵隊作業場時代の訓練のための掘削跡と考えている。この掘り込みは現地表面から2.9ｍに及び，その下面で伏見城期の造成土を確認している。

遺構

石積　調査区東側で確認した石積で北西－南東方向に伸びる。石材は１～２段のみ遺存し，本来的な段数は不明である。裏込は約0.8ｍの幅で確認でき，検出長は約1.6ｍである。裏込遺存状況から見て，石積み南側は調査区外に連続するが，北端は調査区内に収まり連続しない。

裏込の栗石層には瓦片や丹波焼擂鉢が含まれている（図15-３）。瓦片，丹波焼擂鉢ともに伏見城期の特徴を示している。このことから，石積は伏見城の最初期段階（指月屋敷）のものではなく，伏見城廃城後のものでもない，すなわち木幡山城の武家屋敷段階である可能性が高い。

近代掘り込み　調査区南西で北東辺と北西辺を確認した。南西辺，南東辺は調査区外であるため，全体の規模は不明だが，検出範囲では北東辺が約3.3ｍ，北西辺が約2.5ｍである。北東辺・北西辺は直線的で，ほぼ直交するため，方形の掘り込みである可能性が高い。垂直に近い角度で掘り込んでおり最深部までの深さは2.9ｍである。伏見城期の金箔瓦を含む瓦片が多数出土したほか，近世後期から近代の陶磁器や大正十一年製の十銭貨が出土しており，陸軍工兵隊が訓練として掘り込んだ竪坑であると考える。底部は北東辺の一部を確認したにとどまる。

なお，調査区北西にも同様の近代掘り込みが存在する（図14-西壁断面４層）が，調査区内への進入路確保のため，掘削はごく一部にとどめている。

造成土　近代掘り込みの壁面で確認し，一部底面でも確認した。土中には伏見城期の瓦片が含まれ，上面に石積が成立することから，伏見城の４期区分のうち２期（豊臣期指月城）から３期（豊臣期木幡山城）か３期から４期（徳川期木幡山城）のいずれかの転換を契機とした造成であると判断できる。後述するが，既往の調査成果を加味すれば，前者である蓋然性が高い。

南壁際を断ち割り，近代掘り込みよりも東側では，堆積状況を確認できた（図14-南壁断面）。東から西へ落ちる斜め堆積であり，断ち割り部分においては，東から西に向けて造成を進めたことが分かる。

４．遺　物（表３）

出土した遺物は整理箱にして10箱である。内訳は大半が瓦類であり，土師器，須恵器，施釉陶器，焼締陶器，金属製品などを含む。瓦は伏見城期のものが大多数だが，平安時代から近代の幅広い時期の遺物が少数ずつではあるが出土している。以下，その概略を報告する。

（１）土器・陶磁器・金属製品（図15）

９区　１～３は全て９区から出土した。１・２は近代掘り込み内，３は石積背面の栗石層出土である。１は須恵器の甕片である。外面に格子の叩き目が残るが，内面の当て具痕はほとんど視認できない。内面は摩滅しており，器面が滑らかであることから，硯に転用された可能性もある。２は肥

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
室町時代以前	須恵器		須恵器１点		
桃山時代～江戸時代初期	土師器，施釉陶器，焼締陶器，瓦類		焼締陶器１点，瓦類19点		
伏見城廃城以降	陶磁器，金属製品		染付１点，金属製品１点		
合　計		10箱	23点（２箱）		８箱

※　コンテナ箱数の合計は，整理後，Ａランク遺物を抽出したため，出土時より２箱多くなっている。

前産の染付皿で，伏見城廃絶以後の製品である。３は焼締陶器で，丹波焼のすり鉢である。伏見城期の所産であろう。

（２）金属製品（図16）

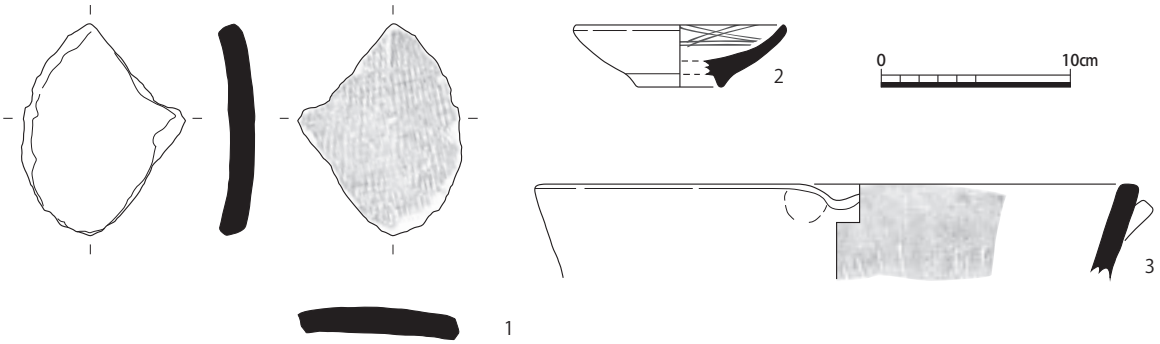


図15　出土土器・陶磁器実測図（１：４）

金１は９区の近代掘り込み埋土内から出土した銭貨である。両面に文字が残り，表面は「大日本」「大正十一年」，裏面「十□」と判読できる。「十銭」であろう。表面の孔部回りには花が表現されている。裏面は本来，上部に菊文，下部に桐文が描かれていたはずだが，それらは摩滅しており，視認できない。

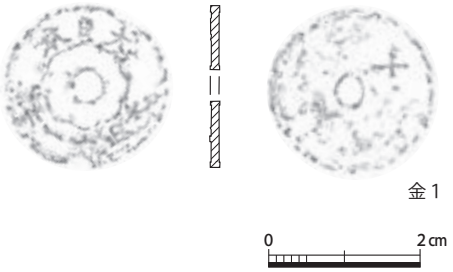


図16　出土銭貨実測図及び拓影（１：１）

（３）瓦　類（図17・18）

金箔瓦

瓦１は巴文軒丸瓦である。９区の造成土中から出土した。金箔が残っており，金箔の剥がれている部分では，漆の付着を確認できる。

図化に耐えなかったものの，金箔を確認できた瓦がほかに11点出土しており，うち７点を写真にて報告する。いずれも９区の近代掘り込みから出土している。瓦２は軒丸瓦で，花文である。金箔の遺存範囲は小さい。瓦３～６は板状の飾り瓦で，いずれも剣花菱文と思われる。瓦７・８は丸瓦の端部に金箔を施している。棟に用いた輪違と考えられる。なお，金箔瓦は分析調査を行ってお

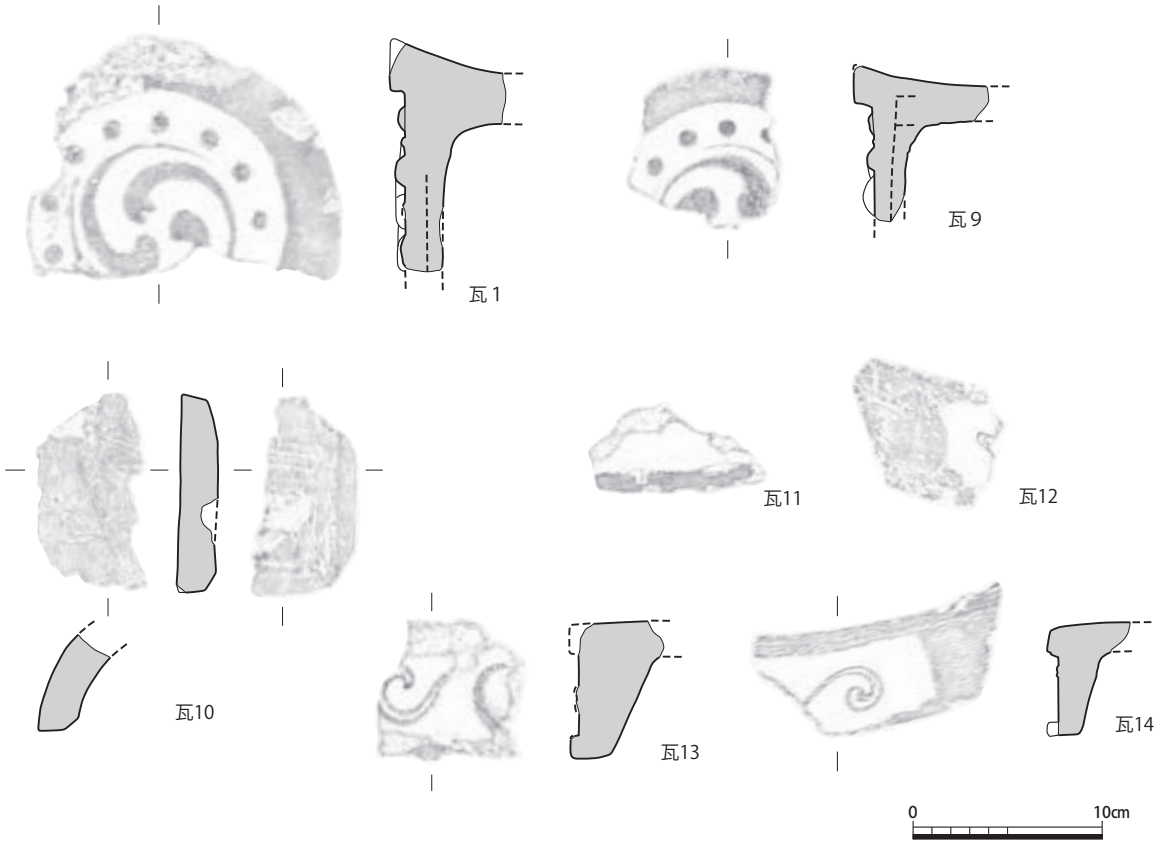


図17　出土瓦実測図及び拓影（1：4）

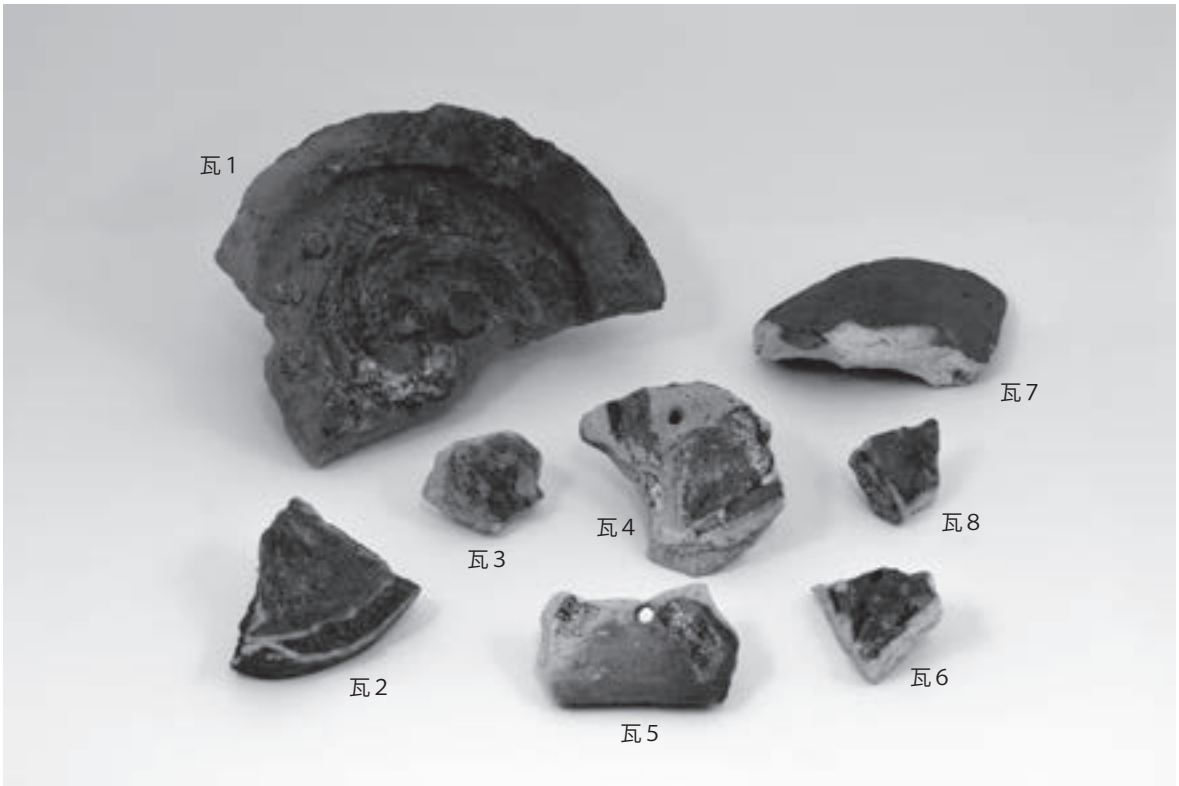


図18　出土金箔瓦

り，図18掲載遺物以外の丸瓦（輪違）も対象としている。これらには別途瓦16～19の番号を与え，写真を掲載しているので，付章を参照されたい。

軒丸瓦

瓦９は巴文軒丸瓦で，７区東半の掘り下げ中，すなわち近代以降の造成土から出土した。

輪違瓦

瓦10は輪違瓦である。９区の近代掘り込みから出土した。通常の丸瓦を短く加工したもので，両端部はともに遺存しており，全長は約10cmである。

軒平瓦

瓦11～14は軒平瓦である。瓦11・12は９区の近代掘り込み，瓦13は８区北半の撹乱，瓦14は９区の近代掘り込みから，それぞれ出土した。

道具瓦

瓦15は盤状の道具瓦である。縁部に円形の文様が連なっている。鬼瓦の可能性がある。

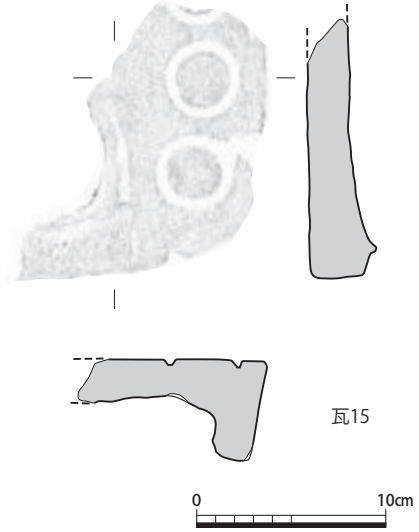


図19　出土瓦実測図及び拓影（１：４）

５．まとめ（図20～21）

今回の調査では，３箇所の調査区を設定したが，いずれにおいても指月城期と断言できる遺構は確認できなかった。しかし９区においては，近代掘り込みの壁面の観察から，木幡山城期の極めて厚い造成土を確認することができた。これまでの調査成果と合わせ考えると，この造成土は指月城の構造を復元するための有益な情報となる。

９区周辺では，これまで平成27年に（有）京都平安文化財が実施した発掘調査（図１・表１：調査13-1），同地点で当課が実施した詳細分布調査（同：調査13-2），平成28年に当課が実施した発掘調査（同：調査14）の事例がある。

調査13-1では，木幡山城段階の武家屋敷に伴う西面石垣及びその下層で検出し，指月城段階にさかのぼると見られる東面石垣を確認している。西面石垣は検出天端が標高約31.9ｍ，東面石垣は検出天端が標高約29.8mであるが，裏込めが標高約30.6ｍまで遺存しているため，それ以上の高さまで石垣が築かれていた可能性が高い。西面石垣の前面は標高約29.1ｍの掘削底まで木幡山城段階の造成土であった。東面石垣は指月城段階の堀の西肩であると考えることができ，西面石垣はこの堀を埋め戻して造成した上に築いたものであろう。

次に東側に目を転じると，調査14の１区は東西方向の調査区のうち，図19のA・C地点では地山を確認できており，指月城期の遺構面は少なくともその検出レベルよりも高い（A：36.2ｍ，C：35.3ｍ）と判断できるが，西側のD・E地点では，掘削底まで木幡山城期の造成土であり，指月城期の遺構面は確認できていない。平成28年調査時点においては，この落ちの性格について判断する材料には欠けていた。

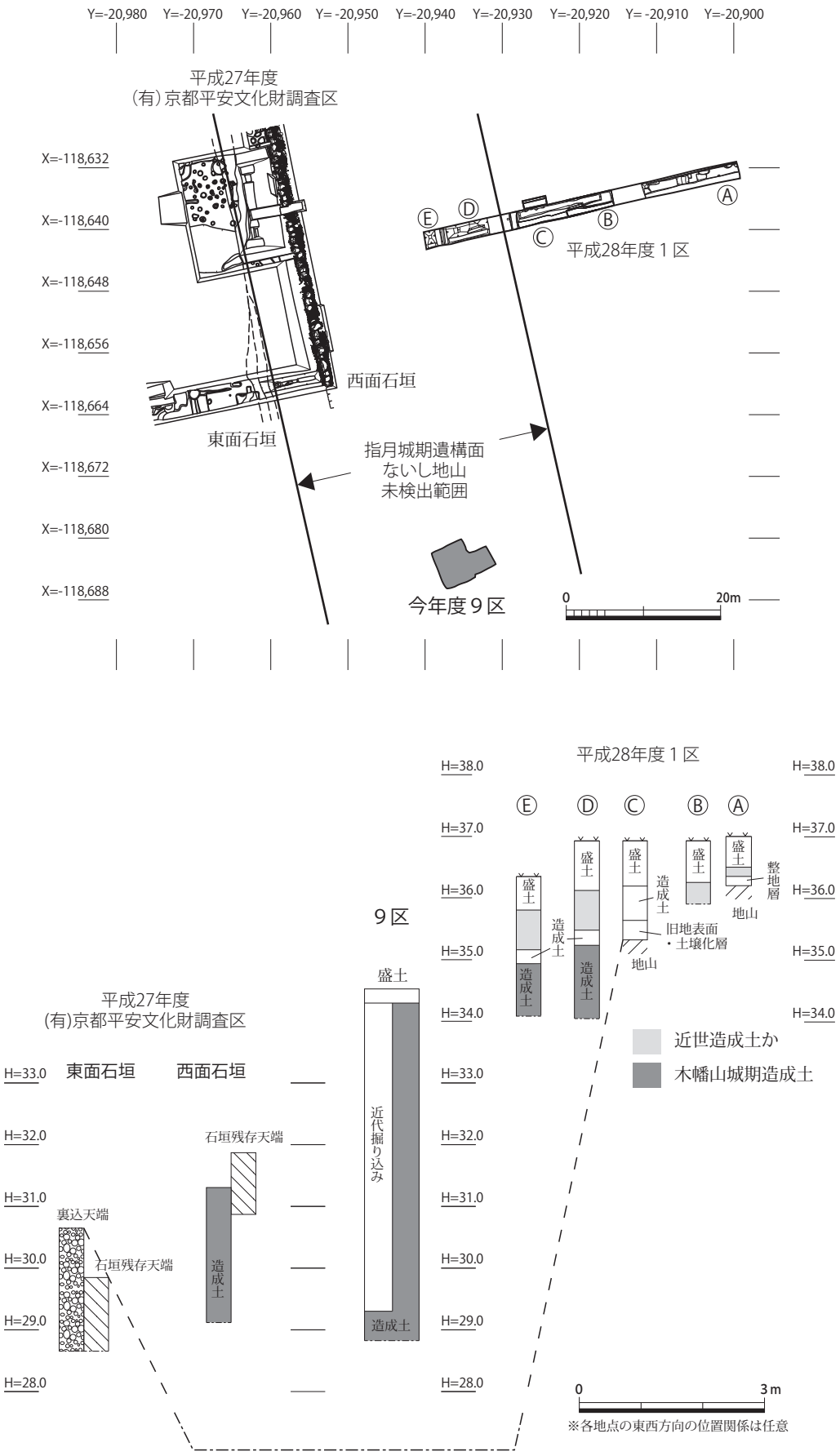


図20　９区周辺調査区配置図と各地点土層柱状図（1：100，1：800）

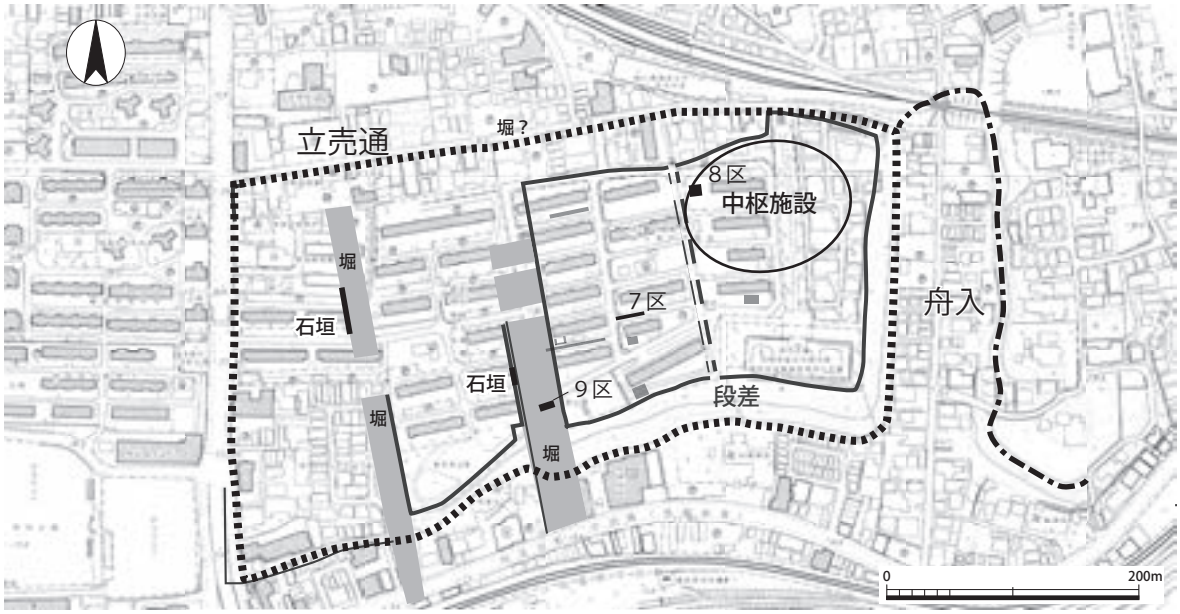


図21　指月城復元案（1：6,000）

今回の調査では標高約28.8mまで掘り下げ，その掘削底まで木幡山城期の造成土が連続することを確認した。平成27・28年の両調査で確認した深度のさらに深くまで造成土が続くことが確認できた。このレベルは，平成27年調査の東面石垣・裏込めの天端よりも約２m深く，９区の地点がいまだ堀の中に位置することを示唆する。さらに，ここから平成28年度調査の結果を振り返ると，C地点からD地点での急激な地山レベルの落ち込みは，堀の東肩口であった可能性が浮かぶ。肩口想定部分そのものは埋設管の影響で掘削できていないが，仮にC地点とD地点の中間付近を東肩口と想定し，東面石垣部分との間が堀であるとすれば，その幅は30m強の規模を誇るものとなる。100m規模を誇る木幡山城の北堀には及ばないが，現存する二条城の内堀が25m規模であることを鑑みると，当時の城郭の堀幅としては一級のものと言えよう。

指月城跡については，これまでその具体的構造に迫る材料に乏しく，実態は謎に包まれていたが，今回の調査によって，天下人豊臣秀吉に相応しい規模の城郭であったことが判明してきた。

７区の調査では，現在敷地内に見られる大規模な段差が近代以降の造成によるものであることが明らかとなった。しかし，８区との地山レベルの差は３m近くあり，このレベル差を処理するための段差が両地点の間のどこかに存在している可能性は高い。また近年，指月城域で石垣の検出が相次いでいる。これまでの想定以上に石垣が残されるものであることが判明してきており，その段差部分には石垣が残る可能性も十分にあろう。

８区では，陸軍工兵隊による塹壕を検出した。これまでの調査でも，陸軍の訓練によるものと考えられる掘り込みは複数確認してきたが，今回ほど明確に塹壕跡と認識できるものはない。複雑な折れと排水用と考えられる小溝など，当時の塹壕の構造を知る上で重要な要素が複数存在する。調査地がこれまでたどった歴史は指月城・伏見城のみが重要な訳ではなく，貴族別業の地，あるいは持明院統，さらに伏見宮家相承の地として，さらに陸軍演習場・作業場として，高度経済成長下で形成された団地の景観を今に残す地として，各時代ごとに積み重ねてきた歴史性を帯びている。指

月城・伏見城とは異なる時代の遺構も，当地にとって重要であろう。また，８区の地山検出レベルは，標高約40.5ｍで，これまでの一連の調査区の中で最も高く，北東部が最中枢域であった可能性が高まっている。

指月城跡の中枢部では，これまで面積の狭い，点的な調査が大半である。しかし，各地点の情報をつなげていくことで，城郭構造の復元が可能であることは，聚楽第の復元において既に示されている[10]。指月城においても，今後さらなる調査の積み重ねが具体像の復元につながるであろう。

（新田　和央）

註

1）　宇野隆志「伏見城下に眠る古墳－古墳時代遺物の出土分布による復元－」『立命館大学考古学論集Ⅵ』立命館大学考古学論集刊行会，2013年。なお周辺では，調査２・３地点で埴輪が出土している。

2）　星野猷二・三木善則『器瓦録想　其の二　伏見城』伏見城研究会，2006年。

3）　清喜裕二ほか「光明天皇ほか　大光明寺陵の外形調査」『書陵部紀要』第69号〔陵墓編〕，宮内庁書陵部，2018年。

4）　山田邦和「伏見城とその城下町の復元」『豊臣秀吉と京都 - 聚楽第・御土居と伏見城 - 』文理閣，2001年。

5）　山本雅和「伏見・指月城の復元」『リーフレット京都』No.261，（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館，2010年など。

6）　前掲４）

7）　谷直樹編『大工頭中井家建築指図集　中井家所蔵本』思文閣，2003年。

8）　部隊史編集委員会『工兵第十六（聯）隊史』，伏見工兵会，1989年。

9）　森島康雄「それでも伏見指月城はあった」『京都府埋蔵文化財論集』第６集，京都府埋蔵文化財調査研究センター，2010年。

10）　森島康夫「聚楽第と城下町」『豊臣秀吉と京都―聚楽第・御土居と伏見城』，日本史研究会，2001年。馬瀬智光「聚楽第の復元―考古学的考察―」『古代文化』57-2，財団法人古代学協会，2005年。

文献一覧（表１　周辺調査一覧表）番号は表１に準拠する

1　鈴木重治編『伏見城豊後橋北詰の調査』伏見城研究会，1975年。

2　網伸也編「伏見城跡１」『昭和53年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，2011年。

3　小森俊寛「伏見城々下町」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，1991年。

4　吉村正親「伏見城跡」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1991年。

5　桜井みどり「伏見城跡」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，2000年。

桜井みどり・南孝雄「伏見城跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財

研究所，2002年。
6　馬瀬智光「伏見城跡 No.13」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成18年度』京都市文化市民局，2007年。
7　山本雅和「伏見城跡（09FD133）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成21年度』京都市文化市民局，2010年。
8　馬瀬智光「伏見城跡 No.106」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成24年度』京都市文化市民局，2013年。
9　田邉一元編『伏見城跡 - 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』イビソク京都市内遺跡調査報告第９輯，㈱イビソク，2014年。
10　京都市文化市民局「試掘調査一覧表　No.22」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成27年度』2016年。
京都市文化市民局「調査一覧表　FD095」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成28年度』2017年。
11　熊谷舞子「伏見城跡・指月城跡（14F018）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成27年度』京都市文化市民局，2016年。
12　京都市文化市民局「試掘調査一覧表　No.100」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成27年度』2016年。
13-1（有）京都平安文化財『伏見城跡（指月城）発掘調査』現地説明会資料（報告書執筆中）
小森俊寛『伏見の丘の発掘成果とまとめ―指月城の復元に向けて―』，伏見連続講座―ふれて，しって，みて伏見―講演資料，2019年。
13-2 奥井智子「伏見城跡・指月城跡（14F529）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成27年度』京都市文化市民局，2016年。
14　熊谷舞子「伏見城跡・指月城跡（16A001）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成28年度』京都市文化市民局，2017年。
15　関西文化財調査会　近隣説明会資料，2016年。（報告書執筆中）
16　熊谷舞子・清水早織「伏見城跡・指月城跡（17F158）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成29年度』京都市文化市民局，2018年。
17　熊谷舞子「伏見城跡・指月城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成29年度』京都市文化市民局，2018年。
18　清喜裕二・有馬伸・横田真吾「光明天皇ほか　大光明寺陵の外形調査」『書陵部紀要』第69号〔陵墓編〕，宮内庁書陵部，2018年。
19　新田和央「伏見城跡・指月城跡・泰長老遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成30年度』京都市文化市民局，2019年。
20　清水早織「伏見城跡，指月城跡（19F349）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和元年度』京都市文化市民局，2020年。

付章　指月伏見城跡出土金箔瓦の分析調査

龍谷大学 文学部　文化財科学室

1．はじめに

伏見区桃山町周辺は，元和９年（1623）の一国一城令による伏見城破却以前の伏見城城郭および周辺武家屋敷が所在した地区である。本年度の京都市文化市民局文化財保護課による本発掘調査では，慶長伏見大地震で破壊された指月伏見城関連の堀跡が検出された。この堀跡を埋めた造成土及び同地点の近代掘り込みからは，金箔瓦が十数点出土した。今回，この金箔瓦に関する分析調査を実施する機会を得たので，本報ではこの結果を報告する。

2．調査対象試料

本調査では，出土金箔瓦片10資料（軒丸瓦片：瓦１・２，飾り瓦片：瓦４・５・19，棟込瓦(丸瓦)片：瓦７・８・16・17・18）を，（公財）京都市埋蔵文化財研究所・下鳥羽収蔵庫から本学大宮学舎の文化財科学室に一旦搬入し，①全体の状態観察，②基本の写真撮影，③漆箔箇所の拡大観察，④可搬型蛍光Ｘ線分析装置を用いた材質分析，などをまず行った。次に詳細な漆箔に関する分析調査を実施する目的で，１～２ｍｍ角の漆箔料剥落小片を各資料から１試料ずつ京都市埋蔵文化財研究所担当者と協議のうえ，注意深く採取して分析試料とした。

3．調査方法

3.1 漆箔の拡大観察

調査対象である各金箔瓦における漆箔の表面状態は，まず（株）スカラ製のDG-3型デジタル顕微鏡を用いて50倍の倍率で拡大観察した。引き続き，注意深く採取した漆箔小破片試料は，（株）ハイロックス社製のVH-7000S型デジタルマイクロスコープにより1,000倍から2,500倍の高倍率で細部の観察を実施し，それぞれ画像記録として保存した。

3.2 金箔および接着漆の構成無機元素の定性分析

調査対象試料である各漆箔の金箔および接着漆の構成無機元素の定性分析は，まず（株）リガクのNiton XL3t-700携帯型のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置を調査対象箇所に注意深く近接させて大気中で分析した。設定条件は，測定視野は直径8.0mmスポット，管球は対陰極Agターゲット，管電圧は15ｋＶ～40kVの切替操作，大気圧で分析設定時間は60秒である。引き続き採取した漆箔小破片試料の構成無機元素に関する詳細な定性分析は，分析用カーボンテープに固定した顔料を（株）堀場製作所MESA-500型の蛍光Ｘ線分析装置を使用した。設定条件は，分析時間は600

秒，試料室内は真空，X線管電圧は15kVおよび50kV，電流は240μAおよび20μA，検出強度は200.0～250.0cpsである。

4．調査結果（図１～34・表１）

各種の分析調査を行なった結果，次のような基礎的データの蓄積を得た。

① 本遺跡出土金箔瓦の金箔箇所をそれぞれ数か所ずつ可搬型蛍光X線分析装置を用いた非破壊分析を行った。その結果，いずれも比較的顕著なAu（金）を検出した。その一方でAg（銀）やCu（銅）はあまり検出されなかった（表４）。さらに，採取した各試料の詳細な分析調査を実施した。その結果。いずれの試料においても顕著なAu（金）のピークは検出されるが，Ag（銀）やCu（銅）のピークは検出されなかった（図22～31）。この点から，本遺跡出土金箔瓦に使用された金箔の金純度は高いものと理解した。

② 本遺跡出土各金箔瓦の漆箔の表面状態を50倍の拡大観察した結果，いずれも瓦胎部の上にまず接着材料である漆塗料を塗布し，その上に１枚掛けで金箔が貼られている状況が確認された（図１～２０）。さらにこの漆箔箇所の状況を採取試料の詳細な高倍率観察した結果，黒色漆（図21）もしくはやや暗赤褐色系漆（図23）を下塗り漆とした試料群が多い。そのなかで瓦１は赤褐色系漆に朱顔料粒子を若干混和した朱ウルミ漆（図24），瓦17は朱漆（図23）である点が明確に観察された。この点は蛍光X線分析結果においても，瓦１はAu（金）とともにHg（水銀）のピークが，特に瓦17は特に顕著なHg（水銀）のピークが検出されており上記の観察結果を裏付けている（図25，30，32）。なお瓦４の漆箔の接着漆は，目視観察や拡大観察では他とはやや色相が異なる赤褐色系漆であるが，これは黒色漆もしくは暗赤褐色系漆が紫外線曝露を受けたため，その劣化進行状態を反映しているものであろう（図５・６）。

③ 以上の分析結果が，どのように各金箔瓦資料の性格を反映されているか検討する目的で，瓦の種類の違いとの関連性をみてみたが，関連性は見出せなかった。基本的には，それぞれの金箔瓦が使用された建造物自体の性格，もしくは瓦が葺かれた位置（建造物の正面や側面の違い）などが関係しているものであろうと認識した。

参考文献

北野信彦『桃山文化期漆工の研究』 p.352　雄山閣　2018年。

図１　金箔瓦（瓦１）

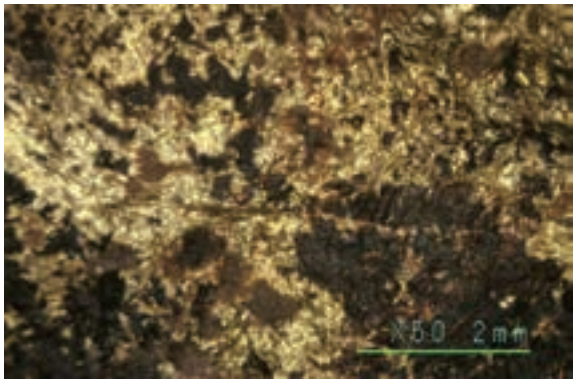


図２　金箔瓦（瓦１）漆箔の拡大観察

図３　金箔瓦（瓦２）

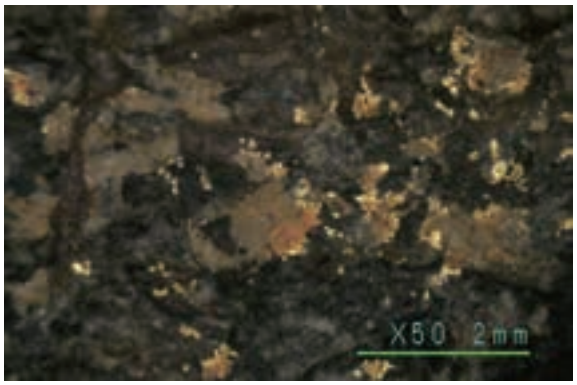


図４　金箔瓦（瓦２）漆箔の拡大観察

図５　金箔瓦（瓦４）

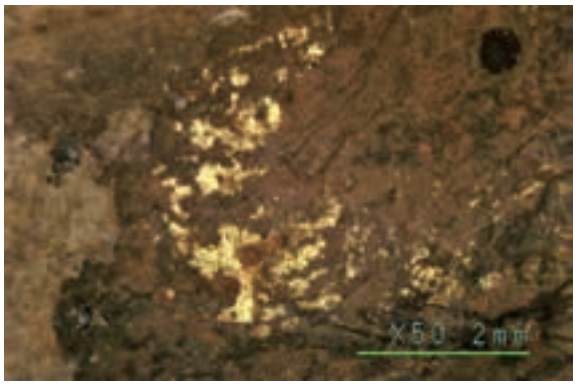


図６　金箔瓦（瓦４）漆箔の拡大観察

図７　金箔瓦（瓦５）

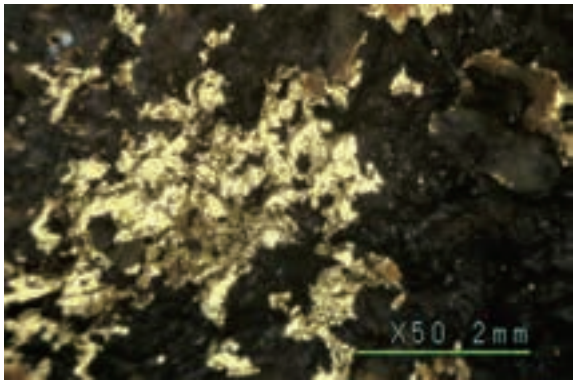


図８　金箔瓦（瓦５）漆箔の拡大観察

図９　金箔瓦（瓦７）

図10　金箔瓦（瓦７）漆箔の拡大観察

図11　金箔瓦（瓦８）

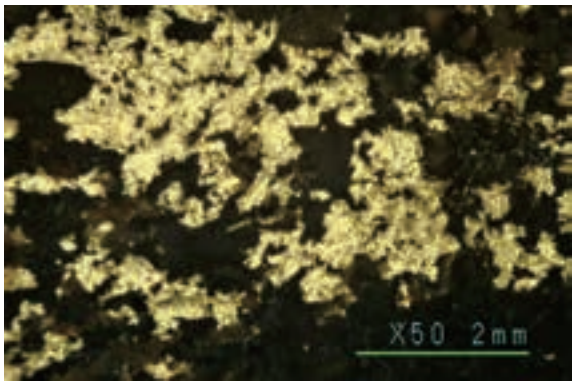


図12　金箔瓦（瓦８）漆箔の拡大観察

図13　金箔瓦（瓦16）

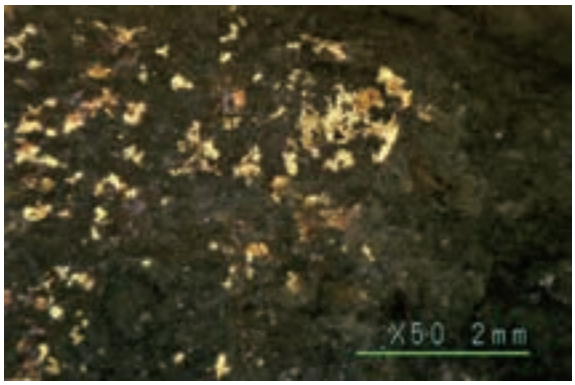


図14　金箔瓦（瓦16）漆箔の拡大観察

図15　金箔瓦（瓦17）

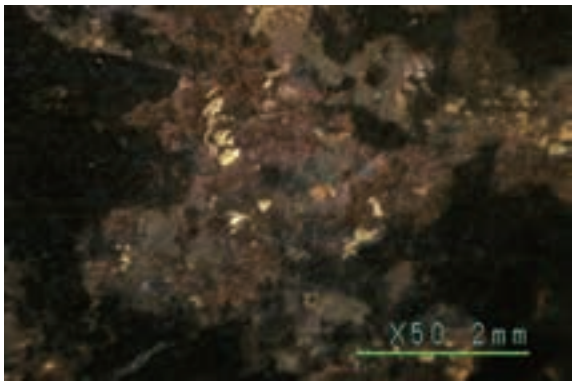


図16　金箔瓦（瓦17）漆箔の拡大観察

図17　金箔瓦（瓦18）

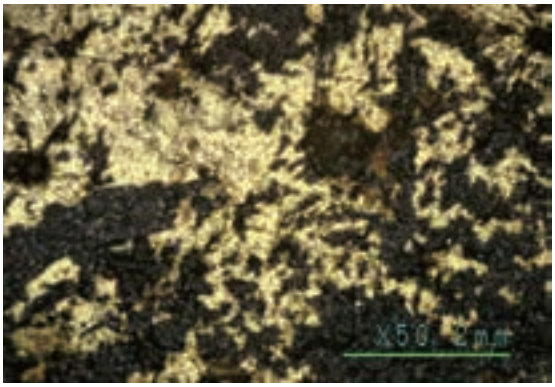


図18　金箔瓦（瓦18）漆箔の拡大観察

図19　金箔瓦（瓦19）

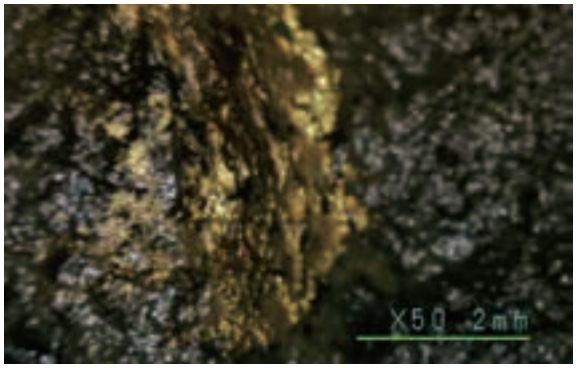


図20　金箔瓦（瓦19）漆箔の拡大観察

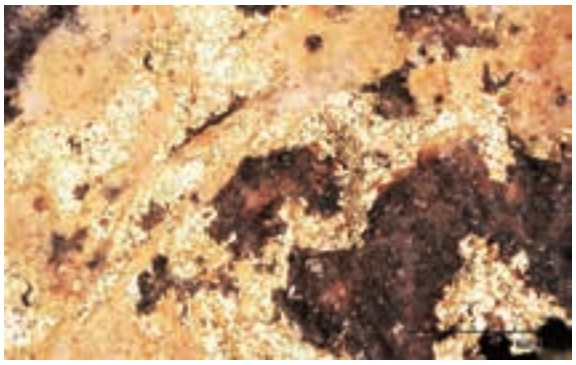


図21　金箔瓦（瓦１）の拡大

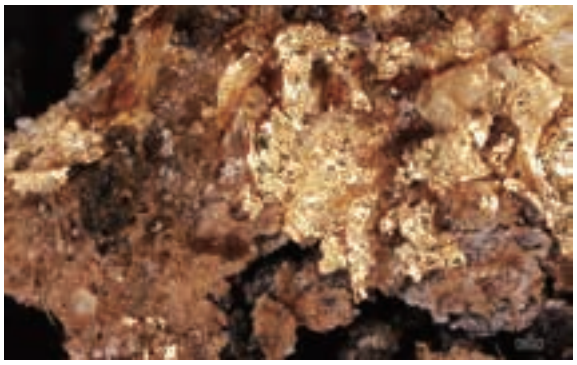


図22　金箔瓦（瓦７）の拡大観察

図23　金箔瓦（瓦17）の拡大観察

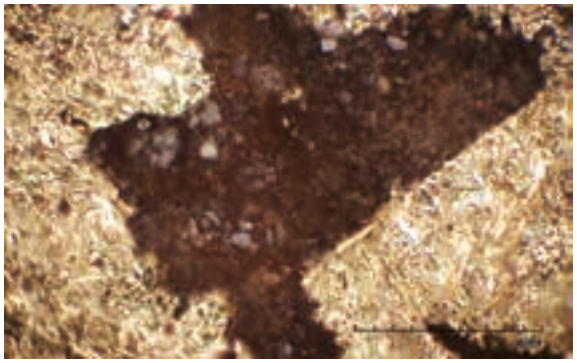


図24　金箔瓦（瓦18）の拡大観察

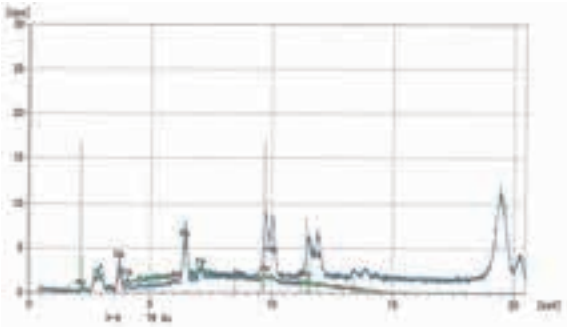


図25　瓦1の蛍光X線分析結果

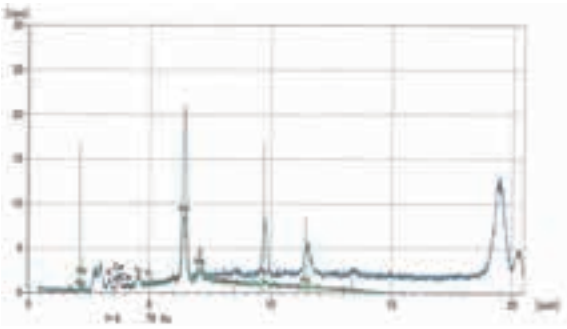


図26　瓦2の蛍光X線分析結果

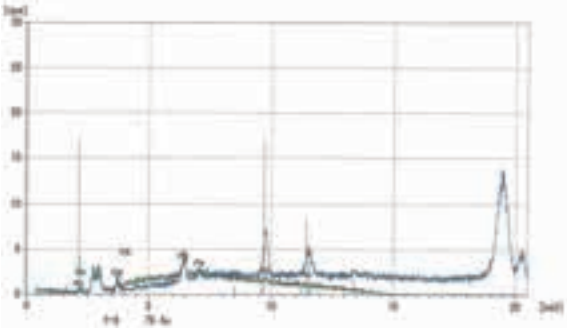


図27　瓦4の蛍光X線分析結果

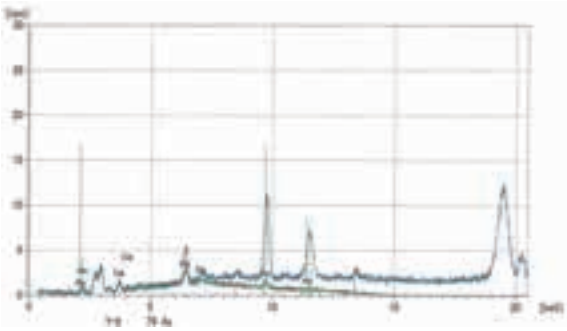


図28　瓦5の蛍光X線分析結果

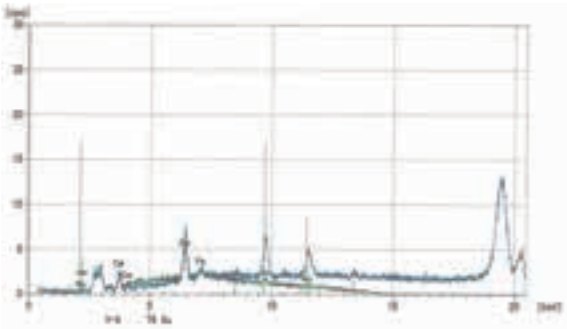


図29　瓦7の蛍光X線分析結果

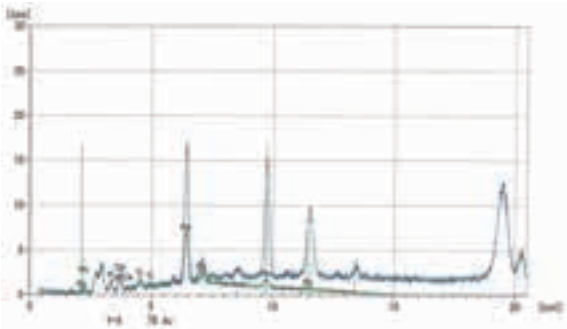


図30　瓦8の蛍光X線分析結果

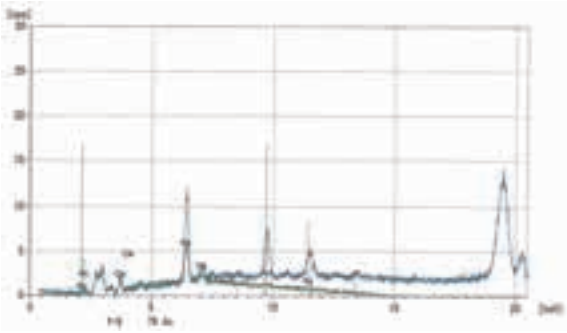


図31　瓦16の蛍光X線分析結果

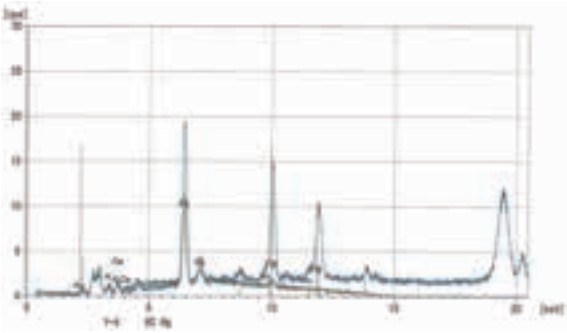


図32　瓦17の蛍光X線分析結果

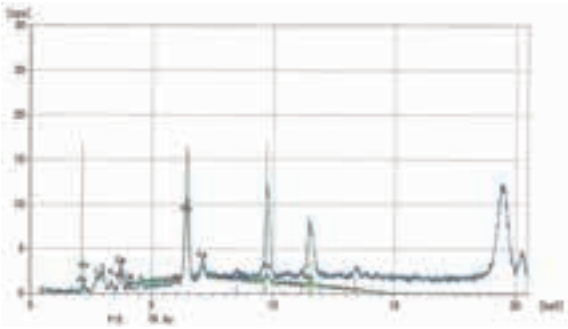


図33　瓦19の蛍光X線分析結果

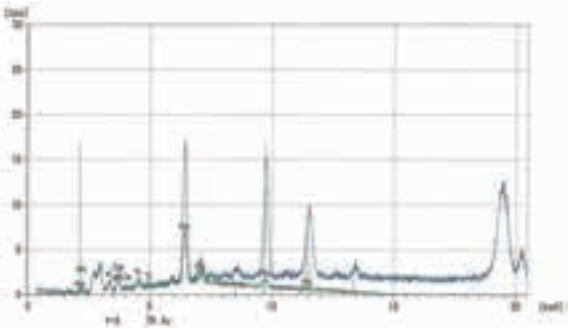


図34　瓦19の蛍光X線分析結果

表1　携帯型蛍光X線分析装置分析結果

No.	S	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Zn	As	Ag	Sn	Ba	Pb	Au	Co	Hg
1・1	19.7K	5899	14.2K	2279	669	23.5K	83	308		50	32	870		5698	296	8199
1・2	639	8936	3301	1342	1405	98.4K	62	104		80	66	1029	24	4004		1007
2・1	475	15.1K	9294	5531	397	15.6K	49	46		1	16	526	34	135		11
4・1	5251	13.8K	3829	4368	240	2241	53	86		8	21	597	18	888		65
4・2	3424	9458	5682	3595	224	15.7K	49	71		8	20	605	19	584		50
4・3	2826	1564	5117	2614	179	17.0K	41	65	15	4	16	579	18	576	15	43
5・1	6190	9472	15.3K	3137	528	15.2K	52	102	8	4	13	526	17	1764	233	144
5・2	4549	8368	10.8K	2761	393	15.0K	43	92		18	24	636	22	973	97	76
7・1	1292	9975	3179	3850	575	17.7K	29	108	4	21	25	682	19	309	28	27
7・2	5772	11.8K	5049	5145	308	18.8K	37	125	9	9	20	596	16	1148	103	66
8・1	8899	13.0K	2476	4471	142	12.6K	43	72	6	26	19	620	22	1817	11	144
8・2	5346	10.5K	2484	3666	147	15.2K	31	53	1	23	23	543	24	1171		97
16・1	1589	9606	4152	4997	941	38.7K	44	125	5	15	25	619	22	348	76	28
16・2	542	5217	1455	2588	560	31.2K		114		18	27	702	28	288	171	8
17・1	13.0K	16.1K	1654	8317	567	36.3K	43	168	18	11	20	612	21	5	43	1446
17・2	5913	10.5K	1017	5553	454	34.1K	47	159	13	22	34		24	42	189	1323
18・1	6617	7735	5072	2942	228	14.9K	45	103	11	21	25	676	26	1210	60	24
18・2	2909	3604	2526	1184	154	13.1K	27	114	5	24	28	553	21	1217	65	79
19・1	2531	8937	1979	3201	246	12.3K	40	97	4	15	25	560	25	1148	57	71

報　告　書　抄　録

ふ り が な	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく　れいわがんねんど
書　　名	京都市内遺跡発掘調査報告　令和元年度
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	馬瀬智光・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・黒須亜希子・清水早織・廣冨亮太
編 集 機 関	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
所 在 地	〒604-8006　京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394　Y・J・Kビル２階
発 行 所	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
発行年月日	西暦2020年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡（へいあんきゅうだいりないかくかいろうあと・じゅらくいせき）	京都市上京区小山町908-15（きょうとしかみぎょうくこやまちょう）	26100	2 237	35度 01分 11秒	135度 44分 36秒	2019年7月29日～2019年11月14日	51㎡	個人住宅
平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡（へいあんきゅうぶらくいんあと・ほうずいいせき）	京都市中京区聚楽廻西町90（きょうとしなかぎょうくじゅらくまわりにしまち）	26100	2 236	35度 44分 03秒	135度 44分 24秒	2019年11月11日～2019年11月23日	6㎡	個人住宅
平安京左京一条三坊十町跡（へいあんきょうさきょういちじょうさんぼうじゅっちょうあと）	京都市上京区室町通出水上る近衛町32-2他3筆・同区下長者町通烏丸西入鷹司町18, 18-3（きょうとしかみぎょうくむろまちどおりでみずあがるこのえちょうしもちょうじゃまちどおりからすまにしいるたかつかさちょう）	26100	1	35度 01分 19秒	135度 45分 30秒	2019年4月2日～2019年5月17日	100㎡	個人住宅
史跡西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡（しせきさいじあと（３６じ）・へいあんきょううきょうくじょういちぼうじゅうに・じゅうさんちょうあと・からはしいせき）	京都市南区唐橋西寺町57（きょうとしみなみくからはしさいじちょう）	26100	A751 1 756	34度 58分 50秒	135度 44分 16秒	2019年9月30日～2019年11月2日	152㎡	範囲確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡	宮殿跡 集落跡	平安時代	石列・ピット・土坑	須恵器・土師器・陶磁器・金属製品	内郭回廊の基壇盛土及び石組溝を確認
平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡	宮殿跡 集落跡	平安時代 江戸時代	整地土 土取穴	瓦・陶磁器	
平安京左京一条三坊十町跡	都城跡	平安～江戸時代	礎石建物・溝・土坑	須恵器・土師器・陶磁器・石製品・金属製品	江戸時代後期の礎石建物を確認
史跡西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡	史跡 都城跡 集落跡	平安時代	礎石・礎石抜取穴・基壇盛土・溝	瓦・土師器	西寺講堂基壇及び建物跡を確認

報　告　書　抄　録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく　れいわがんねんど
書　　名	京都市内遺跡発掘調査報告　令和元年度
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	馬瀬智光・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・黒須亜希子・清水早織・廣冨亮太
編集機関	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
所在地	〒604-8006　京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394　Y・J・Kビル２階
発行所	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
発行年月日	西暦2020年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
西寺跡（37次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡（さいじあと（３７じ）・へいあんきょううきょうくじょういちぼうじゅうさんちょうあと・からはしいせき）	京都市南区唐橋西寺町11, 25（きょうとし　みなみく　からはしさいじちょう）	26100	1 755 756	34度 58分 47秒	135度 44分 12秒	2019年9月30日～2019年11月15日	179㎡	範囲確認
山科本願寺跡（23次）（やましなほんがんじあと　（23じ））	京都市山科区西野山階町37-2, 37-6（きょうとし　やましなく　にしのさんかいちょう）	26100	626	34度 58分 59秒	135度 48分 33秒	2018年12月3日～2018年12月27日	717㎡	範囲確認
山科本願寺南殿跡（６次）（やましなほんがんじなんでんあと　（６じ））	京都市山科区音羽伊勢宿町32-11（きょうとし　やましなく　おとわ　いせじゅくちょう）	26100	629	34度 59分 06秒	135度 49分 15秒	2019年1月7日～2019年1月18日	15㎡	個人住宅
山科本願寺南殿跡（７次）（やましなほんがんじなんでんあと　（７じ））	京都市山科区音羽伊勢宿町32-106（きょうとし　やましなく　おとわ　いせじゅくちょう）	26100	629	34度 59分 06秒	135度 49分 16秒	2019年4月8日～2019年4月19日	15㎡	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西寺跡（37次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡	都城跡 寺院跡 集落跡	平安時代	壺地業・条坊側溝・鍛造関連遺構	須恵器・土師器・瓦	西寺塔跡の関連遺構を確認
山科本願寺跡（23次）	寺院跡	室町～江戸時代	土坑・柱穴・溝・土塁	土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器・線	土塁の構築土より土師器を確認
山科本願寺南殿跡（６次）	邸宅跡	江戸～室町時代	整地土・溝	土師器・陶磁器	溝は南殿の外郭北堀の可能性あり
山科本願寺南殿跡（７次）	邸宅跡	江戸～室町時代	整地土・溝	土師器・須恵器・陶磁器	

報　告　書　抄　録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく　れいわがんねんど
書　　名	京都市内遺跡発掘調査報告　令和元年度
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	馬瀬智光・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・黒須亜希子・清水早織・廣冨亮太
編集機関	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
所在地	〒604-8006　京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394　Y・J・Kビル２階
発行所	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
発行年月日	西暦2020年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
山科本願寺南殿跡（8じ）（８次）（やましなほんがんじなんでんあと）	京都市山科区音羽伊勢宿町35-52（きょうとし　やましなく　おとわ　いせじゅくちょう）	26100	629	34度59分01秒	135度49分18秒	2019年6月17日～2019年7月5日	28㎡	長屋
中臣遺跡（92次）（なかとみいせき（92じ））	京都市山科区勧修寺西金ケ崎250, 251（きょうとし やましなく かんしゅうじにしかながさき）	26100	632	34度58分07秒	135度48分20秒	2019年6月17日～2019年7月11日	120㎡	共同住宅
伏見城跡・桃山古墳群（永井久太郎古墳）（ふしみじょうあと・ももやまこふんぐん　ながいきゅうたろうこふん）	京都市伏見区桃山町永井久太郎55-1, 55-2（きょうとし ふしみく　ももやま　ちょうながいきゅうたろう）	26100	1172 1173	34度56分24秒	135度46分16秒	2019年7月22日～2019年8月14日	99㎡	個人住宅
伏見城跡・指月城跡（ふしみじょうあと・しげつじょうあと）	京都市伏見区桃山町泰長老（きょうとし　ふしみく　ももやま　ちょうたいちょうろう）	26100	1172 1182	34度55分48秒	135度46分15秒	2019年8月19日～2019年10月4日	143㎡	範囲確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山科本願寺南殿跡（８次）	邸宅跡	室町～江戸時代	土坑	土師器・須恵器・陶磁器	
中臣遺跡（92次）	集落跡	弥生時代	竪穴建物・土坑	弥生土器	竪穴建物群の南端に位置する
伏見城跡・桃山古墳群（永井久太郎古墳）	城跡 古墳	桃山～江戸時代	石組溝・石垣・造成土	土師器・瓦器・施釉陶器・瓦	伊達街道沿い東側の石組溝と石垣を確認
伏見城跡・指月城跡	城跡	桃山時代 近代	造成土・石積・塹壕	瓦・陶磁器	伏見城期の造成土を確認

図　　版

図版１　平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡　遺構

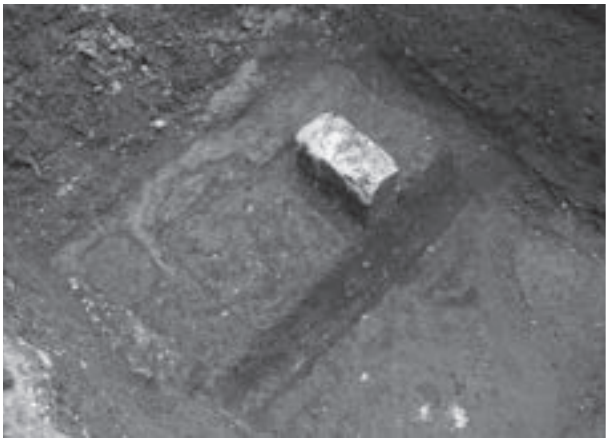
１　１－１区第３面全景（北から）

２　１－１区第５面遺構検出状況（北から）

３　２区全景（東から）

４　１－２区第４面全景（南から）

５　１－２区第５面全景（南から）



６　１－２区遺構検出状況（南東から）

７　１－３区遺構検出状況（北から）

図版２　平安宮内裏内郭回廊跡・聚楽遺跡　遺構

1　２区石組溝検出状況（北から）

2　２区石組溝検出状況（北東から）

3　２区石組溝西側石見通し合成図（東から）

4　２区石組溝東側石見通し合成図（西から）

１　１区北壁（南から）

２　２区西壁焼土層（北東から）

３　３区全景（西から）

図版４　平安京左京一条三坊十町跡　遺構

1　第１面全景（北から）

2　第２面全景（北から）

3　第３面全景（北から）

4　第４面全景（南から）

図版５　平安京左京一条三坊十町跡　遺物

82

103

126

185

222

227

228

229

268

283

1　出土遺物

図版６　史跡西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡　遺構

１　４区第１面全景（南から）

２　５区第２面全景（南東から）

３　４区第２面全景（南東から）

図版７　史跡西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡　遺構

1　４区講堂基壇（南東から）

2　４区礎石抜取穴４（北西から）

図版８　史跡西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡　遺構

1　４区講堂南庇側柱筋（西から）

2　４区講堂身舎桁行入側柱筋（西から）

3　４区礎石３唐居敷座（北から）

4　４区土器溜り11（北西から）

図版９　史跡西寺跡（36次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡　遺構

１　５区第２面全景（南東から）

２　５区礎石抜取穴７（南東から）

３　５区講堂及び東軒廊基壇（南東から）

図版10　西寺跡（37次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡　遺構

1　第７調査区壺地業イ～ハ断割り状況（北から）

2　第７調査区壺地業ハ・ヘ断割り状況（東から）

3　第７調査区壺地業ヘ・リ・ヲ断割り状況（西から）

4　第７調査区地業38西壁断面（南東から）

図版11　西寺跡（37次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡　遺構

1　第８調査区全景（北から）

2　第８調査区鋳造関連土坑２全景（北から）

図版12　西寺跡（37次）・平安京右京九条一坊十三町跡・唐橋遺跡　遺構

1　第９調査区全景（北から）

2　内溝１瓦出土状況（南から）

3　内溝１軒瓦出土状況（北東から）

1　1区　全景（東から）

2　1区　断割り西壁断面（北東から）

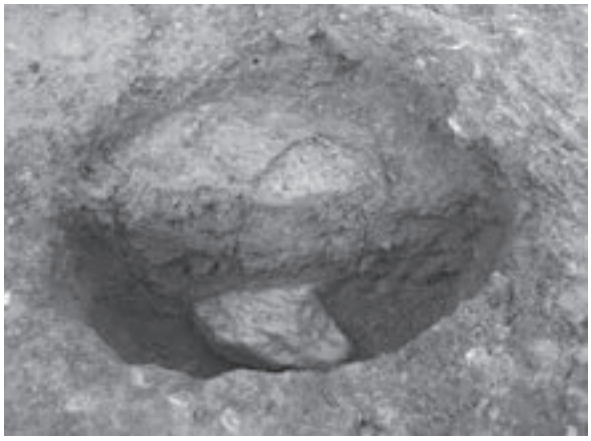
図版14　山科本願寺跡（23次）　遺構

1　２区　全景（北西から）

2　２区　断割り東壁断面（北西から）

1　土坑１・２半裁状況（北東から）

2　柱穴33断面（北西から）



3　柱穴40断面（南から）

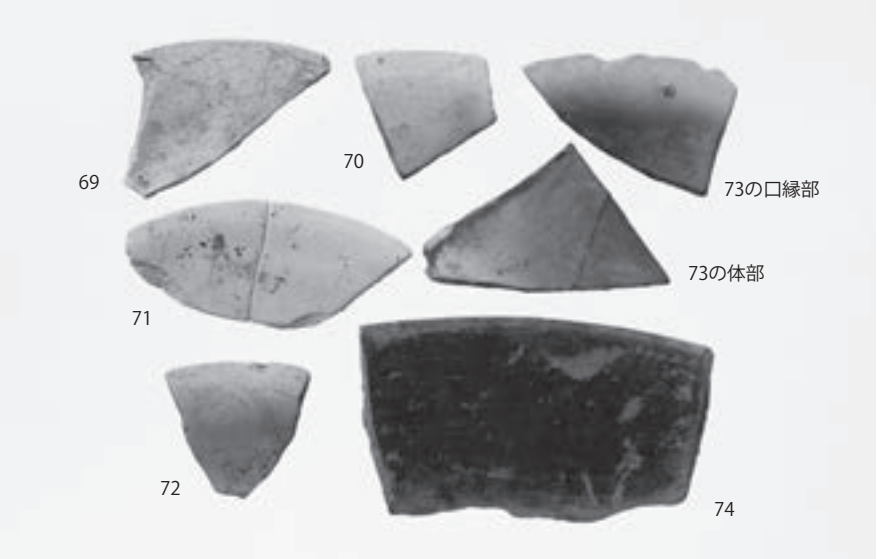
4　土坑42検出状況（南から）

5　現存土塁（東から）

図版16　山科本願寺跡（23次）　遺構・遺物

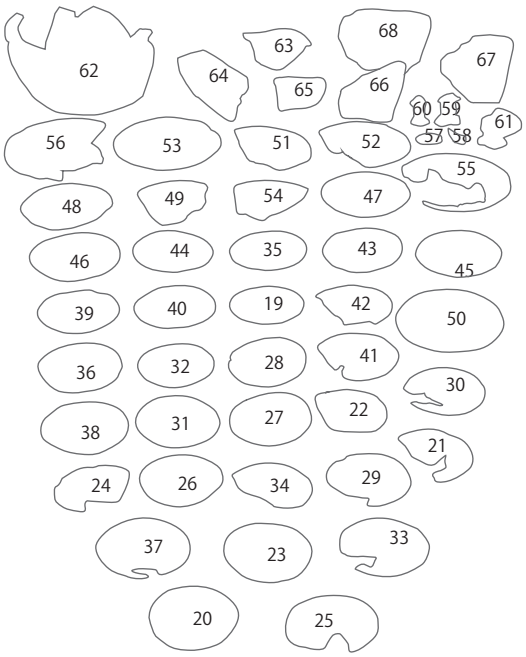
1　現存土塁切り通し西面（北東から）

2　現存土塁切り通し西面遺物出土状況（東から）



3　出土遺物１（69～74）

4　出土遺物２（62）



5　図版17の報告番号対応図

1　土坑42出土遺物（19～68）

図版18　山科本願寺南殿跡（6～8次）　遺構

1　第６次調査　第２面全景（北から）

2　第７次調査　第２面全景（北から）

3　第８次調査　第１面全景（南から）

1　調査区全景　（奥が旧安祥寺川・北東から）

2　竪穴建物１完掘状況（南西から）

3　出土遺物

図版20　伏見城跡・桃山古墳群　遺構

1　３区全景　第２面石垣・造成土検出状況（南西から）

2　３区全景　第３面石垣・造成土検出状況（南西から）

1　３区　第２面石垣石検出状況（南西から）

2　３区　第２面石垣石と石組溝側石（南西から）

3　３区　第３面石垣前面検出状況（南から）

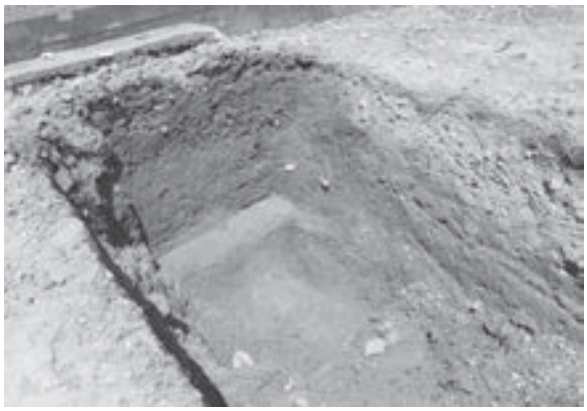
4　３区　第３面石垣石と石組溝（南西から）

5　３区　第３面石垣石裏込め（南東から）

6　３区　第３面石垣石断割り部分（西から）

図22　伏見城跡・桃山古墳群　遺構

1　３区　北壁東側断面（南から）



2　３区　拡張区全景（南東から）

3　１区　全景（南西から）

4　１区　北東隅断割り（西から）

5　１区　北西隅断割り（南東から）

6　２区　全景（北西から）

7　２区　造成土検出状況（南西から）

8　２区　造成土断割り断面（南西から）

1　７区全景（西から）

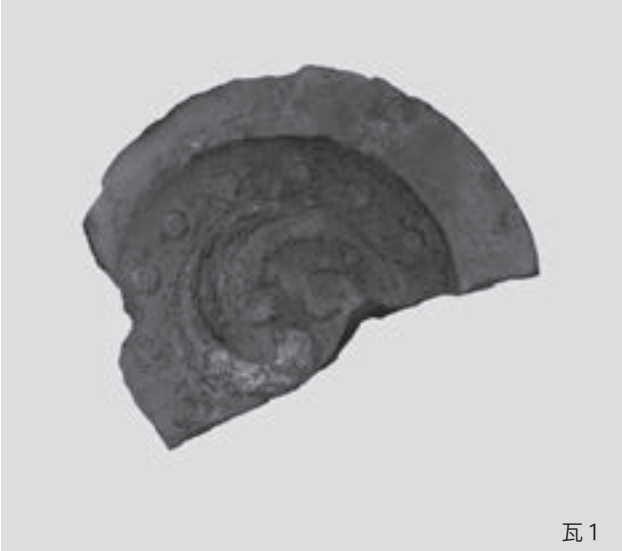
2　７区全景（東から）

3　８区全景（東から）

図版24　伏見城跡・指月城跡　遺構・遺物

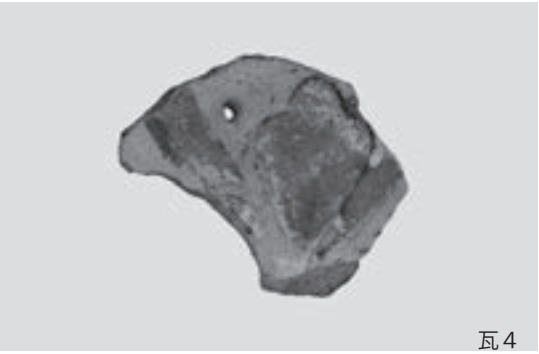
1　９区全景（南西から）

2　９区石積（南から）



瓦１

瓦２



瓦４

瓦５

金１

3　出土遺物

京都市内遺跡発掘調査報告
令和元年度

発行日　２０２０年3月３１日
発　行　京都市文化市民局
編　集　京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課
住　所　京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町３９４番地
Y・J・Kビル２階
TEL：（０７５）－３６６－１４９８
印　刷　株式会社　昭英社
TEL：（０７５）－３５１－１８１１